

2005

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第126集

長土呂遺跡群

---

HIJIRIHARA

聖 原

長野県佐久市浅間山麓田切台地上における巨大古代集落遺跡の調査

---

第5分冊

佐久市土地開発公社  
佐久市教育委員会

長土呂遺跡群

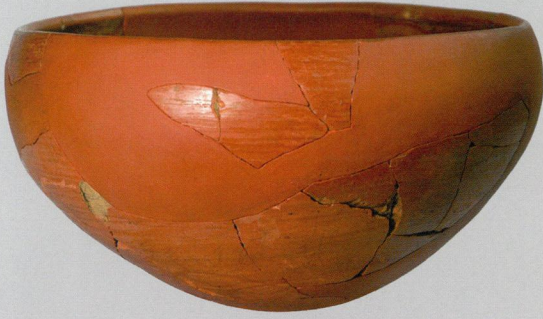
# 聖原

長野県佐久市浅間山麓田切台地上における巨大古代集落遺跡の調査

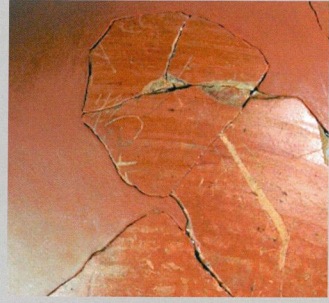
第5分冊

2005





側面



外面体部に焼成後刻まれた文字「為」



内面（中央に「佛」）



外面

H380 号住居址出土仏鉢形土器



出土した瓦塔





## 出土した皇朝十二銭

一遺跡から出土した皇朝十二銭  
としては県内最多枚数・銭種であろう。



和銅開珎



神功開寶



隆平永徳



富壽神銭



承和昌寶



長年大寶



出土した腰帯金具



絞具

巡方

丸柄

鉞尾





八稜鏡



馬鈴



金銅製鈴



銅錠

出土した銅製品









緑釉陶器



白磁





石製印『伯万私印』印面 上一正位、下一反転

## 例 言

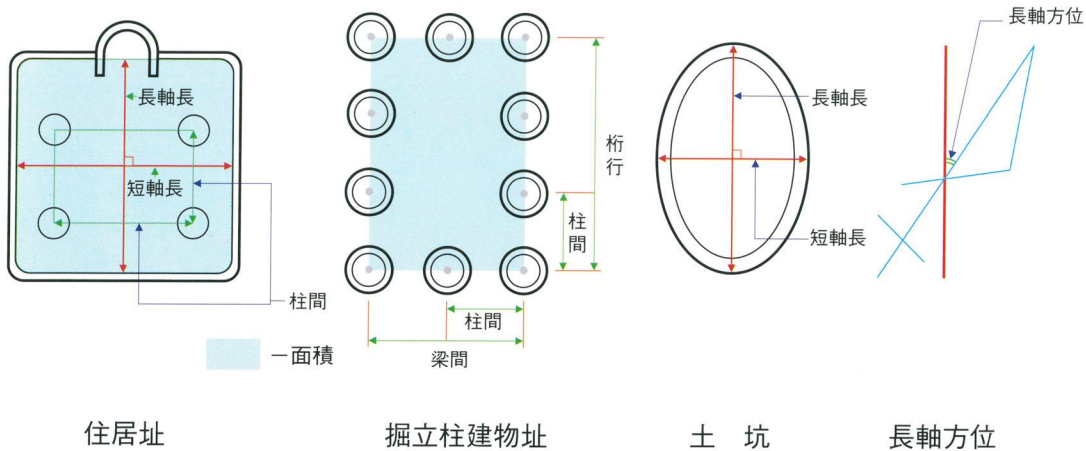
1. 本書は、佐久市土地開発公社による佐久流通業務団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書（第5分冊）である。
2. 調査委託者 佐久市土地開発公社
3. 調査受託者 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター
4. 遺跡名および所在地  
長土呂遺跡群 聖原遺跡（NNH）  
佐久市大字長土呂字上聖端、新城、下聖原、中聖原、上聖原
5. 調査期間及び面積  
昭和63年 試掘調査  
平成1年 4月10日～11月28日（33,000m<sup>2</sup>）  
平成2年 4月9日～12月7日（23,300m<sup>2</sup>）  
平成3年 4月30日～11月30日（11,000m<sup>2</sup>）  
平成4年 4月8日～9月25日（6,500m<sup>2</sup>）  
平成5年 8月4日～10月16日（2,500m<sup>2</sup>）  
平成6年 4月5日～11月28日（13,000m<sup>2</sup>）  
平成7年 6月5日～12月7日（7,600m<sup>2</sup>）  
平成8年 4月1日～平成9年3月31日  
平成9年 4月7日～平成10年3月31日  
平成10年 4月1日～平成11年3月31日  
平成11年 4月1日～平成12年3月31日  
平成12年 4月3日～平成13年3月31日  
平成13年 4月2日～平成14年3月29日  
平成14年 4月5日～平成15年3月28日  
平成15年 5月1日～平成16年3月31日  
平成16年 4月1日～平成17年2月28日
6. 調査の担当は以下のとおりである。  
平成1年度－高村博文、三石宗一、小山岳夫、小林眞寿、翠川泰弘、助川朋広  
平成2年度－三石宗一、小林眞寿、羽毛田卓也、翠川泰弘、助川朋広、  
平成3年度－三石宗一、小林眞寿  
平成4年度－三石宗一、小林眞寿  
平成5年度－三石宗一  
平成6年度－三石宗一、上原学、森泉かよ子  
平成7年度－三石宗一、森泉かよ子  
平成8年度～平成10年度－三石宗一  
平成11年度以降－小林眞寿
7. 出土金属器の保存処理は長野県立歴史館の白沢勝彦氏の指導により行った。また、金属器のX線写真は佐久市立浅間病院の協力を得た。
8. 遺跡の航空写真及び測量は(株)協同測量が行った。
9. 時期別の住居址分布図、周辺遺跡の調査状況図は(株)こうそくが作成し、小林が一部手を加えた。
10. 出土炭化物・種子、獣骨、人骨の鑑定は(株)バリノサーヴェイが行った。
11. 遺構の分類と計測は堀籠滋子・木内明美・小林喜久子が行い、小林眞寿が補足した。
12. 出土遺物の実測・計測は田中ひさ子・森角雅子・柳沢孝子・高見澤綾・佐久本眞樹子・堀籠滋子・小林眞寿が行い、石器の分類は須藤隆司の指導を得て森角雅子・柳沢孝子が、土器・金属器の分類は小林が行った。
13. 瓦塔については、出河裕典氏に教示を得た。
14. 本書に掲載した図版の作成は上原幸子・小林妙子・山村容子・堀籠滋子・小林喜久子・小林眞寿が行った。
15. 漆紙と思われた付着物の認められる土器の保存処理と分析は(財)元興寺文化財研究所に委託した。



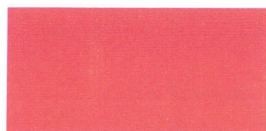
16. H380号住居址出土の甲斐型土器（仏鉢）の修復・復元は(有)武蔵野文化財修復研究所に依頼した。
17. 本書に掲載した遺物写真は小林真寿が撮影した。
18. 本書の執筆・編集は小林真寿が行った。小林以外の執筆部分については執筆者名を記した。
19. 本書及び出土遺物等のすべての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

## 凡 例

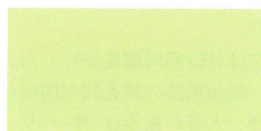
1. 遺構の略号は以下のとおりである。  
 竪穴住居址-H 掘立柱建物址-F 土坑-D 溝址-M Pit-P 粘土採掘坑-粘土坑  
 特殊遺構-Q
2. 挿図の縮尺は原則として以下のとおりである。  
 遺構-1/160 遺物-1/8
3. 遺構の計測値は下図に示した部分の測定値である。  
 竪穴住居址の面積は床面積である。  
 壁残高は最大値である。  
 長軸長と短軸長の差が1割を越えたものを長方形とした。



4. 本報告書の挿図中の色は以下の表現である。



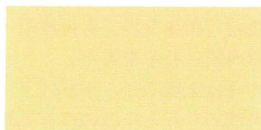
赤色塗彩



灰 釉



緑 釉



白 磁

## 目次

口絵 1～8

例言

凡例

目次—本文・挿図・付表・図版

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査体制	2
第3節 調査日誌	6
第4節 分類基準	6
第Ⅱ章 総括	25
第1節 土器様相	25
第2節 住居址の形態	43
第3節 掘立柱建物址	69
第4節 土坑	83
第5節 粘土坑	87
第6節 溝址	87
第7節 特殊遺構	89
第8節 金属器・金属製品	89
第9節 文字資料	99
第10節 集落の変遷	100
第11節 瓦塔について	109
第Ⅲ章 分析	132
聖原遺跡出土土器内容物の調査・分析 (財)元興寺文化財研究所	132
聖原遺跡の自然科学分析報告 パリノサーヴェイ株式会社	140
はじめに	141
Ⅰ. 植物利用の検討	141
Ⅱ. 動物利用	166
Ⅲ. 出土人骨の同定	176
図版	181
図版	207

## 挿図目次

第1図 聖原遺跡の位置(1:50,000)	1	第9図 土器の分類(3)	17
第2図 主柱穴配置による竪穴住居址分類図	7	第10図 石器の分類(1)	20
第3図 掘立柱建物址の分類(1)	9	第11図 石器の分類(2)	21
第4図 掘立柱建物址の分類(2)	10	第12図 鉄鍬分類基準	23
第5図 掘立柱建物址の分類(3)	11	第13図 土器編年表1	28
第6図 土坑の分類(1)	12	第14図 土器編年表2	29
第7図 土器の分類(1)	15	第15図 土器編年表3	32
第8図 土器の分類(2)	16	第16図 土器編年表4	33

第17図	土器編年表 5	34	第58図	文字資料編年表 2	102
第18図	土器編年表 6	35	第59図	文字資料編年表 3	103
第19図	土器編年表 7	38	第60図	文字資料編年表 4	104
第20図	土器編年表 8	39	第61図	文字資料編年表 5	105
第21図	土器編年表 9	40	第62図	文字資料編年表 6	106
第22図	土器編年表10	41	第63図	文字資料編年表 7	107
第23図	土器編年表11	42	第64図	住居址分布図	110
第24図	住居址変遷図 1	49	第65図	古墳時代Ⅱ期の住居址分布	111
第25図	住居址変遷図 2	50	第66図	古墳時代Ⅲ期の住居址分布	112
第26図	住居址変遷図 3	51	第67図	古墳時代Ⅳ期の住居址分布	113
第27図	住居址変遷図 4	52	第68図	奈良平安時代Ⅰ期の住居址分布	114
第28図	住居址変遷図 5	53	第69図	奈良平安時代Ⅱ期の住居址分布	115
第29図	住居址変遷図 6	54	第70図	奈良平安時代Ⅲ期の住居址分布	116
第30図	住居址変遷図 7	55	第71図	奈良平安時代Ⅳ期の住居址分布	117
第31図	住居址変遷図 8	56	第72図	奈良平安時代Ⅴ期の住居址分布	118
第32図	住居址変遷図 9	57	第73図	奈良平安時代Ⅵ期の住居址分布	119
第33図	住居址変遷図10	58	第74図	奈良平安時代Ⅶ期の住居址分布	120
第34図	住居址変遷図11	59	第75図	奈良平安時代Ⅷ期の住居址分布	121
第35図	住居址変遷図12	60	第76図	奈良平安時代Ⅸ期の住居址分布	122
第36図	住居址変遷図13	61	第77図	奈良平安時代Ⅹ期の住居址分布	123
第37図	住居址変遷図14	62	第78図	奈良平安時代?期の住居址分布	124
第38図	住居址変遷図15	63	第79図	時期不明住居址分布	125
第39図	住居址変遷図16	64	第80図	芝宮遺跡群の郡衙候補地	126
第40図	住居址変遷図17	65	第81図	聖原遺跡及び隣接遺跡出土の焼印状鉄製品、官ノ反A遺跡の館跡	127
第41図	住居址変遷図18	66	図 1	№1 土器内容物のXRFスペクトル	136
第42図	住居址変遷図19	67	図 2	№2 土器内容物のXRFスペクトル	137
第43図	住居址変遷図20	68	図 3	№3 土器内容物のXRFスペクトル	138
第44図	H693支柱セクション図	70	図 4	№1 土器内容物のFT-IRスペクトル	139
第45図	掘立柱建物址実測図(1)	84	図 5	№2 土器内容物のFT-IRスペクトル	139
第46図	掘立柱建物址実測図(2)	85	図 6	№3 土器内容物のFT-IRスペクトル	139
第47図	M74・M78、F607周辺遺構分布状況	86		D24号土坑人骨出土状況	178
第48図	E形態土坑、溝址分布図	88		炭化材出土状況図(1)	198
第49図	土坑分布図	90		炭化材出土状況図(2)	199
第50図	鉄鏃消長図	92		炭化材出土状況図(3)	200
第51図	刀子消長図	93		炭化材出土状況図(4)	201
第52図	鎌消長図	94		炭化材出土状況図(5)	202
第53図	金属器・金属製品編年表 1	95		炭化材出土状況図(6)	203
第54図	金属器・金属製品編年表 2	96		炭化材出土状況図(7)	204
第55図	金属器・金属製品編年表 3	97		炭化材出土状況図(8)	205
第56図	金属器・金属製品編年表 4	98		炭化材出土状況図(9)	206
第57図	文字資料編年表 1	101			

## 表 目 次

第 1 表	器種別消長表	42	第 3 表	時期別住居址属性表 1	71
第 2 表	住居址変遷表	48	第 4 表	時期別住居址属性表 2	72



第5表	時期別住居址属性表3	73	表1	炭化材試料の個体同定(11)	153
第6表	時期別住居址属性表4	74	表1	炭化材試料の個体同定(12)	154
第7表	時期別住居址属性表5	75	表1	炭化材試料の個体同定(13)	155
第8表	時期別住居址属性表6	76	表1	炭化材試料の個体同定(14)	156
第9表	時期別住居址属性表7	77	表1	炭化材試料の個体同定(15)	157
第10表	時期別住居址属性表8	78	表1	炭化材試料の個体同定(16)	158
第11表	時期別住居址属性表9	79	表1	炭化材試料の個体同定(17)	159
第12表	時期別住居址属性表10	80	表2	灰像分析結果	162
第13表	時期別住居址属性表11	81	表3	古墳時代の住居址出土炭化材の遺構別種類構成	164
第14表	時期別住居址属性表12	82	表4	奈良・平安時代の住居址出土炭化材の遺構別種類構成	165
第15表	時期確定可能掘立柱建物址一覧表	83	表5	検出貝類・獣骨の分類一覧	167
表1	炭化材試料の個体同定(1)	143	表6	動物依存体検出状況(1)	168
表1	炭化材試料の個体同定(2)	144	表6	動物依存体検出状況(2)	169
表1	炭化材試料の個体同定(3)	145	表6	動物依存体検出状況(3)	171
表1	炭化材試料の個体同定(4)	146	表6	動物依存体検出状況(5)	169
表1	炭化材試料の個体同定(5)	147	表6	動物依存体検出状況(3)	170
表1	炭化材試料の個体同定(6)	148	表6	動物依存体検出状況(4)	171
表1	炭化材試料の個体同定(7)	149	表6	動物依存体検出状況(5)	172
表1	炭化材試料の個体同定(8)	150	表6	動物依存体検出状況(6)	173
表1	炭化材試料の個体同定(9)	151	表7	人骨同定結果	177
表1	炭化材試料の個体同定(10)	152			

## 図 版 目 次

図版1	炭化材(1)	181	図版12	炭化材(12)	192
図版2	炭化材(2)	182	図版13	炭化材(13)	193
図版3	炭化材(3)	183	図版14	炭化材(14)	194
図版4	炭化材(4)	184	図版15	炭化材(15)	195
図版5	炭化材(5)	185	図版16	植物珪酸体・種実遺体	196
図版6	炭化材(6)	186	図版17	木製品	197
図版7	炭化材(7)	187	図版1	皇朝十二銭 X 線写真	207
図版8	炭化材(8)	188	図版2	帯金具 X 線写真	208
図版9	炭化材(9)	189	図版3	鉄器・鉄製品 X 線写真(1)	209
図版10	炭化材(10)	190	図版4	鉄器・鉄製品 X 線写真(2)	210
図版11	炭化材(11)	191	図版5	銅製品 X 線写真(1)	211

# 第Ⅰ章 調査の概要

## 第1節 調査の経緯と経過

聖原遺跡は佐久市の北部、浅間山南麓の南西に放射状にのびる田切り地形に挟まれた台地上に位置し、標高734～742m前後を測る。

昭和63年度、今回の開発予定区域の南西端に接する部分を佐久市による浅麓湖線建設工事に伴い、佐久埋蔵文化財調査センターが上聖端遺跡の名称で4,700㎡の調査を実施し、古墳時代後期～平安時代の住居址47軒、掘立柱建物址21棟を検出した。同年、佐久市教育委員会は開発予定区域に大規模な試掘調査を実施し、古墳時代後期～平安時代の大規模集落遺跡の存在を確認した。また、同年～平成元年にかけて、開発予定区域の北東において佐久埋蔵文化財調査センターにより実施された聖原遺跡Ⅱの調査や、昭和63年度の御代田町教育委員会による聖原遺跡Ⅱ調査区の隣接地の調査により、聖原遺跡は佐久市を越え御代田町にまで展開する広大な集落遺跡であることが確認にされた。

今回の調査は佐久市流通業務団地の造成に伴い、遺跡の破壊が余儀なくされる事態となったため、平成元年度は佐久市土地開発公社より委託を受けた佐久市教育委員会が、佐久埋蔵文化財調査センターに調査を委託し行い、平成2年度以降は佐久市教育委員会が委託を受け調査を実施した。

報告書は平成13年度～第1分冊、平成14年度～第2分冊、平成15年度～第3分冊、平成16年度～第4・5分冊（本書）を刊行し、全ての調査が終了した。



第1図 聖原遺跡の位置 (1 : 50,000)



## 第2節 調査体制

平成元年度		
調査受託者	佐久市教育委員会教育長	大井 昭二（6月退任） 大井 季夫（7月就任）
事務局	佐久埋蔵文化財調査センター所長	西沢 政巳
	佐久埋蔵文化財調査センター 庶務係長	畠山 俊彦
	庶務係	飯沢 恵子、菊池 直美
	調査係主査	高村 博文
	調査係	三石 宗一、小山 岳夫、小林 眞寿、翠川 泰弘 助川 朋広
	調査担当者	高村 博文
調査主任	三石 宗一、小山 岳夫、小林 眞寿、翠川 泰弘 助川 朋広	
平成2年度		
調査受託者	佐久市教育委員会教育長	大井 季夫
事務局	佐久市教育委員会 佐久埋蔵文化財調査センター	
	佐久市教育委員会教育次長	小池 八郎
	佐久市開発公社局長	須江 吉介
	埋蔵文化財課長兼埋蔵文化財係長兼 佐久埋蔵文化財調査センター所長	相沢 幸男
	管理係長	桜井 牧子
管理係 埋蔵文化財係		東城 公人
		高村 博文、林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司
		小山 岳夫（平成2年度退職）、小林 眞寿、羽毛田卓也、 翠川 泰弘（平成2年度退職）、竹原 学
		助川 朋広（平成2年度退職）
	調査担当者	三石 宗一、小林 眞寿、羽毛田卓也、翠川 泰弘 助川 朋広
平成3年度		
調査受託者	佐久市教育委員会教育長	大井 季夫
事務局	佐久市教育委員会 佐久埋蔵文化財調査センター	
	佐久市教育委員会教育次長	奥原 秀雄
	佐久市開発公社局長	佐々木正泰
	埋蔵文化財課長兼 佐久埋蔵文化財調査センター所長	上原 正秀
	管理係長	桜井 牧子
	埋蔵文化財係長	草間 芳行
埋蔵文化財係		高村 博文、林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司
		小林 眞寿、羽毛田卓也、竹原 学（平成3年度退職）
	調査担当者	三石 宗一、小林 眞寿
平成4年度		
調査受託者	教育長	大井 季夫
事務局	教育次長	奥原 秀雄
	埋蔵文化財課長	上原 正秀
	管理係長	桜井 牧子

	埋蔵文化財係長	草間 芳行
	埋蔵文化財係	高村 博文、林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司
	調査担当者	小林 眞寿、羽毛田卓也 三石 宗一、小林 眞寿
平成5年度		
調査受託者	教育長	大井 季夫
事務局	教育次長	奥原 秀雄
	埋蔵文化財課長	上原 正秀
	管理係長	小林 泰子
	埋蔵文化財係長	草間 芳行
	埋蔵文化財係	高村 博文、林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司
	調査担当者	小林 眞寿、羽毛田卓也、富沢 一明、上原 学 三石 宗一
平成6年度		
調査受託者	教育長	大井 季夫
事務局	教育次長	奥原 秀雄
	埋蔵文化財課長	戸塚 満
	管理係長	谷津 恭子
	管理係	田村 和広
	埋蔵文化財係長	草間 芳行
	埋蔵文化財係	林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司、小林 眞寿 羽毛田卓也、富沢 一明、上原 学
	調査担当者	三石 宗一、上原 学、森泉かよ子
平成7年度		
調査受託者	教育長	大井 季夫（6月退任） 依田 英夫（7月就任）
事務局	教育次長	市川 源
	埋蔵文化財課長	戸塚 満
	管理係長	谷津 恭子（6月退任）
	管理係	田村 和広
	埋蔵文化財係長	大塚 達夫
	埋蔵文化財係	林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司、小林 眞寿 羽毛田卓也、富沢 一明、上原 学
	調査担当者	三石 宗一、森泉かよ子
平成8年度		
調査受託者	教育長	依田 英夫
事務局	教育次長	市川 源
	埋蔵文化財課長	北沢 元平
	管理係長	糊沢 慶子
	管理係	田村 和広
	埋蔵文化財係長	大塚 達夫
	埋蔵文化財係	林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司、小林 眞寿 羽毛田卓也、富沢 一明、上原 学
	調査担当者	三石 宗一
平成9年度		
調査受託者	教育長	依田 英夫
事務局	教育次長	市川 源
	埋蔵文化財課長	須江 仁胤
	管理係長	糊沢 慶子



	埋蔵文化財係長	大塚 達夫
	埋蔵文化財係	林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司、小林 眞寿
	調査担当者	羽毛田卓也、富沢 一明、上原 学
平成10年度		三石 宗一
調査受託者	教育長	依田 英夫
事務局	教育次長	北沢 馨
	埋蔵文化財課長	須江 仁胤（管理係長兼任）
	埋蔵文化財係長	荻原 一馬
	埋蔵文化財係	林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司、小林 眞寿
	調査担当者	羽毛田卓也、富沢 一明、上原 学
		三石 宗一
平成11・12年度		
調査受託者	教育長	依田 英夫
事務局	教育次長	小林 宏造
	文化財課長	草間 芳行
	文化財係長	荻原 一馬
	文化財係	林 幸彦、須藤 隆司、小林 眞寿、羽毛田卓也
	調査担当者	富沢 一明、上原 学、出澤 力
		小林 眞寿
平成13年度		
調査受託者	教育長	依田 英夫（4月～6月） 高柳 勉（7月～）
事務局	教育次長	小林 宏造（4月～5月） 黒沢 俊彦（5月～）
	文化財課長	草間 芳行
	文化財係長	荻原 一馬（4月～5月） 森角 吉晴（5月～）
	文化財係	林 幸彦、須藤 隆司、小林 眞寿、羽毛田卓也
	調査担当者	富沢 一明、上原 学、出澤 力
		小林 眞寿
平成14年度		
調査受託者	教育長	高柳 勉
事務局	教育次長	黒沢 俊彦
	文化財課長	嶋崎 節夫
	文化財係長	森角 吉晴
	文化財係	林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司、小林 眞寿
	調査担当者	富沢 一明、上原 学、山本 秀典、出澤 力
		小林 眞寿
平成15年度		
調査受託者	教育長	高柳 勉
事務局	教育次長	赤羽根寿文
	文化財課長	嶋崎 節夫
	文化財係長	高村 博文
	文化財係	林 幸彦、三石 宗一、須藤 隆司、小林 眞寿
	調査担当者	富沢 一明、上原 学、赤羽根太郎、出澤 力
		小林 眞寿
平成16年度		
調査受託者	教育長	高柳 勉
事務局	教育次長	赤羽根寿文
	文化財課長	小林 正衛

文化財係長  
文化財係

調査担当者

高村 博文

林 幸彦、須藤 隆司、小林 眞寿、羽毛田卓也

富沢 一明、上原 学、赤羽根太郎、出澤 力

小林 眞寿

#### 平成元年～3年調査団

団 長—黒岩 忠男

副 団 長—白倉 盛男、藤沢 平治

#### 平成元年～16年度調査員

調査主任—佐々木宗昭、森泉かよ子

調 査 員—青木あさ代、秋山 勝哉、秋山 たけ、秋山みち子、秋山 芳子、浅沼ノブ江、阿部 和人、甘利 亘  
荒井 かつ、荒井ふみ子、有賀 澄江、有賀 保晴、飯沢つや子、飯田すえの、飯田チヨ子、五十嵐勝吉  
池田 その、池田 園子、池田 豊子、石井 美鈴、磯貝 はな、市村 百代、井出 愛子、井出つねじ  
井出徳四郎、井出 安生、伊藤 理、井上 行雄、井上貴美子、今井みさ子、岩崎 房江、上原あや子  
上原 希、上原 学、上原 幸子、碓氷 英之、白田 俊保、白田 真杉、内堀 団、梅沢 淳子  
江口まさ江、江原 富子、遠藤しずか、大井 キセ、大井今朝太、小田川 栄、小田川時江、尾沼けさと  
小幡 弘子、柏原 松枝、金井 延、金沢 花子、金森 治代、香山 優子、河合 節子、川多アヤ子  
神部 妙子、木内 明美、木内 英一、木内 公子、木内 節夫、木内 久、菊池 喜重、菊池 康一  
木島 美子、木村 裕孝、倉見 渡、棚沢三之助、神津 春代、高地 正雄、神津 啓子、神津 節子  
神津ツネヨ、神津つる子、小金沢たけみ、小須田サクエ、小須田幸子、小平富美江、小林 永一  
小林 和儀、小林喜久子、小林 定男、小林 幸子、小林 立江、小林とめの、小林まさ子、小林 満子  
小林 三男、小林みよ子、小林百合子、小林よしみ、小松威久男、小山 功、小山 澄江、小山 正吉  
小山 林一、斉藤 義男、斉藤 真理、酒井 豊子、堺 益子、佐久本眞樹子、桜井 聖人  
桜井 牧子、佐々木 正、佐々木久子、佐藤 愛子、佐藤志げ子、佐藤みす江、佐藤 節子、佐藤 玉枝  
沢井 皐月、重田 文枝、篠崎 清一、篠原 昭子、島田 幹子、清水佐知子、清水 六郎、白井おくに  
須江 慶、須藤 瑞帆、関口 正、関口 美咲、大工原春巳、高橋かね子、高橋加代子、高橋かをえ  
高橋 敬子、高橋サチコ、高橋 恒代、高橋 錦、高橋のり子、高橋ふさ代、高橋 ふみ、高橋 冬子  
高橋 良市、高見沢 綾、滝沢 澄子、武井とよ子、武井ミサイ、竹重 祐夫、田中タツ子、田中ひさ子  
田村 祐子、角田しず江、角田 すい、角田すづ子、角田 時、角田トミエ、角田まさ江、角田 良夫  
東城 友子、東城 幸子、徳田 代助、徳田けさき、徳田 英胤、樋田 咲枝、長岡喜代人、長岡 政道  
中沢みどり、中島武三郎、中島 照夫、中島とも子、中島ふくじ、仲條 悦子、中山いつ代、中山弥太郎  
中山 雪子、並木ことみ、中山たのし、成沢 富子、成沢 師弘、西川しづ子、西沢 次男、羽毛田香里  
橋詰 勝子、橋詰けさよ、橋詰 信子、畠山みち子、花岡美津子、花里香代子、花里きしの、花里四之助  
花里三佐子、林 美智子、原 キミエ、原田登里子、原 まき子、樋沢しづい、比田井久美子  
平林 泰、藤巻 初枝、藤巻 辰江、星野 重一、星野 保彦、星野 良子、細萱ミスズ、細谷 秀子  
堀籠 滋子、堀籠 因、堀籠みさと、真島 保子、増野 深志、三浦 洋崇、水間 雅義、宮川百合子  
武者 幸彦、村松とみ子、茂木とよ子、桃井もとめ、森泉 欽一、森泉源治郎、森角せきよ、森角 雅子  
森川 宗治、丸山 澄、柳沢江い子、柳沢 孝子、柳沢千賀子、柳沢ちなみ、柳沢豊志子、柳沢 豊子  
柳沢 典子、柳沢 八重、矢野きくえ、山浦 豊子、山浦とらじ、山口 弘子、山崎 直、山崎 博文  
山崎平八郎、山村 容子、吉原 照美、依田 みち、和久井芳雄、渡辺久美子、渡辺 倍男、渡辺まさじ  
渡辺 吉治



## 第3節 調査日誌

平成元年度	平成元年4月10日～11月28日	現場調査	平成元年12月1日～平成2年3月30日	整理調査
平成2年度	平成2年4月9日～12月7日	現場調査	平成2年12月10日～平成3年3月29日	整理調査
平成3年度	平成3年4月30日～11月30日	現場調査	平成3年12月2日～平成4年3月31日	整理調査
平成4年度	平成4年4月8日～9月25日	現場調査	平成4年9月28日～平成5年3月31日	整理調査
平成5年度	平成5年8月4日～10月16日	現場調査	平成5年10月18日～平成6年3月31日	整理調査
平成6年度	平成6年4月5日～11月28日	現場調査	平成6年11月29日～平成7年3月31日	整理調査
平成7年度	平成7年6月5日～12月7日	現場調査	平成7年12月8日～平成8年3月29日	整理調査
	現場調査完了			
平成8年度	平成8年4月1日～平成9年3月31日	整理調査		
平成9年度	平成9年4月7日～平成10年3月31日	整理調査		
平成10年度	平成10年4月1日～平成11年3月31日	整理調査		
平成11年度	平成11年4月1日～平成12年3月31日	整理調査		
平成12年度	平成12年4月3日～平成13年3月31日	整理調査		
平成13年度	平成13年4月2日～平成14年3月29日	整理調査	(報告書第1分冊刊行)	
平成14年度	平成14年4月5日～平成15年3月28日	整理調査	(報告書第2分冊刊行)	
平成15年度	平成15年5月1日～平成16年3月31日	整理調査	(報告書第3分冊刊行)	
平成16年度	平成16年4月1日～平成17年2月28日	整理調査	(報告書第4・5分冊刊行)	
	調査完了			

## 第4節 分類基準

### 1. 遺構

#### 1) 竪穴住居址

竪穴住居址はその平面形態から隅丸方形=A、隅丸長方形=Bに大別し、計測表の平面形態の項目に記載した。(方形と長方形の区分は長軸長と短軸長の差が1割を越えたものを長方形とした)

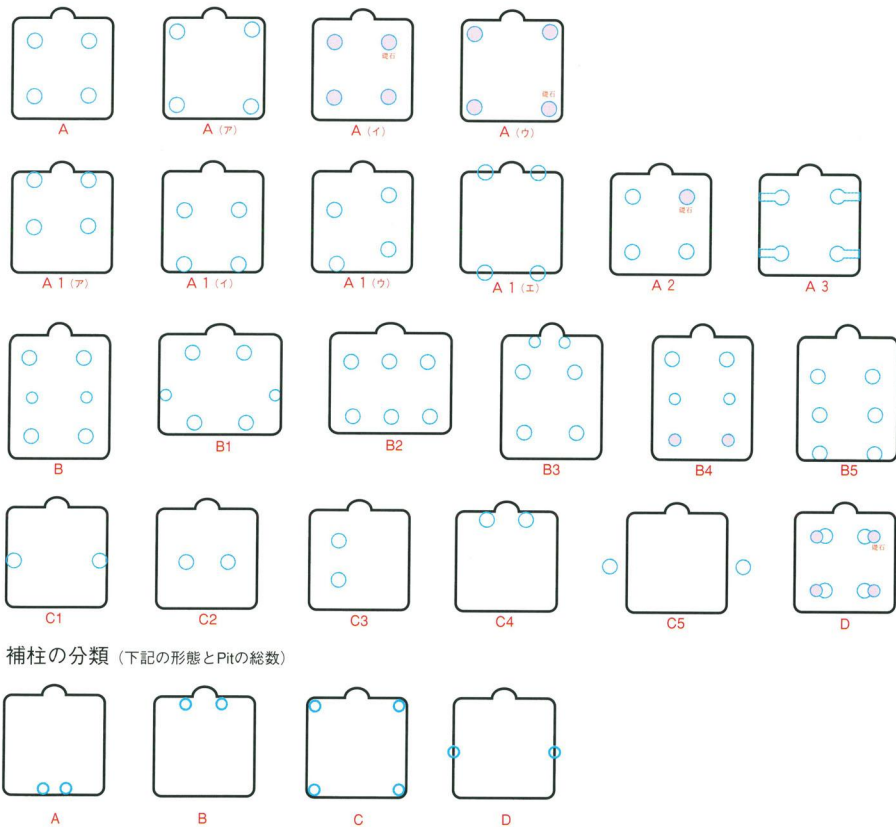
平面形態とは別に支柱穴の配置により第2図のように竪穴住居址を分類し、計測表中の支柱配置の項目に記載した。これは、あくまでも支柱穴の配置により分類を試みたものであり、所謂「壁柱穴」・「出入口」・「張り出し」については、それぞれ、補柱や付属施設の項目に記載をした。

計測表のカマド構築方法には、カマドの構築部材を記載した。石=軽石を含む岩石の略、粘土=遺跡の粘土採掘坑から採取したと考えられる粘質土の略、土器=煙道部に使用される武蔵甕を含む完形・破片の土器の略、そして、地山を削り残して袖の芯としたものは地山削出とした。

堀方から検出された Pit には、その遺構に伴うものと、先行するものが混在するが、区分は不可能である。

- A 一屋内に4基の支柱穴が均等に配置されるもの。
- Aア 一屋内の4隅に配置される。
- Aイ 一Aの柱穴を礎石で構成するもの。
- Aウ 一アの柱穴を礎石で構成するもの。
- A1ア 一屋内に均等に配置される4基の支柱穴がカマドの存在する壁に偏って配置される。
- A1イ 一屋内に均等に配置される4基の支柱穴がカマドの存在する壁と反対の壁に偏って配置される。
- A1ウ 一屋内に4基の支柱穴が不均等に配置される。
- A1エ 一カマドの存在する壁とそれに対峙する壁に4基の支柱穴が均等に配置される。
- A2 一Aの支柱穴の一部が礎石で構成される。
- A3 一Aに所謂「間仕切り」溝が伴うもの。

- B 一屋内に6基の支柱穴が均等に配置されるもの。
- B 1 一均等に配置される6基の内の中央の一組が壁下に配置されるもの。
- B 2 一Bの柱穴配置が90°回転したもの。
- B 3 一屋内に均等に配置される4基の支柱穴の他に、カマドの両脇にも支柱穴が配置されるもの。
- B 4 一Bの柱穴の一部を礎石で構成するもの。
- B 5 一屋内に均等に配置される6基の支柱穴がカマドの存在する壁と反対の壁に偏って配置される。
- C 1 一屋内の壁中央壁下に2基の支柱穴が均等配置されるもの。
- C 2 一屋内の中央に2基の支柱穴が均等配置されるもの。
- C 3 一屋内に2基の支柱穴が不均等に配置されるもの。
- C 4 一屋内のカマドの両脇に2基の支柱穴が配置されるもの。
- C 5 一C 1の支柱穴が壁外に配置されるもの。
- D 一Aの支柱穴脇に礎石が伴うもの。



第2図 支柱穴配置による竪穴住居址分類図

## 2) 掘立柱建物址

掘立柱建物址は第3図～第5図に示したように形態分類を行った。分類の基本は梁間の柱間数と桁行の柱間数の組み合わせである。溝持 Pit や布堀のものは平面形態上 Pit により構成されるものとは別個の物として分類したが、略号の末尾に梁間と桁行の柱間構成の分類略号を付加してある。

また、基本形から派生するバリエーションについては、小文字のアルファベットにより識別し、所謂「廂」を有す



る物は桁側は+K、梁側は+Hと表記した。尚、便宜上柱列や柵と思われるものも掘立柱建物址に含め分類した。

以下形態毎の概略を記していく。

A 1-1 間×1 間の側柱の形態。A 2-A 1 の柱穴が1 基欠落するもの。

B 1-1 梁間1 間×桁行2 間の側柱の形態。B 2 梁間2 巻×桁行1 間の側柱の形態。B 3-B 1 の中央に1 基の柱穴を有するもの。B 4-B 2 の中央に1 基の柱穴を有するもの。B 5-B 2 の桁行の1 辺の中央の柱穴が1 基欠落するもの。B 6-B 1 の梁間の1 辺の中央の柱穴が欠落するもの。B 7-1 梁間の1 辺の端部の柱穴が1 基欠落し、その柱穴を伴う桁行の中央の1 基柱穴が付加されるもの。B 8-B 1 の4 隅の柱穴が1 基欠落するもの。

C 1-1 梁間1 間×桁行3 間の側柱の形態。C 2-C 1 の桁行の1 辺が両隅の2 基の柱穴で構成されるもの。C 3-C 1 の桁行の1 辺が3 基の柱穴で2 間に構成されるもの。

D 1-1 梁間1 間×桁行4 間の側柱の形態。

E 1 a-1 梁間2 間×桁行2 間の側柱の形態。E 1 a+H 1-E 1 a の梁間に3 基の柱穴で2 間に構成される廂を伴うもの。E 1 a+H 2-E 1 a+H 1 の廂が2 基の柱穴で構成されるもの。E 1 b-E 1 a の梁間の1 辺の中央の柱穴が外に突出するもの。E 1 c-E 1 b とは逆に中に引っ込むもの。E 2-2 間×2 間の総柱の形態。E 2+H-E 2 の梁間の1 辺に2 基の柱穴により構成される廂を有するもの。E 3-桁行の中央の列が4 基の柱穴で構成される総柱の形態。E 4 a-桁行の1 辺の中央の柱穴が欠落するもの。E 4 b-1 梁間の1 辺の中央の柱穴が欠落する形態。E 4 c-E 4 b の中央に柱穴を有するもの。E 5-E 1 a の1 隅の柱穴1 基が欠落する形態。

F 1 a-1 梁間2 間×桁行3 間の側柱の形態。F 1 b-F 1 a と長軸が180° 異なるもの。F 1+K-F 1 の桁行の1 辺に廂を伴うもの。F 2 a-F 1 の総柱の形態。F 2 b-F 2 a の桁行の中央の列が4 間で構成されるもの。F 3 a-F 1 の梁間の1 辺が1 間で構成されるもの。F 3 b-F 1 の桁行の1 辺が2 間で構成されるもの。F 3 c-F 3 b の2 間構成の桁行が等分の柱間であったのに対し、3 等分の柱間の1 基の柱穴が欠落し、2 間構成となるもの。F 3 c+K-F 3 c の3 間構成の桁行側に廂を伴うもの。F 3 d-F 3 c の梁間の中心の柱穴が内側に引っ込むもの。F 3 e-F 3 a の1 隅の柱穴1 基が欠落するもの。F 3 f-F 1 a の梁間の1 辺の中央の柱穴が中に引っ込むもの。F 4-F 1 の桁行の1 辺が1 間で構成されるもの。F 4+H-F 4 の梁間の1 辺に廂を伴うもの。F 5-F 1 の梁間の1 辺が3 間で構成されるもの。F 6-F 1 の梁間の1 辺の中央と隅の柱穴が2 基欠落し、この辺に2 基1 間の廂が伴うもの。F 7-F 1 の桁行の1 辺の隅とその隣の2 基の柱穴が欠落するもの。F 8-F 1 の隅の柱穴が1 基欠落するもの。F 9-F 1 a の梁間と桁行のそれぞれ1 辺が1 間で構成されるもの。

G 1-1 梁間2 間×桁行4 間の側柱の形態。G 2-G 1 の桁行の1 辺が3 等分の間で構成されるもの。G 3-G 1 の総柱形態で、中央の桁行だけが1 間で構成されるもの。

H 1-1 梁間2 間×桁行5 間の側柱の形態。H 2-H 1 の中心に1 基の柱穴を有するもの。

I 1-1 梁間3 間×桁行3 間の側柱の形態。I 2-I 1 の梁間の1 辺の中央の2 基の柱穴の内の1 基が欠落する形態。I 3-I 1 の桁行の中央の2 基の柱穴の1 基が欠落する形態。I 4-I 1 の桁行の1 辺が等分の2 間で構成されるもの。I 5-1 梁間3 間×桁行3 間の総柱の形態。

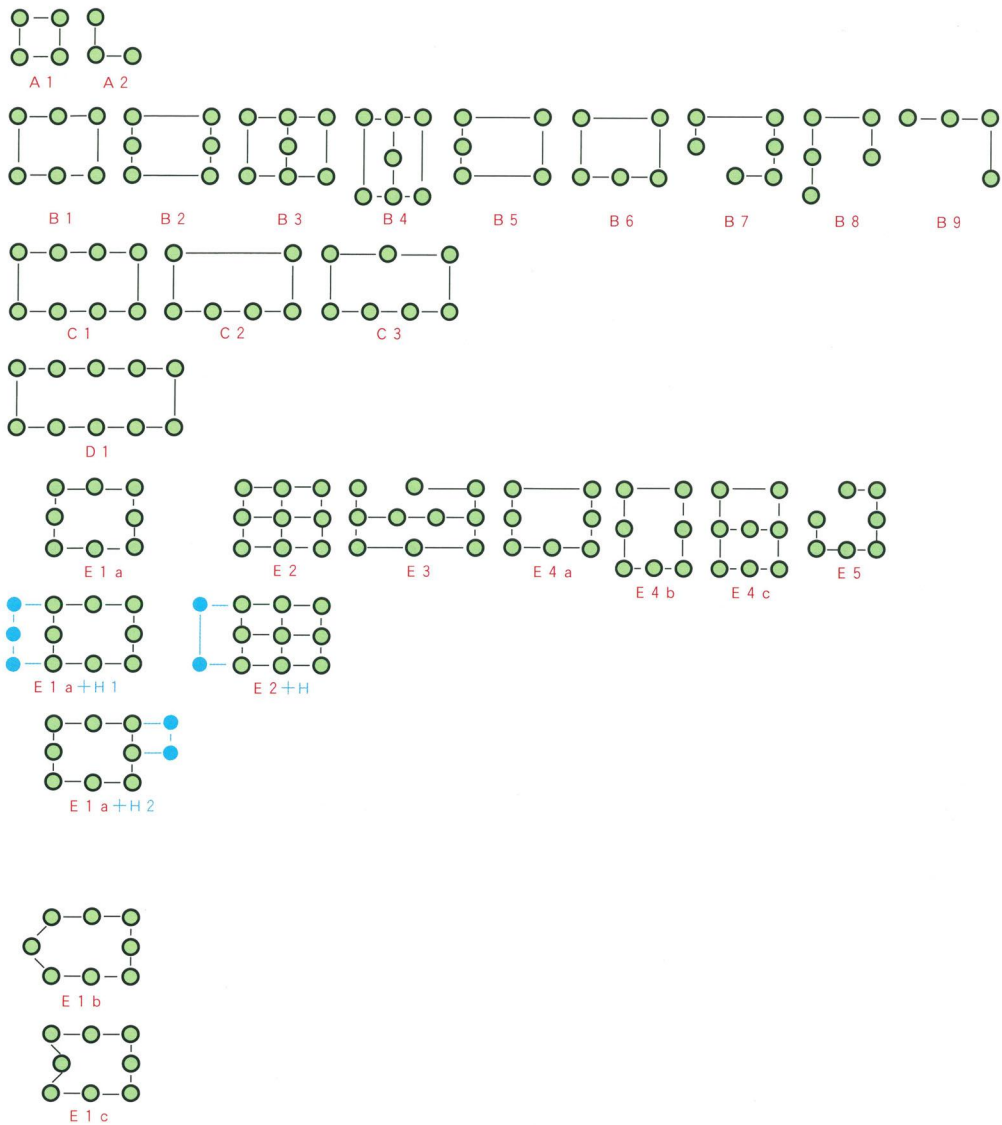
J 1-1 梁間2 間×桁行4 間の側柱の形態。J 2-J 1 の桁行中央に梁間が付加されるもの。J 3-J 1 の桁行中央以外に梁間が付加されるもの。J 4-J 1 の桁行の1 辺が5 間で構成されるもの。J 5-J 1 の梁間の1 辺の中央の柱穴が1 基欠落するもの。J 6-J 1 の桁行の1 辺の中央の柱穴1 基が欠落するもの。

K 1-1 梁間3 間×桁行5 間の側柱の形態。K 2-K 1 の1 隅の柱穴が欠落するもの。K 3-1 梁間4 間×桁行6 間の側柱の形態。K 4-K 3 の梁間の1 辺が3 間、桁行の1 辺が4 間の形態。K 5-1 梁間5 間×桁行5 間の形態。K 6-1 梁間6 間×桁行7 間の側柱の形態。K 7-1 梁間5 間×桁行4 間に配置される柱の内部に梁間3 間×桁行2 間の側柱の形態が内包されるもの。K 8-1 梁間2 間×桁行5 間の側柱の形態。

L 1 a-桁行の2 辺が溝掘される、梁間1 間の側柱の形態。L 1 b-1 梁間の2 辺が溝掘される、桁行1 間の側柱の形態。L 2-L 1 a の桁行の1 辺が2 本の溝で構成されるもの。L 3-L 1 a の桁行が2 辺共に2 本の溝で構成されるもの。L 4-L 1 b の梁間の1 辺が2 基の柱穴で構成されるもの。

M 1 a-L 1 a の梁間の中央に1 基の柱穴が付加され、2 間になるもの。M 1 b-L 1 b の桁行の中央に1 基の柱穴が付加され、2 間構成になるもの。M 2 a-L 3 の梁間の中央に1 基の柱穴が付加されるもの。M 2 b-M 2 a の桁行の1 辺の中央に1 基の柱穴が付加されるもの。M 3-1 間の溝5 本により構成される、梁間2 間×桁行3 間の側柱の形態。M 4 a-桁行方向に長い「L」字の溝2 本により構成されるもの。M 4 b-1 辺の桁行は1 本の溝、1 隅を含む梁間から桁行が「L」字の溝、1 隅と1 辺の梁間中央が柱穴で構成されるもの。

N 1 a-桁行方向に3 本の溝で構成される総柱の形態。N 1 b-1 梁間方向に3 本の溝で構成される総柱の形態。N



第3図 掘立柱建物址の分類(1)

1 c - N 1 b の 1 隅が 1 基の柱穴で構成されるもの。N 2 - 桁行方向に長い長方形の環状溝と、1 本の桁行溝とで構成される総柱の形態。N 3 - 「E」字の溝 2 基で構成される総柱の形態。

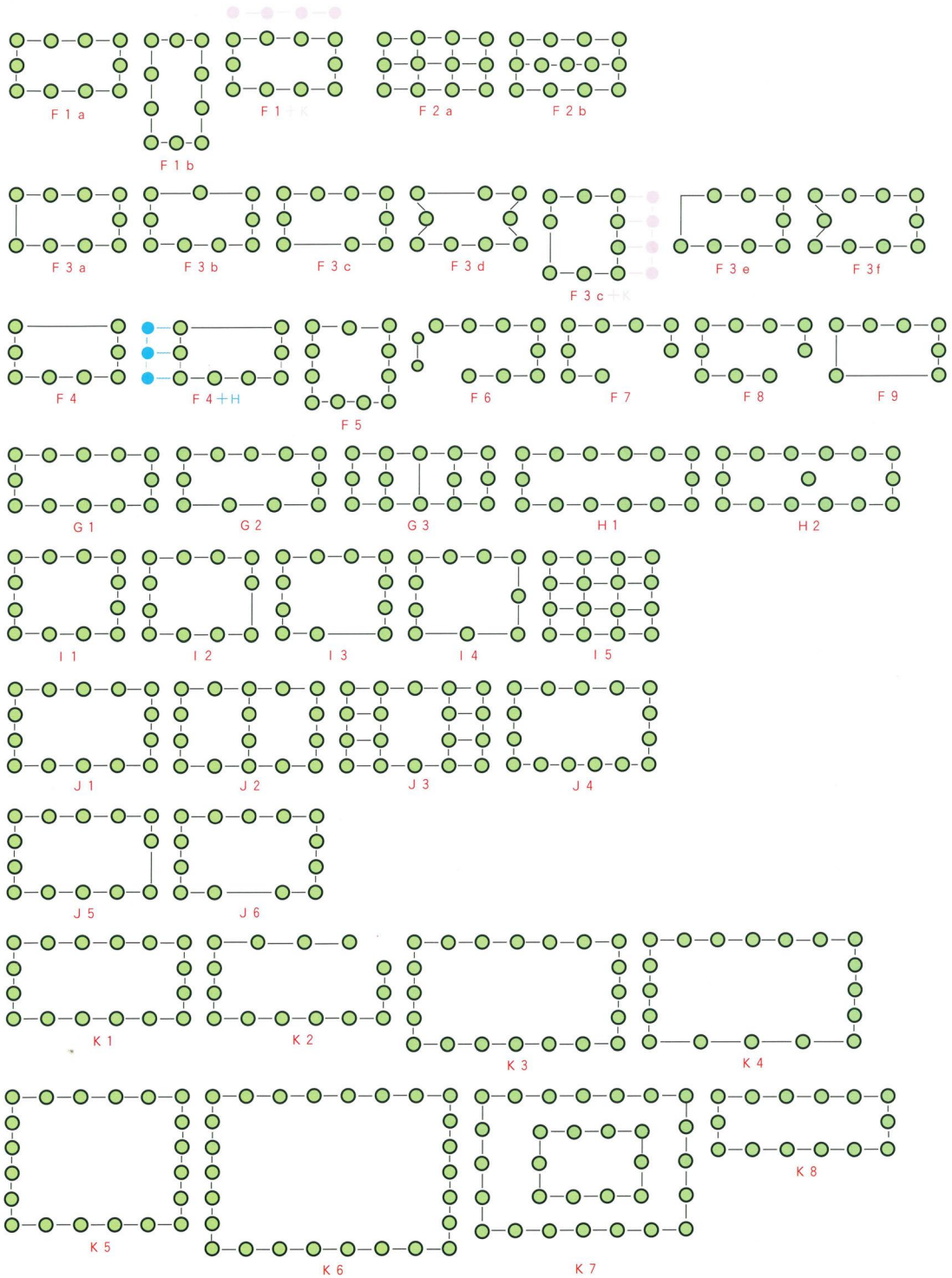
O - M 1 a の梁間に 1 間の溝が付加された梁間 3 間の側柱の形態。

P 1 - 所謂「柱列」。P 2 ~ P 6 - 所謂「柵」。

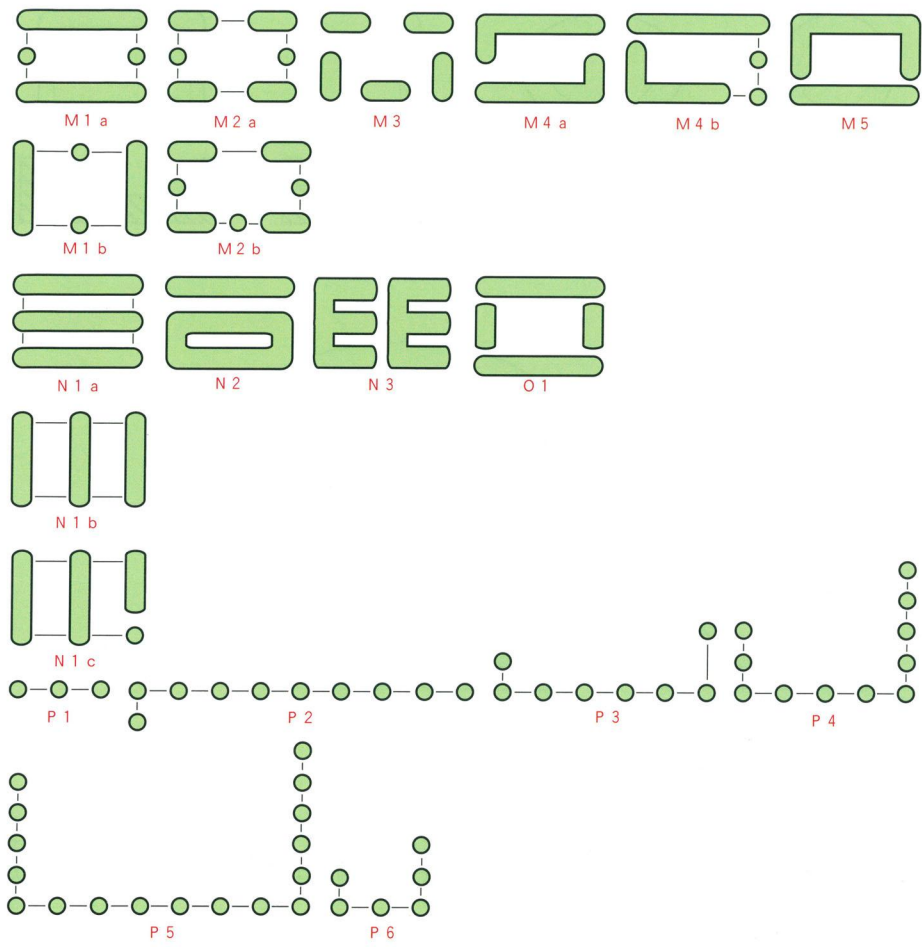
### 3) 土坑

土坑は第 6 図に示したように分類した。当遺跡の特徴としては、住居址等と同時期の墓廣が存在しないことが挙げられる。概略は以下のとおりである。





第 4 図 掘立柱建物址の分類(2)

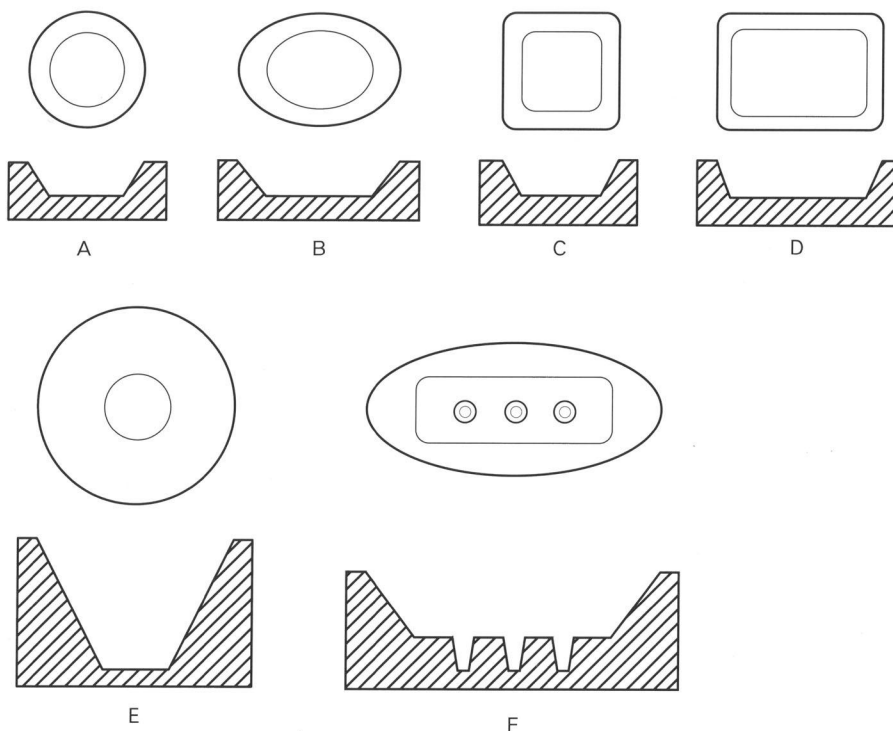


Pitで構成される掘立柱建物址の一部に溝持Pitが併用される場合は分類記号の頭に以下の略号を付加している。

	M1 一桁に使用
	M2 一梁に使用
	M3 L字に隅に使用
	U1 一桁の側辺と2隅を溝持Pitで構成
	U2 一梁間の一辺と2隅を溝持Pitで構成
	Z 一布堀

第5図 掘立柱建物址の分類(3)





第6図 土坑の分類

A—平面形態が円形を呈するもの。B—平面形態が楕円形を呈するもの。C—平面形態が方形を呈するもの。D—平面形態が長方形を呈するもの。E—平面形態が円形～楕円を呈し、断面は底面の小さい逆梯形を呈する比較的深度が深いもの。F—縄文時代の陥穴。

以上であるが、円形と楕円形、方形と長方形の違いは、長径と短径の差が1割を越えるものを楕円形、長方形とした。また、Eに分類した土坑は、1986『池端・西御堂』においては羽田伸博により、牛馬を使用した雨乞い等の呪術的な祭祀遺構とされ、1995『長野県考古学会誌75号』における花岡弘の論考においては、塵芥処理土坑、1996『立正史学』における中山晋の論考「古代日本の「氷室」の実体」においては氷室とされたものである。縄文時代の陥穴Fはその性格上、遺物を伴うことはないが、遺跡から出土する打製石鏃をはじめとする縄文時代の石器や縄文土器片、他遺跡の例、遺跡が立地する田切台地上に認められる低湿地の痕跡の縁辺に構築される立地、他の土坑と明瞭に異なる覆土、特徴的な平・断面形態等から縄文時代の陥穴とした。

## 2. 遺物

### 1) 土師器

○杯—杯は成形・調整・器形から次ぎのように分類した。

A—ロクロ成形で底部にはヘラケズリだけが認められるものを一括する。内面の状態により、以下に細分する。

- A 1—ヘラミガキ後黒色処理
- A 2—ヘラミガキ
- A 3—ナデ後黒色処理
- A 4—ナデ
- A 5—暗紋+黒色処理

- A 6－ナデ後暗紋
  - B－ロクロ成形でロクロから糸で切離した後、ヘラケズリを施すもの。(明らかにロクロから糸で切離したと思われるものでも、糸切痕が残存しないものは除外する)。内面の状態により以下に細分する。
    - B 1－ヘラミガキ後黒色処理
    - B 2－暗紋＋黒色処理
    - B 3－ナデ
    - B 4－ナデ後黒色処理
  - C－ロクロ成形で底部に糸切痕だけが認められるもの。内面の状態により以下に細分する。
    - C 1－ヘラミガキ後黒色処理
    - C 2－暗紋＋黒色処理
    - C 3－ナデ後黒色処理
    - C 4－内外面がヘラミガキ後黒色処理
    - C 5－ヘラミガキ
    - C 6－内面に暗紋が施され、内外面共に黒色処理。
    - C 7－内外面共にナデ後黒色処理
  - D－ロクロ成形で底部に糸切痕だけが認められるもので、黒色処理が施されないもの。内面の状態により以下に細分する。
    - D 1－ナデ
    - D 2－ナデ＋暗紋
  - E－非ロクロ成形で須恵器杯蓋の模倣、あるいは模倣を原形とするもの。(所謂「有段口縁杯」や「北武蔵型杯」も含む)
  - F－非ロクロ成形で須恵器杯身の模倣、あるいは模倣を原形とするもの。
  - G－非ロクロ成形で半球状の形態もの。内面に黒色処理が施されないものをG 1、施すものをG 2に細分する。
  - H－非ロクロ成形で、丸底を呈し、長い口縁部が外反する。口縁部と底部の境には稜が形成される。
  - I－所謂「機内系暗紋」杯を一括しI 1とし、暗紋が欠落するものをI 2とした。(I 1とは異なる北武蔵型暗文杯も存在する)
  - J－甲斐型杯を一括する。
- 杓状杯－成形時に杯の両端を外側に広げ、平面形が楕円形を呈するものを、推測されるその用途から命名した。

○碗－高台が付加される杯の内身の深いものを碗とした。高台の形態により以下に分類した。

A－通常の高台が貼付されるもの。内面の状態により以下に細分する。

- A 1－ヘラミガキ後黒色処理
- A 2－暗紋＋黒色処理
- A 3－ヘラミガキ
- A 4－内外面共にヘラミガキ
- A 5－ナデ＋暗紋
- A 6－内外面ナデ後黒色処理
- A 7－内外面ヘラミガキ後黒色処理
- A 8－内面黒色
- A 9－内面ナデ

B－柱状高台が付加されるもの

○皿－高台が付加される杯の身の浅いものと、所謂「皿」を皿とした。高台の形態、有無により以下に細分した。

A－通常の高台が貼付されるもの。内面の状態により以下に細分する。

- A 1－ヘラミガキ後黒色処理
- A 2－内外ヘラミガキ後黒色処理
- A 3－内外ヘラミガキ

B－所謂「かわらけ」を一括する

C－柱状高台が付加されるもの

D－皿Bに高台が付加されるもの

E－灯明皿として特定できる形態的特徴を有するもの



○甕—甕は所謂「武蔵甕」と「ロクロ甕」とその他の甕に大別し、それぞれを細分した。

●武蔵甕—口縁部の形態・最大径の位置、台の有無により以下に分類した。

A—「く」字の口縁部形態を呈し、口縁部に最大径を有するもの。

B—「く」あるいは「コ」字気味の口縁部形態を呈し、体部に最大径を有するもの。

C—「コ」字の口縁部形態を呈し、体部に最大径を有するもの。

D—台が貼付されるものを一括する。「く」字口縁のものをD 1、「コ」字口縁のものをD 2に細分した。

E—Bの形態であるが、器壁の厚さや胎土がロクロ甕に近いもの。

●ロクロ甕—形態と最大径の位置により以下に細分した。

A—口縁部に最大径を有するもの。

B—体部に最大径を有するもの。

C—須恵器甕Aと同様な形態を呈するもの。

D—台が貼付されるもの。

●甕—調整と最大径の位置により以下に分類した。

A—口縁部に最大径を有するもの。内外面共にヘラケズリ調整のものをA 1、ハケメが併用されるものをA 2に細分した。

B—体部に最大径を有するもの。内外面共にヘラケズリ調整のものをB 1、ハケメが併用されるものをB 2に細分した。

C—口縁部が短く鉢状の形態のものを一括する。調整はナデである。

D—内外面にヘラケズリ調整が施され、丸底を呈する外来系の甕を一括する。所謂「北野型」・「機内系」甕。

E—内外面にヘラケズリ調整が施され、平底を呈する外来系の甕を一括する。

F—「甲斐型甕」に類するものを一括する。口縁部に最大径を有するものをF 1、体部に最大径を有するものをF 2に細分した。

○羽釜—鐙の形態により以下に分類した。

A—鐙が全周するもの。

B—鐙が断続するもの。

○甑—底部孔の形態と把手の有無により以下に分類した。

A—底部が全開のもの。把手を有さないものをA 1、把手を有するものをA 2、羽釜型のものをA 3に細分する。

B—多孔のもの。

C—単孔のもの。

○壺・鉢・盤・蓋・鍋等—細分が複雑になり煩雑化するもの、出土量が乏しく分類の必要が認められないこれらの器種は分類せず一括した。

## 2) 須恵器

○杯—杯は成形・調整・器形から以下のように分類した。

A—底部にヘラによる成形・調整痕だけが認められるもの。

B—ロクロから糸により切離した後、ヘラケズリが施されるもので、糸切痕が残存しているもの。

C—底部に糸切痕だけが認められるもの。

D—強く内傾する短いちあがり有するもの。

E—Dに比べちあがりが長く、内傾が弱いもの。

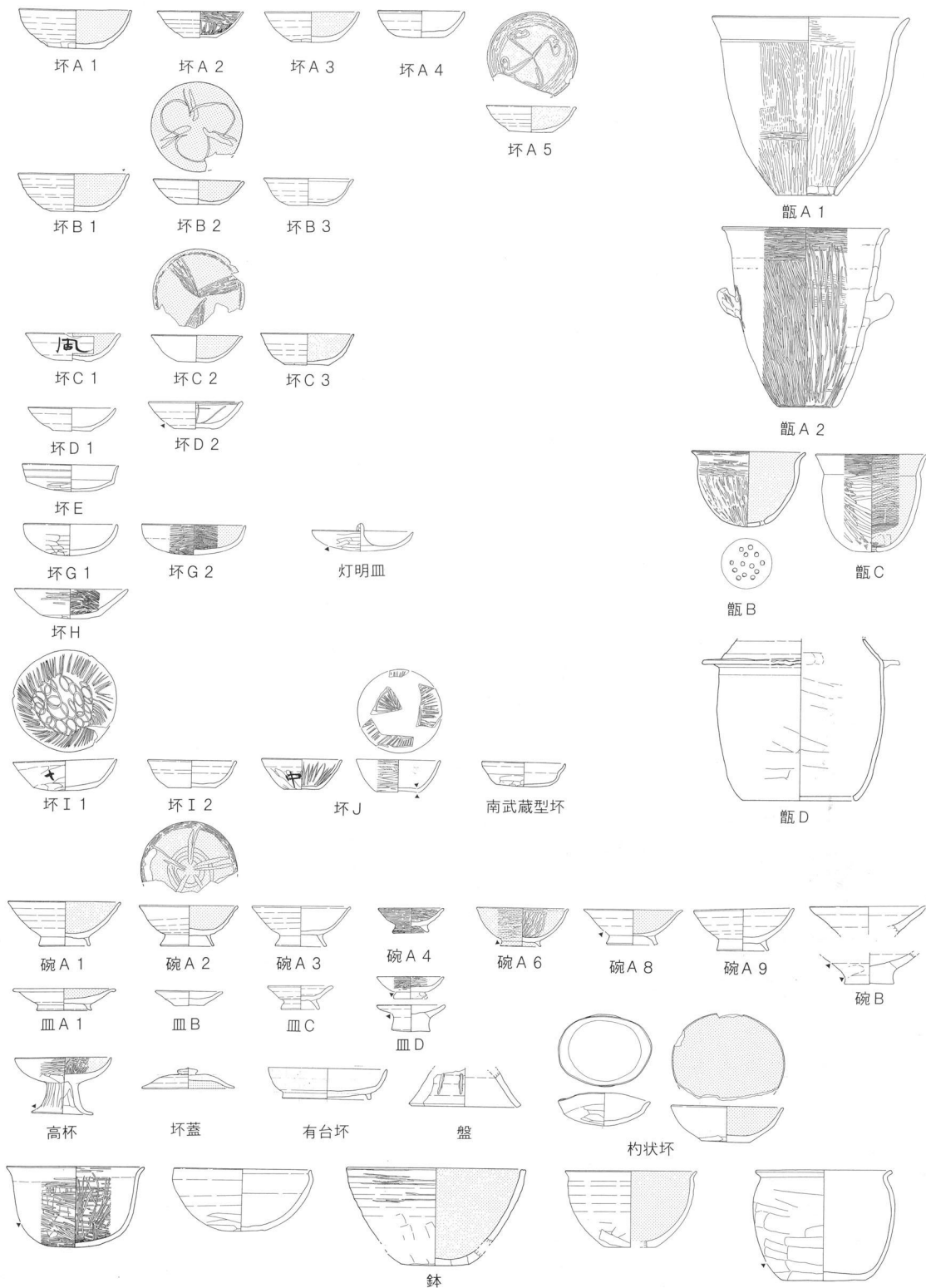
杓状杯—成形時に杯の両端を外側に広げ、平面形が楕円形を呈するものを、推測されるその用途から命名した。

○有台杯—身の深さと高台の形態、底部の状態により以下に分類した。

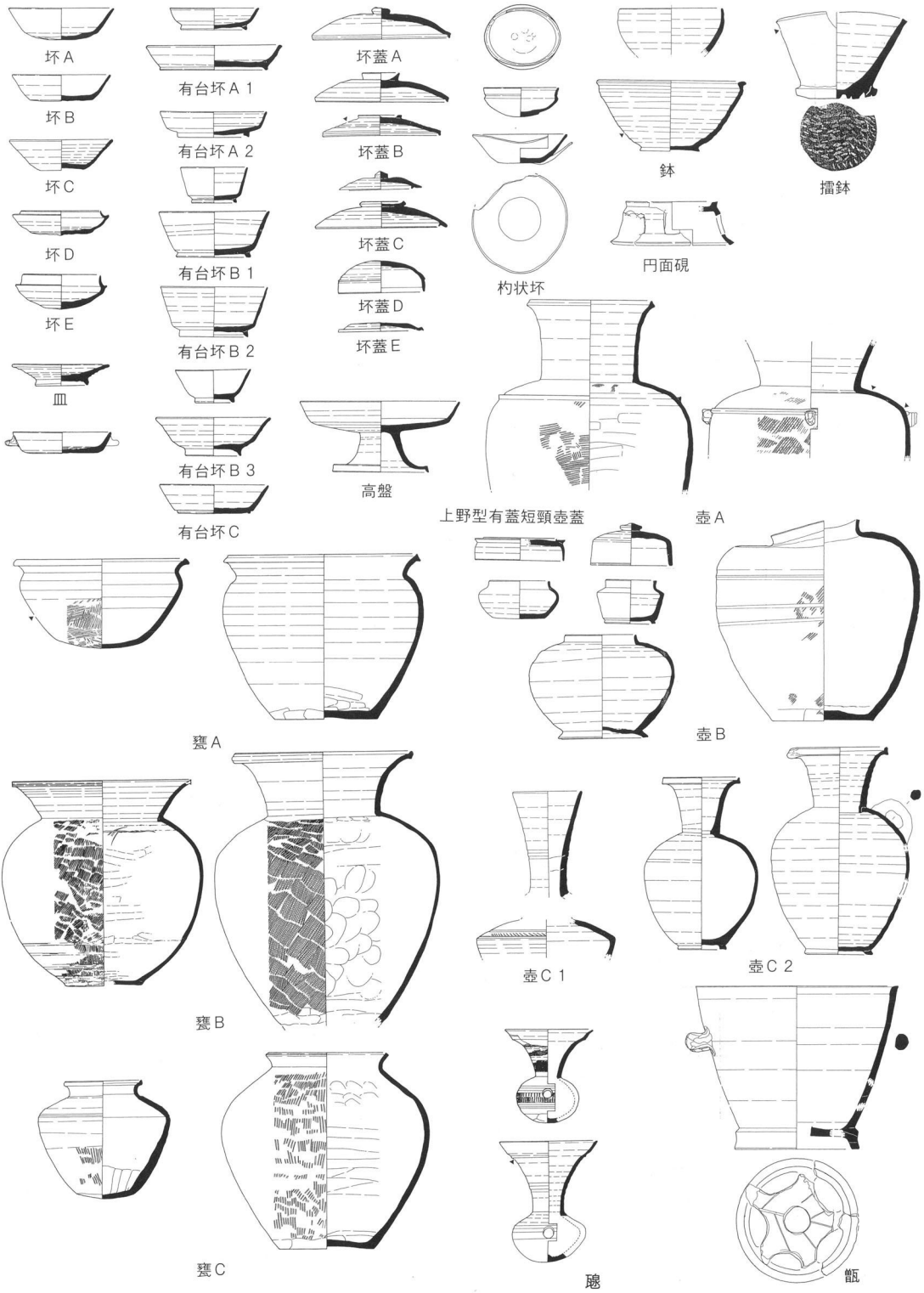
A—高台が貼付され、身の浅いもの。底部にヘラによる成形・調整痕だけが認められるものをA 1、糸切痕が伴うものをA 2に細分した。

B—高台が貼付され、身の深いもの。底部にヘラによる成形・調整痕だけが認められるものをB 1、糸切痕が伴うものをB 2、碗型の形態を呈するものをB 3に細分した。

C—削り出しの高台を有するもの。

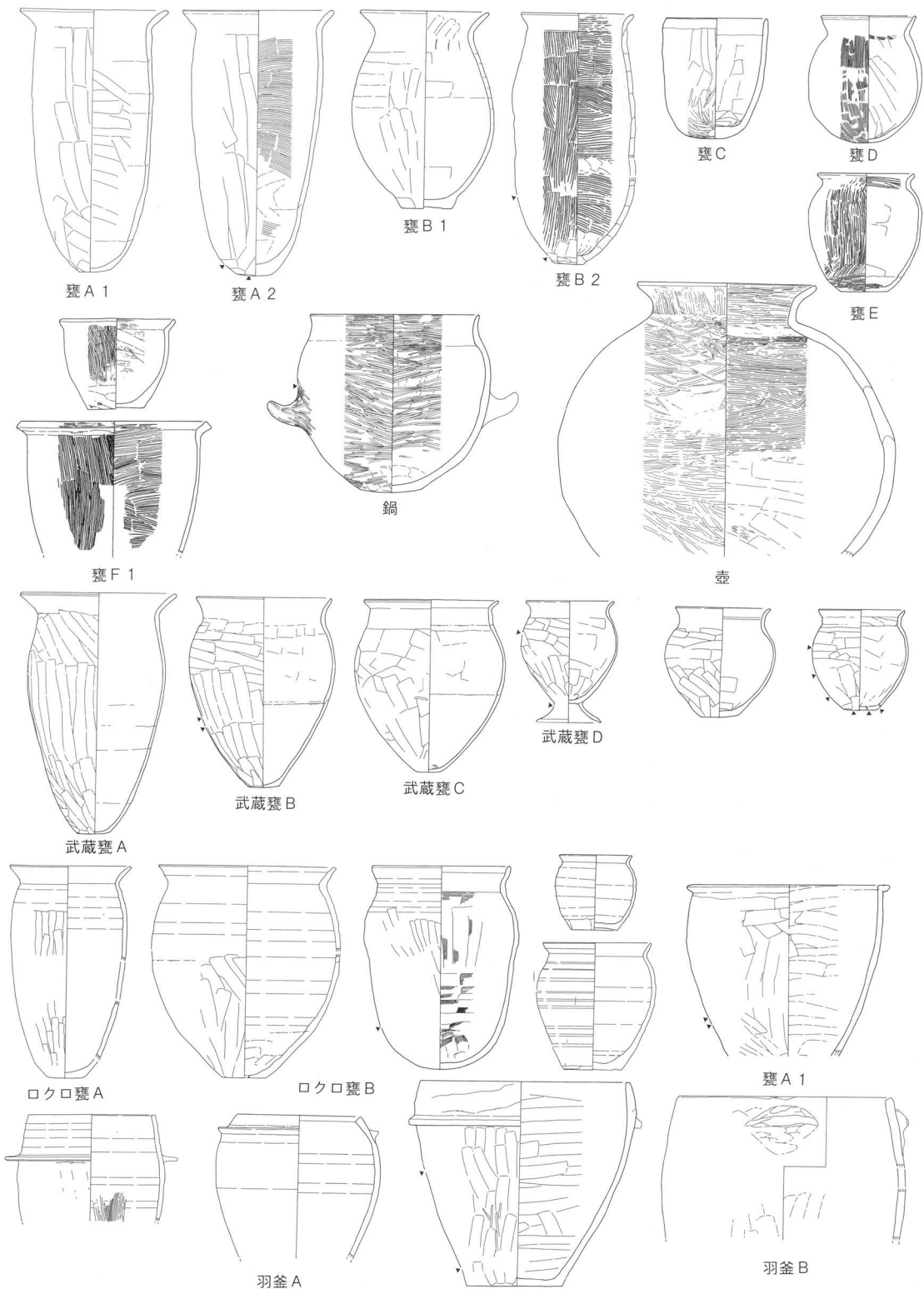


第7図 土器の分類(1)



第 8 图 土器の分類(2)





第9図 土器の分類(3)

○杯蓋—つまみの有無・形態、かえりの有無により以下に分類した。

A—擬宝珠つまみが貼付され、かえりを有さないもの。

B—皿状のつまみが貼付され、かえりを有さないもの。

C—かえりを有するものを一括する。

D—つまみを有さないもので、半球状、あるいは、天井部と口縁部の境に稜を有する形態のもの。

E—AないしBのつまみを有さない形態。

○甕—基本的に無台である。口縁部の形態を基本に以下に分類した。

A—広口で短い口縁部を有する鉢型のもの。

B—広口で口縁部が長く、頸部が括れるもの。概して大型のものが多い。

C—頸部が括れ、口縁部が比較的短いもの。壺に近い形態。

○壺—基本的に有台である。口縁部の形態により以下に分類した。

A—所謂「凸帯文付四耳壺」を一括した。

B—短頸壺。

C—長頸壺を一括した。単純口縁のものをC1、有段のものをC2に細分した。

○甃・甑・各種瓶類・円面硯等—出土量が乏しく分類の必要が認められないこれらの器種は分類せず一括した。

### 3) 灰釉陶器・緑釉陶器

通常使用されている器種名により分類した。器種内での細分は行わなかったが、窯式期や、産地が比定できるものは記載した。

### 4) 石器・石製品

石器・石製品は以下のように分類した。

○砥石—当遺跡において最も出土量が多い石器である。出土総数229点である。携帯用をA、通常の形態のものをBに大別し、それぞれ側面4面に使用痕が認められるものを1、側面に加え両端にも使用痕が認められるものを2として細別した。更に、使用面に条痕を伴う場合は末尾にJを、加工を伴う場合はKを付加した。

石材は以下のとおりであり、流紋岩製が最も多く認められた。

流紋岩	砂岩	硬砂岩	安山岩	ガラス質安山岩	粘板岩	凝灰岩	グリーンタフ	チャート	ホルンフェルス
142	48	2	14	5	12	2	2	1	1

○台石—45点の出土が認められる。石材的には安山岩製が最も多く40点を占める。その他にはガラス質安山岩、粘板岩、砂岩、グリーンタフ、磁鉄鉱製のものが1点ずつ認められた。

○凹石—凹石には、凹の形態から縄文時代的なものと、そうでないもの2種類が認められる。数量的には総出土数52点の内縄文時代的なもの5点に対し、そうでないもの47点である。石材も縄文時代的なものが、安山岩製3点、両輝石安山岩製と流紋岩製が各1点なのに対し、そうでないものは軽石製42点、スコリア製3点、安山岩製2点と形態による差異を反映している。以上のような区分とは別に凹の存在する面から次のような分類を行った。

片面に凹が認められるものをA1、両面に凹が認められるものをB1、多面に凹が認められるものをC1に分類し、それぞれに凹と凹以外の加工両方が認められるものをA2、B2、C2として分類した。

○臼—全て突臼であり、安山岩製である。出土総数は13である。

○石製模造品—製品だけでなく原材も含めた。総数45点が出土している。石材は千枚岩23点、滑石12点、粘板岩3点、蛇紋岩2点、砂岩2点、ホルンフェス1点、珪化木1点である。

○剥片石器－打製石斧、磨製石斧、スクレイパー、剥片、その他に分類した。数量・石材の内訳は以下のとおりである。

打製石斧

ガラス質安山岩	安山岩	粘板岩	硬砂岩	砂岩	流紋岩
7	2	4	2	1	1

磨製石斧

輝緑岩	硬砂岩	閃緑岩
1	1	1

スクレイパー

黒曜石	粘板岩	チャート	硬砂岩	砂岩	ガラス質安山岩	千枚岩
6	5	2	2	1	1	1

剥片

黒曜石	粘板岩	チャート	瑪瑙
11	2	1	1

その他

黒曜石	チャート
3	1

○軽石製品－軽石に加工を加えたものを一括した。用途は不明なものが多い。石材はすべて軽石であってしかるべきであるが、溶結凝灰岩、スコリア、安山岩製のものも含まれている。総量は95点であり、大型、穿孔が認められるもの、扁平なもの、その他に分類した。分類項目毎の石材と数量の内訳は以下のとおりである。

大型	穿孔			扁平		その他		
軽石	溶結凝灰岩	スコリア	軽石	スコリア	軽石	安山岩	スコリア	軽石
3	1	3	24	1	16	7	9	31

○石鏃－磨製、打製有茎、打製無茎に分類した。総量55点である。項目毎の数量と石材は以下のとおりである。磨製石鏃は弥生時代、打製石鏃の大半は縄文時代の所産と考えられる。

磨製石鏃		打製有茎		打製無茎			
粘板岩	チャート	チャート	黒曜石	硬砂岩	チャート	粘板岩	黒曜石
3	1	2	6	1	6	8	28

○玉類－白玉、管玉、勾玉が認められる。総量は57点である。各項目毎の数量と石材は以下のとおりである。

白玉					管玉			勾玉		
チャート	粘板岩	輝緑凝灰岩	砂岩	滑石	翡翠	粘板岩	輝緑凝灰岩	輝緑凝灰岩	瑪瑙	石英
2	2	2	3	26	1	4	4	1	1	1

○紡錘車－30点が出土している。石材は蛇紋岩製が最も多く19点、滑石製が8点、流紋岩製2点、砂岩製が1点である。

○編物石－190点が出土している。加工が認められないものA、側面に加工痕が認められるものB、先端に加工痕が認められるものC、側面と先端に加工痕が認められるものをDとして分類した。石材的には安産岩製が160点と最も多く、次いで閃緑岩製9点、粘板岩製6点、流紋岩製とチャート製が各4点、砂岩製2点、礫岩製・黄砂岩製・輝緑岩製・ガラス質安山岩製・両輝石安産岩製が各1点である。

○磨石・敲石－124点が出土している。磨だけが認められるものと、他の加工が伴うものとの大別される。石材は以下のとおりである。

磨石の機能だけを有するもの

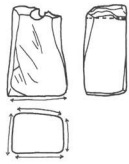
閃緑岩2点、砂岩4点、硬砂岩4点、千枚岩1点、グリーンタフ1点、軽石1点、礫岩1点、ヒン岩1点、粘板岩5点、流紋岩4点、ガラス質安山岩4点、安山岩35点

その他

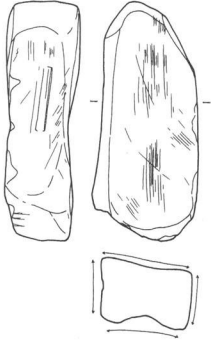
流紋岩1点、輝緑岩1点、グリーンタフ1点、石英閃緑岩1点、閃緑岩7点、砂岩3点、硬砂岩2点、粘板岩8点、ガラス質安山岩4点、安山岩33点。

○その他－他に分類不可能な石製品が5点認められる。石材は流紋岩・チャート・頁岩・石墨片岩・安山岩である。

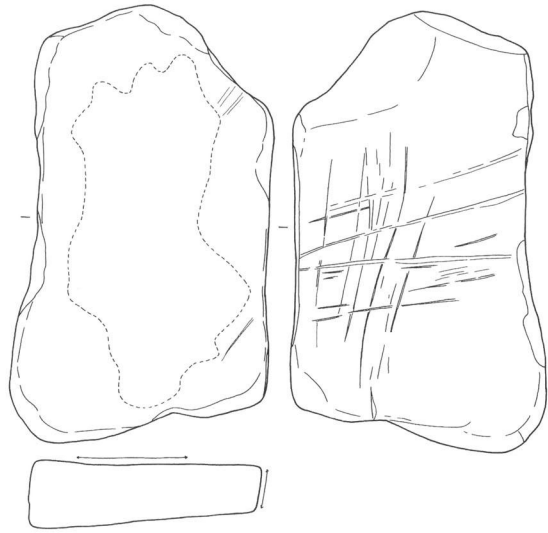




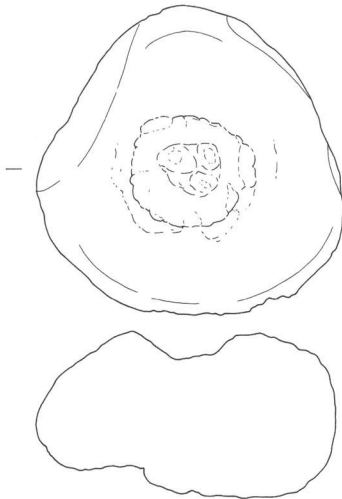
砥石A



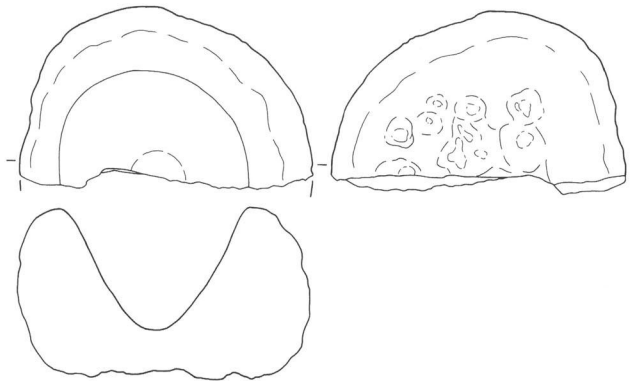
砥石B



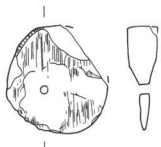
台石



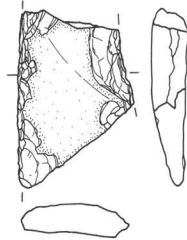
凹石



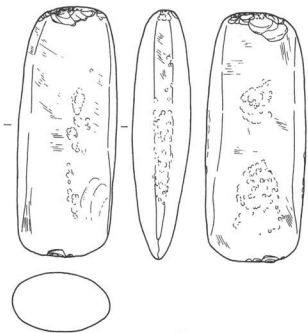
臼



石製模造品



打製石斧

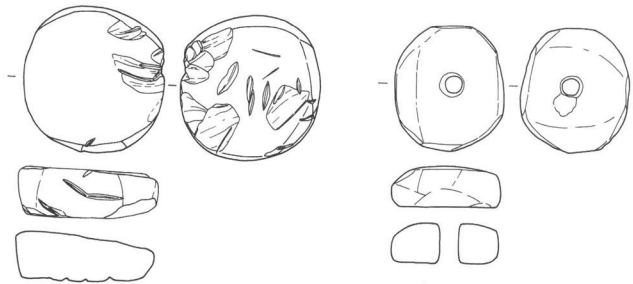


磨製石斧

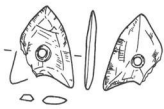
第10図 石器の分類(1)



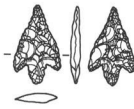
スクレイパー



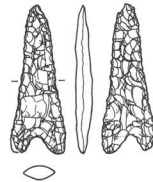
軽石製品



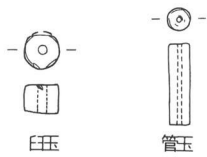
磨製石斧



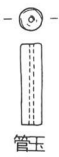
打製石斧(有茎)



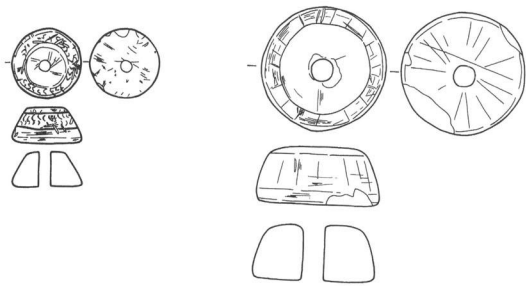
打製石斧(無茎)



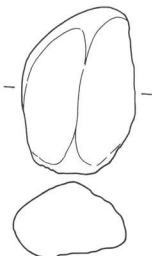
玉



管玉



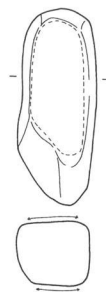
紡錘車



編物石A



編物石B



磨石

第11図 石器の分類(2)

#### 4) 鉄器・鉄製品

○鍬—第12図に従い以下の26形態に分類した。

1. 無頸で鍬身平面形が三角形1のもの、造込は平で、孔を有する。
2. 無頸で鍬身平面形が柳葉のもの、造込は両丸で、孔を有する。
3. 無頸で鍬身平面形が三角形2のもの、造込は平で、孔を有する。
4. 短頸有茎で鍬身平面形が三角形1のもの、関は角で、造込は平である。
5. 短頸有茎で鍬身平面形が柳葉のもの、関は角で、造込は両丸である。
6. 短頸有茎で鍬身平面形が三角形1のもの、関は台形で、造込は片丸か平である。
7. 短頸有茎で鍬身平面形が三角形1のもの、関は角で、造込は両丸か平である。
8. 短頸有茎で鍬身平面形が三角形2のもの、関は角で、造込は両丸か平である。
9. 短頸有茎で鍬身平面形が三角形3のもの、関は角で、造込は平である。
10. 短頸有茎で鍬身平面形が三角形3のもの、関は台形で、造込は両丸である。
11. 短頸有茎で鍬身平面形が三角形3のもの、関は台形で、造込は両丸か片丸である。
12. 短頸有茎で鍬身平面形が五角形のもの、関は角で、造込は平か両丸である。
13. 短頸有茎で鍬身平面形が雁又のもの、関は角で、造込は切刃である。
14. 短頸有茎で鍬身平面形が斧箭のもの、関は角で、造込は平である。
15. 短頸有茎で鍬身平面形が斧箭のもの、関は台形で、造込は平である。
16. 長頸有茎で鍬身平面形が三角形2のもの、関は棘で、造込は片丸である。
17. 長頸有茎で鍬身平面形が鑿箭のもの、関は棘で、造込は平である。
18. 長頸有茎で鍬身平面形が三角形1のもの、関は棘で、造込は平である。
19. 長頸有茎で鍬身平面形が三角形3のもの、関は棘で、造込は平である。
20. 長頸有茎で鍬身平面形が鑿箭のもの、関は棘で、造込は片丸である。
21. 長頸有茎で鍬身平面形が鑿箭のもの、関は角で、造込は平である。
22. 長頸有茎で鍬身平面形が片刃2のもの、関は棘で、造込は平である。
23. 長頸有茎で鍬身平面形が片刃1のもの、関は棘で、造込は平である。
24. 長頸有茎で鍬身平面形が片刃3のもの、関は棘で、造込は平である。
25. 長頸有茎で鍬身平面形が片刃1のもの、関は棘で、造込は平である。23との相違は鍬身に関を有することである。
26. 22の頸部に捩りが加えられるもの。

○刀子—最も普遍的に各時期で認められる鉄器であるが、研ぎ減りが著しく、刀身部の平面形は分類の基準とは成り得ない、また、茎部は変化に乏しく分類には不向きである。結果として、関部による分類を行った。造込みは平造り以外認められない。

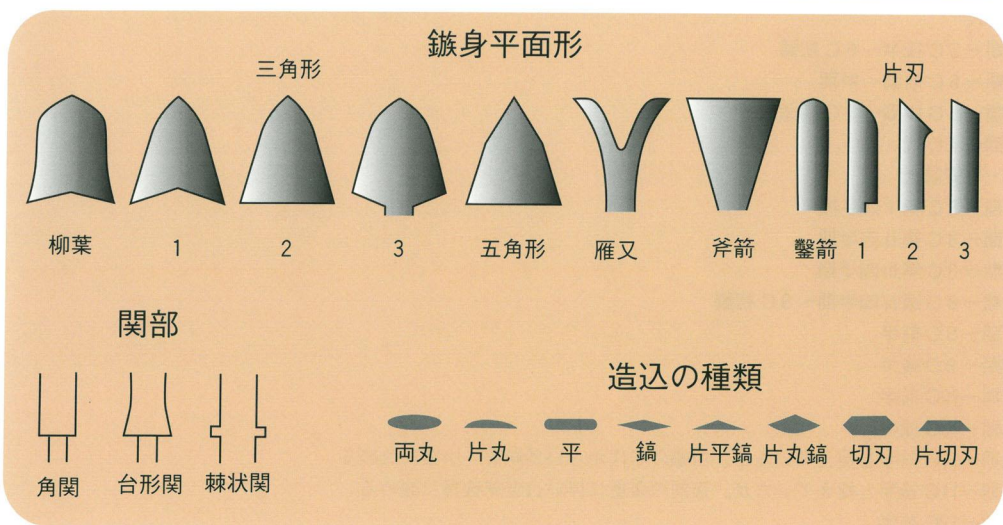
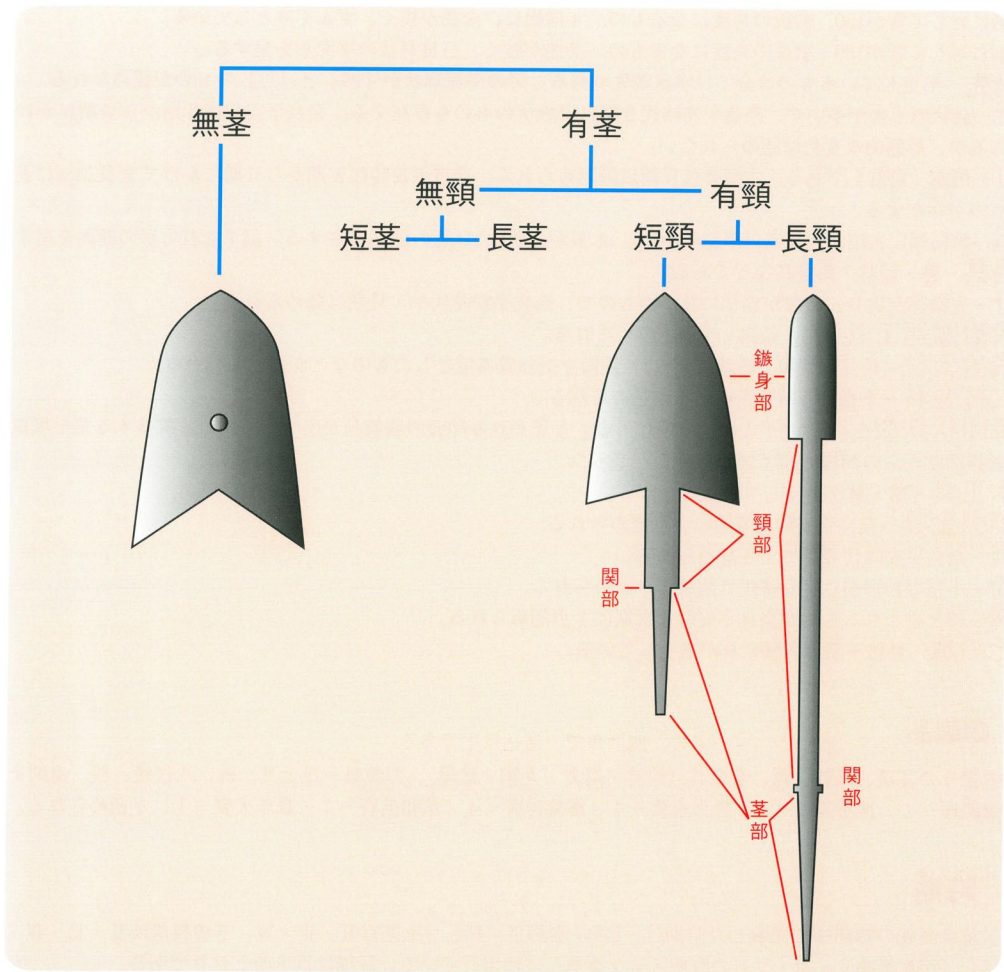
- 1—両関で、下部の関が茎から垂直に立ち上がらず、角度を有するもの。
- 2—両関で、関が茎から垂直に立ち上がるもの。
- 3—上部片関のもの。
- 4—下部片関のもの。
- 5—無関であるが、下部の関に相当する部分が突出するもの。

○紡錘車—古墳時代Ⅲ期には存在しないが、Ⅳ期以降普遍的に認められる。軸は円盤を境に上が方形、下が円形の断面形状を呈する。円盤径は6cm前後と4.8cm前後の2種類以外は認められない。

○鎌—最も普遍的に認められる農具である。右と左が認められる。また、手鎌と思われるものも存在する。以下の6形態に分類される。

- 1—柄に対して背が垂直になるもの。身幅は均一で、先端部で弱く屈曲する。
- 2—柄に対して背が110°前後の角度になるもの。身幅は均一で、先端に向かい緩やかに湾曲する。
- 3—柄に対して背が130°前後の角度になるもの。先端に向かい緩やかに湾曲しながら、身幅も細くなる。
- 4—柄に対して背が130°前後の角度になるもの。3と異なり、全長が短く、ずんぐりとしている。





第12図 鉄族分類基準

5－柄に対して背が150°前後の角度になるもの。4同様に、全長が短く、ずんぐりとしている。

6－柄に対して背が130°前後の角度になるもの。湾曲が強く、三日月状の平面形を呈する。

○鋤先－出土しているものは全てU字状鋤先である。刃の平面形状が「凹」と『U』のものが認められる。

○斧－袋状のものが多いが、奈良平安時代Ⅱ期には板状のものも存在する。奈良平安時代Ⅱ期からⅥ期にかけて認められるが、形態的な変化は認められない。

○釘－所謂「角釘」である。古墳時代Ⅳ期以降認められる。奈良平安時代Ⅳ期からⅥ期にかけて全長20cmに及ぶ長大なもの存在する。

○鏃－釘同様に古墳時代Ⅳ期以降認められる。木質が付着した状態のものも存在する。扁平な長方形の断面を呈する。

○馬具－轡・鉸具・飾金具などである。

○針－先端部が尖り、頭部が環状になったもので、奈良平安時代Ⅴ・Ⅵ期に認められる。

○鍛冶関連工具－鎚・鉄鉗・毛抜が認められる。

○鍛冶素材－鉄滓・鉄塊（棒状・板状）・鉄器を折り畳み塊としたものなどが出土している。

○火打金具－奈良平安時代Ⅳ期に1点認められる。

○焼印状鉄製品－奈良平安時代Ⅴ期に「金」と思われる印面の鉄製品が出土している。隣接する栗毛坂遺跡群や下曾根遺跡からの同様な出土例がある。

○木工具－鑿・錐が出土している。

○苧引金具－奈良平安時代Ⅶ期に1点認められる。

○釜－奈良平安時代Ⅵ期に1点認められる。

○鈴－小型の鈴が奈良平安時代Ⅵ期に1点認められる。

○鐸－鐸と思われるものが奈良平安時代Ⅸ期に1点認められる。

○その他－性格不明の各種金具が出土している。

## 5) 銅製品

銅芯金張りの耳環、馬鈴、鈴、帯金具（鉸具・巡方・丸軛・蛇尾）、刀装具－足金具、碗、八稜鏡、塊、皇朝十二銭（和銅開珎－1・神功開寶－1・隆平永寶－4・富壽神寶－4・承和昌寶－1・長年大寶－1）が認められる。

## 3. 時期

住居址計測表の時期欄に記載した時期は、『西一本柳Ⅲ・Ⅳ』、『上芝宮Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ』、『下曾根遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅶ』、『深堀遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ』の時期区分を継承して使用している。詳細は以下のとおりである。

古墳時代

Ⅰ期－5C後半～6C初頭

Ⅱ期－6C前葉～中葉

Ⅲ期－6C中葉～7C初頭

Ⅳ期－7C代

奈良・平安時代

Ⅰ期－8C第Ⅰ四半期

Ⅱ期－8C第Ⅱ四半期

Ⅲ期－8C第Ⅲ四半期

Ⅳ期－8C第Ⅳ四半期～9C初頭

Ⅴ期－9C前半

Ⅵ期－9C後半

Ⅶ期－10C前半

Ⅷ期－10C後半

Ⅸ期－11C前半と捉えていたが、白磁の年代から11世紀前・中葉に改める。

X期－11C後半と捉えていたが、Ⅸ期の変更に伴い11世紀後葉に改める。

XI期－12C前半

# 第Ⅱ章 総括

## 第1節 土器様相

第Ⅰ章－4節－3で記したように、当遺跡の時期区分は『西一本柳Ⅲ・Ⅳ』、『上芝宮Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ』、『下曾根遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ』、『深堀遺跡Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ』を継承している。調査した住居址の内、時期が比定できるものを各時期毎に帰属させると以下ようになる。

古墳時代Ⅰ期－該当なし

古墳時代Ⅱ期（3軒）

H331 H418 H488

古墳時代Ⅲ期（112軒）

H29 H59 H64 H67 H84 H88 H93 H97 H98 H100 H101 H102 H106 H119 H122 H124  
H126 H149 H150 H157 H158 H159 H162 H163 H164 H165 H167 H169 H170 H171 H187 H201  
H209 H226 H232 H234 H238 H247 H254 H257 H267 H269 H276 H277 H278 H280 H282 H283  
H284 H292 H295 H333 H335 H338 H344 H347 H367 H369 H371 H373 H388 H402 H404 H406  
H410 H436 H445 H448 H453 H454 H456 H457 H459 H467 H494 H497 H503 H511 H531 H543  
H549 H550 H637 H638 H639 H640 H641 H642 H643 H644 H646 H647 H648 H649 H650 H651  
H654 H655 H656 H665 H668 H693 H698 H700 H705 H706 H711 H712 H719 H723 H741 H747

古墳時代Ⅳ期（40軒）

H140 H173 H194 H196 H223 H235 H368 H372 H400 H437 H452 H468 H479 H483 H493 H504  
H510 H539 H653 H699 H737 H815 H866 H902 H909 H912 H915 H917 H919 H921 H923 H924  
H929 H934 H939 H950 H951 H952 H957 H958

奈良平安Ⅰ期（66軒）

H25 H66 H77 H80 H81 H95 H113 H114 H131 H134 H141 H146 H160 H175 H185 H192  
H222 H229 H236 H245 H258 H339 H348 H353 H356 H365 H366 H375 H482 H505 H534 H536  
H540 H603 H618 H669 H709 H713 H717 H722 H732 H733 H734 H780 H787 H809 H839 H840  
H851 H853 H905 H913 H925 H931 H933 H935 H936 H944 H947 H948 H953 H954 H955 H956  
H966 H967

奈良平安Ⅱ期（91軒）

H23 H48 H50 H51 H56 H57 H58 H62 H63 H65 H72 H74 H76 H79 H82 H83  
H89 H96 H144 H168 H189 H200 H202 H221 H227 H242 H275 H293 H303 H308 H310 H328  
H337 H343 H349 H355 H360 H362 H370 H376 H379 H381 H386 H423 H431 H462 H480 H481  
H484 H499 H508 H520 H530 H554 H557 H570 H580 H581 H589 H596 H657 H677 H691 H716  
H756 H757 H762 H765 H767 H771 H772 H773 H779 H786 H793 H796 H800 H820 H821 H843  
H847 H850 H860 H868 H870 H884 H890 H896 H937 H940 H942

奈良平安Ⅲ期（70軒）

H54 H71 H73 H87 H104 H105 H107 H111 H127 H135 H143 H148 H155 H172 H207 H213  
H214 H215 H216 H220 H252 H259 H260 H265 H270 H274 H279 H313 H318 H326 H364 H382  
H389 H401 H447 H451 H486 H487 H501 H509 H522 H532 H538 H541 H544 H568 H605 H612  
H619 H626 H630 H633 H645 H670 H678 H695 H718 H728 H738 H774 H778 H783 H784 H801  
H831 H842 H886 H897 H908 H938

奈良平安Ⅳ期（132軒）

H52 H60 H90 H91 H108 H109 H110 H112 H117 H118 H121 H123 H125 H139 H152 H166  
H177 H181 H186 H191 H195 H198 H199 H219 H240 H250 H255 H268 H281 H287 H290 H294



H297 H301 H305 H319 H320 H325 H327 H329 H342 H346 H352 H363 H383 H384 H387 H393  
H396 H413 H415 H424 H429 H444 H465 H473 H475 H477 H490 H495 H500 H516 H519 H523  
H526 H527 H537 H545 H558 H559 H564 H566 H569 H575 H577 H582 H584 H588 H591 H595  
H611 H616 H620 H621 H622 H624 H629 H632 H636 H661 H675 H686 H690 H692 H697 H710  
H714 H715 H729 H745 H746 H753 H755 H760 H776 H782 H790 H794 H795 H797 H805 H816  
H823 H825 H826 H830 H844 H846 H876 H878 H881 H887 H891 H895 H907 H911 H914 H920  
H934 H949 H961 H962

奈良平安Ⅴ期 (136軒)

H24 H49 H68 H69 H70 H75 H78 H86 H94 H99 H103 H116 H120 H130 H136 H137  
H138 H142 H151 H153 H154 H161 H174 H176 H180 H182 H190 H193 H197 H204 H205 H208  
H210 H225 H243 H248 H264 H272 H273 H285 H286 H289 H291 H296 H302 H309 H316 H317  
H330 H332 H336 H354 H380 H395 H399 H409 H412 H425 H427 H439 H441 H449 H470 H489  
H502 H513 H518 H521 H529 H533 H535 H546 H548 H553 H555 H556 H562 H565 H572 H583  
H585 H587 H593 H594 H599 H606 H609 H610 H628 H631 H635 H652 H658 H660 H663 H664  
H666 H667 H672 H674 H682 H683 H684 H685 H688 H694 H701 H702 H703 H707 H720 H726  
H730 H731 H736 H748 H752 H758 H759 H761 H768 H775 H781 H785 H789 H829 H838 H845  
H848 H849 H869 H880 H893 H916 H930 H965

奈良平安Ⅵ期 (69軒)

H92 H133 H147 H178 H179 H184 H203 H211 H231 H239 H244 H253 H256 H266 H306 H307  
H312 H314 H321 H350 H359 H392 H398 H408 H417 H419 H420 H421 H433 H443 H458 H461  
H492 H496 H506 H507 H514 H515 H517 H524 H525 H547 H561 H573 H574 H597 H601 H614  
H625 H627 H634 H673 H676 H687 H724 H725 H743 H750 H763 H770 H777 H872 H873 H879  
H883 H885 H904 H906 H968

奈良平安Ⅶ期 (49軒)

H128 H129 H132 H145 H156 H183 H188 H228 H230 H233 H237 H241 H246 H322 H385 H397  
H405 H411 H414 H422 H428 H430 H432 H435 H438 H446 H450 H460 H491 H498 H512 H727  
H744 H751 H766 H769 H798 H811 H828 H835 H855 H882 H898 H901 H926 H941 H964 H974  
H975

奈良平安Ⅷ期 (13軒)

H341 H472 H474 H814 H841 H854 H858 H859 H861 H889 H900 H922 H927

奈良平安Ⅸ期 (24軒)

H55 H224 H304 H311 H315 H323 H403 H563 H567 H571 H579 H592 H613 H615 H681 H788  
H791 H804 H822 H837 H857 H862 H877 H899

奈良平安Ⅹ期 (11軒)

H115 H560 H578 H586 H598 H604 H623 H827 H856 H874 H894

奈良平安Ⅺ期 (2軒)

H792 H806

合計818軒の住居址が時期比定されている。遺跡が存在する田切台地の縁辺部分は両側共未調査であるため、この部分に集中して存在するⅨ期以降の住居址は若干の増加が推測されるが、奈良平安時代1期～Ⅵ期にピークが認められ、その中でも奈良平安時代Ⅳ期に最も隆盛した遺跡であることが読みとれる。

以下において、各期毎の土器様相を概観する。

古墳時代Ⅱ期

本期は、6世紀前葉～中葉の実年代が比定されている。当遺跡において該当する住居址は3軒と極めて少数である。後続する古墳時代Ⅲ期に近い時期の所産と思われる。

土師器のみが認められるが、年代的には須恵器も当然存在する。杯には、Hの祖系である西一本柳分類の「杯C」が認められることが本期の特徴のひとつである。杯はその他にE・F・Gが存在し、赤彩が施されるものも認められる。

壺は口縁部に認められる縦位の暗文状ヘラミガキや、多用される赤彩が特徴である。甕はBのみが、甗はAのみが認められる。

以上が本期の土器様相であるが、資料数が少ないため臆気な様相しか掴めていないことをお断りしておく。

#### 古墳時代Ⅲ期

本期は、6世紀中葉～7世紀初頭の実年代が想定されている。該当する住居址は112軒であり、突如として集落が形成されたようである。本期は約70年ほどの時間幅を有するが、112軒の住居址数を、四半世紀単位単位で割かえしたとしても、四半世紀に40軒近い住居址が存在することから、所謂「計画集落」として聖原遺跡の集落は形成された可能性が高いと言える。

○土師器 杯はH、Eが主体である。量的にはHの方が多い。他にF、Gが認められるが、Fは少量である。Hは赤彩されることが多く、赤彩も全面に施される場合と意匠的・文字的に施される場合がある。Eには文字ではないが「墨書」の認められるものが存在する。また、所謂「有段口縁杯」も普遍的に存在する。須恵器の窯印のような焼成前の刻書が、内外面の底部に認められる例も形態を問わず存在する。

高坏は杯に空洞の脚を付したものである。

鉢は杯を大型化したものや、仏具を模したもの、台付きのものなど様々な形態のものが認められ、量的にも多い。

壺はⅡ期同様に広口で頸部が括れないものと、頸部が強く括れ、球形の体部に最大径を有するものが認められ、赤彩されることが多い。小型ものは須恵器の臚の模倣品をはじめ、須恵器の壺を模倣したものが認められる。

甕は長胴で体部に最大径を有し、底部が突出する形態である。体部の球形状から、砲弾状への変遷が本期の中で認められる。調整はケズリのもの、ハケ目のものが存在するが、前者の方が多数である。外来系のもので南伊勢地方の北野型であるDや東海系の甕Eが存在する。

甗は大型のものと小型のものが存在する。大型は底部が開口するAであり、把手を有するものと有さないものが存在する。また、1点のみであるが、底部中芯を通過する直線の仕切が付加されたものが認められた。小型のものには、大型同様のA1と共に多孔のB、単孔のCが存在する。全ての形態に共通して赤彩が認められるものが多いことから、甗により調理された「米」（米である確証はないが）は日常的な食物でなく、供物などである可能性が高い。

その他に鍋や手捏土器が認められる。鍋は赤彩される場合が多い。

○須恵器 杯身・杯蓋が大半を占めており、これに臚や壺・瓶類、高坏が認められるが量的には少数である。陶邑編年のⅡ型式のものであり、年代的にも矛盾は認められない。

#### 古墳時代Ⅳ期

本期は7世紀の実年代が想定されている。該当する住居址は40軒と古墳時代Ⅲ期から著しく減少している。

○土師器 杯はE・Gが主体となり、H・Fは極めて少数が認められるにすぎない。Gは前時期からのものに加え、所謂「北武蔵型坏」が出現する。杯Eには所謂「有段口縁杯」が残存しているが、時期が下がるにつれ、所謂「北武蔵型坏」と同様な橙色・陶質で外面底部にヘラケズリ調整が施される他はナデ調整のものが主体となる。また、本期から杯の両端を成形時に外側に広げ、平面形が楕円形を呈するものが出現する。これは須恵器にも認められる。第4分冊までは杯に含めたが、機能的に片口や柄杓のようなものが推測されるため、仮称ではあるが「杓状坏」とした。

高坏は杯に脚を付したものであるが、脚は空洞のものと、棒状のものが認められる。

鉢はⅢ期同様に様々な形態・法量のもの存在する。壺や甕との分類が困難なものも多い。内面に黒色処理が施されるものも顕著である。

壺は広口で頸部が括れないものが消滅し、頸部が強く括れ、球形の体部に最大径を有するものが主体となる。赤彩は認められるものの、少量である。

甕は口縁部に最大径を有する長胴のものが主体となり、底部は突出しなくなる。法量的には大・中・小に分化するようである。外来系のD・Eも認められる。

甗は小型で多孔のBのみとなる。赤彩は認められないが、内面に黒色処理が施されるものが多い。

鍋もⅢ期に引き続き存在するが、赤彩は施されない。

○須恵器 杯身・杯蓋、高坏、臚、壺、壺・瓶類などが認められる。杯身にはDの他にAが認められ、杯蓋もDの他にCが認められる。また、大甕が顕著に認められるようになる。

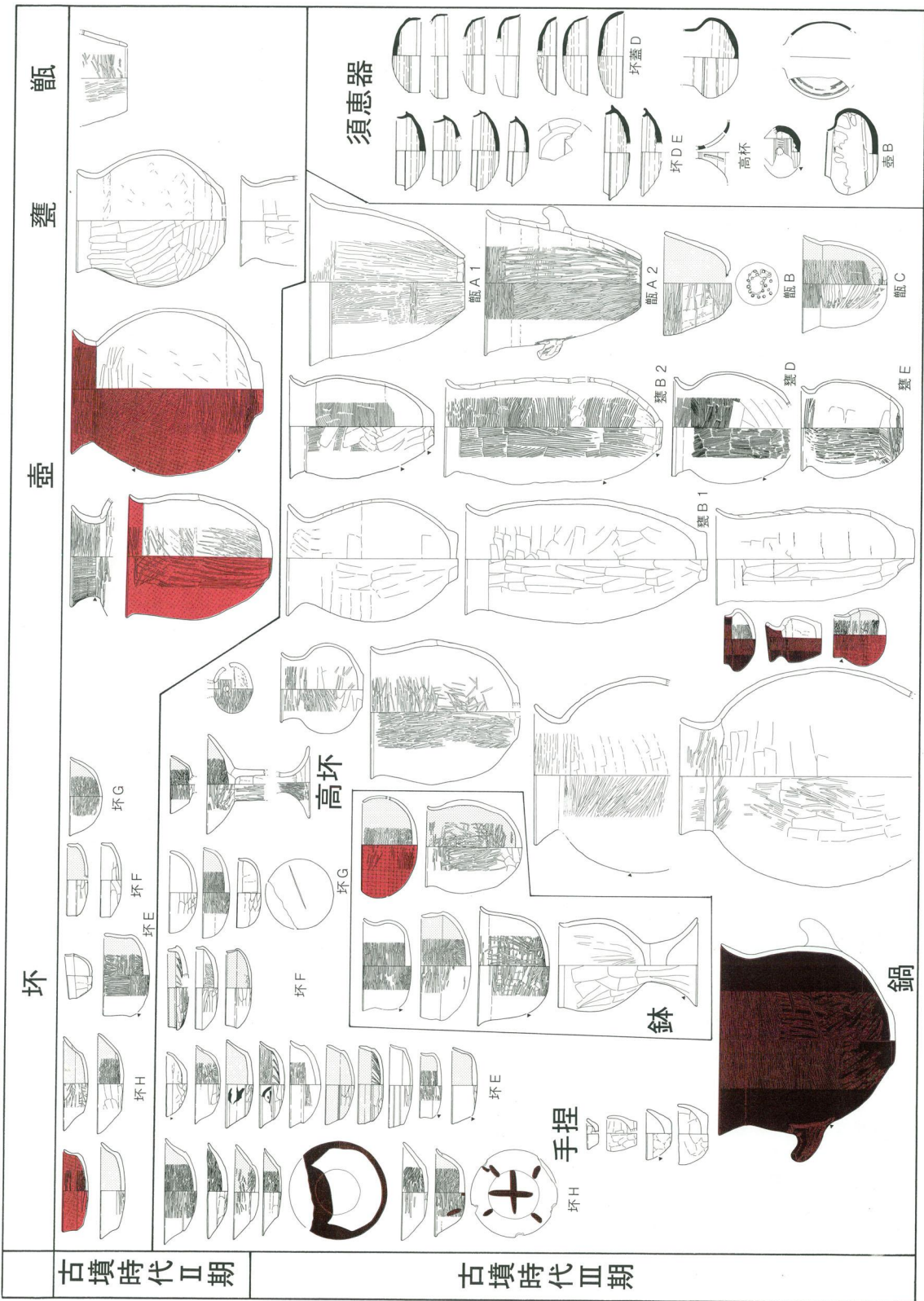
#### 奈良・平安時代Ⅰ期

実年代として8世紀第1四半期が想定されている。該当する住居址は66軒であり、古墳時代Ⅳ期に比べ飛躍的に増加する。

○土師器 杯にはGとI以外は存在しない。Gが主体であり、所謂「北武蔵型坏」と共に、内面黒色処理が施され

64葉  
2  
64葉

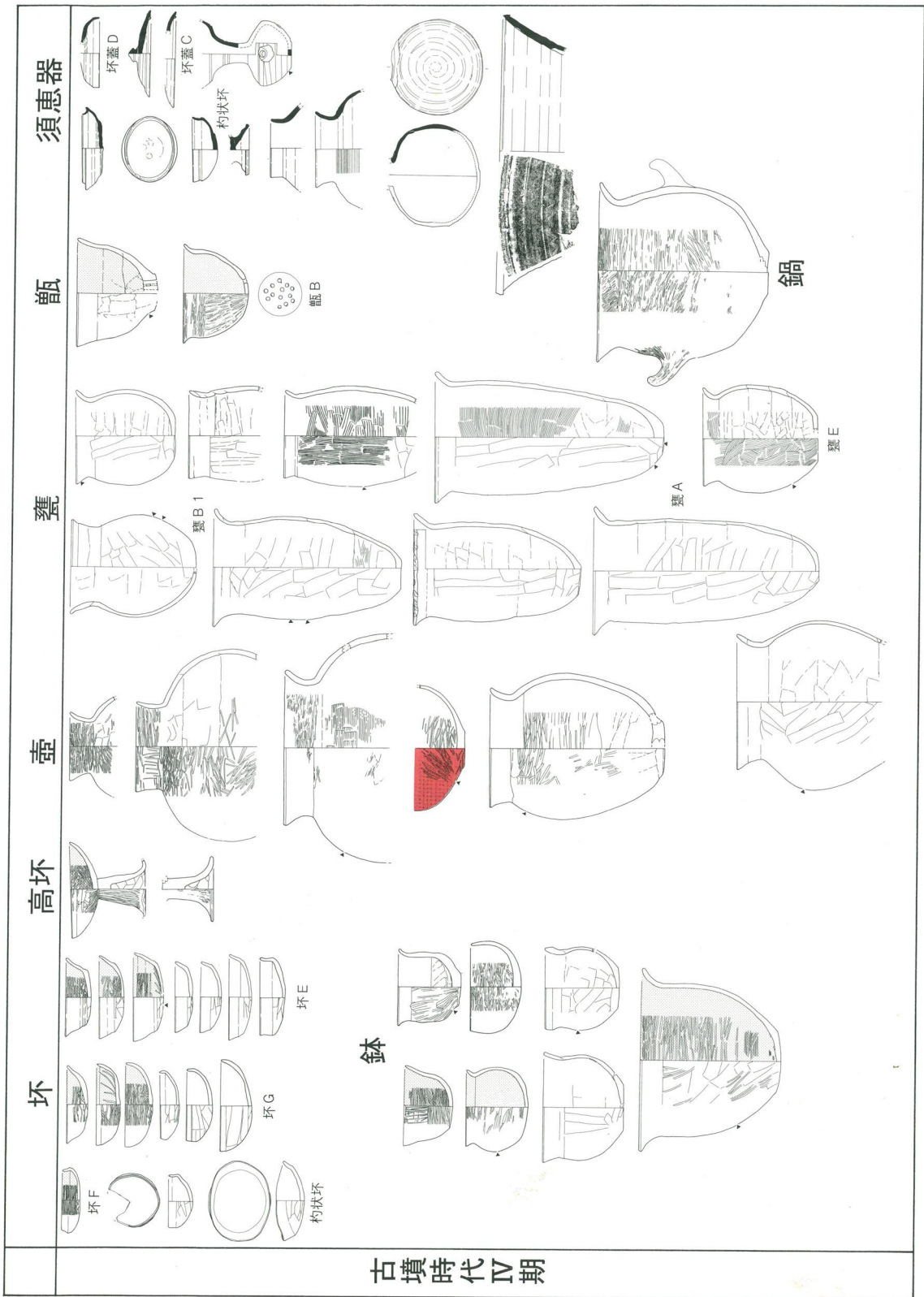
64葉  
2  
64葉



古墳時代II期

古墳時代III期

第13図 土器編年表1



第14图 土器編年表2



るものが半々の割合で存在する。また、1点ではあるが坏Gの形態で、内面中央に芯を立てかける突起を有した、灯明皿が認められる。坏Iは本期から認められ、I1が大半を占める。I1とは別に所謂「北武蔵型暗文坏」も少数ではあるが存在する。

高坏は坏Gに比較的短い脚を付したもので、暫時小型化する。基本的に内面黒色処理が施されている。

鉢は無頸のものや、丸底で球胴気味の体部を有し、短い口縁部が開くもの、最大径を口縁部に有し、頸部が括れ、弱く外湾しながら、平坦な底部を形成する古墳時代から認められる形態のものなどが存在するが、量的には減少する。赤彩は認められず、黒色処理も普遍的ではない。

壺は量的に減少する。背景には須恵器甕の普及が推測される。頸部が強く括れ、球形の体部に最大径を有するものが主体であるが、体部の長胴化や、須恵器模倣の形態が認められる。赤彩は施されないようである。

甕は前時期から継続するA1から武蔵甕へと暫時変化する。本期の武蔵甕は「く」字状の口縁部に最大径を有し、後続する時期のものに比べ器高も高いものである。また、外来系のDも認められる。

甌は対象となる住居址出土資料中には、図示が可能な資料が存在しない。底部状況は不明であるが、小型で、内面黒色処理が施され、口縁部に最大径を有し、頸部が括れない鉢の口縁部が数点認められ、これらが本期の甌である可能性が高いものと思われる。

○須恵器 前時期に比べ飛躍的に増加する。坏はAのみが認められる。形態的に丸底のもの、平底のものが存在する。また、杓状坏も認められる。

坏蓋はCの他にAが認められる。本期では、量的に大差なく両形態が存在するが、暫時A形態が主体となる。また、C形態の「つまみ」は擬宝珠から皿状がほとんどとなる。

有台坏は本期において出現する。身の浅いA1が大半を占めるが、身の深いB1も認められる。底部が高台よりも突出するものや、盤とした方が妥当な口径の大きなものも存在する。高台が底部端に付されることも形態的特徴のひとつである。

高坏は少数ながら存在するが、高盤の方が量的には多い。

壺・瓶類は量的にも器種的にも前時期に比べ増加する。大・小の短頸壺や、肩に稜を有する長頸壺の、肩部の平行沈線間にクシバ状工具による刺突列を巡らす文様帯を有するもの、平瓶などが存在する。

甕はA・B・C全てが認められ、破片資料が大半であるが量的には多い。

その他に、播鉢や銅碗模倣の鉢などが認められる。

## 奈良・平安時代Ⅱ期

本期は8世紀第2四半期の実年代が想定されている。該当する住居址は91軒であり、前時期に比べ増加する。

○土師器 坏はGが消滅し、新たにロクロ成形のA1が出現するが、主体はI1であり、これに若干のI2で構成される。I1の中には、赤彩や墨書が施されるものが認められる。また、暗文も放射状だけで、見込部の螺旋が省略されたものや、放射ではなく格子のものも存在する。土師器杯は、形態的に須恵器坏に近似したものとなる。

高坏は前時期で消滅し本期には残存しない。

鉢は前時期に比べ数量的に減少する。代わりに小型甕や壺が増加するように思われる。

壺はヘラミガキ調整が省略され、ヘラケズリ調整のものが主体となる。赤彩は認められない。前時期に認められた須恵器模倣の形態や、ロクロ成形のものが出現する。

甕の主体は武蔵甕である。暫時短胴化している。ロクロ成形のものは前時期に比べ増加する。法量的に大・中・小の3種類に区分できる。E形態も存在する。

須恵器の製作技法により作られた酸化焰焼成の土器が認められる。具体的にはロクロ、叩きにより成形された須恵器甕A形態のものや、甌と思われるもの、甌によく似るが、円筒形を呈するものなどである。ロクロ成形の坏・壺・甕をあわせ、所謂「ロクロ土師器」の顕著化は本期の土器様相を特徴付ける大きな要因のひとつである。

○須恵器 坏はAが主体であるが、糸切痕が認められるBも出現する。丸みを帯びた底部から平坦な底部に暫時変化する。また、底径の縮小化が始まる。1点ではあるが、坏に2ヶの把手を付したものが存在する。

坏蓋はC・B・A形態のものが認められる。量的にはAが主体である。B形態のつまみには、前時期から皿状のものと共に輪状ないし高台状のものが認められる。

有台坏はA1・B1・Cが認められる。B1は法量的に大・小が存在する。A1は口径に対する底径の縮小化が認められる。また、削り出し高台のCは初現である。

盤・高盤は存在するが、高坏は認められない。

壺は短頸壺・長頸壺が認められる。短頸壺には大・小があり、大には高台が付されるものも存在する。また、短頸

壺の蓋も認められ、群馬県の上野型有蓋短頸壺形態のものも初出する。

甕はAが主体であるが、B・Cも存在する。全ての形態において底部は丸底と平底が存在する。

#### 奈良・平安時代Ⅲ期

本期は8世紀第3四半期の実年代が想定されている。該当する住居址は70軒であり、前時期より若干減少する。

○土師器 坏はロクロ成形のA1が主体となる。墨書が認められるものも存在する。I1は減少するものの、少なからぬ量が存在し、暗文を有さないI2も認められる。甲斐型坏Jは本期が初現である。須恵器有台坏の模倣や鉢形のものも存在する。

鉢は小型甕に代わりほとんど認められない。

壺は認められないが、形態的には武蔵甕Bの中に、球形胴を呈するものが存在する。

甕の主体は武蔵甕であり、短胴化し、体部に最大径を有するBが多くなる。前記した、壺型のものや、小型のもの、台付のDなども認められる。ロクロ成形のものも前時期同様に認められるが、数量的には減少するようである。外来系のE形態、叩き・ロクロ成形の羽釜も存在する。

○須恵器 坏はA・B・C全てが認められる。量的にはBが最も少なく、AとCはほとんど同量である。形態的には底部の縮小化が認められるものと、そうでないものがA・B・C全てで認められる。底部は基本的に平坦である。墨書が認められるものも存在する。

坏蓋はCが前時期で消滅し、BとA形態が存在するが、Bは少量で、つまみの形態は輪状のものは認められず、皿状のものだけとなる。主体となるAは口径の大きなものと、小さなものが存在する。また、器高も扁平で低いもの、普通のもの、高いものの3種類が存在する。

有台坏はA1・A2・B1・B2・B3が認められる。量的には底部ヘラ調整のA1・B1の方が、底部糸切のA2・B2より若干多い。B3は少量である。A1形態の底部に「中伯」の焼成前刻書が1点に認められる。

高盤・盤は認められない。

壺は長頸壺、短頸壺が認められる。前時期に引き続き、群馬県上野型有蓋短頸壺の蓋も存在する。

甕はAが主体で、B・Cも認められるが、Cは少量である。底部は平底が大半を占める。

その他に、臚、播鉢、銅碗模倣の鉢などが存在する。

#### 奈良・平安時代Ⅳ期

本期は8世紀第4四半期の実年代が想定されている。該当する住居址は132軒であり、後続する奈良平安時代Ⅴ期と共に聖原遺跡が最も隆盛した時期である。

○土師器 坏はA1主体であるが、ロクロからの切離に糸を使用する、B1・C1が出現する。器形的にも、口径に対し底径が小さく、器高も低い皿状のものが多くなる。墨書が認められるものも存在する。甲斐型坏Jも前時期に引き続き認められる。

鉢は仏鉢形のもが1点認められる。

壺は奈平Ⅱ期に認められた、須恵器模倣形態と、小型の須恵器模倣形態のもの、武蔵甕B形態の球胴を呈するものが存在する。量的には少ない。

甕は武蔵甕が主体である。B形態がほとんどであり、僅かにAが存在する。前時期まで「く」字状であった口縁部が「コ」字気味に変化し始める。法量的には大・中・小が認められ、台付きのD形態も存在する。ロクロ成形のものも引き続き認められるが、B形態の壺型のもが目立つ。外来系のE・D形態も存在するが、破片資料である。成型時の叩きは判断できないが、ロクロ成形の羽釜Aも存在する。

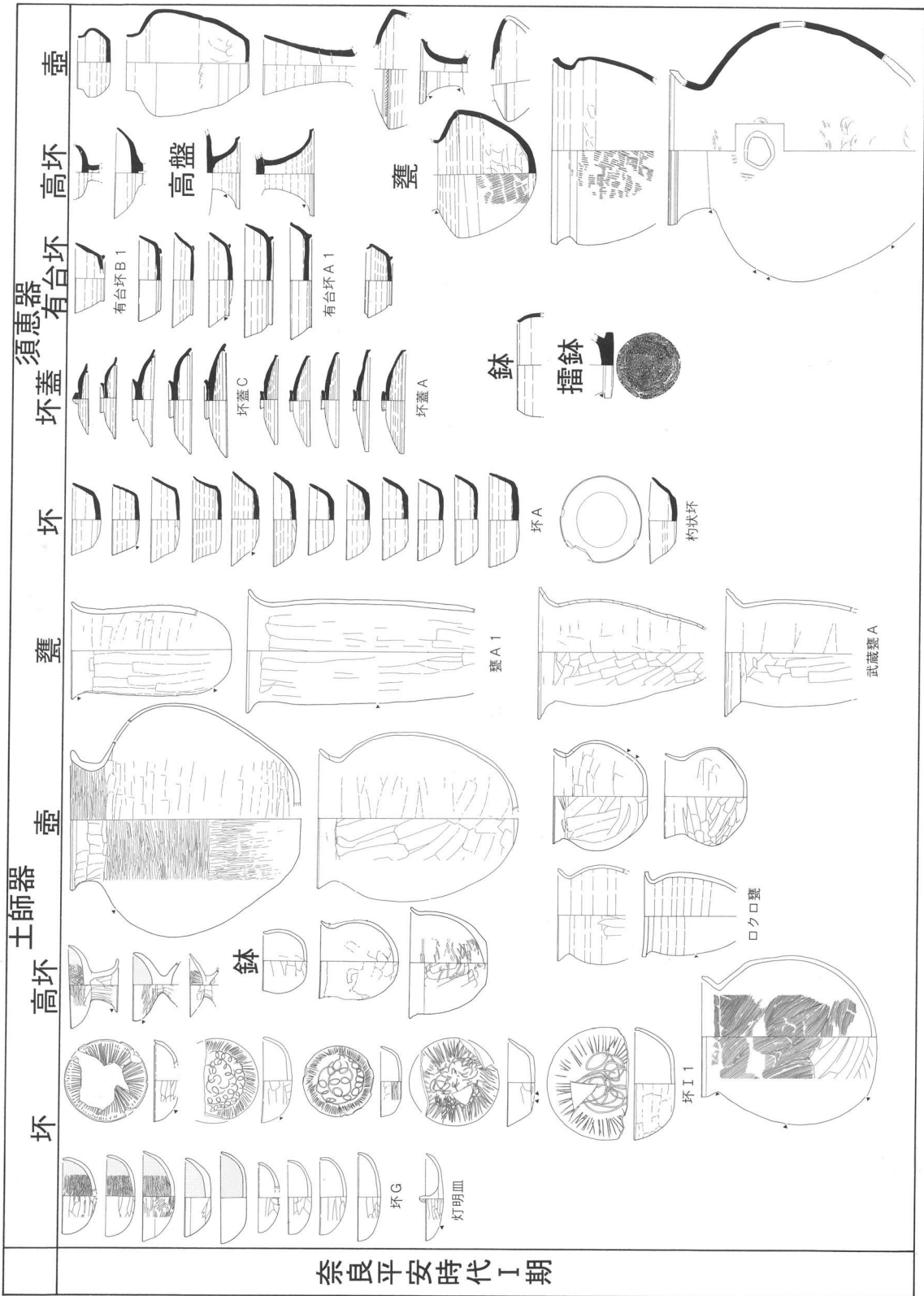
○須恵器 坏はC形態が主体であり、少量のA・B形態が認められる。刻書・墨書が認められるものも存在する。また、土師器の黒斑、あるいは黒色処理のような、炭素吸着が認められる坏が少なからず認められる。群馬県で「いぶし焼成」と呼称されるものであろうか。底部の縮小化したものが多くなる。

坏蓋はAのみとなる。主体は器高が高いものである。つまみの擬宝珠は扁平なものだけとなる。

有台坏は前時期同様にA1・A2・B1・B2・B3が認められる。量的にはA2・B2が主体である。B形態で口径が小さく、器高が高いものが目立つ。また、A形態の口径が大きなものは、高台径が極端に小さくなる。

壺はA形態が初現する。耳を有するものと、有さないものが存在する。Bは小型のもの、大型のものが認められる。群馬県上野型有蓋短頸壺の底部が認められる。C形態は肩に稜を有するものと、有さないものが認められる。

甕はA形態が主体である。法量的にもバラエティに富み、把手を有するものも存在する。B形態は大型のものを主体に、A形態よりは量的に少ないが数多く認められる。C形態はA・Bに比べ少量であるが存在し、法量的にも小・中が存在する。



奈良平安時代I期

第15図 土器編年表3









その他に、銅碗模倣の鉢が認められる。

#### 奈良・平安時代Ⅴ期

本期は9世紀前半の実年代が想定されている。該当する住居址は136軒である。

○土師器 坏はA1からC1に主体が移行する。A1・B1・C1のように内面はヘラミガキ黒色処理のものがほとんどであるが、A2のようにヘラミガキだけのものや、A3のようにヘラミガキが施されない黒色処理のもの、D1のようにヘラミガキも黒色処理も施されないものも存在する。杯の両端を成形時に外側に広げ、平面形が楕円形を呈する杓状坏も認められる。外来系の坏として、甲斐型坏Jの他に、南武蔵型坏と思われるものが1点ではあるが認められた。

高台を有する碗、皿は本期が初現である。底部は回転ヘラケズリ調整後高台が貼付されており、ロクロからの切離痕は消去される。内面はヘラミガキ黒色処理である。少量であるが、外面も黒色処理されるものが認められる。坏を含め墨書が認められるものが前時期に比べ増加する。坏・碗・皿類の須恵器との量的な比率は、本期において土師器が急速に増加を始めるが、須恵器の方が多い。

尚、少量ではあるが、須恵器坏蓋Aを模倣した内面黒色処理の坏蓋が認められる。また、脚に透かしを有する、高盤が初現する。

前時期には、極僅かしか存在しなかった鉢が増加する。形態的には坏をそのまま大きくしたもの、平底で身深の体部が外湾しながら立ち上がり、口縁部で稜を形成し、短く直線的に外反するもの、仏鉢形の3種類である。この内の仏鉢形のものに、甲斐型土器が1点存在し、暗文により、古代の甲斐国の地名等が記されている。

壺はロクロ成形のものが少数認められる。法量的に大きなものは存在せず、小型・中型のものである。黒色処理が内面ないし、内外面に施されている。

甕は「コ」字口縁を呈する武蔵甕Cが主体となる。台付きのD2も増加する。法量的には台付きのD形態は中型のものしか存在せず、無台のCには中・大型が存在する。小型のものはロクロ甕が補足するようである。ロクロ甕はB形態が主体であり、法量的には大・中・小が存在する。武蔵甕との量的な比率は6：4～7：3で武蔵甕が多い。

ロクロ成形の羽釜Aも少量ではあるが認められる。

○須恵器 坏はCのみとなる。土師器の黒斑、あるいは黒色処理のような、炭素吸着が認められる坏も前時期同様に存在する。墨書や刻書が認められるものも増加する。杓状坏も存在する。

坏蓋はA形態の他にE形態が1点認められる。量的には激減する。

有台坏は前時期同様にA1・A2・B1・B2・B3が認められる。量的には減少しており、本期において出現した土師器碗が須恵器有台坏に代わるものと思われる。形態的にはB2が主体であり、B3が増加している。

土師器皿と同形態の皿が少量認められる。

壺はC形態が増加する。把手・片口を有する手付長頸瓶も存在する。B形態の蓋には群馬県上野型有蓋短頸壺のものが存在する。A形態も普遍的に認められる、耳は付されるものと付されないものが存在する。

甕はAが主体であるが、B形態も数多く認められる。C形態は減少するようである。

その他に大型の把手付甗や円面甗が認められる。

○灰釉陶器 本期において出現する。量的には少ない。器種的には碗・三足盤・長頸瓶が認められる。K14号窯式期のものと思われる。

以上のような様相を呈する本期の大きな特徴のひとつとして、特に、坏、碗・有台坏、皿における、土師器と須恵器の形態の近似化、ないしは同一化があげられる。

#### 奈良・平安時代Ⅵ期

本期は9世紀後半の実年代が想定されている。該当する住居址は69軒であり、前時期に比べ半減する。

○土師器 坏はC1を主体とするが、内面黒色処理+暗文のA5・B2・C2が出現する。また、ヘラミガキを行わず、黒色処理が施されるA3・C3や、ヘラミガキも黒色処理も省略したD1形態も増加する。

碗はA1が主体であるが、坏同様に黒色処理+暗文のA2やヘラミガキも黒色処理も省略したA9などが出現する。

皿はA1が主体であり、坏や碗のような手抜き形態は認められない。

坏・碗・皿共に刻書・墨書が認められるものが多い。

鉢はロクロ成形で内面黒色処理が施される。仏鉢形は認められず、坏を大型化したものや、須恵器甕Aと同形態のものが存在する。坏を大型化したものには片口を有するものも認められる。

壺は認められない。

甕はロクロ甕が主体となる。前時期に主体であった武蔵甕CもDと共に残存するが、量的にはロクロ甕と完全に逆

転する。ロクロ甕は体部に最大径を有するB以外は認められないが、底部はこれまで平底しか存在しなかったが、本期から、丸底のものが出現する。

羽釜は、ロクロ成形の他に、非ロクロ成形のものが認められる。形態的にはAのみである。

○須恵器 坏はC形態のみが認められる。量的には激減し、土師器と逆転する。墨書が認められるものが多い。

坏蓋はA形態が少量認められる。

有台坏も坏・坏蓋同様に激減する。B2・B3形態が認められる。

壺はA形態が比較的多く認められるが、耳を有さないもの、耳を有するが穿孔がされないもの、穿孔されるものが存在する。B・C形態も存在するが量的には前時期に比べ減少している。

甕はC形態が認められず、A・B形態と、土師器ロクロ甕と同一の形態を呈するものが新たに出現する。

○灰釉陶器 前時期に比べ量的に増加する。器種的にも増え・手付瓶・小瓶・短頸瓶・短頸瓶の蓋・皿が新たに認められる。光ヶ丘1号窯式期～大原2号様式期のものと思われる。

#### 奈良・平安時代Ⅶ期

本期は10世紀前半の実年代が想定されている。該当する住居址は49軒であり、前時期から更に減少する。

○土師器 坏の主体は内面黒色処理+暗文のA5・B2・C2になる。数量的には糸切底のC2が最も多い。暗文の種類は多岐にわたるが放射状のものが最も多い、放射する本数は3～6である。その他に、花卉や放射+同心円等がみとめられる。内面ナデ調整のD1も前時期に比べ増加する。墨書が認められるものも前時期同様に多く存在する。

碗も坏同様に内面黒色処理+暗文のA2が主体となる。ヘラミガキが施されない黒色処理のA3や、ヘラミガキも黒色処理も施されないA9も前時期に比べ増加している。足高気味の高台が付されるもの少数ではあるが存在する。墨書が認められるものも坏ほど多くはないが存在する。

皿は著しく減少する。灰釉陶器の普及が原因と思われる。

鉢はロクロ成形の仏鉢形のものや、ハケ目調整のロクロ甕に胎土や調整が近似する土鍋型のものが存在する。

壺はロクロ成形、内面黒色処理の小型無頸壺が1点認められる。

甕は武蔵甕が認められなくなり、ロクロ甕が主体である。大型のものは、体部に最大径を有するB形態がそのほとんどであり、底部も平底ではなく丸底である。叩き+ロクロ成形のものが多いと思われるが、叩目や当具痕は基本的に消去されるため判然としない。極一部のものに叩目や当具痕が認められる。反面、中・小型のものはロクロ成形のものが多く、平底である。1点台付のものが認められる。又、外来系の甲斐型甕F1が2点認められる。

羽釜は前時期同様にロクロ成形の他に、非ロクロ成形のものが認められる。形態的にはAのみである。口縁部が内傾し、体部が強く張るものは群馬馬場の吉井型羽釜の可能性が強いが、同形態のものが本遺跡では前時期から認められ、時期的に吉井型よりも先行する。尚、1点ではあるが羽釜A形態で、底部が開口する甑Dが存在する。

○須恵器 須恵器はほとんど認められなくなるが、坏Cや甕B、壺など僅かに認められる。また、特殊な形態ではあるが、仏鉢形のもの1点存在する。

○灰釉陶器 前時期同様に本期においても量的に増加する。器種的には碗・皿が大半を占めるようになり、前時期のように多種ではなくなる。大原2号様式期のものが主体で、虎溪山1号様式期のものも認められる。

○緑釉陶器 本期が初現である。小瓶・碗が認められる。小瓶は花文が印刻されており、京都産である。碗は尾張・東濃産である。

#### 奈良・平安時代Ⅷ期

本期は10世紀後半の実年代が想定されている。該当する住居址は13軒である。

○土師器 坏はD1が主体となる。C1・C2・C3も僅かながら認められる。前時期まで残存していた、底部処理にヘラを使用する。A、B形態は存在しない。墨書が認められるものも存在する。

皿はB形態が本期で初現する。量的には極めて少ない。その他の形態の皿は認められない。

碗はA1・A2・A3・A8・A9形態が認められる。量的にはA9形態が最も多いが、主体と呼べるほどではない。坏同様に墨書が認められるものも存在する。また、足高高台が付されるものも存在する。

壺、鉢は認められない。

甕は口唇部ないしは、短い口縁部が外反するナデ調整のものが主体となる。ロクロ甕も残存するが少量である。

羽釜はA・B両形態のものが存在する。B形態は本期が初現である。成形的にもロクロ成形のものと、そうでないものが認められる。本期の煮沸具の主体は甕よりも羽釜である。

甑は本期の甕と同様な形態で、底部が開口する甑Aが存在する。

○須恵器 破片は認められるが断片的である。基本的に須恵器は前段階で消滅するものと推測される。

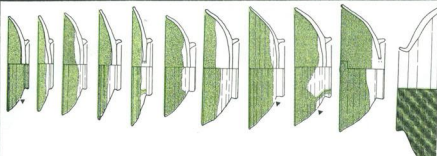




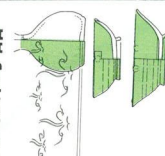




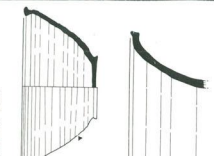
灰釉陶器



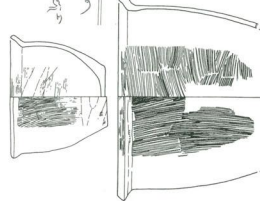
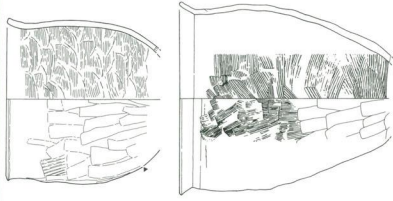
綠釉陶器



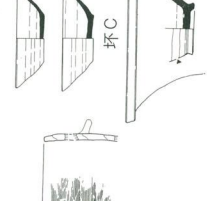
須惠器



甕



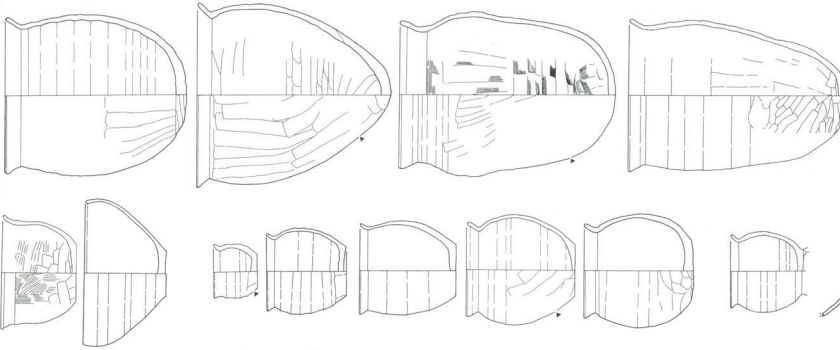
甕 F 1



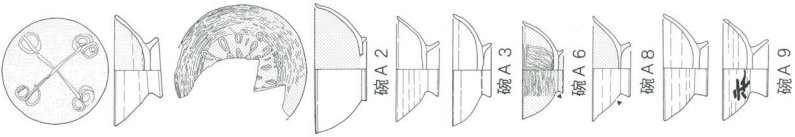
环 C

羽釜 A

鉢



土師器  
碗



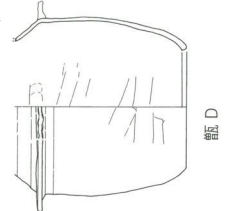
碗 A 2

碗 A 3

碗 A 6

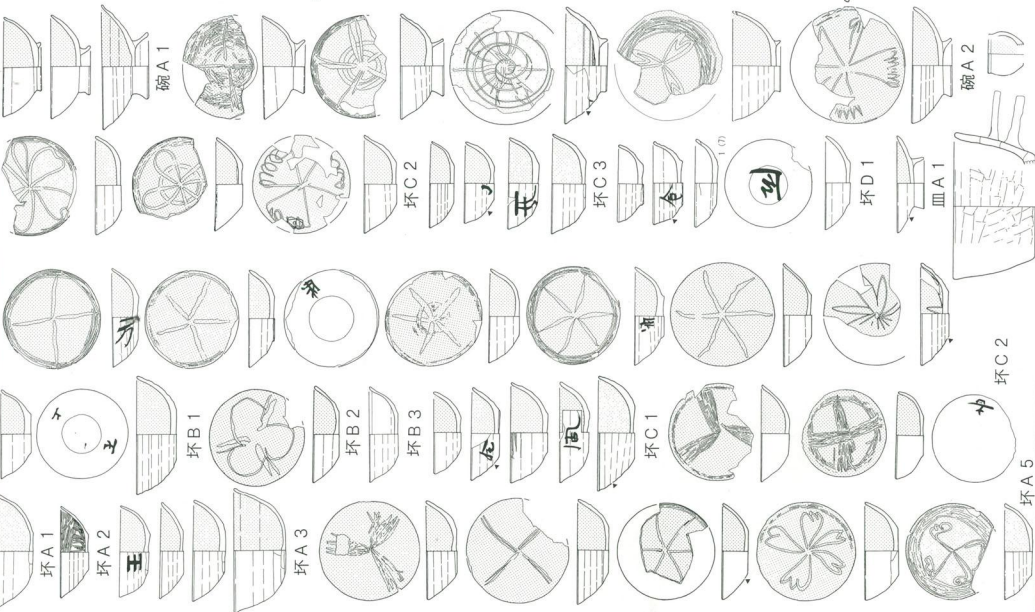
碗 A 8

碗 A 9



甕 D

环



碗 A 1

碗 A 2

环 C 2

环 C 3

环 D 1

皿 A 1

环 A 1

环 A 2

环 A 3

环 B 1

环 B 2

环 B 3

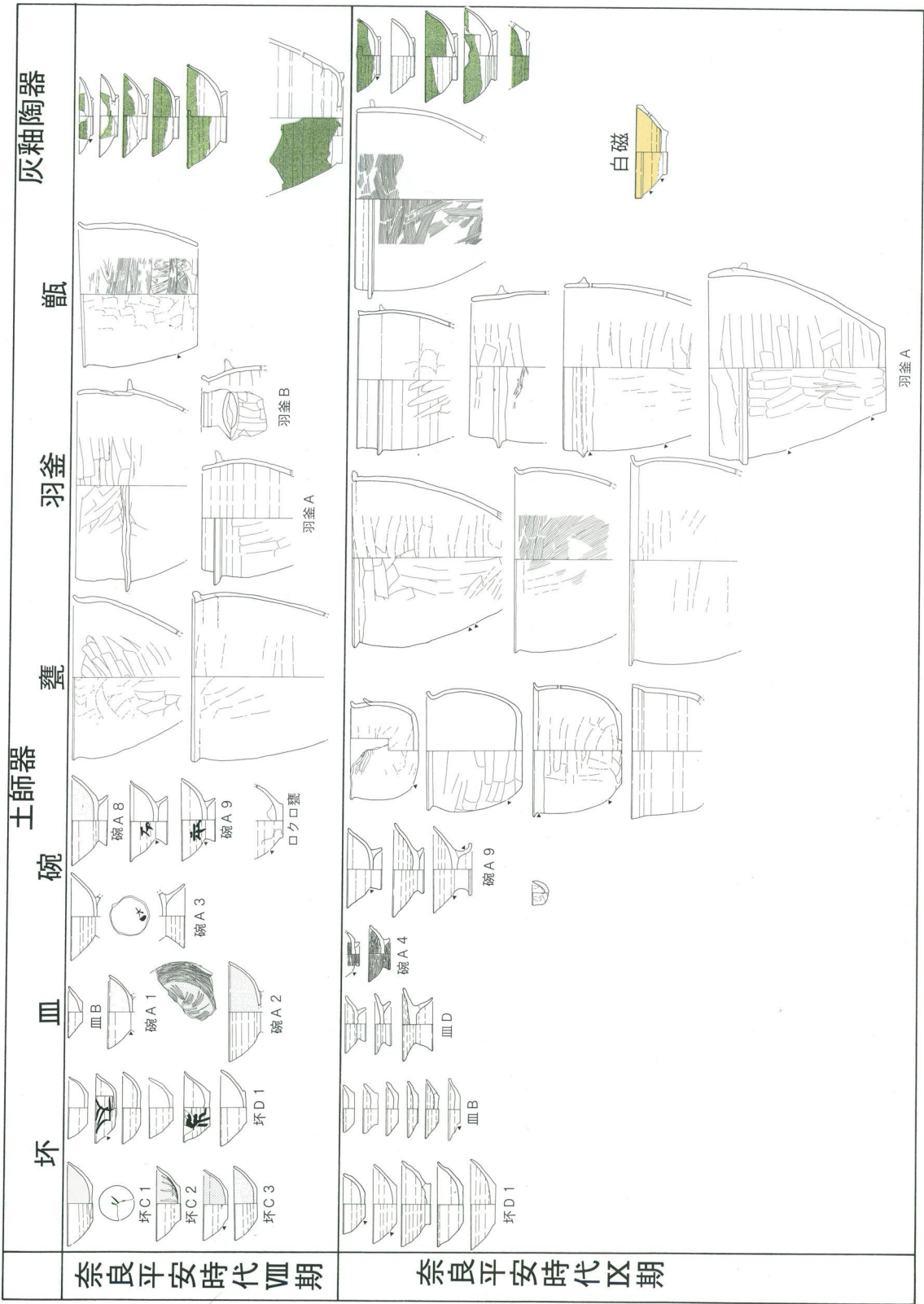
环 C 1

环 C 2

环 A 5

奈良平安時代Ⅶ期

第21图 土器編年表 9



第22図 土器編年表10





○灰釉陶器 皿・碗が主体である。その他に短頸瓶や長頸瓶の底部が認められる。虎溪山1号様式期、丸石2号様式期のものである。

#### 奈良・平安時代IX期

本期は11世紀前・中葉の実年代が想定されている。該当する住居址は24軒である。

○土師器 坏はD1のみとなる。前時期に多くみられた口径の小さいものは減少し、比較的口径の大きなものが主体となる。墨書はまったく認められない。

皿はB形態が主体であり、量的にも増加する。B形態に高台を付したD形態は本期が初現である。足高高台が付されるものも存在する。坏同様に墨書は認められない。

碗はA9が主体である。足高高台が付されるものも認められる。また、法量が小さく内外面共にヘラミガキが施されるA4形態は本期が初現である。

前時期は判然としなかった鉢は前時期に出現し、本期においても主体である甕を短胴化した形態のもので、鉢というよりは鍋とした方が良いのかもしれない。片口を有するものも存在する。ロクロ成形とそうでないものが認められる。

甕は前時期と同形態のものが主体である。ハケ目調整が施されるものも存在する。口唇部が外反するものは、前時期には上面が凹、やや上向きに屈折していたものが、水平に屈折するようになる。

羽釜は前時期同様に煮沸具の主体である。A・B両形態が認められ、成形は非ロクロ成形のものが主体であるが、ロクロ成形のものも僅かに認められる。ハケ目調整が施されるものも存在する。

その他に、手捏土器が認められる。

○灰釉陶器 碗・短頸ないし長頸瓶が認められる。量的には減少する。丸石2号様式期のものである。

○白磁 IV類の碗が1点出土している。

#### 奈良・平安時代X期

本期は11世紀後葉の実年代が想定されている。該当する住居址は11軒である。本期に於いて、土器は土師器だけとなり、量的にも減少する。

○土師器 坏はD1のみが認められる。坏そのものが量的に激減している。

皿はBが主体である。前時期に比べ量的増加が著しい。B形態の他には柱状高台が付されるC形態が初現する。B形態の柱状高台には、身との境で内屈するものと、そうでないものが存在する。

碗は柱状高台のB形態のみが認められる。B形態は本期が初現である。

鉢は前時期同様のものが認められるが、量的には少ない。

甕は本期においては認められない。

羽釜はA・B形態が認められる。ロクロ成形のものは認められなくなる。

その他に、手捏土器が認められる。

#### 奈良・平安時代XI期

本期は12世紀前半の実年代が想定されている。該当すると思われる住居址は2軒であるが、前時期の範疇で捉えるべきか、本期とすべきか、明確ではない。基本的に前時期と大きな差はなく、皿・碗の柱状高台の大型化が最も大きな変化である。

以上のような各期の様相から明らかとなった器種別の消長を第1表に示した。大きな画期が3回認められ、4区分されることがわかる。

第1の画期は、古墳時代IV期と奈良平安時代I期の間に認められる。時代区分とも一致するこの画期の特徴はロクロ成形土師器・須恵器の普及などの、古墳時代的土器から奈良時代的土器への変化である。

第2の画期は奈良平安時代IV期とV期の間に認められる。第1の画期同様に奈良時代から平安時代への時代区分と一致するこの画期の特徴は須恵器の減少と灰釉陶器、土師器碗・皿の出現、黒色土器の隆盛である。

第3の画期は奈良平安時代VII期とVIII期の間に認められる。土師器皿Bの出現、黒色土器の衰退、煮沸具における新たな甕の出現と、羽釜の隆盛。須恵器の消滅が特徴である。図らずも、土器組成は時代を如実に反映することが再確認される結果となった。

## 第2節 住居址の形態

本節では、竪穴住居址の形態変化を時期毎に観察し、その変遷を明らかにする。

本遺跡では支柱穴の配置により、住居址を形態分類してきたが、これにカマドの位置を加え、土器様相により区分された時期毎に住居址の全容が明らかなものを抽出し、各期の特徴を把握する。以下各期毎に概観していく。

尚、住居址の平面形は便宜的に方形と長方形の2区分で行ってきたが、実際には正方形や長方形と呼べるものは少ない。多くの場合、カマドの構築部分には関係なく、北辺が南辺より短い台形①、北辺が南辺より長い台形②、①・②を横位にした台形③、平行四辺形の4種類に分類される。

○古墳時代Ⅱ期 該当する住居址が2軒しかないため、様相は不明である。柱穴を有さない東カマドのものと、A形態で北カマドのものが1軒存在する。平面形は便宜的にH331は台形①、H418は台形②である。

○古墳時代Ⅲ期 支柱穴配置は、A形態が主体である。Aの中でも、貯蔵穴を有するものが本期の特徴であり、特に、貯蔵穴部分を、カマドが構築される北辺中央に相対する南辺中央に張出して設けるものは、本期以外には認められない形態である。

全ての形態において、カマドは北辺の中央部分に構築されるのが基本であるが、柱穴を持たないものや、Aの中に東辺や、北東隅に構築されるものが存在する。

平面形は柱穴をもたないものでは、H67・367・101は台形①、H402・165は台形②、H284は平行四辺形である。この形態の住居址は面積が小さなものが多く、平均12.9㎡である。カマドを持たず、規模も他に比べ大きいH284を除いた平均面積は11.9㎡となり、本期の住居址の平均面積23.0㎡と比べると約半分の規模であることがわかる。

A形態の住居址も張出部の有無に関係なく、H59・162・454・333・226・741が正方形の他は、台形①・②・③・平行四辺形のものが多い。この形態の平均面積は26.7㎡で、本期の平均面積23.0㎡より大きい。本形態で張出部を有するH162は、本期中最も面積が大きく60.1㎡である。カマドは北辺の中央に構築されるものが多いが、H373のように、東辺中央に構築されるものや、H454・247のようにカマドを付け替えたものも存在する。

A形態で、所謂「間仕切り」溝を持つA3も、本期～奈良平安時代Ⅱ期にかけて認められる形態である。大半は、正方形として差し支えないものであるが、H647のように台形②の形態のものも認められる。平均面積は23.3㎡で、ほぼ本期の平均値である。カマドは北辺に構築されるが、必ずしも中央ではない。

C2形態住居址は平均面積12.5㎡であり、柱穴を持たないものより若干ではあるが大きい。カマドは北辺中央に構築されており、東西方向が長軸である。平面形は平行四辺形や、台形③である。

○古墳時代Ⅳ期 前時期同様に支柱穴配置はA形態が主体であり、基本的にカマドは北辺中央に構築される。

柱穴を持たないもののうち、H206はカマドを持たず規模も小さい。平面形は台形①である。他のものは台形①・②のものも多く、面積は平均10.1㎡で、前時期の同形態よりやや小規模である。

A形態も長方形や正方形と呼べるものは存在せず、台形①・②・③、平行四辺形の平面形を呈している。面積は平均22.7㎡であり、本期の平均20.2㎡よりも大きい。

A3形態のH173は本期中最大の住居址であり、面積は46.3㎡である。この住居址はカマドを付け替えている。

C2形態のH912は間仕切りを有する。本来東辺に構築されていたカマドを北辺中央に付け替えている。

本期の住居址の特徴は、前時期に比べての小規模化、A形態で北辺中央に構築されるカマドである。前時期から認められるものではあるが、南辺中央の出入口施設と思われる、Pitや凹の顕在化も特徴のひとつである。

○奈良平安時代Ⅰ期 本期の特徴は、前時期に比べての更なる小規模化、A形態で北辺中央にカマドが構築されるものが主体であることである。

柱穴を持たないものは東西が長軸となるものが多い。カマドは北辺の中央に構築される。面積は平均9.3㎡であり、前時期の同形態のものより更に小規模化する。

A形態の中では、規模の小さなH931・192などが正方形である他は、台形①・②・③・平行四辺形である。東西が長軸となるH954なども認められる。面積は平均20.2㎡であり、本期全体の平均18.6㎡よりは規模が大きい、前時期の同形態よりは小規模化している。本期中最大の住居址H131は本形態であり、37.4㎡である。

A1(ア)形態は本期が初現である。北西隅が拡張する独特の平面形を呈している。面積は12.2㎡と小さい。

A3形態の住居址は平均面積24.0㎡であり、本期においては規模の大きな住居址で構成されている。平面形は台形①・②や平行四辺形であるが、H933のような隅丸長方形や、H540のように六角形状のものも認められる。

C2形態のH669は面積3.4㎡と極めて小規模である。

○奈良平安時代Ⅱ期 本期の平均面積は19.2㎡であり、前時期より若干規模が大きくなっている。北辺中央にカマドが構築されるA形態が最も多いが、本期において出現するB・B4形態や、礎石、所謂「壁柱穴」の使用が本期の特徴である。

柱穴を持たないものは、平均面積12.2㎡である。前時期より規模が大きくなっているが、カマドを有さないものには、H72のように面積が35.1㎡と本期全体の面積より大きなものも存在する。カマドを有さないものを除いた場合の平均面積も10.4㎡であり、規模は大きくなっている。カマドは北辺中央に構築されるものがほとんどであるが、H381のように北東隅のものも存在する。平面形は台形①・②・③や平行四辺形であるが、H786は西辺の北西隅が方形に張り出している。

A形態の平均面積は21.8㎡であり、本期全体の平均や、前時期よりも大きい。カマドは北辺中央が基本である。平面形はH570・850・508のように正方形や長方形と呼んで差し支えないものも存在するが、台形①・②や、平行四辺形のものが多い。H756や50のように、出入口と思われる南辺の中央が弧状に突出するものも認められる。また、面積が49.7㎡と規模の大きなH557は壁柱穴が巡らされている。

A3形態の住居址は本期を最後に消滅する。H554が1軒認められるだけである。

前時期が初現のA1(ア)は本期においても認められる。平均面積は15.1㎡と前期より規模が大きい。平面形は台形①・②であるが、H370は北壁に柱穴が構築されるため、北辺中央のカマド部分が、「W」状に凹んでいる。A1(ア)とは反対の柱穴配置となるA1(ウ)も本期において1軒認められる。

B形態や礎石を伴うB4形態は本期が初現であり、本期の特徴である。特にB4形態のH667は66.4㎡の規模を有する、本期最大の住居址である。壁際には壁柱穴と礎石が配置され、壁の外側に1ないし2段のテラス状の堀込みを有する特異な住居址である。

C2は平均面積8.0㎡であり、小規模である。平面形はH168の東西が長軸の長方形、H76は台形①である。

○奈良平安時代Ⅲ期 本期の平均面積は19.7㎡である。前時期より若干規模が大きくなっている。北辺中央にカマドが構築されるA形態が最も多いが、本期最大規模の住居址は前時期同様B4形態のH718で55.2㎡である。B4・D形態や、礎石、所謂「壁柱穴」の使用、また前時期に萌芽がみられた長軸と短軸の差の増大、つまり、正方から長方への変化が本期の特徴である

柱穴を持たないものの平均面積は12.5㎡であり、前時期よりも規模が大きくなる。カマドは北辺中央か東辺に構築される。平面形は台形①・②・③である。

A形態の住居址の平均面積は21.6㎡で、前時期とほぼ同じである。カマドは北辺中央が基本である。平面形は前時期同様であるが、長軸方向に伸長した形状のものが増える。また、4隅の1ヶ所が他よりも突出するものも多い。

A1(ア)は平均面積17.4㎡である。前時期よりさらに規模が大きくなっている。カマドは北辺中央に構築される。Aとは異なり、長軸方向への伸長は顕著でない。

B4形態のH718は外側の支柱穴に礎石が伴うが、この4基は同時に柱痕も有している。柱穴の新旧ではなく同時に使用されたものであり、住居が所謂「高屋」であった可能性が推測される。壁際には壁柱穴が巡らされている。また、本址は本期最大の住居である。面積は55.2㎡である。

D形態は本期が初現である。4基の支柱穴にはH718同様に礎石と柱痕が存在する。壁際に巡る壁柱穴が本来構築される位置には礎石が設置されている。面積は36.3㎡である。

本期では、2本の支柱穴により構成される住居址はC2からC1に変化する。平面形は平行四辺形・台形②である。カマドは北辺の中央からやや片寄って構築される。平均面積は14.6㎡で、前時期のC2より大きい。

○奈良平安時代Ⅳ期 本期の平均面積は14.9㎡である。前時期に比べ規模は著しく小さくなっている。その原因は柱穴を持たない住居址の増大にあり、本期の特徴のひとつである。

柱穴を持たない住居址の平均面積は10.8㎡である。前時期まで拡大していた規模が縮小に転じている。カマドは北辺中央がほとんどであり、東辺のものが極僅かに認められる。平面形は正方形に近いものも存在するが、台形①が多い。前時期に僅かに認められた、カマド部分が壁外に突出するものが多くなる。また、長軸方向への伸長も認められる。

A形態は平均面積21.3㎡である。前時期と目立った規模の変化はない。長軸方向への伸長は顕著であるが、カマドの壁外への突出は僅かに認められる程度である。カマドは北辺中央が基本である。平面形は台形①・②が大半であるが、H429のように南辺中央が弧状に突出するものや、H830のように北辺の両隅が突出するものも認められる。

A1(ア)は平均面積13.6㎡である。前時期に比べ規模は著しく小さくなる。カマドは北辺中央に構築され、平面形は台形①が多いが、H118・177は正方形に近い。H566・911は北辺の方隅が突出する。また、H566はC1との折衷ともとれる支柱穴の配置である。

A1(エ)は本期が初現である。平均面積は12.1㎡である。カマドは北辺中央に構築される。H823は堀方から検出



された柱穴から、A形態であった住居址を拡張した結果本形態になったようであり、長軸方向へ伸長している。

B1、B3も本期が初現である。平均面積はB1が17.9㎡、B3が18.4㎡である。

前時期に認められなかったC2形態はC1形態と共に認められる。平均面積はC1が11.6㎡、C2が12.7㎡で、本期の平均面積よりも規模は小さい。H816が東辺にカマドを有する他は北辺中央である。平面形は台形①・②・平行四辺形である。

本期の特徴は前記の他に、4本の支柱穴が住居址内に均等に配置されるA形態から、住居址内の片寄った位置に配置されるA1(ア)・A1(イ)、支柱穴が2本で構成されるC1・C2等の増加があげられる。

尚、本期において最大規模の住居址はH250で、43.4㎡の面積である。

○奈良平安時代V期 本期の平均面積は16.2㎡である。前時期に比べ規模は大きくなる。本期の住居址の特徴として、支柱穴を持たない住居址の更なる増加、A形態の長軸方向への伸長、東カマドの増加と東南隅カマドの初現、カマド煙道を武蔵甕の連結により構築するものの出現、住居の床面構築後に構築され、多くは白色の灰が堆積する植物(稲藁?)を燃やし、再び埋め戻し、床を構築する土坑の隆盛があげられる。全体として乱れた平面形状の住居址が増加し、正方・長方と呼べるものは極端に減少する。

柱穴をもたないものは平均面積11.0㎡である。規模的には前時期と変化は認められないが、数は増加する。大半は北壁中央にカマドが構築されるが、東辺に構築されるものも存在する。東辺のカマド位置は南辺よりであり、中央ではない。H176はカマドが構築される東辺が2段になっており、棚と思われる。また、長軸が東西のものは、北辺にカマドが構築される場合、中央ではなく東西のいずれかに片寄っている。平面形は台形①・②・③・平行四辺形である。カマドを有さないものも存在する。

A形態は平均面積21.9㎡である。前時期よりも規模は若干大きくなっている。カマドは北壁中央が基本である。平面形は正方形に近いものも存在するが、多くは台形①・②・③・平行四辺形であり、長軸方向に伸長したものが多い。

A形態のバリエーションであるA(ア)、A(イ)等も認められる。A(ア)は1軒が認められるに過ぎない。面積6.9㎡と規模は小さい。礎石を伴うA(イ)は平均面積32.5㎡であり、大規模である。本期の他形態の住居址にはみられない壁柱穴、あるいはそれに代わる礎石を有している。平面形は台形①・平行四辺形である。カマドは北辺中央に構築される。本期における最も大規模な住居址は本形態のH635であり、41.3㎡である。

A1(ア)の平均面積は16.6㎡である。前時期に比べ規模が大きくなっている。カマドは北辺中央が基本であるが、東辺に構築されるH332や北辺、東辺の両方に有するH965なども存在する。平面形は台形が多いが、H748・H838のように台形③を基本に北辺の東辺よりが突出するものも認められる。

A1(イ)は本期が初現である。平均面積は14.8㎡であり、本期の平均よりは規模が小さい。カマドは北辺中央に構築され、平面形は台形③・平行四辺形である。

A1(ウ)はH354が1軒だけ該当する。面積15.8で、台形①の平面形を呈し、カマドは北壁中央に構築される。

支柱穴の一部に礎石を伴うA2形態も本期が初現である。H502は平面形は台形②、カマドは東壁中央に構築される。平均面積は24.8㎡であり、本期平均より大規模である。

支柱穴6本で構成されるB形態は平均面積19.7㎡で、本期の平均よりは大規模である。平面形は台形②・平行四辺形であり、カマドは北辺中央に構築される。

B1形態はH682が1軒だけ認められる。平面形は平行四辺形、カマドは北辺中央に構築される。面積は小規模で9.9㎡である。

2本の支柱穴で構成されるC形態はC1・C3・C4が存在する。C3・C4は本期が初現である。平均面積はC1が11.5㎡、C3が12.5㎡、C4が13.5㎡であり、総じて小規模で、前時期から変化しない。カマドは北辺・東辺の他に、H701のような東南隅のものが出現する。

○奈良平安時代VI期 本期の平均面積は16.1㎡であり、前時期からの変化は認められない。本期の住居址の特徴としては、柱穴を持たない住居址が過半数を占めるようになること、東カマドの更なる増加、前時期から継続するカマド煙道を武蔵甕の連結により構築するものの存在である。

柱穴を持たない住居址の平均面積は12.5㎡である。前時期より規模は大きくなる。カマドは北辺中央か東辺の中央から東南隅よりに構築される。武蔵甕を連結し煙道を構築するものも認められる。平面形は台形①・②・③・平行四辺形である。

A形態の平均面積は26.7㎡である。前時期よりも規模が大きくなっている。本期最大規模の住居址は本形態のH517であり、34.2㎡である。カマドは北辺中央が基本で、壁柱穴を有するものも存在する。平面形は台形①・②であるが、H515はカマド部分が突出しており、5角形の平面形を呈する。

A(ア)はH496が1軒だけ該当する。面積は16.5㎡でほぼ平均規模である。カマドは北辺中央に構築され、平面形

は胴が張る正方形である。

A 1 (ア)は平均面積14.5㎡であり、平均より小さい。平面形は平行四辺形を呈し、カマドは北辺中央に構築される。

A 1 (イ)も平均面積15.1㎡で、平均よりも小さい。カマドは北辺中央に構築され、平面形は台形③であるが、H420は支柱穴全てに礎石が設置されている。

B形態はH676が1軒が認められる。面積は25.8㎡であり、平均より大きい。東辺にカマドが構築され、平面形は台形③である。

C形態はC 1・C 3・C 5が認められる。C 5は初現である。面積はC 1が12.7㎡、C 3が18.1㎡、C 5が12.1㎡であり、C 3が平均より大きい他は、平均よりも小規模である。すべてのものが、カマドは北辺中央である。

○奈良平安時代Ⅶ期 本期の平均面積は13.4㎡であり、前時期に比べ小規模になる。本期の特徴は柱穴を持たない住居址が増加し、住居址の大半を占めること、同様に東カマドと東南隅カマドの合計が北カマドとほぼ同比率になることである。

柱穴を持たない住居址は平均面積11.6㎡である。平均よりも小規模であり、前時期に比べても大幅に規模が縮小している。カマドは北辺よりも東辺及び東南隅に構築されるものが主体である。また、北辺と東辺に1基ずつ2基のカマドを有するものも認められる。平面形は台形①・②・③である。H411はベット状遺構を持つ。

A形態は量的に激減する。面積は平均33.9㎡であり、本期最大の住居址は本形態のH414であり、40.3㎡である。H414は平面形もほぼ正方形を呈し、カマドは北辺中央に構築されている。H322は台形②の平面形を呈し、カマドは東辺中央から、東南隅に移築している。

A 1 (イ)形態はH828が1軒だけ該当する。平行四辺形の平面形態を呈し、カマドは北辺中央に構築される。面積は15.1㎡で、平均より大きい。

C 2形態はH237が1軒該当するが、規模は不明である。カマドは北辺中央に構築されている。

○奈良平安時代Ⅷ期 本期の住居址の平均面積は13.9㎡である。前時期との変化はほとんど認められない。本期の特徴は、主体が柱穴を持たないものになり、カマドは東南隅に構築されるものが大半となることである。

柱穴を持たないものは平均面積10.7㎡であり、本期平均及び前時期よりも小規模である。カマドは東南隅が大半であるが、北辺に構築されるものも存在する。平面形は台形①・③が多いが、東南隅にカマドを持つものは、カマド部分が突出する。

A形態の住居址は2軒認められるが、他遺構等との重複により、詳細は不明である。

A 1形態は(イ)と(ウ)が1軒ずつ認められる。どちらも東南隅カマドで平面形は台形①と平行四辺形である。本期最大規模の住居址はA 1 (ウ)形態のH841で27.9㎡である。

○奈良平安時代Ⅸ期 本期の住居址の平均面積は22.4㎡である。Ⅵ期以降縮小してきた規模が本期で再び大きくなる。

本期の特徴は、ほとんど全ての住居址が東南隅カマドになる事と、面積規模の拡大である。

柱穴を持たないものは平均面積16.5㎡であり、規模的には前時期に比べ約1.5倍に拡大する。しかし、量的には前時期に主体であったものが、本期全体の約27%に減少する。カマドは東南隅主体であるが、東辺中央や持たないものも存在する。平面形は台形①・②・平行四辺形である。

A形態の平均面積は24.7㎡である。カマドは東南隅が主体であるが、H55やH615のように西南隅に有するものも認められる。平面形は台形②・③である。H613は、本期最大の住居址であり42.4㎡の規模である。

A (ア)、A (イ)形態は各1軒が認められる。面積は各21.4㎡、31.9㎡である。A (イ)は所謂「曲屋」であり、本来は柱穴が配置される場所に見あたらないため、礎石を併用したものと思われる。

A 1 (ア)は平均面積22.6㎡である。本期全体の平均と大差ない。カマドは東南隅以外には存在しない。平面形は台形③が主体であるが、台形①も認められる。

B形態はH323が1軒認められる。面積は38.3㎡で大規模である。台形③の平面形を呈する。

C 3形態はH403が該当する。面積18.1㎡であり、平均より若干小さい。カマドは東南隅に構築され、平面形は台形①である。

○奈良平安時代Ⅹ期 本期の住居址の平均面積は27.0㎡である。本期の特徴は、前時期からの更なる住居址規模の拡大である。

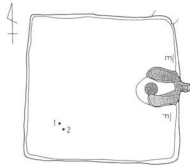
柱穴を持たない住居址の平均面積は23.7㎡である。前時期に比べ大規模であるが、本期平均に比べると小さい。カマドは東南隅以外は存在せず、平面形は台形③・平行四辺形である。尚、本形態のH560は本期最大規模の住居址で、面積は34.6㎡である。

A形態の住居址の平均面積は29.0㎡で、前時期に比べ大きくなっている。カマドは東南隅以外は存在しない。平面

	形態の特徴	カマド位置			間仕切	平面形	平均面積	最大面積	その他の特徴
		北	東	東南					
古墳時代	II	不明							
	III						23.0	60.1	貯蔵穴の隆盛
	IV						20.2	46.3 A3	規模の縮小 南辺中央部出入口施設の顕在化
奈良平安時代	I						18.6	37.4 A	更なる規模の縮小
	II	Bの出現 					19.2	66.4 B4	規模の拡大 A形態の北辺中央カマドが最も多い 礎石 壁柱穴 長軸方向への伸長の萌芽
	III						19.7	55.2 B4	規模の拡大 礎石 壁柱穴 長軸方向への伸長
	IV						14.9	43.4 A	規模の著しい縮小 長軸方向への伸長 A1(7)・A1(1)・C1・C2の増加 カマドの壁外突出
	V						16.2	41.3 A(1)	長軸方向への伸長 (A形態) 東カマドの増加 東南隅カマドの出現 武蔵甕連結煙道の出現 床下土坑の隆盛 礎石・壁柱穴
	VI						16.1	34.2 A	柱穴を持たないものが過半数 東カマドの更なる増加 武蔵甕連結煙道
	VII						13.4	40.3 A	規模の縮小 柱穴を持たないものが大半 東十東南隅カマドが北カマドとほぼ同数
	VIII						13.9	27.9 A(7)	柱穴を持たないものが主体 東南隅カマドが大半
	IX						22.4	42.4 A	規模の拡大 東南隅カマド主体 礎石 曲屋
	X						27.0	34.6	更なる規模の拡大 東南隅カマド以外認められない 炉?の増加

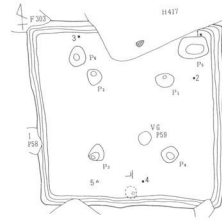
第2表 住居址変遷表

古墳時代Ⅱ期



H 331

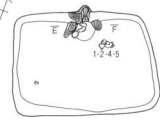
柱穴を持たないもの



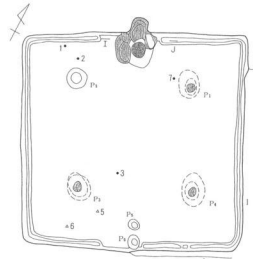
H 418

A

古墳時代Ⅲ期



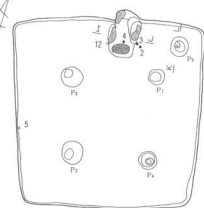
H 67



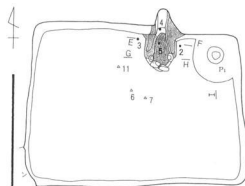
H 511



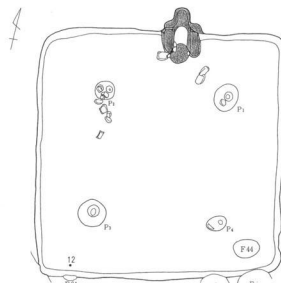
H 88



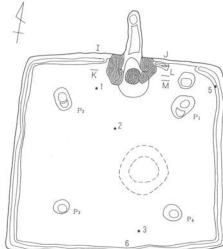
H 282



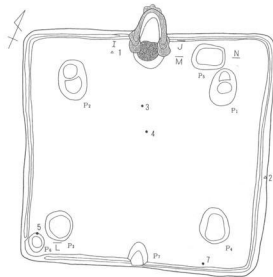
H 367



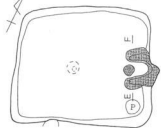
H 59



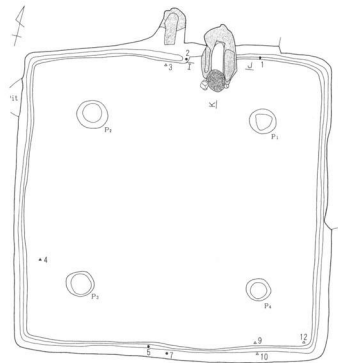
H 648



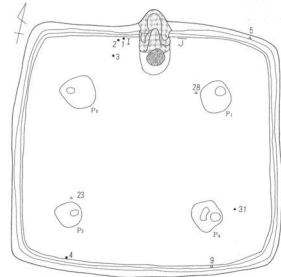
H 640



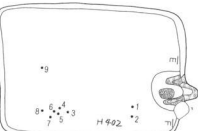
H 101



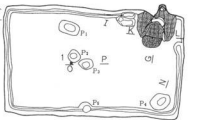
H 454



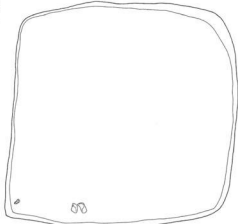
H 456



H 402

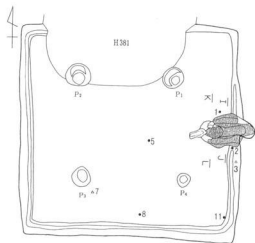


H 165



H 284

柱穴を持たないもの



H 373

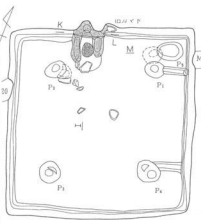
A

第24図 住居址変遷図1

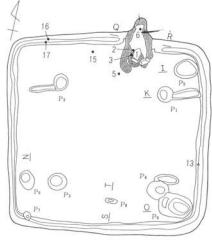




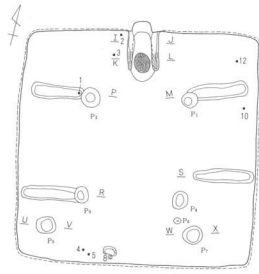
古墳時代Ⅲ期



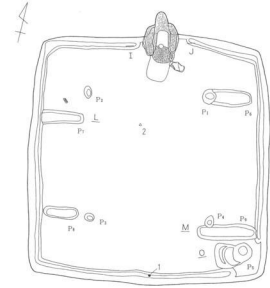
H 649



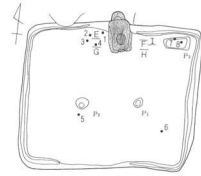
H 647



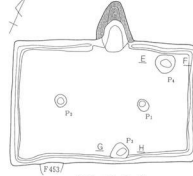
H 638



H 643



H 369



H 646

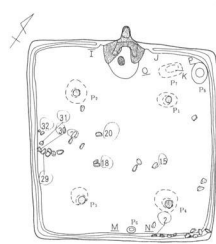
A3

C2

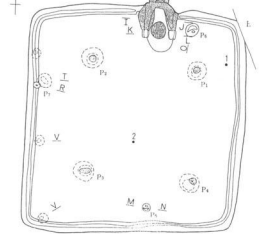
古墳時代Ⅳ期



H 206



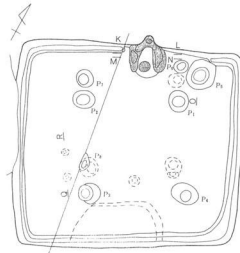
H 917



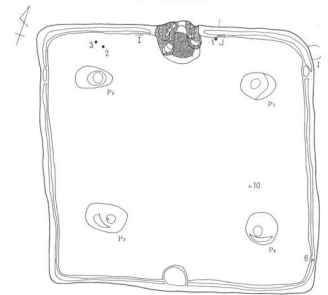
H 952



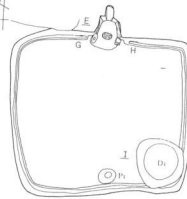
H 372



H 909



H 235

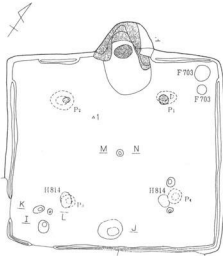


H 867

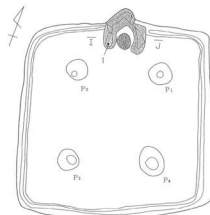
柱穴を持たないもの



H 939

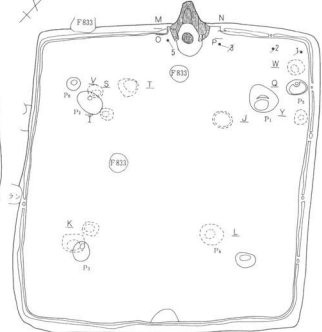


H 815



H 504

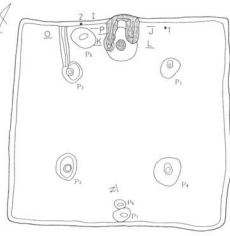
A



H 958

第26図 住居址変遷図3

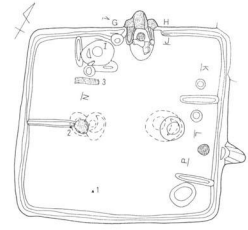
古墳時代Ⅳ期



H 479



H 173

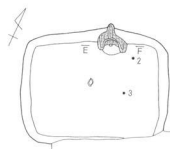


H 912

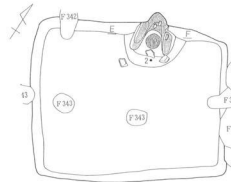
C2

A3

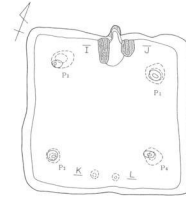
奈良平安時代Ⅰ期



H 348

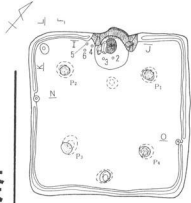


H 536

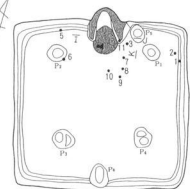


H 722

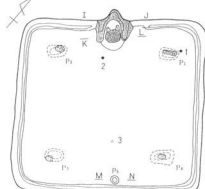
柱穴を持たないもの



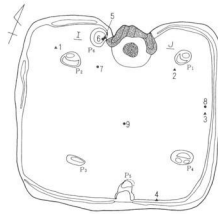
H 931



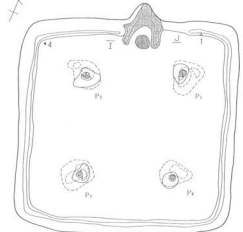
H 192



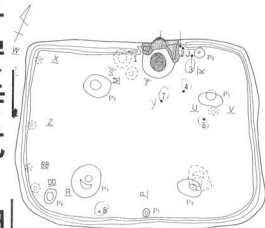
H 851



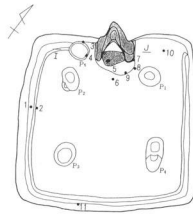
H 236



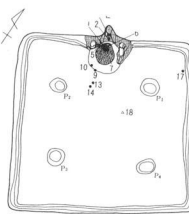
H 505



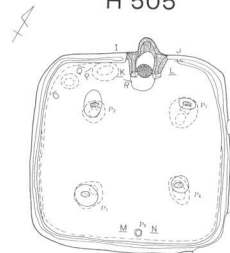
H 954



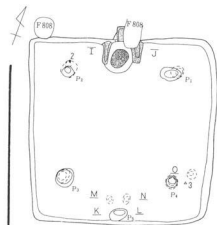
H 113



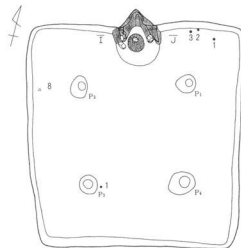
H 114



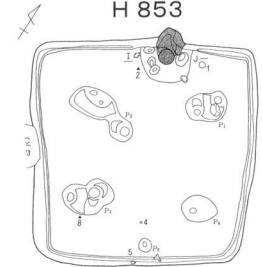
H 853



H 956



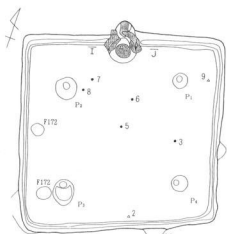
H 66



H 95

A

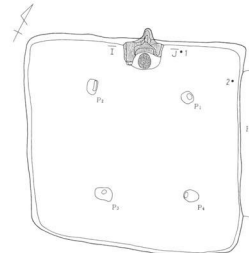
第27図 住居址変遷図 4



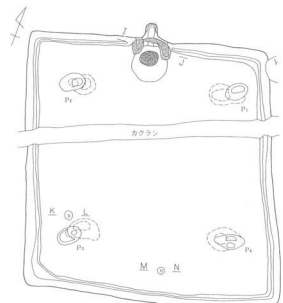
H 366



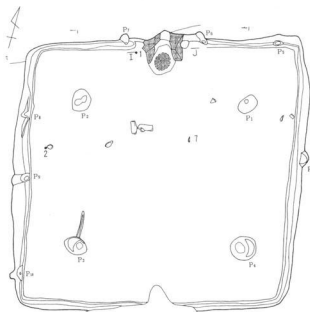
H 840



H 353



H 717

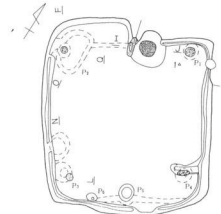


H 131

A

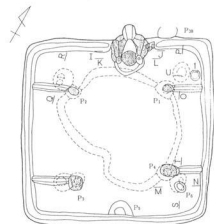


H 809

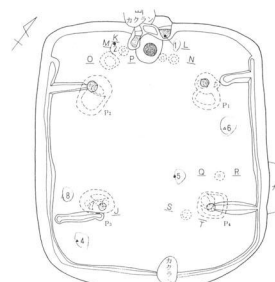


H 936

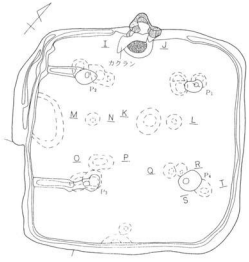
A1(ア)



H 913



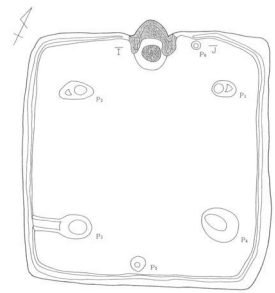
H 933



H 935

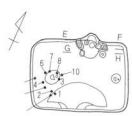


H 947

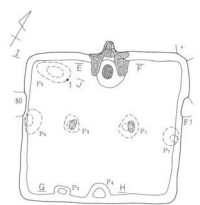


H 540

A3



H 669



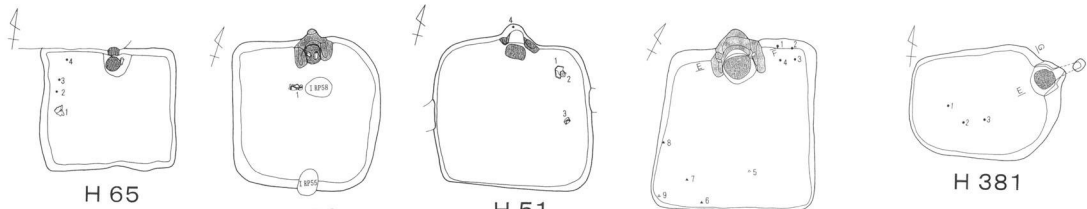
H 713

C2

奈良平安時代 I 期

第28図 住居址変遷図 5





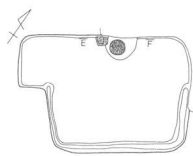
H 65

H 62

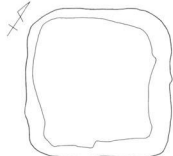
H 51

H 343

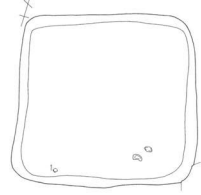
H 381



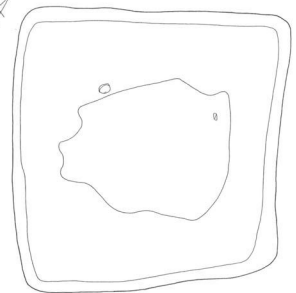
H 786



H 293

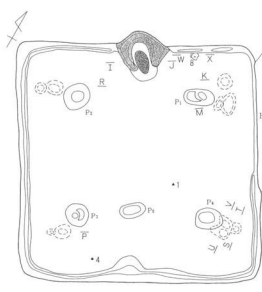


H 328

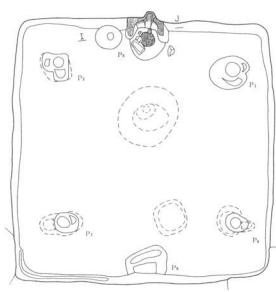


H 72

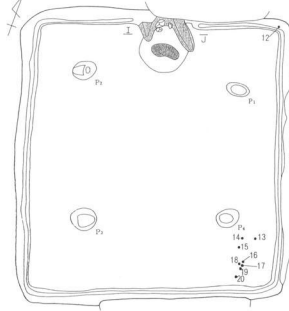
柱穴を持たないもの



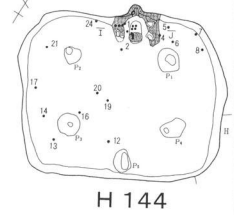
H 570



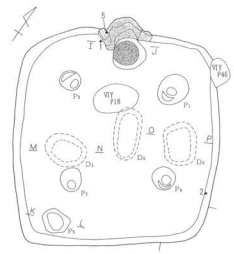
H 850



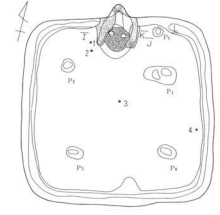
H 508



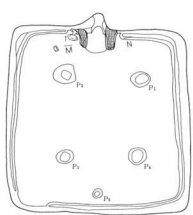
H 144



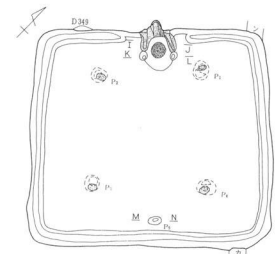
H 589



H 362



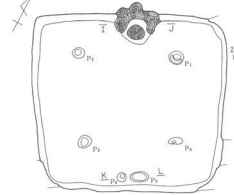
H 79



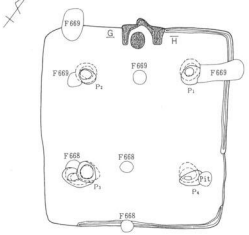
H 860



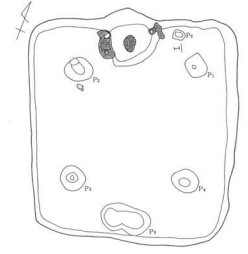
H 757



H 242



H 772

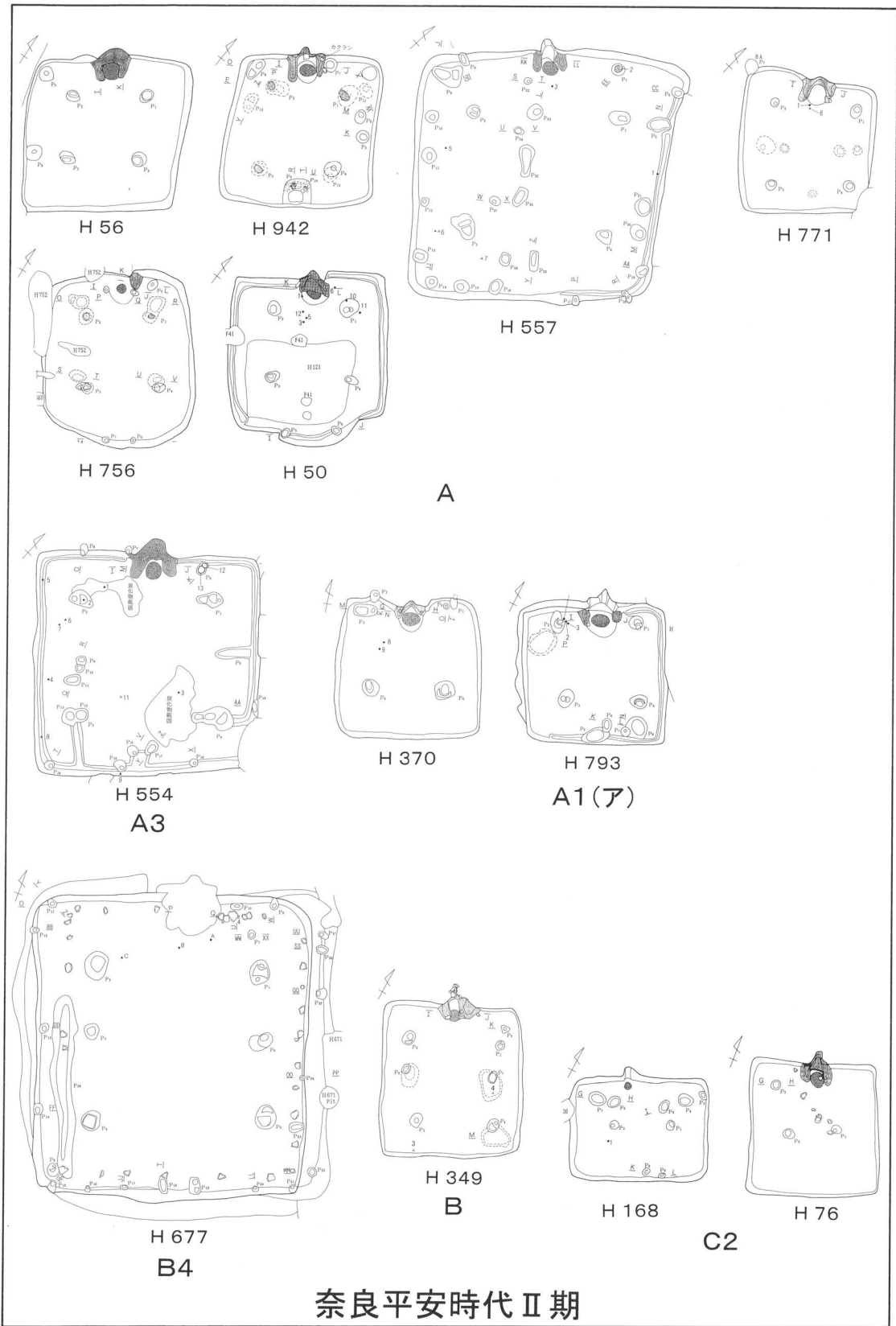


H 96

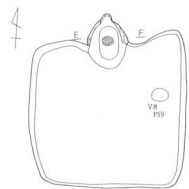
A

奈良平安時代Ⅱ期

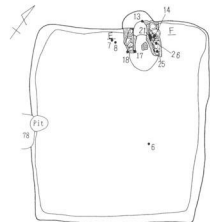
第29図 住居址変遷図6



第30図 住居址変遷図7



H 487



H 279

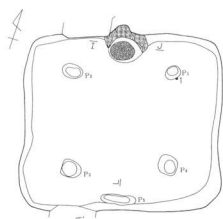


H 259

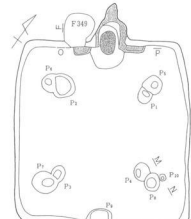


H 135

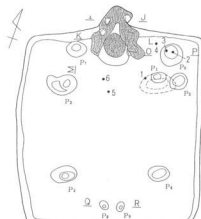
柱穴を持たないもの



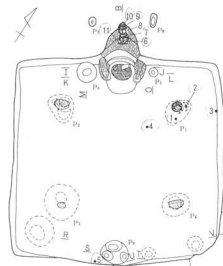
H 216



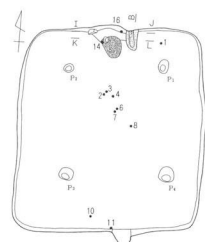
H 544



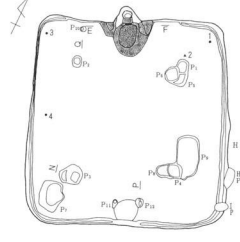
H 645



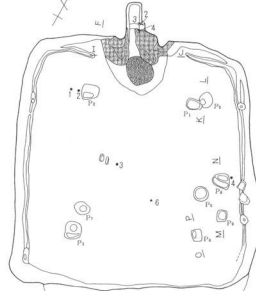
H 842



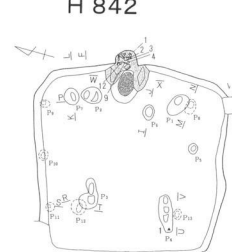
H 382



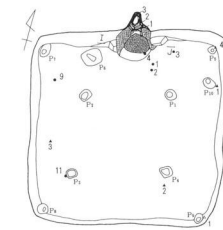
H 127



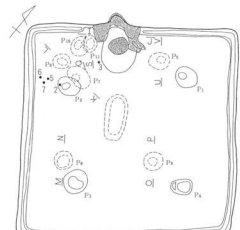
H 214



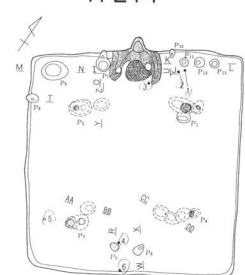
H 501



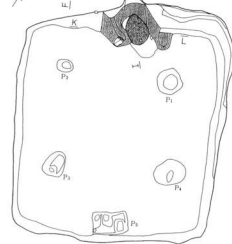
H 73



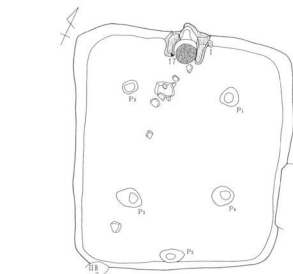
H 619



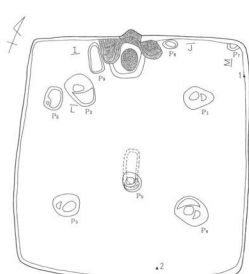
H 778



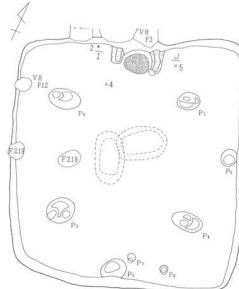
H 148



H 326



H 678



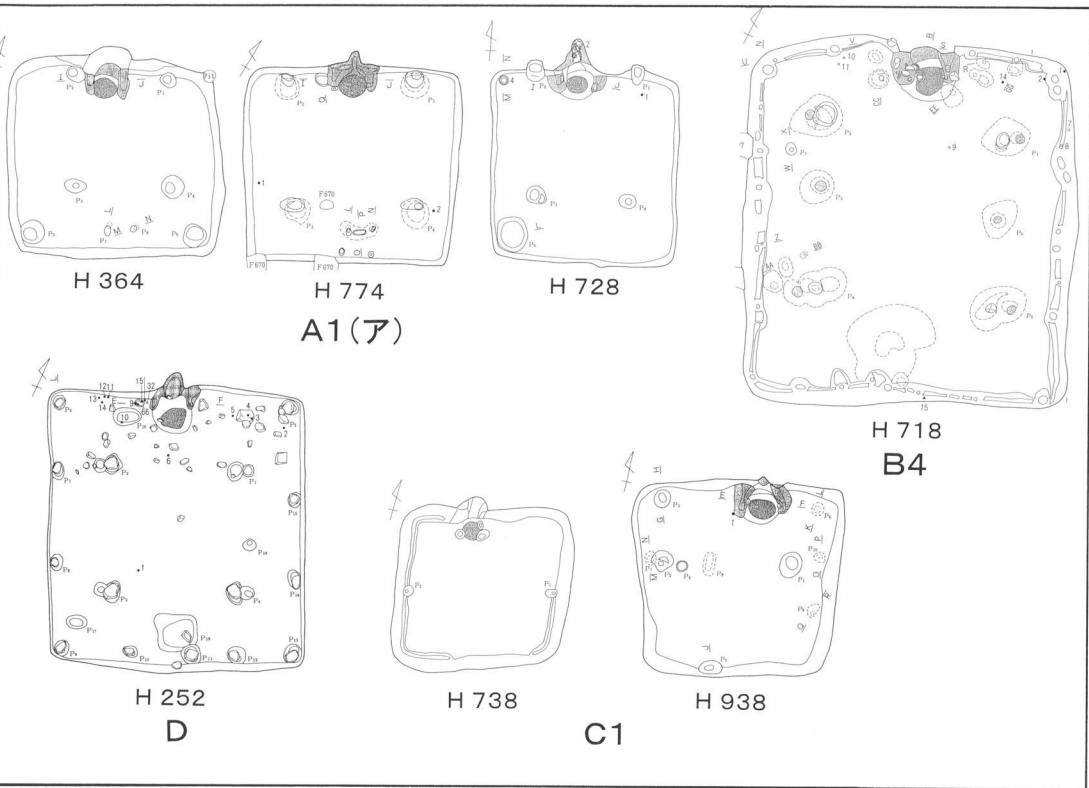
H 401

A

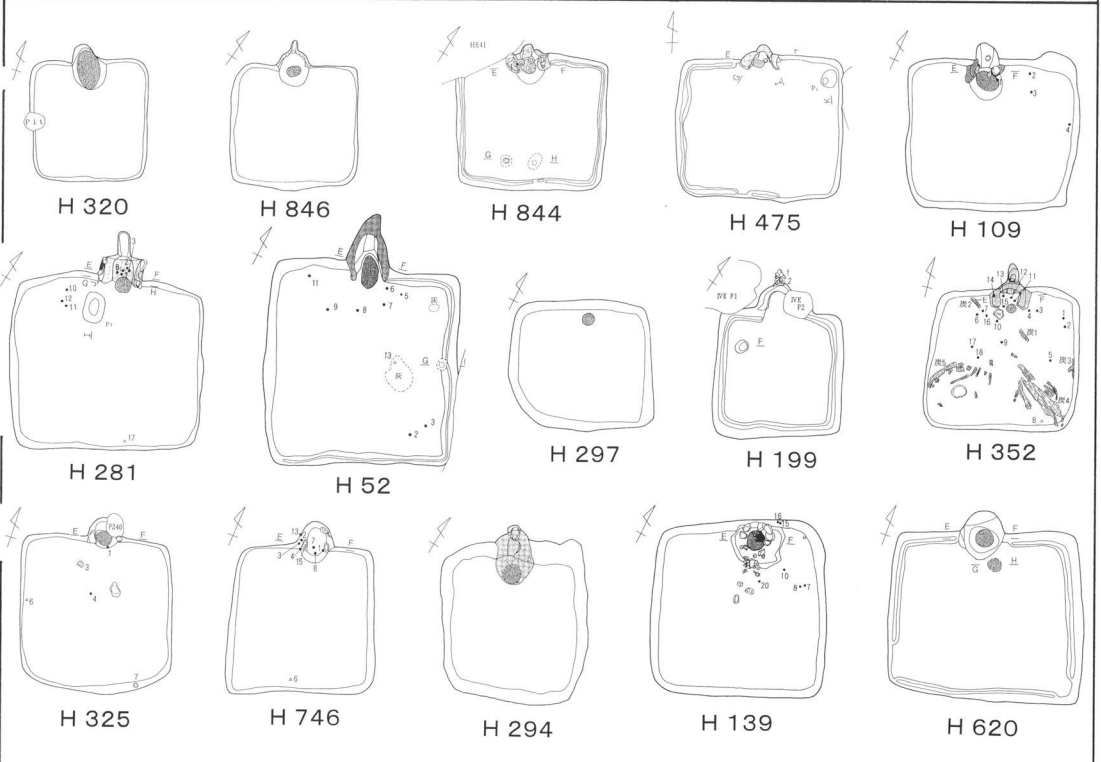
奈良平安時代Ⅲ期

第31図 住居址変遷図 8

奈良平安時代Ⅲ期



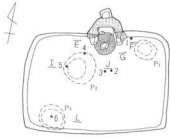
奈良平安時代Ⅳ期



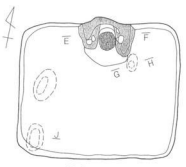
柱穴を持たないもの

第32図 住居址変遷図9

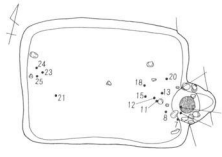




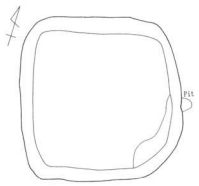
H 477



H 622

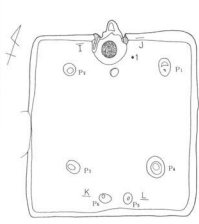


H 327

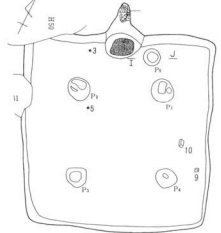


H 166

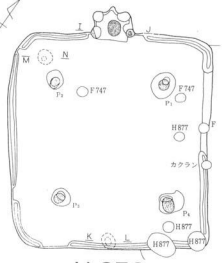
柱穴を持たないもの



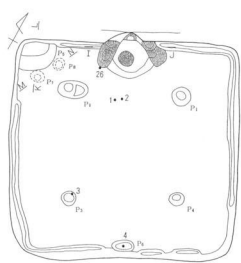
H 934



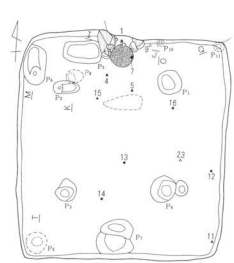
H 123



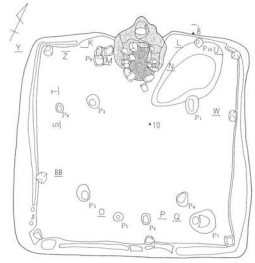
H 878



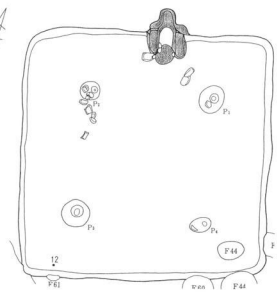
H 545



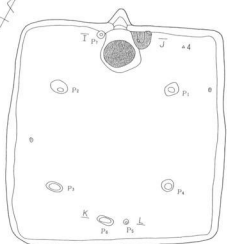
H 387



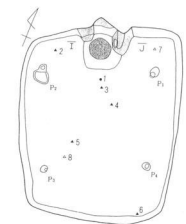
H 569



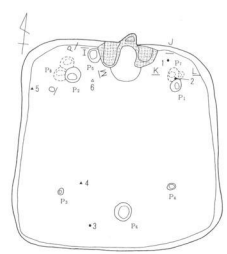
H 60



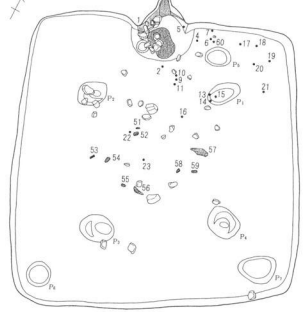
H 714



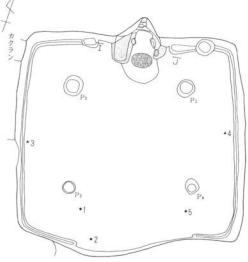
H 346



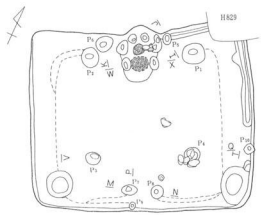
H 424



H 250

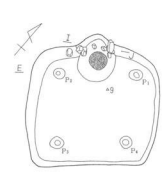


H 429

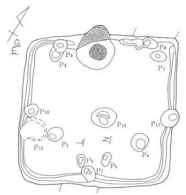


H 830

A



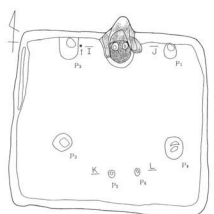
H 582



H 566



H 911

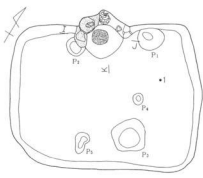


H 363

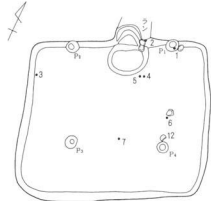
A1(ア)

奈良平安時代IV期

第33図 住居址変遷図10



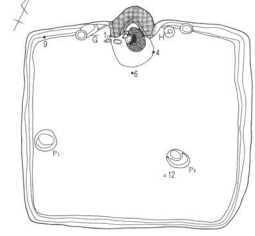
H 384



H 255

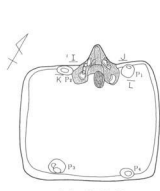


H 177

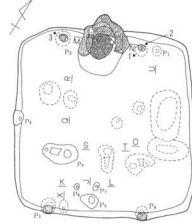


H 118

A1(ア)



H 690



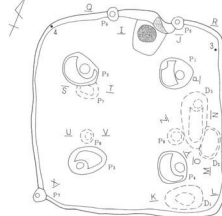
H 823

A1(イ)

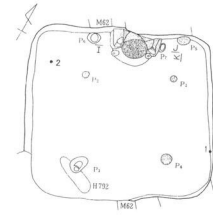


H 198

B1

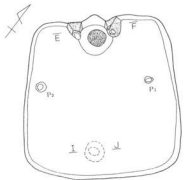


H 527

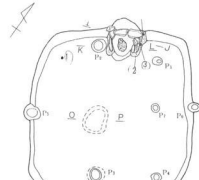


H 795

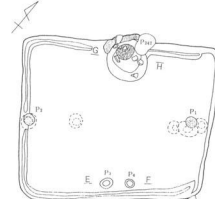
B3



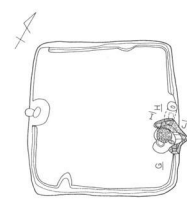
H 760



H 907

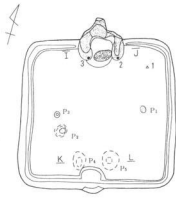


H 826

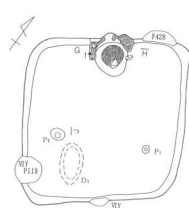


H 816

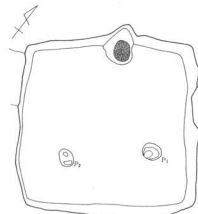
C1



H 949



H 591



H 108



H 790

C2

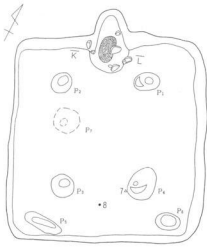
奈良平安時代Ⅳ期

第34図 住居址変遷図11

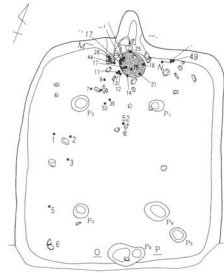


第35図 住居址変遷図12

奈良平安時代V期



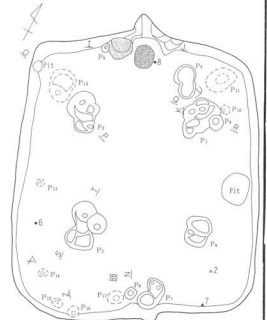
H 587



H 75



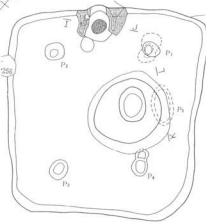
H 137



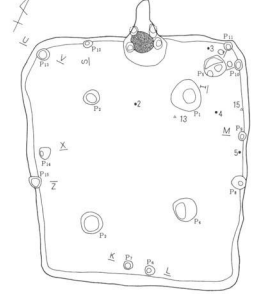
H 684



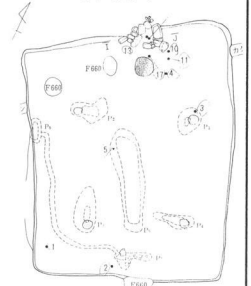
H 513



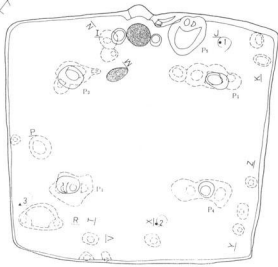
H 548



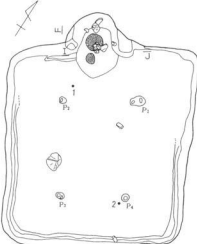
H 193



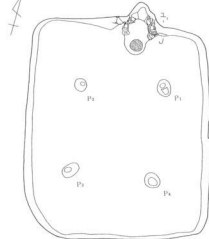
H 752



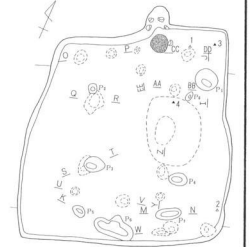
H 761



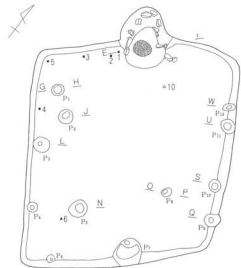
H 142



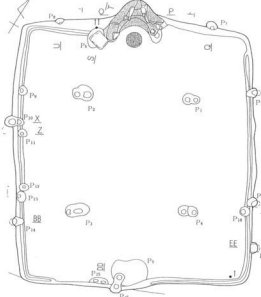
H 427



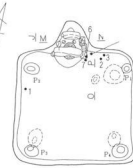
H 565



H 555

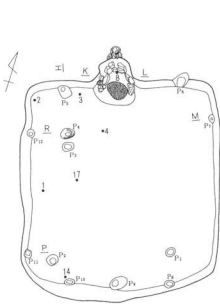


H 529

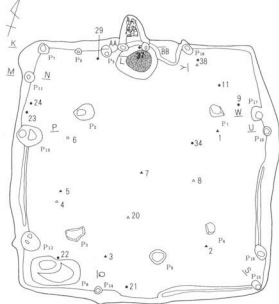


H 702

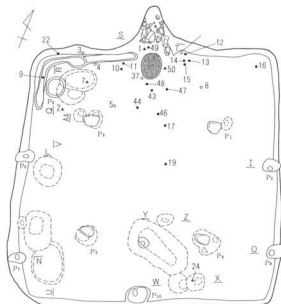
A(ア)



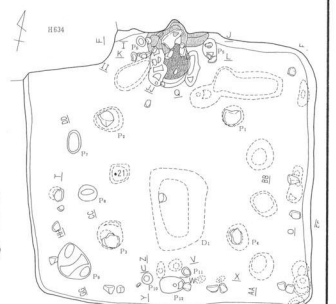
H 197



H 309



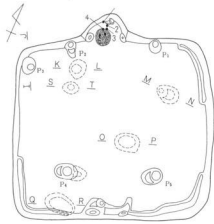
H 685



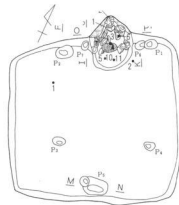
H 635

A(イ)

第36図 住居址変遷図13



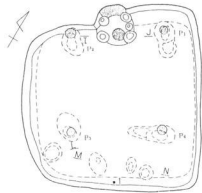
H 730



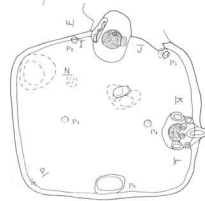
H 317



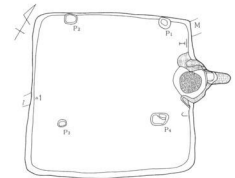
H 748



H 838

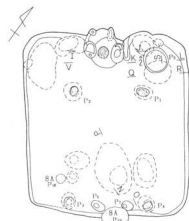


H 965

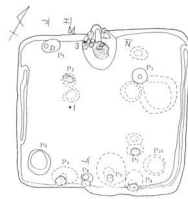


H 332

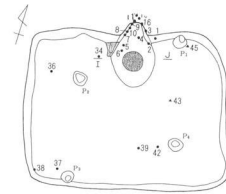
A1(ア)



H 781



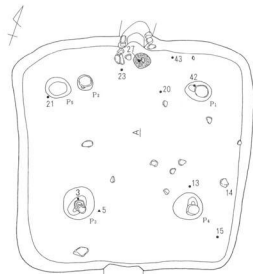
H 829



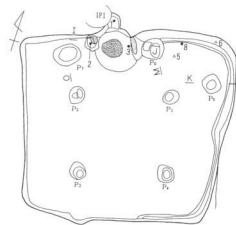
H 354

A1(イ)

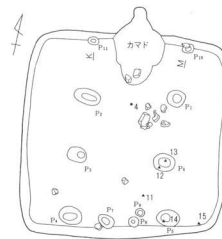
A1(ウ)



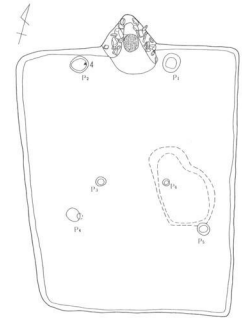
H 395



H 120

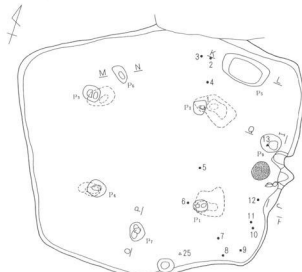


H 204



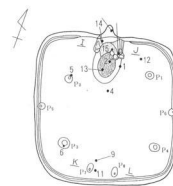
H 441

B



H 502

A2



H 682

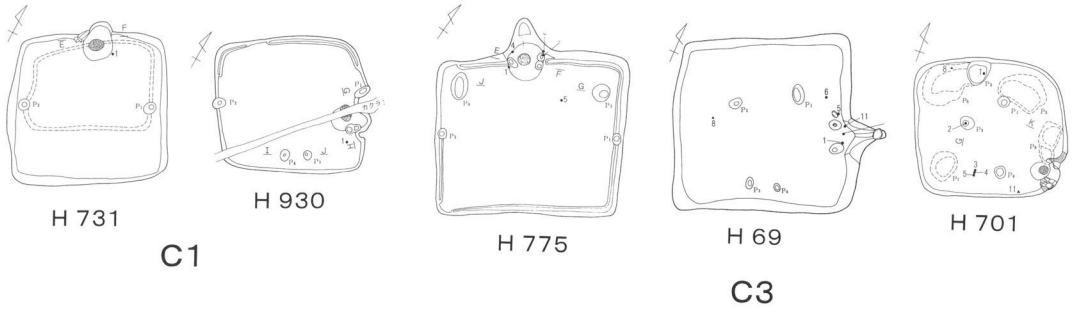
B1

奈良平安時代V期

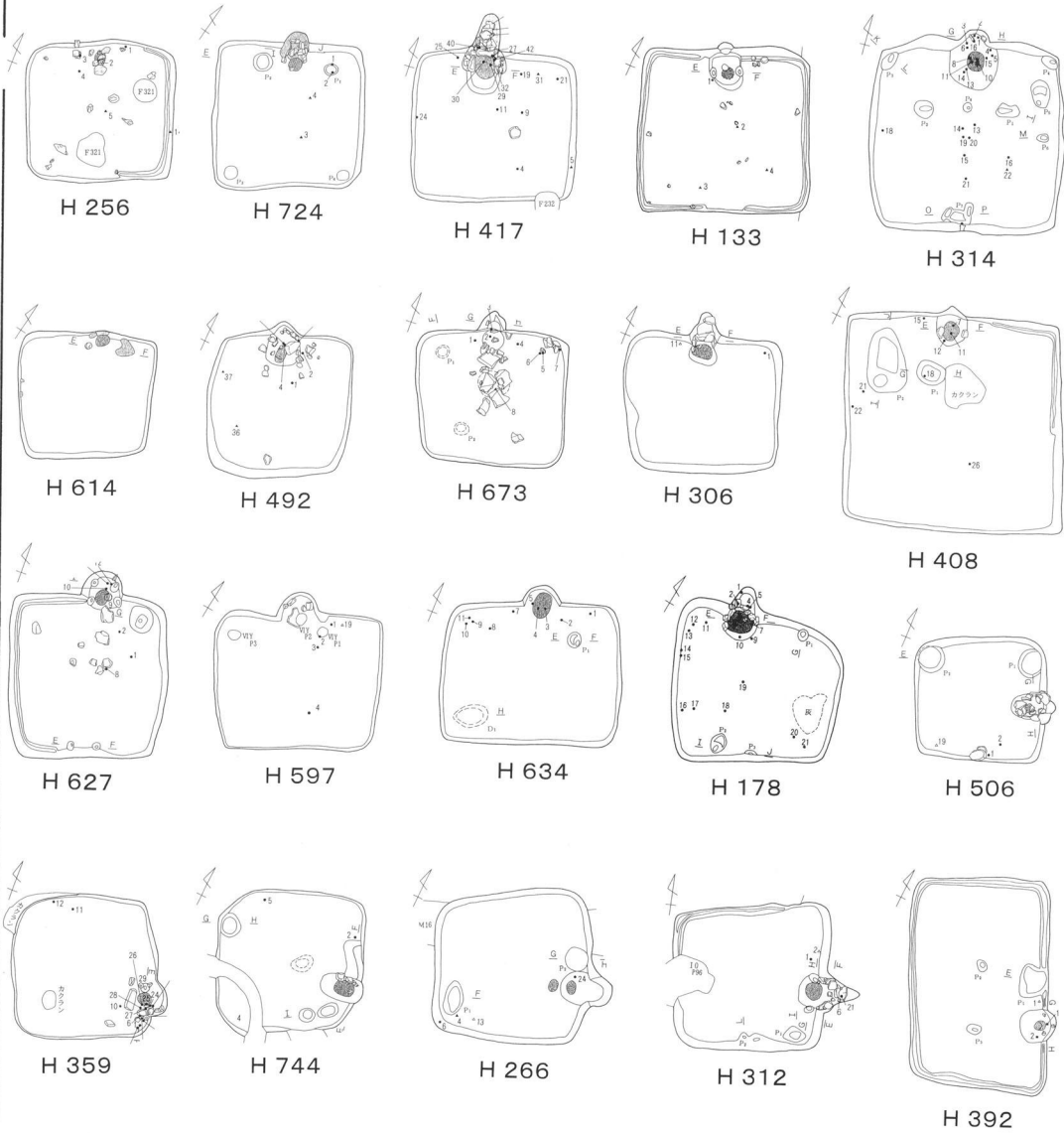
第37図 住居址変遷図14



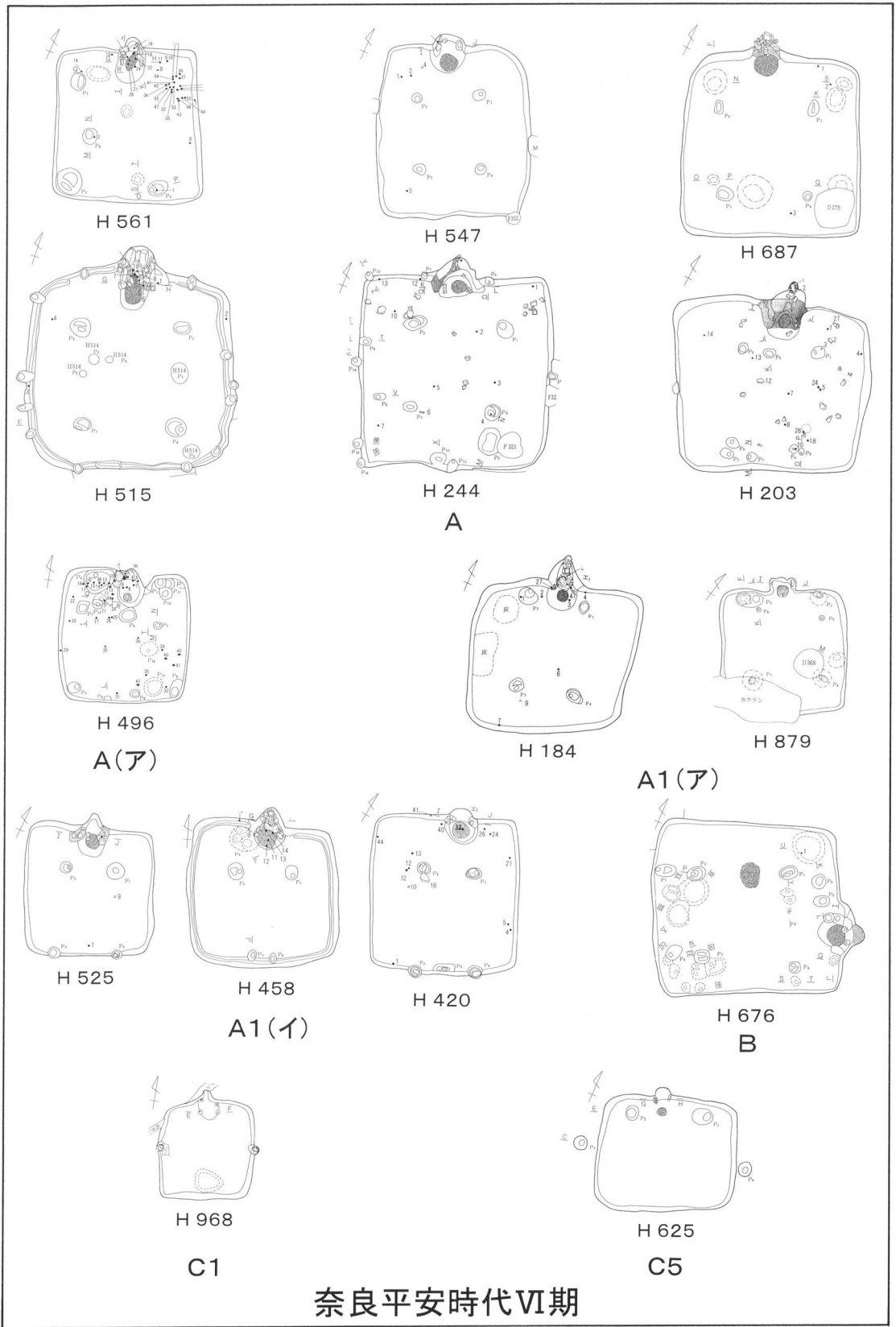
奈良平安時代V期



奈良平安時代VI期



柱穴を持たないもの

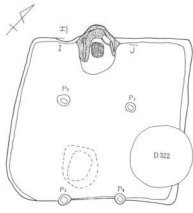


第39図 住居址変遷図16

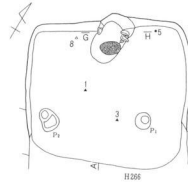


第40図 住居址変遷図17

奈良平安時代Ⅶ期

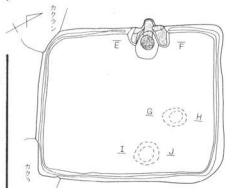


H 828  
A1(イ)

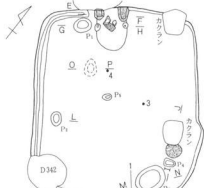


H 237  
C2

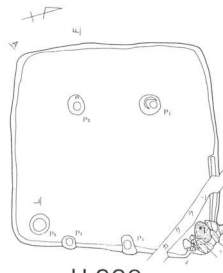
奈良平安時代Ⅷ期



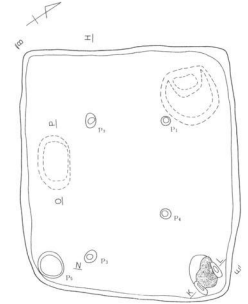
H 922



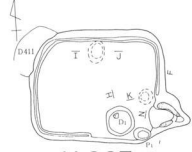
H 854



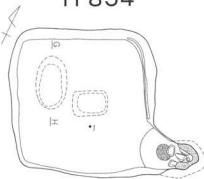
H 900  
A1(イ)



H 841  
A1(ウ)



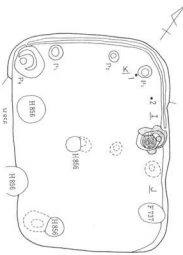
H 927



H 472

柱穴を持たないもの

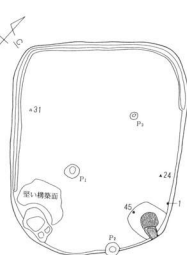
奈良平安時代Ⅸ期



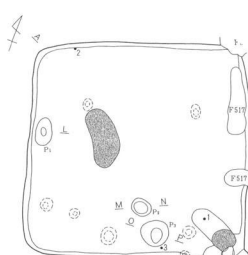
H 857



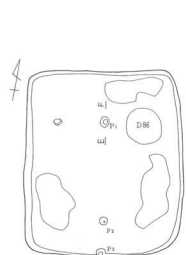
H 563



H 304

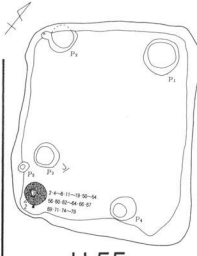


H 681

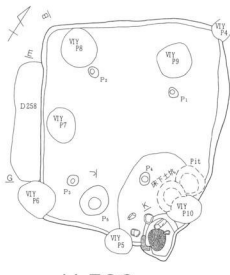


H 224

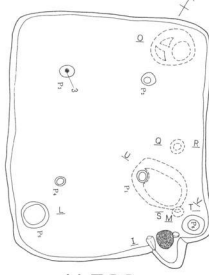
柱穴を持たないもの



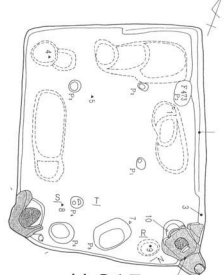
H 55



H 592



H 788

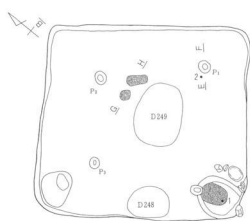


H 615

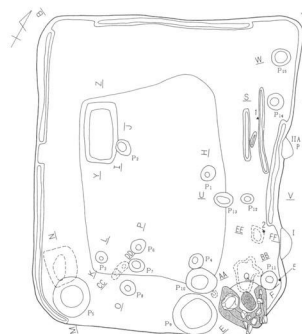
A

第41図 住居址変遷図18

奈良平安時代区期

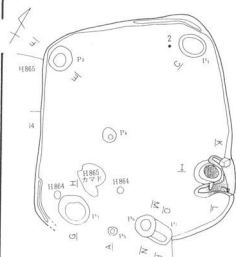


H 579

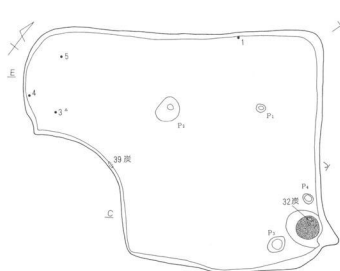


H 613

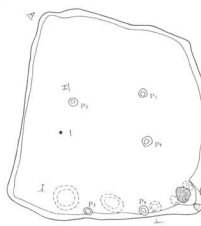
A



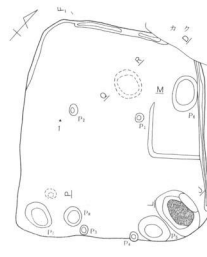
H 862  
A(ア)



H 311  
A(イ)



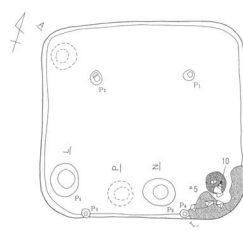
H 837



H 877

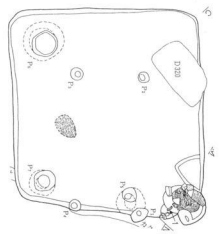


H 822

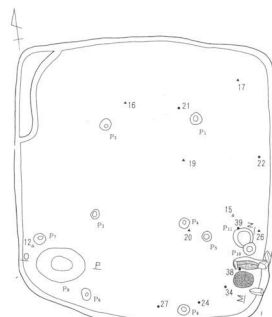


H 567

A1(ア)



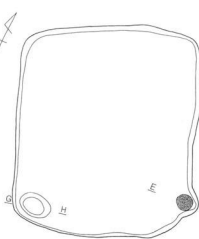
H 804



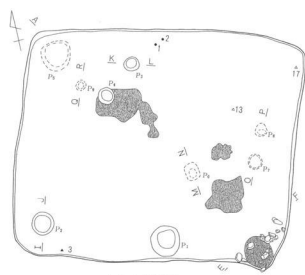
H 323

B

奈良平安時代X期

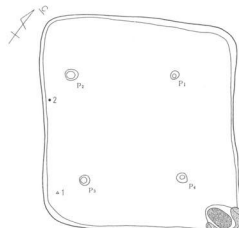


H 115



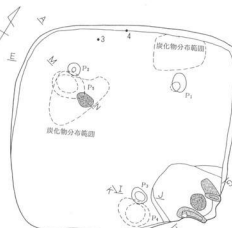
H 560

柱穴を持たないもの



H 604

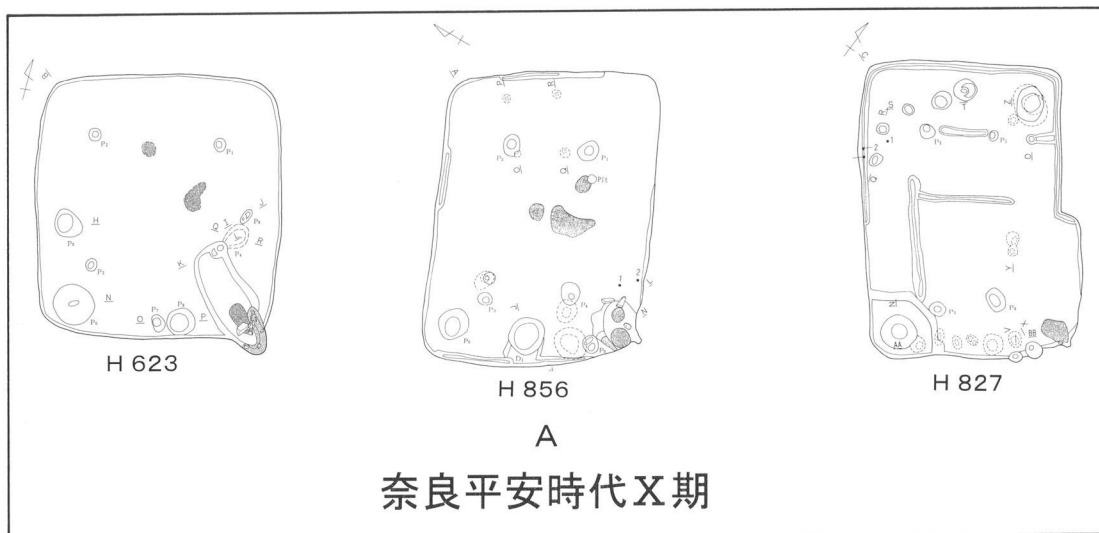
A



H 586

第42図 住居址変遷図19





第43図 住居址変遷図20

形は平行四辺形が主体である。Ⅹ期以降顕在化するカマド以外の住居内床面に認められる焼土が、本期では更に増加する。この焼土は住居址中央付近に認められることが多く、炉である可能性が推測される。H827は間仕切溝、貯蔵穴、カマド部分の張出なども認められる。

○**竪穴住居の構築工程** 本節の最後に古代の竪穴住居の構築について、住居の堀方調査から得られた工程についてふれておく。

佐久地方において、古代の竪穴住居構築工程の復元を試みたのは、堤 隆の『根岸遺跡』（1989 御代田町教育委員会）における考察が唯一と思われる。他には、堀方の形態分析に主眼をおいた岡村秀夫の『栗毛坂遺跡群』（1991（財）長野県埋蔵文化財センター）等がある。

構築工程を把握するためには堀方の調査が不可欠であるが、聖原遺跡の調査においては、初年度は南北・東西トレンチ範囲での堀方の状況確認を基本とし、必要に応じ範囲を拡大した。しかし、この方法では最も肝心な主柱の設置過程が把握できないため、2年目以降は住居を東西・南北に4分割するトレンチに主柱の中心を通る分割線を加え、住居堀方の全面を調査することにした。

このような調査により、確認された本遺跡における竪穴住居の構築工程は以下のとおりである。

1 一建設地に竪穴住居の平面プランが設定され、地面が掘り下げられる。掘り下げは全面が均等な深さになるようには行われぬ。多くの場合、中央はあまり掘り下げられず、主柱部分と出入口部分などが深くなる。

以上はあくまでも原則論であり、実際には、カマドの袖を地山から削り出すものや、全面を均等に掘り下げるもの、ほとんど掘り下げないものなど、時期や規模等により多様である。

堀方は、カマドの位置・規模、柱の位置等の住居空間のレイアウトを地面に投影する行為である。言うなれば設計図面を地面に引いているのである。

\* 周提については聖原では検出できなかった。佐久地方では浅科村『砂原遺跡』で1994年に（財）長野県埋蔵文化財センターの調査で検出された1軒が唯一の事例である。聖原の住居が周提を巡らしていたか否か、全ての住居が周提を持つのか否かは現状では不明である。しかし、上記の『砂原遺跡』においては、平安時代の水田や畑層などの下に埋没していた古墳時代の住居には周提の存在は確認されていない。もともと、住居の廃絶時に周提を削り、廃絶する竪穴住居の埋め戻しに使用したと考えれば矛盾はない。

2 一主柱の位置、深さを調整しながら、下部を埋設固定し、上屋の構造材の懸架を開始する。カマドは、燃烧効率の良い煙道の角度、長さなどに規制された火床面の深さまで多くの場合埋め戻される。（堀方の完掘時にカマドの両袖や支脚にあたる部分には、芯材となる石を埋設固定する穴が掘られるが、必ずしもこの穴に石は埋設されていない場合が多い。堀方時にカマドの規模を決め、必要となる構築材を調達するために行う行為なのだろうか？）

また、出入口が梯子状の施設の場合、梯子の桁もこの時に埋設固定される。

3 一壁材やカマド芯材を設置、固定しながら床面まで埋め戻し、所謂「貼床」を敷設する。粘土を用い、芯材を被覆し、カマドを完成させる。並行し上屋を完成させる。

\*住居があくまでも所謂「穴家（堅穴住居）」である場合を想定しているが、本遺跡には堅穴内に構築された所謂「高屋」を推測させる住居も存在する。その場合構築手順は異なると思われる。

以上の手順と、堤の『根岸遺跡』での手順との最も大きな相違は、いつ主柱を設置するかである。具体的には床面構築後に、埋め戻さず残しておいた予定地（＝結果として柱穴となる）に柱をたてるのか、堀方完掘後に柱を設置し固定しながら埋め戻して床を敷設するのかの違いである。

第43図は、本遺跡H693号住居址の主柱のセクション図である。所謂「柱穴」は認められず、堀方完掘後、主柱を固定しながら埋設した状況が確認できる。無論、すべての住居に当てはまるわけではなく、床を完全に埋め戻し、柱穴を新たに掘削しているものも存在する。『根岸遺跡』のような手順も存在しないとは言いきれない。聖原遺跡の当初の調査方法のように、主柱セクションの調査・記録が実施されていない住居は、構築工程を復元することは不可能である。更に自戒も含め言えるのは、住居床面で検出した柱痕を掘り抜いてしまうと、その部分の土層が消失してしまい、正確性を欠くことになる。掘り足りなければ問題ないが、掘りすぎた場合には取り返しがつかない。これは掘立柱建物址の調査でも同様である。柱痕だけを掘り抜く調査手法に有効性はない。

尚、付編に詳細が掲載してあるが、本遺跡の住居内出土の炭化材の樹種同定では、クヌギ節・コナラ節が最も多く、特にコナラは際だっている。

\*カマド背面に土壁を構築する例が指摘されている。（1997年『遺跡・遺物から何を讀みとるか（I）』帝京大学山梨文化財研究所－変貌する古代堅穴住居像－桐生直彦）本遺跡のカマドは地山をトンネル状にくりぬき、壁外に長くのばす煙道の形態ではなく、群馬県黒井峯遺跡と同様な形態である。おそらく黒井峯のように粘土で構築された煙突状の煙道が屋根から突き出ているものと推測される。

カマドを縦断する土層観察からは、壁外に粘土で構築された煙突のようなものが崩壊した土層が観察される事が多い。この土層はカマドの残存部分と密着していることはないため、住居の廃絶過程において、壁外から倒壊、ないし流入したものと考えられるが、量的には土壁を想定するには無理があり、壁外に立ち上がった煙突の残骸と考えるのが妥当のように思える。また、中世の堅穴建物の例であり、時代が異なるため傍証にすならぬかもしれないが、「金井城」（1991年『金井城跡』佐久市教育委員会）では焼失した堅穴建物の屋根（スサ？を混せて練った土屋根）がレンガ状になり、平面プランより一回り小型の方形に床面に堆積していた。事例の全てが土壁ではなく、屋根の可能性もあるのではないかと？

カマドの構築材に軽石が多用されるのは、浅間山寄りの長野県佐久地方の特徴である。入手しやすく、加工が容易、軽量、耐火性にすぐれ、粘土とも良くなじむ、非の打ち所がない材料である。抽象的なイメージに近いが、時期が下がるにつれ軽石の使用が減少するようにも思われる。

群馬県で発見された黒井峯遺跡、中筋遺跡により古代の堅穴住居の構造、平地式住居の存在等大きな成果があった反面、遺跡の性格や地域性、過去の調査の検討等を軽視し、黒井峯、中筋に適合させようとするかのような動向も見受けられる。

## 第3節 掘立柱建物址

掘立柱建物址は869棟検出された。遺構の形態上、他遺構との重複により認識できない場合や、建て替えを把握するのが難しい等の理由により、実数は堅穴住居址と変わらないものとする。

明確な根拠はないのであるが、堅穴住居址と掘立柱建物址は異なる立地をするわけではなく、あたかも隣接するかのように遺跡の中に存在し、双方ともに、同じ場所に繰り返し建て替えられる状況が見受けられることから、堅穴住居址－1に掘立柱建物址－1という組み合わせが聖原遺跡における基本的な単位と思われる。当然のことながら、堅穴住居址同様に、掘立柱建物址も各時期に帰属させる事が本筋ではあるが、時期の上限・下限は推定可能であるが、確定できるものは少数である。（第15表参照）

検出された掘立柱建物址の中で最も面積が小さいものはF713の3.0㎡、最も大きいものはF512の63.3㎡、平均面積は14.27㎡である。

形態別の数量が最も多いのは、A1－73棟、E1a－68棟、B1－56棟、F1a－39棟、M1F1a－22棟であり、他は20棟以下である。最も単純な形態である桁行1間×梁間1間のA1が最多である。平均面積は5.78㎡であり、最

小のものはF713の3.0㎡、最大のものはF720の11.5㎡である。柱痕径が明らかものは12~28cmであり、他形態と変わらないことから、床面積が小さな本形態は比較的頑丈な建物と言える。本形態を高床の米倉とする説もあるが、根拠が見あたらない。平均5.78㎡の本形態は正方形であれば1辺2.4mであり、本遺跡最大のものでも1辺3.4m弱である。一見すると住居とは考えにくいのであるが、堅穴住居址にも同規模のものは数多く存在し、11.5㎡以下のものは120軒以上存在する。見方を変えて、堅穴住居址の主柱に囲まれた面積を掘立柱建物址に置き換えると、3.4m×3.4mの主柱間を有する堅穴住居址の床面積は30㎡台に達する。

E1aは2間×2間の側柱の形態である。平均面積は13.56㎡であり、最小は8.37㎡、最大は23.98㎡である。

B1は2間×1間のA1の桁行を1間拡大した形態である。平均面積8.57㎡、最小4.12㎡、最大17.87㎡である。

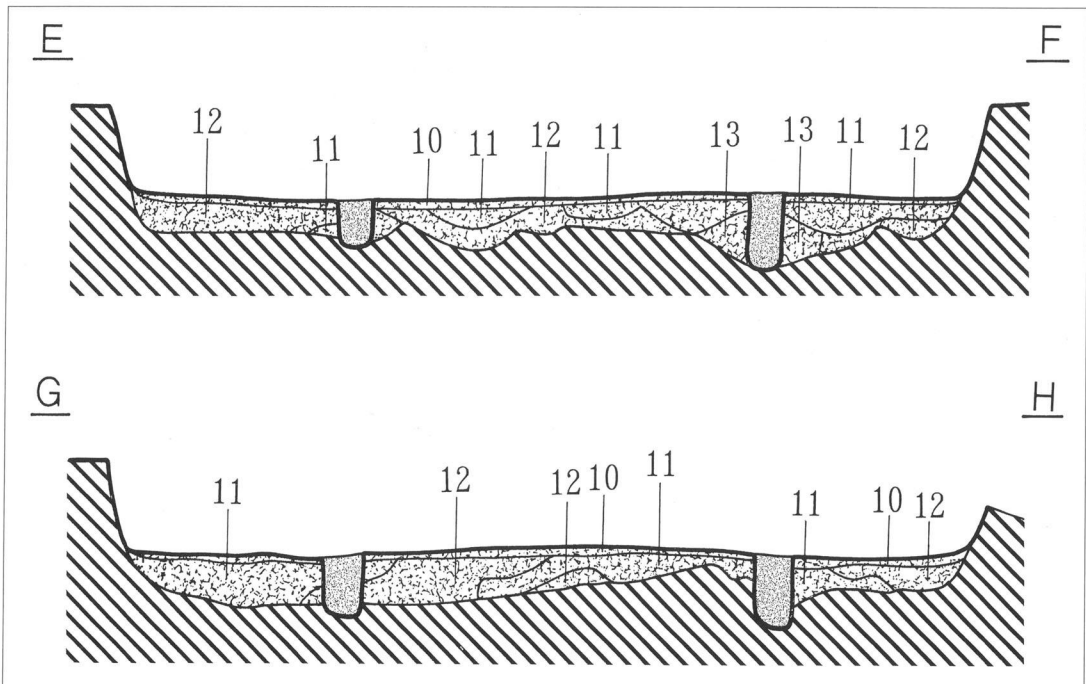
F1aとM1F1a-は3間×2間の側柱形態であり、桁行部分に溝掘が使用されるか否かの違いである。平均面積はF1a-20.98㎡・M1F1a-19.11㎡である。最小はF1a-8.28㎡・M1F1a-13.38㎡、最大はF1a-35.57㎡・M1F1a-27.50㎡である。

おそらく、堅穴住居址同様に時期毎の特徴が形態に反映されているのであろうが、抽出できない。このことは、その性格についても同様である。

しかしながら、形態や出土遺物から性格を推定できるものも僅かではあるが認められる。以下にその概要を記す。

1. 内部や周囲に火床が存在するもので、平地式住居址の可能性を有するもの-F541・F601・F788が該当する。この3棟以外には該当するものは存在しない。火山灰により埋没した『中筋遺跡』では、季節により堅穴住居と平地式住居を住み分けたと想定されており、平地式住居にもカマドが存在する。しかし、通常の埋没をした遺跡では、後の耕作等により、旧地表面が削平されるため、調査時にはカマドやその痕跡は消滅しているというのが、掘立柱建物址からカマドが検出されない理由のひとつとしてあげられている。積極的にこの考えを支持すれば、多くの掘立柱建物址は平地式住居となる。しかし、本遺跡では火床が確認できるのであるから、大きな削平は受けていないとも考えられる。本遺跡では堅穴住居址という呼称を考慮することなく使用してきたため、堅穴住居址に対する平地式住居址という用語を使用した。住居址ではなくとも平地式の土間部分が存在する建物の存在をこの3棟の掘立柱建物址は証明している。その場合、検出された火床はカマドではない別の機能を考える必要もある。

2. 高床の建物であることが想定できるもの-F483は2×3間の側柱形態で、布掘りの堀方を有している。梁間の1辺の中央柱穴部分だけが布掘りではなく単独の堀方になっており、この柱穴の外側の両脇に主柱穴より小口径のPit



第44図 H693主柱セクション図

古墳時代Ⅱ期

遺構名	規 模 (m)						主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
	長軸方向	長軸長	短軸長	壁残高	面積(m <sup>2</sup> )	柱痕径(cm)		位置	構築方法		
H331	N-87°-W	3.44	3.32	0.66	12.3			東中央	粘		
H418	N-4°-E	3.84	3.84	0.40	15.9	16	A				

古墳時代Ⅲ期

遺構名	規 模 (m)						主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
	長軸方向	長軸長	短軸長	壁残高	面積(m <sup>2</sup> )	柱痕径(cm)		位置	構築方法		
H723	N-81°-E	3.20	2.68	0.28	10.2	20	A	北中央	粘		
H543	N-60°-E	3.28	2.84	0.36	11.0		A	北中央	粘		張出
H711	N-18°-W	3.40	3.20	0.60	13.2	16	A	北中央	粘・石		
H335	N-88°-E	3.60	3.52	0.40	13.6	16	A	北中央	粘	有	
H712	N-26°-W	3.44	3.36	0.40	13.6	16	A	北中央	粘・石		
H292	N-63°-E	3.76	3.48	0.44	13.7		A	北中央	地山削出・粘		
H656	N-55°-E	3.60	3.48	0.36	14.7		A	北中央	地山削出・粘・石	有	
H88	N-72°-E	3.80	3.72	0.66	15.4		A	北中央	粘・石		
H102	N-26°-W	3.08	3.80	0.60	16.1	20	A	北中央	粘・石		
H163	N-90°-E	3.92	3.76	0.36	16.5		A	北東寄	粘・石		
H698	N-62°-E	3.88	3.84	0.24	16.5	16	A	北中央	地山削出・粘		
H693	N-73°-E	4.04	3.76	0.48	16.9	20	A	北中央東寄	地山削出・粘・石		
H276	N-84°-E	3.80	3.80	0.48	17.4		A	北中央	粘		
H706	N-78°-E	4.08	3.84	0.44	17.9	20	A	北中央	地山削出・粘・石	有	
H171	N-30°-W	4.12	4.04	0.52	18.2	24	A	北中央	粘	有	南中央出入口
H494	N-5°-W	4.20	3.96	0.52	18.8	12	A	北中央	粘	有	貯蔵穴
H639	N-2°-W	4.16	4.12	0.44	18.8	24	A	北中央	粘・石	有	
H282	N-17°-W	4.16	4.16	0.18	19.1		A	北中央	粘		
H648	N-84°-E	4.40	3.84	0.28	19.3	12	A	北中央	地山削出・粘・石	有	
H295	N-22°-W	4.26	4.20	0.32	19.4	16	A	北中央	粘		
H668	N-24°-W	4.36	4.20	0.40	20.4	20	A	北中央東寄	地山削出・粘	有	貯蔵穴
H122	N-75°-E	4.20	4.12	0.36	21.0		A	北中央	地山削出・粘	有	
H170	N-77°-E	4.64	4.56	0.60	22.8	12	A	北中央	粘・石		
H167	N-73°-E	4.72	4.56	0.52	23.3		A	北中央			張出
H511	N-28°-W	4.64	4.60	0.36	23.5	24	A	北中央	地山削出・粘	有	
H158	N-65°-E	4.92	4.72	0.40	24.8	12	A	北中央	粘・石	有	
H278	N-32°-W	4.92	4.72	0.60	26.8		A	北中央	粘		
H234	N-82°-E	4.92	4.80	0.60	27.0	24	A	北中央	粘・石	有	張出
H187	N-80°-E	5.08	5.00	0.52	27.2	20	A	北中央	粘・石		張出
H280	N-63°-E	5.04	4.96	0.48	28.2	12	A	北中央	地山削出・粘・石		
H347	N-16°-W	5.32	5.16	0.56	28.6	24	A	北中央	地山削出・粘・石		
H388	N-2°-W	5.32	5.12	0.48	28.8	16	A	北中央	地山削出・粘・石		
H267	N-15°-W	5.28	5.20	0.40	29.0	20	A	北中央	粘・石	有	
H640	N-68°-E	5.24	5.04	0.64	29.4		A	北中央	地山削出・粘	有	
H226	N-88°-E	5.40	5.20	0.40	30.1	20	A	北中央	地山削出・粘	有	張出
H456	N-79°-E	5.48	4.72	0.52	31.6		A	北中央	粘	有	
H247	N-54°-E	5.60	5.32	0.54	31.8		A	北中央	粘・石	有	北東角土抗
H232	N-10°-W	5.60	5.32	0.56	32.0	16	A	北中央	粘・石	有	張出
H436	N-9°-W	5.44	5.32	0.64	32.1		A	北中央西寄	粘・石		貯蔵穴
H59	N-75°-E	5.52	5.36	0.60	32.3		A	北中央	地山削出・粘・石		
H741	N-7°-E	5.80	5.76	0.44	36.4	12	A	北中央	粘	有	張出
H457	N-76°-E	6.08	5.76	0.48	41.9		A	北中央	粘・石	有	張出
H700	N-73°-E	6.40	6.36	0.48	43.8	22	A	北中央	粘	有	
H238	N-10°-W	6.64	6.48	0.44	44.0	24	A	北中央	地山削出・粘	有	
H159	N-23°-W	6.60	6.52	0.76	44.9	24	A	北中央	粘	有	
H549	N-13°-W	6.64	6.28	0.36	47.0		A	北中央	粘	有	南中央出入口
H333	N-60°-E	6.92	6.68	0.68	48.9	22	A	北中央	地山削出・粘・石		
H454	N-14°-W	6.72	6.52	0.72	49.0		A	北中央東寄	粘・石	有	
H169	N-87°-E	6.84	6.56	0.40	49.4	24	A	北中央		有	張出
H100	N-13°-W	6.92	6.76	0.60	50.2	16	A	北中央	粘・石		

第3表 時期別住居址属性表1

古墳時代Ⅲ期

遺構名	規 模 (m)						主柱 配置	カ マ ド		周溝	付属施設(張出等)
	長軸方向	長軸長	短軸長	壁残高	面積(m <sup>2</sup> )	柱痕径(cm)		位置	構築方法		
H162	N-85°-E	8.60	7.84	0.48	60.1		A	北中央	石		張出
H373	N-89°-E	4.64	4.52	0.56	22.2	28	A	東中央	粘・石	有	
H649	N-70°-E	3.92	3.92	0.52	15.9	12	A3	北中央西寄	地山削出・粘・石	有	
H647	N-79°-E	4.08	3.88	0.56	18.0	20	A3	北中央東寄	地山削出・粘・石	有	
H650	N-87°-W	4.60	4.24	0.44	21.1	20	A3	北中央東寄	粘・石	有	
H642	N-23°-W	4.68	4.60	0.52	23.2	24	A3	北中央	粘・石	有	
H643	N-10°-W	5.08	4.92	0.64	28.2	28	A3	北中央	地山削出・粘	有	
H638	N-78°-E	5.48	5.44	0.60	33.4	24	A3	北中央	地山削出・粘	有	
H646	N-65°-E	4.00	2.32	0.44	9.6		C2	北中央	粘	有	
H369	N-84°-E	3.80	3.00	0.50	12.3		C2	北中央	粘	有	
H644	N-87°-W	4.12	3.56	0.48	15.6	12	C2	北中央	地山削出・粘	有	南中央出入口
H67	N-70°-E	2.72	1.84	0.52	6.6			北中央	粘		
H208	N-69°-E	2.56	2.08	0.56	6.8			北中央東寄	粘・石		
H705	N-0°-W	2.56	2.12	0.32	6.9						
H101	N-63°-E	2.80	2.32	0.32	7.5			東中央	粘		
H641	N-29°-W	3.48	2.12	0.16	8.2			北東寄	?	有	
H165	N-84°-E	3.84	2.12	0.40	9.1			北東角	地山削り・粘・石	有	
H164	N-84°-E	3.20	2.60	0.32	9.4			北西寄	地山削り・粘	有	
H126	N-72°-E	3.40	2.60	0.48	11.2			北中央東寄	粘・石		
H402	N-88°-E	4.00	2.64	0.60	12.6			東中央南寄	粘		
H269	N-18°-W	4.08	3.80	0.48	16.9			北中央			
H367	N-89°-W	4.72	3.34	0.56	17.5			北東寄	地山削出・粘・石		
H651				0.32	20.0			北中央西寄	地山削出・粘・石	有	
H124	N-46°-W	4.20	4.12	0.36	21.9			北西寄	土器・粘	有	
H284	N-69°-E	4.72	4.56	0.44	25.7						

古墳時代Ⅳ期

遺構名	規 模 (m)						主柱 配置	カ マ ド		周溝	付属施設(張出等)
	長軸方向	長軸長	短軸長	壁残高	面積(m <sup>2</sup> )	柱痕径(cm)		位置	構築方法		
H950	N-63°-E	3.48	3.12	0.40	14.3	12~24	A	北中央	粘・石	有	
H742	N-73°-E	3.72	3.60	0.44	15.6	16	A	北中央	地山削出・粘		
H939	N-55°-E	3.82	3.60	0.48	15.6	12~24	A	東中央	粘	有	
H504	N-78°-E	3.72	3.64	0.56	16.6	16	A	北中央	粘	有	
H917	N-35°-W	4.08	3.72	0.60	18.1	12~20	A	北中央	粘	有	
H924	N-58°-E	4.08	4.08	0.48	18.1	12~16	A	北中央	地山削出・粘・石	有	
H539	N-73°-E	4.08	4.00	0.64	19.0	12	A	北中央東寄	粘	有	南中央出入口
H909	N-64°-E	4.48	3.92	0.80	21.1		A	北中央	地山削出・粘	有	
H815	N-58°-E	4.80	4.24	0.28	22.0	12~20	A	北中央	粘・石	有	
H699	N-22°-W	4.36	4.32	0.48	23.1	12	A	北中央東寄	粘・石		
H952	N-0°-E	4.60	4.48	0.52	23.3	16~24	A	北東寄	粘・石・地山削出	有	
H452	N-83°-E	4.96	4.40	0.72	25.5		A	北中央	石	有	
H493	N-19°-W	4.60	4.20	0.68	28.8		A	北中央	石	有	
H235	N-73°-E	5.88	5.72	0.28	36.7		A	北中央	粘・石	有	南中央出入口
H958	N-41°-W	6.44	5.92	0.52	43.2	12~32	A	北中央	粘・石	有	
H437	N-72°-E	5.52	5.48	0.56	33.6		A(1)?	北中央	粘・石	有	
H479	N-66°-E	4.72	4.68	0.32	24.2	16	A3	北中央	粘・石		
H173	N-64°-E	6.72	6.48	0.52	46.3	20	A3	北東寄	粘	有	
H912	N-62°-E	4.12	4.00	0.48	19.4	24	C2	北中央東寄	粘・石	有	
H206	N-5°-E	2.88	1.84	0.44	6.8						
H918	N-84°-W	2.48	2.32	0.64	7.5			北東寄	地山削出・粘		
H932	N-63°-E	3.00	2.48	0.52	9.0			北東	粘・石・土器	有	
H372	N-47°-E	3.20	2.60	0.42	9.8	14		北中央	粘・石		
H430	N-73°-E	3.16	2.76	0.16	9.8			東中央南寄	粘・石	有	
H955	N-75°-E	3.12	2.76	0.76	10.8			北中央	粘・石	有	
H923	N-26°-E	3.60	3.00	0.52	13.1			北中央東寄	地山削出・粘	有	
H867	N-88°-E	3.40	3.20	0.32	13.7			北中央	粘・石	有	

第4表 時期別住居址属性表2



奈良平安時代Ⅰ期

遺構名	長軸方向	規 模 (m)					主柱配置	カ マ ド		周溝	付属施設(張出等)
		長軸長	短軸長	壁残高	面積(m <sup>2</sup> )	柱径(cm)		位置	構築方法		
H146	N-64°-E	3.24	3.08	0.52	11.8		A	北中央	粘・石		
H618	N-46°-W	3.24	3.04	0.12	12.2	20	A	北中央			
H722	N-70°-E	3.24	3.16	0.64	12.39		A	北中央東寄	粘		南中央出入口
H245	N-45°-E	3.44	3.28	0.48	12.4		A	北中央	粘・石		南東角
H603	N-86°-E	3.44	3.13	0.20	12.6	20	A	北中央	粘・石	有	
H931	N-40°-W	3.44	3.20	0.40	12.7	12~24	A	北中央	粘・石	有	
H113	N-57°-E	3.20	3.12	0.76	13.0	16	A	北中央	粘・石	有	
H839	N-23°-W	3.36	3.28	0.48	13.4	8~20	A	北中央	粘	有	南中央出入口
H192	N-75°-E	3.52	3.36	0.50	13.5	20	A	北中央	粘・石	有	南中央出入口
H114	N-31°-W	3.72	3.60	0.48	15.5		A	北中央	粘・石	有	
H851	N-51°-E	3.84	3.56	0.32	15.6	12~32	A	北中央	粘・石	有	
H356	N-75°-E	4.08	3.56	0.56	16.3	10	A	北中央	粘・石	有	
H236	N-70°-E	3.96	3.76	0.44	17.5		A	北中央	粘	有	南中央出入口
H956	N-18°-W	4.02	3.80	0.60	17.8	12~16	A	北中央	粘		
H853	N-25°-W	3.72	3.68	0.56	18.1	16~20	A	北中央	粘・石	有	南中央出入口
H134	N-60°-E	4.32	4.08	0.64	18.4	12	A	北中央	粘・石	有	
H175	N-77°-E	4.08	4.04	0.56	19.0		A	北中央	粘・石		
H185	N-29°-W	4.20	3.92	0.56	19.0		A	北中央	粘・石		
H366	N-70°-E	4.28	4.12	0.64	19.1	16	A	北中央	粘・石	有	
H222	N-58°-E	4.28	3.80	0.56	19.5	16	A	北中央	粘		
H25	N-24°-E	4.40	4.08	0.84	19.8	16	A	北中央	粘・石	有	
H505	N-68°-E	4.24	3.96	0.72	20.2	72	A	北中央東寄	粘・石	有	
H966	N-62°-E	4.40	4.24	0.36	20.8	12~24	A	北中央東寄	粘	有	南中央出入口
H948	N-70°-E	4.40	4.00	0.40	21.3	24~56	A	北中央	粘	有	南中央出入口
H954	N-68°-E	4.88	3.80	0.40	21.4	16~32	A	北東寄	粘・地山削出	有	
H935	N-42°-W	4.40	4.08	0.40	22.9	16~24	A	北中央	粘	有	
H780	N-43°-W	4.60	4.08	0.28	23.1	22~28	A	北中央西寄	粘・石		南中央出入口
H709	N-70°-W	4.56	4.36	0.64	23.8	8	A	北中央	粘		
H95	N-32°-W	4.64	4.60	0.36	23.9	28	A	北東寄	粘	有	
H947	N-70°-E	4.60	4.32	0.68	24.0	20~32	A	北中央	粘	有	南中央出入口
H353	N-64°-E	4.88	4.56	0.66	24.5	20	A	北中央	粘・石		
H66	N-17°-W	4.72	4.36	0.56	24.6	14	A	北中央	粘・石		
H365	N-66°-E	4.76	4.64	0.68	24.9	16	A	北中央	粘	有	
H734	N-64°-E	4.80	4.60	0.68	27.5	24	A	北中央東寄	粘	有	
H953	N-63°-E	5.28	5.16	0.40	27.6	24~36	A	北中央	粘・石	有	南中央出入口
H717	N-69°-E	5.00	4.88	0.52	31.1		A	北中央	粘	有	
H258	N-60°-E	6.24	5.84	0.48	36.9		A			有	
H131	N-72°-E	6.16	5.96	0.52	37.4	20	A	北中央	粘	有	
H840	N-34°-W	4.60	4.52	0.68	23.9	32~40	A	北中央	粘・石	有	
H936	N-30°-W	3.52	3.20	0.32	13.9	12~20	A1(ア)	北中央東寄	粘	有	南中央出入口
H809	N-68°-E	3.20	2.68	0.20	10.5		A1(ア)	北東角	粘・石	有	南側出入口
H913	N-60°-E	3.80	3.60	0.64	16.1	16~28	A3	北中央東寄	粘・石		南中央出入口
H933	N-38°-W	5.12	4.48	0.68	26.5	12~28	A3	北中央	粘	有	
H540	N-26°-W	5.16	4.96	0.56	29.5	28	A3	北中央	粘・石	有	
H669	N-67°-E	2.04	1.34	0.16	3.4		C2	北中央東寄	粘・石		
H713	N-60°-E	3.24	3.12	0.52	11.9	12	C2	北中央	粘		南出入口
H967	N-52°-E	4.72	3.52	0.28	19.3		C2	北中央	粘・石		
H348	N-67°-E	2.84	2.08	0.56	6.9			北中央	粘・石		
H733	N-68°-E	2.68	2.24	0.48	7.2			北中央	粘・石		
H732	N-75°-E	2.96	2.44	0.44	8.8			北東寄	粘		
H77	N-77°-E	2.80	2.64	0.40	9.5			北東寄	粘・石		
H536	N-57°-E	4.12	2.96	0.68	14.0			北中央東寄	粘・石		南中央出入口

第5表 時期別住居址属性表3

奈良平安時代Ⅱ期

遺構名	規 模 (m)						主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
	長軸方向	長軸長	短軸長	壁残高	面積(m <sup>2</sup> )	柱径径(cm)		位置	構築方法		
H716	N-76°-E	3.20	3.00	0.40	12.0		16	A	北中央	粘・石	
H757	N-33°-W	3.48	3.32	0.40	13.0		12~18	A	北中央東寄	粘・石	有
H771	N-49°-E	3.52	3.52	0.36	14.7		8~12	A	北中央	粘・石	
H362	N-14°-W	3.52	3.48	0.72	15.2		32	A	北中央	粘・石	有
H79	N-17°-W	3.68	3.40	0.52	15.5		20	A	北中央	粘	有
H480	N-78°-E	3.96	3.52	0.56	15.6		12	A	北中央	粘・石	有
H144	N-59°-E	3.84	3.36	0.52	15.7		20	A	北中央	粘・石	
H657	N-31°-W	3.68	3.52	0.68	15.8		24	A	北中央	粘・石	
H48	N-12°-W	3.96	3.80	0.96	16.0			A	北中央	粘	
H308	N-63°-E	3.76	3.76	0.52	16.2			A	北中央	粘	有
H242	N-60°-E	3.96	3.72	0.56	16.8		10	A	北中央	粘	
H431	N-64°-E	3.92	3.76	0.56	16.9		16	A	北中央東寄	粘	南中央出入口
H499	N-73°-E	3.92	3.88	0.56	17.4		20	A	北中央	粘・石	有
H50	N-48°-E	4.00	3.88	0.68	17.6			A	北中央	粘	有
H942	N-36°-W	3.92	3.80	0.48	17.7		12~28	A	北中央	粘・石	南中央出入口
H57	N-29°-W	4.24	4.12	0.64	18.9		16	A	北中央	粘	有
H756	N-33°-W	4.00	3.52	0.56	18.9		8~20	A	北中央?	粘・石	南中央出入口
H530	N-70°-E	4.00	4.00	0.52	19.2		20	A	北中央	粘	有
H221	N-61°-E	4.24	3.70	0.40	19.5		28	A	北中央		有
H56	N-55°-E	4.20	4.08	0.66	19.5			A	北中央	粘・石	
H82	N-16°-W	4.20	4.00	0.60	19.6			A	北中央西寄	粘・石	有
H868	N-53°-E	4.20	4.16	6.40	19.8		20~24	A	北中央	粘	南中央出入口
H800	N-60°-E	4.40	3.68	0.48	20.2		10~12	A	北中央		南中央出入口
H772	N-37°-W	4.44	4.04	0.04	20.3			A	北中央	粘	有
H589	N-34°-W	4.04	3.80	0.40	20.5		16	A	北中央	粘・石	
H63	N-11°-W	4.24	3.56	0.80	21.5		20	A	北中央	粘	
H581	N-57°-E	4.92	3.92	0.36	22.7		16	A	北中央	粘・石	
H96	N-22°-W	4.72	4.72	0.68	22.8		16	A	北中央	粘・石	
H843	N-31°-W	4.64	4.52	0.52	24.4		20~36	A	北中央	粘・石	有
H860	N-48°-E	4.72	4.40	0.60	24.9		16~24	A	北中央	粘	有
H570	N-60°-E	5.04	5.00	0.36	28.2		24	A	北中央	粘	有
H847	N-52°-E	5.24	4.80	0.48	30.2		16~28	A	北中央	粘・石	有
H83	N-23°-W	5.40	5.08	0.72	31.7			A	北中央	粘・石	南中央出入口
H850	N-28°-W	5.92	5.52	0.44	35.3			A	北中央	粘・石	有
H508	N-63°-E	6.04	5.48	0.68	37.1		16	A	北中央	粘・石	有
H557	N-48°-E	6.40	6.16	0.52	49.7		16	A	北中央	粘	有
H773	N-33°-W	4.36	4.20	0.32	22.0		24~32	A.	北中央	粘・石	有
H793	N-65°-E	3.60	3.56	0.64	14.7		16~24	A1(ア)	北中央	粘・石	有
H370	N-79°-E	3.72	3.68	0.36	15.5			A1(ア)	北中央	粘・石	
H481	N-11°-W	3.44	3.28	0.64	14.0			A1(ウ)	北中央	粘・石	
H554	N-48°-E	5.76	5.60	0.56	36.7		28	A3	北中央	粘	有
H462	N-15°-W	3.76	3.68	0.52	15.8		0.2	B			
H349	N-29°-W	4.28	3.72	0.68	17.5		20	B	北中央	土器・粘・石	
H677	N-22°-W	7.92	7.48	0.80	66.4		20	B4	北中央	粘・石	南中央出入口、張出
H520	N-67°-E	2.64	2.04	0.36	7.1			C2	北中央	粘	有
H168	N-63°-E	3.60	2.60	0.52	10.9			C2	北西寄		
H76	N-20°-W	3.52	3.48	0.68	13.9		16	C2	北中央	粘・石	
H200				0.28	6.1				北中央	土器	有
H376	N-89°-E	2.68	1.80	0.26	6.2				東中央	粘・石	
H381	N-81°-E	2.56	2.04	0.40	7.0				東北寄	地山削出	
H65	N-83°-E	2.72	2.44	0.64	7.8				北中央東寄	粘	
H293	N-37°-W	2.72	2.48	0.42	8.0						
H786	N-57°-E	2.80	2.36	0.28	8.1				北東寄	粘	西北に張出有
H89	N-76°-W	3.20	2.76	0.48	9.6				北中央	粘	
H596	N-42°-W	2.92	2.80	0.12	9.7				北中央	粘・石	
H62	N-21°-W	2.80	2.60	0.48	10.0				北中央	粘・石	

第6表 時期別住居址属性表4

奈良平安時代Ⅱ期

遺構名	長軸方向	規模 (m)				柱痕径 (cm)	主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
		長軸長	短軸長	壁残高	面積 (㎡)			位置	構築方法		
H870	N-34°-W	3.16	3.04	0.72	11.2			北東寄	粘		南中央出入口
H51	N-16°-W	3.08	3.00	0.60	11.6			北中央	粘		
H343	N-25°-W	3.52	3.32	0.56	12.9			北中央	粘・石		
H940	N-57°-E	3.36	3.20	0.98	13.4			北中央東寄	粘・石		南中央出入口
H328	N-73°-E	3.70	3.40	0.64	14.5						
H189	N-13°-W	4.34	4.28	0.44	20.8	22		北中央	粘・石	有	
H72	N-27°-W	5.60	5.24	0.68	35.1						

奈良平安時代Ⅲ期

遺構名	長軸方向	規模 (m)				柱痕径 (cm)	主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
		長軸長	短軸長	壁残高	面積 (㎡)			位置	構築方法		
H270	N-67°-E	3.44	3.32	0.40	14.2		A	北中央	粘	有	
H111	N-17°-W	3.56	3.52	0.48	15.4		A	東中央南寄			
H544	N-40°-W	3.88	3.56	0.56	16.4		A	北中央	粘		南中央出入口
H216	N-70°-E	3.84	3.60	0.52	16.4	20	A	北中央	粘		南中央出入口
H105	N-63°-E	3.88	3.76	0.64	17.0	20	A	北中央東寄	土器・粘		南中央出入口
H73	N-17°-W	4.08	3.92	0.56	17.8		A	北中央	土器・粘		
H645	N-17°-W	4.24	3.68	0.60	17.9	20	A	北中央	粘・石		南中央出入口
H908	N-56°-E	4.00	4.00	0.28	19.4	16	A	北中央西寄	粘	有	
H155	N-30°-W	4.28	3.84	0.68	19.7	16	A				
H389	N-25°-W	4.40	4.36	0.36	20.0	16	A	北中央		有	南中央出入口
H501	N-75°-E	3.76	3.64	0.52	17.6	16	A	東中央	粘・土器		
H148	N-27°-E	4.56	4.24	0.74	20.4	28	A	北中央	粘	有	南中央出入口
H382	N-1°-W	4.52	4.04	0.24	20.6		A	北中央	粘・石		
H605	N-63°-E	4.00	3.92	0.40	20.7		A	北中央	粘・石		
H127	N-24°-W	4.56	4.12	0.34	21.6	24	A	北中央	土器・粘	有	南中央出入口
H172	N-17°-W	4.72	4.08	0.36	21.6	20	A	北中央	粘・石		
H541	N-52°-E	4.36	4.24	0.36	21.9	24	A	北中央	粘・石		
H619	N-40°-W	4.56	4.40	0.28	22.1	24	A	北中央西寄	粘	有	
H318	N-64°-E	4.48	4.04	0.24	22.4	20	A	北中央	粘		
H842	N-59°-E	4.64	4.40	0.72	22.4	16~32	A	北中央	粘・石・土器		南中央出入口
H326	N-22°-W	4.76	4.36	0.52	24.6	28	A	北中央	粘・石		南中央出入口
H532	N-75°-E	4.72	4.44	0.60	24.7	20	A	北中央	粘	有	
H214	N-27°-W	5.08	4.32	0.72	25.1	16	A	北中央	粘	有	
H778	N-31°-W	4.92	4.68	0.36	26.0	8~20	A	北中央	粘・石		南中央出入口
H633	N-21°-W	4.76	4.72	0.48	26.3	24	A	北中央	粘・石・土器		
H220	N-14°-W	4.92	4.80	0.52	27.1		A	北中央東寄	粘	有	
H451	N-78°-E	4.96	4.64	0.56	27.7		A	北中央			
H401	N-24°-W	4.96	4.86	0.56	29.6		A	北中央	粘・石		
H678	N-19°-W	5.28	4.92	0.56	30.3	20	A	北中央	粘		
H612	N-68°-E	2.68	2.40	0.28	7.8	12	A1(ア)	北中央	粘・石		
H728	N-2°-W	4.08	3.92	0.52	18.5	16	A1(ア)	北中央西寄	粘・石・土器		
H568	N-64°-E	4.20	3.88	0.52	18.6	32	A1(ア)	北中央	粘	有	貯蔵穴
H364	N-75°-E	4.40	4.00	0.80	20.2	28	A1(ア)	北中央	粘		
H774	N-63°-E	4.44	4.16	0.48	22.1	12~16	A1(ア)	北中央	粘		南中央出入口
H718	N-23°-W	7.56	6.80	0.56	55.2	20	B4	北中央	粘・石	有	南出入口
H738	N-77°-E	3.16	2.72	0.64	11.3		C1	北西寄	石	有	
H938	N-10°-W	3.76	3.68	0.36	17.9		C1	北中央東寄	粘・石		
H252	N-25°-W	6.24	5.96	0.52	36.3		D	北中央	粘		
H265	N-68°-E	2.80	2.68	0.48	8.6			北中央	粘		
H259	N-31°-W	3.00	2.56	0.40	9.4			東中央	石		
H104	N-55°-E	3.04	2.88	0.48	10.3			北中央	土器・石	有	
H831	N-62°-E	3.12	2.72	0.28	10.6			北中央	粘・石		
H87	N-58°-E	3.32	2.96	0.56	10.8			北中央	土器・粘・石		
H135	N-62°-E	3.76	2.52	0.64	10.8			東南寄	粘・石		
H215	N-77°-E	3.16	2.80	0.44	10.8						

第7表 時期別住居址属性表5

奈良平安時代Ⅲ期

遺構名	規 模 (m)						主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
	長軸方向	長軸長	短軸長	壁残高	面積(m <sup>2</sup> )	柱痕径(cm)		位置	構築方法		
H487	N-88°-E	3.08	3.04	0.52	11.2			北中央	粘		
H107	N-54°-E	3.52	2.64	0.68	11.9			北中央	土器・粘・石		南中央出入口
H670	N-28°-W	3.68	3.60	0.32	16.1			北中央東寄	粘・石		
H279	N-59°-E	4.36	3.56	0.46	17.6			北東寄	粘・石		
H71	N-26°-W	4.40	4.16	0.68	21.4						

奈良平安時代Ⅳ期

遺構名	規 模 (m)						主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
	長軸方向	長軸長	短軸長	壁残高	面積(m <sup>2</sup> )	柱痕径(cm)		位置	構築方法		
H805	N-41°-W	2.88	2.84	0.40	10.5	16	A	北東寄	粘・石		南中央出入口
H495	N-64°-E	4.00	3.00	0.44	14.3		A	北中央東寄	石・土器	有	
H346	N-20°-W	4.00	3.16	0.48	14.8	20	A	北中央	粘・石		
H584	N-38°-W	3.52	3.44	0.32	15.2		A	北中央			
H934	N-17°-W	3.92	3.68	0.24	15.7		A	北中央	粘		南中央出入口
H424	N-9°-W	4.08	3.76	0.44	15.9		A	北中央	地山削り・粘		
H697	N-22°-W	3.72	3.60	0.52	16.0		A	北中央	粘		
H90	N-20°-W	4.08	3.66	0.68	17.1		A				
H152	N-67°-E	4.48	3.40	0.52	17.4	12	A	北中央	土器・粘・石	有	
H692	N-70°-E	4.24	3.60	0.40	18.7	0.2	A	北中央	粘・石		南中央出入口
H123	N-24°-W	4.20	3.80	0.52	19.3		A	北中央	土器		
H60	N-84°-E	4.44	3.92	0.60	20.6		A	北中央	土器・粘・石		
H914	N-60°-E	4.44	3.76	0.12	20.9	16~24	A	北中央	石		
H830	N-65°-E	4.88	4.04	0.12	21.9		A	北中央	石	有	南中央出入口
H878	N-33°-W	4.56	4.16	0.04	21.9	28	A	北中央	粘・石	有	
H881	N-30°-W	4.52	4.08	0.16	21.9	16~28	A	北中央	石		南中央出入口
H429	N-73°-E	4.60	4.16	0.64	22.1	20	A	北中央	粘・石	有	
H569	N-26°-W	4.56	4.52	0.48	23.0	16	A	北中央	粘・石	有	南中央出入口
H537	N-29°-W	5.00	4.04	0.44	24.3	16	A	北中央	粘・石		南中央出入口
H714	N-24°-W	4.72	4.40	0.64	24.5	20	A	北中央	粘		南中央出入口
H545	N-28°-W	4.64	4.60	0.36	24.9	28	A	北中央	粘	有	貯蔵穴
H387	N-2°-W	5.08	4.56	0.36	25.4	16	A	北中央	粘・石		南中央出入口
H632	N-23°-W	4.76	4.64	0.32	25.7	16	A	北中央	粘	有	
H329	N-76°-E	5.08	4.48	0.52	27.7	14	A	北中央	粘・石	有	南中央出入口
H575	N-25°-W	5.56	4.72	0.36	30.6		A			有	南中央出入口
H250	N-62°-E	6.24	6.04	0.56	43.4		A	北中央	粘・石		
H112	N-19°-W	3.92	3.80	0.76	18.0		A(イ)?	北中央東寄			
H125	N-20°-W	4.56	4.44	0.64	25.1		A(工)?	北中央	粘		
H582	N-52°-E	2.36	2.12	0.28	6.4		A1(ア)	北中央	石		
H566	N-68°-E	3.04	3.00	0.48	10.8	24	A1(ア)	北中央	粘	有	南中央出入口
H911	N-68°-E	3.20	3.04	0.40	11.7	16~24	A1(ア)	北中央	?	有	南中央出入口
H384	N-60°-E	3.84	2.76	0.40	12.7		A1(ア)	北中央	土器・粘・石		
H363	N-90°-E	4.12	3.80	0.60	17.3	20	A1(ア)	北中央	粘・石	有	南中央出入口
H118	N-63°-E	4.48	4.24	0.48	22.4		A1(ア)	北中央	粘・石	有	
H690	N-60°-E	2.76	2.32	0.40	7.9	16	A1(工)	北中央	粘・石		
H526	N-68°-E	3.36	2.72	0.60	11.7	20	A1(工)	北中央	粘		南中央出入口
H823	N-31°-W	3.80	3.76	0.48	16.7	8~20	A1(工)	北中央	粘・石		
H255	N-61°-E	4.00	3.32	0.50	14.9		A1ア	北中央	石		
H177	N-68°-E	4.64	4.20	0.64	22.4	12	A1ア	北中央	粘・石		南中央出入口
H198	N-69°-E	3.80	3.56	0.68	16.3		B1	北中央	粘・石		南中央出入口
H527	N-22°-W	4.12	4.12	0.32	19.4		B1	北中央東寄	粘		
H795	N-61°-E	3.92	3.44	0.40	16.6	12~20	B3	北中央	粘・石		
H715	N-72°-E	4.20	3.76	0.40	20.2	16	B3	北中央	粘・石		南出入口
H305	N-76°-E	3.04	2.88	0.32	10.2		C1	北中央		有	
H523	N-71°-E	2.76	2.28	0.12	7.7		C1	北中央	?		
H816	N-30°-W	3.16	2.92	0.36	11.6	10~16	C1	東南寄	粘・石	有	

第8表 時期別住居址属性表6

奈良平安時代Ⅳ期

遺構名	長軸方向	規模 (m)					主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
		長軸長	短軸長	壁残高	面積 (㎡)	柱径 (cm)		位置	構築方法		
H907	N-57°-W	3.28	3.04	0.32	12.5		C1	北中央東寄	粘・石・土器		
H826	N-52°-E	4.00	3.12	0.12	15.3	4~16	C1	北中央	粘・石	有	南中央出入口
H760	N-42°-W	3.32	2.96	0.28	12.1		C1?	北中央	粘・石		
H949	N-75°-E	3.04	2.88	0.48	10.2	12	C2	北中央	粘・石	有	南中央出入口
H790	N-53°-E	3.72	2.56	0.16	11.6		C2	北東寄	石		
H591	N-33°-W	3.20	3.04	0.36	12.3		C2	北中央	粘・石		
H117	N-58°-E	3.36	3.24	0.40	12.4		C2				
H108	N-55°-E	3.60	3.36	0.56	14.8		C2	北中央			
H558	N-60°-E	3.68	3.08	0.20	15.1	12	C2	北中央	粘・石		
H91	N-63°-E	3.16	2.04	0.52	6.3			北中央	粘	有	
H199	N-57°-E	2.32	2.30	0.40	6.4						
H477	N-82°-E	2.92	1.92	0.40	6.9			北中央	粘・石・土器		
H320	N-19°-W	2.56	2.40	0.20	7.3			北中央			
H297	N-69°-E	2.72	2.28	0.60	7.7			北中央			
H846	N-60°-E	2.60	2.48	0.44	8.1			北中央	?		
H219	N-58°-E	2.72	2.60	0.60	8.9			北中央東寄	粘・石		
H383	N-57°-E	3.00	2.44	0.36	9.0			東中央	土器・石		
H294	N-30°-W	2.88	2.60	0.66	9.1			北中央	土器・粘・石		
H342	N-65°-E	3.08	2.68	0.48	9.2			北中央	粘・石		
H920	N-54°-E	3.12	2.44	0.44	9.2			北中央	?		
H887	N-57°-E	3.04	2.44	0.28	9.4			北中央	粘・石		南中央出入口
H844	N-60°-E	2.96	2.64	0.40	9.5			北中央西寄	粘・石	有	南側出入口
H473	N-31°-E	2.92	2.48	0.32	9.8			北中央			
H710	N-75°-E	3.12	2.52	0.40	9.8			北中央東寄	粘		
H327	N-78°-E	3.52	2.36	0.40	9.9			東南寄	石		
H121	N-60°-E	3.60	2.40	0.64	10.0			北中央東寄	粘		
H166	N-16°-W	2.96	2.52	0.36	10.1						
H301	N-59°-E	3.32	2.76	0.36	10.3			北中央	粘・石	有	南中央出入口
H621	N-74°-E	3.20	2.60	0.16	10.4						南中央出入口
H352	N-77°-E	3.10	2.92	0.54	10.6			北中央	粘・石		
H746	N-20°-W	3.04	2.92	0.32	10.6			北中央東寄	石		
H622	N-78°-E	3.32	2.64	0.18	10.7			北中央	粘・石		
H475	N-89°-E	3.44	2.72	0.28	11.1			北中央	粘・石	有	
H325	N-74°-E	3.12	3.08	0.30	11.6			北中央	石		
H782	N-24°-W	2.88	3.12	0.32	11.9			北東寄	粘・石		
H268	N-60°-E	3.60	2.92	0.32	12.2			北中央	粘		
H797	N-38°-W	3.04	2.80	0.44	12.2			北中央	?		
H109	N-66°-E	3.28	2.98	0.48	12.4			北中央	粘・石		
H825	N-39°-W	3.52	3.40	0.36	14.1			北中央	粘・石		南中央出入口
H139	N-29°-W	3.60	3.40	0.48	14.1			北中央	石		
H620	N-70°-E	3.64	3.24	0.32	14.5			北中央		有	
H577	N-53°-E	3.80	3.40	0.16	15.1			北中央	粘・石		
H729	N-31°-W	3.68	3.48	0.12	15.3						
H281	N-61°-E	4.00	3.52	0.36	16.8			北中央	粘・石		
H52	N-24°-W	4.20	3.92	0.64	17.6			北中央	粘	有	

奈良平安時代Ⅴ期

遺構名	長軸方向	規模 (m)					主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
		長軸長	短軸長	壁残高	面積 (㎡)	柱径 (cm)		位置	構築方法		
H138	N-60°-E	3.16	2.80	0.70	10.0		A	なし			
H225	N-16°-W	3.28	3.20	0.40	12.3		A	北中央	粘・石		南中央出入口
H628	N-74°-E	3.88	3.68	0.44	17.2	12~24	A	北中央	粘	有	南中央出入口
H585	N-53°-E	4.00	3.72	0.28	17.6		A	北中央	粘・石		
H142	N-30°-W	4.20	3.84	0.54	17.7		A	北中央	石	有	
H513	N-30°-W	4.00	3.92	0.32	18.9		A	北中央	粘・石		

第9表 時期別住居址属性表7



奈良平安時代V期

遺構名	規 模 (m)						主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
	長軸方向	長軸長	短軸長	壁残高	面積 (㎡)	柱痕径 (cm)		位置	構築方法		
H548	N-37°-W	4.04	3.80	0.48	19.2	16	A	北中央西寄	粘・石		
H587	N-26°-W	4.28	4.08	0.44	19.3		A	北中央	石		
H427	N-13°-W	4.48	3.44	0.48	19.7	16	A	北東寄	土器・石		
H845	N-17°-W	4.08	4.00	0.36	20.4	8	A	北中央	石		
H658	N-20°-W	4.40	4.36	0.40	20.9		A	北中央西寄	粘・石		南中央出入口
H707	N-74°-E	4.24	4.00	0.20	21.0	10	A	北中央	粘・石		
H606	N-22°-W	4.24	3.84	0.28	21.0	16	A	北中央	粘	有	南中央出入口
H556	N-65°-E	4.44	4.08	0.16	21.6		A	北中央	石		
H75	N-14°-W	4.28	3.92	0.76	21.6	24	A	北中央	粘・石		
H565	N-22°-W	4.44	3.88	0.24	22.1		A	北中央東寄	石		
H572	N-23°-W	4.56	4.28	0.28	23.3	20	A	北中央東寄	粘・石		
H190	N-20°-W	4.96	4.48	0.40	24.2		A	北中央	土器・粘・石	有	南中央出入口
H449	N-17°-W	4.88	4.52	0.6	25.3		A	北中央	石		
H663	N-21°-W	4.80	4.56	0.28	25.4		A	北中央西寄	石		南中央出入口
H137	N-25°-W	5.16	4.72	0.60	27.6	12	A	北中央	粘		
H752	N-26°-W	5.16	4.52	0.40	27.9	16~24	A	北中央東寄	石・土器		
H336	N-14°-W	5.00	4.92	0.52	28.5		A	北中央	粘・石		
H193	N-26°-W	5.40	4.60	0.6	28.5	20	A	北中央			
H529	N-30°-W	5.72	5.04	0.44	32.5	20	A	北中央	粘・石	有	南中央出入口
H684	N-24°-W	5.52	4.96	0.68	33.2		A	北中央	地山削出・粘		南中央出入口
H761	N-55°-E	5.72	5.08	0.36	35.1	16~20	A	北中央	石		
H702	N-76°-E	2.84	2.32	0.44	6.9		A(ア)	北中央	石		
H197	N-18°-W	4.34	4.16	0.56	21.1		A(イ)	北中央	土器・粘・石		
H685	N-22°-W	5.64	5.48	0.44	35.2	16	A(イ)	北中央	石		
H635	N-80°-E	6.12	5.68	0.28	41.3		A(イ)	北中央	粘・石		南中央出入口
H302	N-69°-E	3.44	3.28	0.38	12.5		A(ウ)?	北中央	石	有	
H309	N-15°-W	5.68	5.36	0.60	32.2		A(オ)	北中央	土器	有	床下土抗
H555	N-33°-W	4.32	4.04	0.32	22.3	10	A?	北中央	石		
H317	N-63°-E	3.64	3.32	0.44	13.9	10	A1(ア)	北中央	粘・石		南中央出入口
H332	N-60°-E	3.60	3.46	0.56	14.1		A1(ア)	東中央	土器・粘		
H965	N-70°-E	3.60	2.96	0.36	14.3	16~20	A1(ア)	北東寄	石		南中央出入口
H838	N-58°-E	3.40	3.32	0.44	15.3	16~24	A1(ア)	北中央	粘		
H748	N-72°-E	3.64	3.44	0.4	15.8	12	A1(ア)	北中央西寄	?		
H730	N-68°-E	3.88	3.48	0.38	16.4	12	A1(ア)	北中央	石	有	南中央出入口
H599	N-57°-E	4.20	4.08	0.28	20.2		A1(ア)	北中央	石		
H153	N-24°-W	4.88	4.24	0.40	22.5	16	A1(ア)	北中央	粘・石	有	
H829	N-59°-E	3.40	3.32	0.20	13.9	12~20	A1(イ)	北中央	石	有	南中央出入口
H660	N-74°-E	3.72	3.36	0.48	15.2		A1(イ)	北中央西寄	粘		南中央出入口
H781	N-36°-W	3.60	3.40	0.20	15.4	20	A1(イ)	北中央	?		南中央出入口
H354	N-72°-E	4.20	3.30	0.48	15.8		A1(ウ)	北中央	粘		
H848	N-68°-E	4.08	4.00	0.48	19.8	20	A2	北中央	粘・石		南中央出入口
H395	N-21°-W	4.80	4.60	0.44	26.1	20	A2	北中央	石		
H502	N-72°-E	5.36	3.96	0.60	31.4		A2(イ)	東中央	地山削出・石		
H24	N-68°-E	4.64	4.20	0.68	21.8	28	A2イ	北中央	石		
H136	N-60°-E	3.40	2.28	0.72	8.9		B	北中央	粘・石		
H120	N-72°-E	4.24	3.80	0.56	19.2		B	北中央西寄	粘	有	
H204	N-79°-E	4.20	3.92	0.56	20.3	20	B	北中央	土器・粘・石		南壁出入口柱有
H441	N-14°-W	5.92	4.20	0.48	30.2		B	北中央	石		D-1
H682	N-15°-W	2.80	2.64	0.32	9.9		B1	北中央	粘・石	有	南出入口
H916	N-22°-W	2.80	2.72	0.24	9.3		C1	北中央東寄	石	有	南中央出入口
H930	N-58°-E	2.92	2.56	0.12	9.4		C1	東中央南寄	石	有	南中央出入口
H731	N-65°-E	3.16	3.00	0.36	11.5	12	C1	北中	石		
H775	N-54°-E	3.88	3.24	0.26	14.5		C1	北中央	粘	有	
H652	N-15°-W	3.68	3.64	0.32	14.8	16	C1	北中央西寄	石		
H701	N-71°-E	2.72	2.68	0.20	10.1	12	C3	東南角	粘・石		

第10表 時期別住居址属性表 8

奈良平安時代V期

遺構名	長軸方向	規模 (m)					主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
		長軸長	短軸長	壁残高	面積 (㎡)	柱径 (cm)		位置	構築方法		
H69	N-27°-W	3.64	3.60	0.72	14.8	12	C3	東中央	石		
H161	N-57°-E	3.20	3.16	0.64	13.5	16	C4	北中央	石		
H583	N-58°-E	2.04	1.80	0.20	4.7			北中央東寄	粘		
H720	N-15°-W	2.04	1.88	0.40	5.3			北西寄	石		
H521	N-18°-W	2.36	2.26	0.12	6.4			北中央			
H849	N-67°-E	2.64	2.20	0.36	7.1			北中央東寄	石	有	南中央出入口
H869	N-52°-E	2.72	2.08	0.20	7.6			北中央	石		
H103	N-64°-E	2.60	2.28	0.36	7.6			北中央	土器・粘	有	
H176	N-80°-E	2.96	2.28	0.68	7.6			東中央	土器・石		
H291	N-59°-E	2.64	2.62	0.48	7.7			北中央	土器・粘		
H594	N-57°-E	2.84	2.24	0.16	7.9			北中央	粘・土器		
H154	N-27°-W	2.68	2.44	0.56	8.1						
H533	N-15°-W	2.80	2.32	0.48	8.4			北中央	粘・石・土器	有	
H272	N-64°-E	2.76	2.48	0.48	8.5			東南寄			
H99	N-19°-W	2.88	2.56	0.56	8.9			北中央	石		
H667	N-73°-E	3.04	2.44	0.44	8.9			北中央西寄	粘	有	
H180	N-70°-E	2.96	2.64	0.56	9.0			北中央	粘		
H86	N-72°-E	3.00	2.70	0.60	9.4			北中央	土器・石	有	
H412	N-30°-W	3.04	2.64	0.56	9.6			北中央	石		
H330	N-56°-E	3.28	2.52	0.18	10.1			北中央	石		
H470	N-78°-E	2.96	2.92	0.40	10.2			北中央	粘		
H49	N-65°-E	3.12	2.72	0.56	10.3			北中央	石		
H296	N-28°-W	3.00	2.84	0.44	10.6			北中央	土器・粘・石		
H174	N-6°-E	3.08	2.92	0.56	11.1			南東角			
H609	N-69°-E	3.16	2.88	0.32	11.2			東中央南寄	粘		
H248	N-35°-W	3.44	3.04	0.52	11.4			東南寄	石		
H553	N-69°-E	3.04	3.00	0.32	11.5			北中央	石		
H78	N-8°-W	3.12	3.08	0.32	11.5			北中央西寄	石		
H546	N-56°-E	3.20	2.64	0.32	11.7			北中央	?		
H758	N-37°-E	3.28	2.76	0.28	12.0						
H785	N-57°-E	3.24	2.68	0.40	12.2			北中央	粘		
H182	N-70°-E	3.96	2.54	0.50	12.2			北東寄	粘		
H664	N-74°-E	3.68	3.04	0.28	12.7			北中央	石		南中央出入口
H116	N-64°-E	3.48	3.08	0.32	13.6			北中央	石		
H535	N-68.5°-E	3.44	3.08	0.36	13.7			北中央	石		
H610	N-67°-E	3.84	2.80	0.60	14.1			北中央	粘		
H286	N-31°-W	3.48	3.40	0.52	14.2			北中央	土器・石		
H70	N-75°-E	3.76	3.32	0.68	14.2			北中央	石	有	
H243	N-75°-E	3.68	3.52	0.18	14.3						
H666	N-62°-E	4.40	2.84	0.36	14.4			北中央西寄	粘・石		
H562	N-67°-E	3.52	2.44	0.36	14.5			北中央	粘・石・土器		
H285	N-35°-W	3.60	3.60	0.48	15.4			北中央			
H316	N-58°-E	3.52	3.52	0.40	15.6	16		北中央	石		
H151	N-74°-E	3.88	3.32	0.52	15.7			北中央	粘・石		
H768	N-50°-E	4.28	3.04	0.28	16.7			東南	?		
H264	N-72°-E	4.16	3.68	0.36	17.2			東中央	石	有	

第11表 時期別住居址属性表 9

奈良平安時代VI期

遺構名	規模 (m)						主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
	長軸方向	長軸長	短軸長	壁残高	面積(m <sup>2</sup> )	柱痕径(cm)		位置	構築方法		
H561	N-23°-W	4.00	3.80	0.20	17.3	24	A	北中央	石		
H547	N-24°-W	4.64	3.48	0.16	20.0		A	北中央	石		
H231	N-68°-E	4.16	4.08	0.48	21.2	12	A	北中央	土器		
H239	N-72°-E	4.52	4.44	0.48	23.9	12	A	北中央	粘		
H687	N-24°-W	4.84	4.60	0.32	25.7	16	A	北中央西寄	粘・石		
H203	N-67°-E	4.92	4.16	0.68	25.8	16	A	北中央	粘・石		
H515	N-73°-E	4.88	4.64	0.32	28.8	24	A	北中央	石	有	
H244	N-19°-W	5.44	5.04	0.50	30.0	16	A	北中央	粘・石		南中央出入口
H253	N-63°-E	5.68	5.36	0.68	32.8		A	北中央	土器・粘・石	有	
H883	N-33°-W	5.48	5.04	0.56	33.8	0.16	A	北中央	粘・石	有	南中央出入口
H517	N-70°-E	5.44	5.36	0.48	34.2		A	北中央	粘・石・土器		
H496	N-8°-W	3.40	3.24	0.28	16.5		A(ア)	北中央	地山削出・粘		
H879	N-35°-W	3.28	3.16	0.28	12.1	12~20	A1(ア)	北中央	石		
H777	N-63°-E	3.28	2.80	0.32	13.0		A1(ア)	北中央	?	有	
H184	N-63°-E	4.20	3.64	0.68	18.4		A1(ア)	北中央	土器・石		
H525	N-66°-E	3.28	3.24	0.28	12.6	20	A1(イ)	北中央	粘・石		
H458	N-84°-E	3.60	3.16	0.36	14.5		A1(イ)	北中央	石・土器	有	
H420	N-29°-W	4.08	3.92	0.32	18.3		A1(イ)A2	北中央東寄	粘・石		南中央出入口(礎石有)
H676	N-67°-E	4.84	4.52	0.28	25.8	20	B	東中央南寄	粘		
H968	N-8°-W	2.32	2.24	0.36	7.0	12~24	C1	北中央	?		
H147	N-61°-E	2.88	2.68	0.28	9.1		C1	北中央	石		
H725	N-66°-E	3.36	3.12	0.20	12.6		C1	北中央	石		
H398	N-26°-W	4.84	3.96	0.6	22.1	16	C1	北中央	石		南中央出入口
H514	N-65°-E	4.00	3.68	0.32	18.1		C3	北中央	?		
H625	N-71°-E	3.40	2.80	0.24	12.1	20	C5	北中央西寄	石		
H506	N-68°-E	2.52	2.32	0.32	7.8			東中央	石		
H614	N-60°-E	2.64	2.40	0.28	8.3			北中央	粘・石		
H507	N-73°-E	3.00	2.15	0.40	8.6						
H750	N-66°-E	2.64	2.60	0.28	9.2			北中央西寄	石?		
H492	N-23°-W	2.76	2.56	0.36	9.9			北中央	石		
H256	N-70°-E	3.04	2.80	0.32	10.2			北中央	粘・石	有	
H306	N-69°-E	3.20	2.84	0.48	10.2			北中央	石		
H312	N-82°-E	3.04	3.04	0.44	10.4			東	石	有	
H359	N-72°-E	3.00	2.82	0.18	10.7			東南寄	石		
H770	N-57°-E	2.96	2.92	0.44	10.7			東中央	石		
H673	N-73°-E	3.12	2.60	0.20	10.8			北中央	石		
H266	N-65°-E	3.08	2.96	0.40	11.3			東南寄			
H573	N-64°-E	3.20	2.68	0.36	11.4			北中央東寄			
H597	N-59°-E	3.36	3.04	0.16	11.4			北中央	石		
H321	N-66°-E	3.08	3.00	0.16	11.5			東中央	石		
H724	N-60°-E	3.08	3.04	0.20	11.5			北中央	粘・石		
H627	N-17°-W	3.24	3.00	0.40	11.6			北中央東寄	土器	有	南中央出入口
H743	N-24°-W	3.48	2.64	0.28	11.8			北東寄	?	有	
H178	N-67°-E	3.40	3.04	0.48	12.3			北中央	石		
H417	N-73°-E	3.44	3.28	0.40	12.7			北中央西寄	土器・粘・石		
H634	N-66°-E	3.68	2.96	0.36	12.8			北中央			
H392	N-24°-W	4.60	2.72	0.24	14.0			東南寄	石	有	
H133	N-67°-E	3.68	3.44	0.40	14.0			北中央	不明	有	
H763	N-50°-E	3.40	3.20	0.20	14.5			北西寄	石・土器		
H443	N-81°-E	3.88	3.48	0.44	18.5			北中央	石		P-5
H314	N-76°-E	4.08	4.00	0.24	18.7	12		北中央	石		南中央出入口
H92	N-76°-E	4.36	4.14	0.32	20.3			北中央	石		南中央出入口
H408	N-67°-E	4.72	4.32	0.36	24.2			北中央	石	有	

第12表 時期別住居址属性表10

奈良平安時代Ⅶ期

遺構名	規 模 (m)						主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
	長軸方向	長軸長	短軸長	壁残高	面積(m <sup>2</sup> )	柱痕径(cm)		位置	構築方法		
H322	N-14°-W	6.32	5.08	0.20	37.5		A	東南角	石		
H414	N-64°-E	6.08	5.88	0.44	40.3		A	北中央	粘・石	有	
H828	N-39°-W	3.56	3.48	0.24	15.1	16	A1(イ)	北中央西寄	粘・石		
H811	N-56°-E	3.20	2.96	0.16	11.3		C1?	北中央	粘・石	有	南中央出入口
H237				0.44			C2	北中央	粘・石		
H230	N-65°-E	2.04	1.88	0.52	5.0			東南寄	石		
H450	N-14°-W	2.08	2.00	0.4	5.7			東南	石	有	
H145	N-22°-W	2.64	2.12	0.22	6.9			北中央	石		
H132	N-27°-W	2.84	2.24	0.24	7.5			北東寄り	地山削出・石	有	
H446	N-23°-W	2.80	2.24	0.32	7.7			東南角			
H491	N-66°-E	2.72	2.40	0.20	8.0			北中央	粘・石	有	
H498	N-19°-W	3.72	2.24	0.24	8.5			東南寄	粘・石		
H512	N-64°-E	2.60	2.52	0.08	8.7			北中央西寄	粘・石	有	
H926	N-90°-E	3.20	2.48	0.36	8.9			北東寄	粘	有	
H385	N-32°-W	3.00	2.36	0.20	9.0			東南寄	石		
H228	N-20°-W	2.80	2.72	0.40	9.1			東南寄	石		
H233	N-64°-E	2.88	2.72	0.36	9.1			北中央	?	有	
H798	N-32°-W	3.56	2.32	0.08	10.3			東南	粘		東北に張出
H855	N-62°-E	2.92	2.64	0.28	10.4			北中央	粘・石	有	
H422	N-60°-E	3.64	3.56	0.40	10.5			東南角	石		
H941	N-67°-E	3.40	2.40	0.24	10.5			東南	石	有	
H882	N-36°-W	3.40	2.60	0.24	10.7			東南	粘・石		
H246	N-25°-W	3.20	3.04	0.40	11.0			東南寄	石		カマド両サイドに土抗
H751	N-17°-W	3.64	2.80	0.24	11.5			東中央南寄	?	有	
H727	N-28°-W	3.28	3.12	0.16	12.7			東南寄	石	有	
H438	N-71°-E	3.44	3.24	0.32	13.0			東南寄	粘・石	有	
H129	N-66°-E	3.52	3.48	0.32	13.7			北中央	石	有	
H188	N-75°-E	3.72	3.40	0.28	13.9			北中央	石	有	
H435	N-34°-W	5.08	2.76	0.24	16.1			北東寄			
H183	N-73°-E	4.04	3.80	0.40	16.3			北中央	石	有	
H397	N-59°-E	3.72	3.48	0.36	17.0			北中央	粘・石		
H460	N-23°-W	3.84	3.72	0.28	17.0			北中央	粘・石	有	
H766	N-64°-W	4.64	3.92	0.24	22.3			東南寄	石		
H411	N-23°-W	5.12	4.28	0.36	25.8			東中央南寄	粘・石		

奈良平安時代Ⅷ期

遺構名	規 模 (m)						主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
	長軸方向	長軸長	短軸長	壁残高	面積(m <sup>2</sup> )	柱痕径(cm)		位置	構築方法		
H900	N-12°-E	4.24	4.20	0.24	22.1	16~20	A1(イ)	東南角	粘・石	有	
H841	N-56°-W	5.20	4.24	0.28	27.9		A1(ウ)	東南角	?		
H922	N-60°-E	2.36	2.00	0.28	5.8			東中央	粘・石	有	
H927	N-86°-W	2.28	2.08	0.36	6.3			東南	粘	有	
H858	N-52°-E	2.40	2.00	0.02	6.6			東南角	粘・石	有	
H472	N-27°-W	2.80	2.56	0.56	9.2			東南	粘・石	有	
H859	N-29°-W	3.20	3.08	0.32	12.6			北中央	粘・石	有	
H854	N-37°-W	3.72	3.28	0.12	15.7			北中央西寄	粘・石	有	
H341	N-13°-W	4.52	3.64	0.12	18.8			東南寄			P-5

第13表 時期別住居址属性表11

奈良平安時代Ⅸ期

遺構名	規模 (m)						主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
	長軸方向	長軸長	短軸長	壁残高	面積 (㎡)	柱痕径 (cm)		位置	構築方法		
H55	N・30°-W	4.48	3.32	0.36	17.8		A	西南角			
H592	N・32°-W	4.28	3.20	0.20	19.0		A	南東寄	粘・石		
H579	N・37°-W	4.40	4.24	0.12	20.8		A	東南角	石		
H615	N・21°-W	4.96	3.80	0.36	22.8	16	A	北東角	粘・石		
H788	N・34°-W	4.88	4.24	0.28	25.5		A	東北	石		
H613	N・27°-W	6.72	5.24	0.24	42.4	16	A	東南角	粘・石	有	
H862	N・33°-W	4.32	3.92	0.04	21.4		A(ア)	東南	粘・石	有	南中央出入口?
H311	N・48°-E	7.08	5.60	0.24	31.9		A(イ)	東南角			
H837	N・56°-W	3.80	3.20	0.24	18.4		A1(ア)	東南角	粘		
H567	N・70°-E	4.24	4.00	0.16	20.4		A1(ア)	東南角	粘・石		
H877	N・40°-W	4.32	3.60	0.08	20.6	8~24	A1(ア)	東南角	石	有	
H804	N・30°-E	4.20	4.16	0.24	20.8		A1(ア)	東南角	粘・石		
H822	N・22°-W	4.72	3.84	0.16	21.8	12~16	A1(ア)	東南角	粘・石	有	
H791	N・30°-E	5.28	5.20	0.20	33.7	12~20	A1(ア)	北西角	?		
H323	N・10°-E	5.68	5.56	0.30	38.3		B	東南角	粘・石		
H403	N・21°-W	4.24	3.40	0.20	18.1		C3	東南角	土器・粘・石		
H563	N・21°-W	2.84	2.49	0.24	8.8			東南角			
H224	N・14°-W	4.00	3.28	0.36	15.0						
H571	N・7°-W	3.44	3.40	0.24	15.4						
H857	N・37°-W	4.40	3.16	0.04	17.0			東中央	粘	有	
H304	N・39°-W	4.12	3.34	0.16	17.7			東南角	粘・石	有	
H681	N・68°-E	4.68	4.56	0.28	25.0			東南角	石		

奈良平安時代Ⅹ期

遺構名	規模 (m)						主柱配置	カマド		周溝	付属施設(張出等)
	長軸方向	長軸長	短軸長	壁残高	面積 (㎡)	柱痕径 (cm)		位置	構築方法		
H604	N・35°-W	4.32	4.00	0.12	21.8		A	東南角	粘		
H827	N・36°-W	6.32	4.12	0.20	31.3		A	東南角	石	有	貯蔵穴、張出
H623	N・14°-W	5.53	5.20	0.14	34.2	20	A	東南角	粘・石		
H856	N・68°-E	6.16	4.80	0.08	34.3		A	東南角	粘・石	有	
H586	N・62°-E	4.28	3.84	0.24	23.2		A?	東南角	粘・石		
H578	N・20°-W	3.68	3.60		17.0			南東寄	粘・石		
H115	N・27°-W	4.24	3.52	0.32	19.6			東南			
H560	N・73°-E	6.12	4.76	0.16	34.6			東南角	石		

第14表 時期別住居址属性表12



時 期	遺 構 No.
古 III	F193 F234 F236 F258 F264 F319 F329 F322 F392 F453 F480 F547 F573 F742
古 IV	F182 F220 F318
奈平 I	F48 F467 F477
奈平 II	F141
奈平 III	
奈平 IV	F41 F143 F671 F672
奈平 V	F49 F71 F116 F327 F381 F500 F666
奈平 VI	F233 F283
奈平 VII	
奈平 VIII	
奈平 IX	
奈平 X	
奈平 ?	

第15表 時期確定可能掘立柱建物址一覧表

が存在する。この小口径の Pit は梯子を埋設したものと推測され、竪穴住居址の出入口施設と想定されるものとよく似ている。また、この部分以外の3辺が布掘りであるのは、1階部分に壁が存在したためかもしれない。そう考えた場合、布掘りでない部分の南半部分が1階の出入口であったものと推測される。

3. P形態で分類したもの以外で、竪穴住居址に付随する柵と思われるもの—H24に対するF61・H540に対するF163があげられるが、これら以外にも判断に苦しむものが存在する。他のものと異なり、柱間・平面形・断面形状・深度が不規則である。柱痕が把握しづらいのは、径が小径であるためと思われる。本来の掘立柱建物址であれば存在すべき位置に Pit が配置されないことから、遺構の重複による結果ではないと思われる。また、F109も付随する遺構は存在しないが、建物ではなく柵の可能性が高い。

4. 柵で圍繞された掘立柱建物址—F607が該当する。5間×4間（9m×7.6m）の柵で囲まれた空間に3間×2間（5.2m×3.6m）の掘立柱建物址が同一長軸上に配置されている。全体がひとつの総柱の建物とも考えられるが、柱痕は周囲が10cm前後、内部が16cm前後であるから内部が束柱とは考えにくい。柱痕から考えると規模的にはさして大きくはないが、周囲と隔絶する柵を有することから「ヤシロ」のようなものも想起させられる。

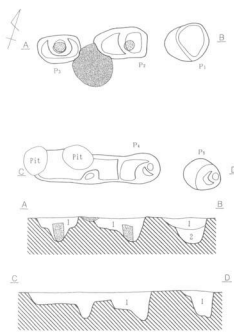
5. 壁の存在が推測できるもの—地面から立ち上がる壁の存在が想定されるものとして、所謂「庇」を有するF126等、変則的な2間×2間の側柱・布掘り形態で、梁間の1辺が1間の構成で、浅い溝で桁行と結合されるF38は、溝の断面が「V」字状を呈し浅いことから、壁材を埋設固定したものと推測される。F38同様に布掘りのF457は、3間×2間の側柱の形態で、柱穴を連結する溝幅が柱穴部分より細く、壁材を埋設固定したものと推測される。更に、梁間の1辺の1間部分だけ布掘りが途切れていることから、この部分が出入口と思われる。

6. F196は瓦塔片を出土し、低地と高地の境界に立地するため、建物の東半分部分の周囲には他の建物が存在しないことから「寺」の可能性を有する。本遺跡から出土している「於寺」・「大方寺」・「寺」等の刻書・墨書土器に記された寺かも知れない。蛇足ではあるが、本址の東40mに位置するH735も同様な立地で瓦塔片が出土し、竪穴であるがカマドを有さない特殊な遺構であり、本址同様「寺」か「寺」に関わる施設の可能性がある。

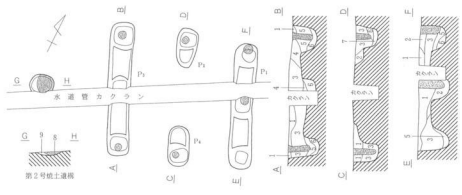
本節の冒頭の見解—「竪穴住居址—1に掘立柱建物址—1という組み合わせが聖原遺跡における基本的な単位」には矛盾するが、掘立柱建物址だけが規則的に配置された場所が認められる。（第46図参照）M74、M78を意識して1間×1間、2間×1間の掘立柱建物址が6棟配置されている。これとは別に前述したF607の周囲なども掘立柱建物址だけが重複して建てられており、他とは異質な空間である。（第46図参照）

## 第4節 土坑

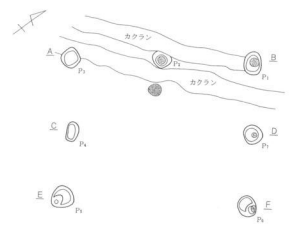
検出された370基の土坑は平面形態（一部断面形態を考慮）により、A～Fの6形態に分類した。数量的には、A—69基、B—147基、C—8基、D—26基、E—33基、F—42基、不明—44基、分類項目には存在しないが近世の井



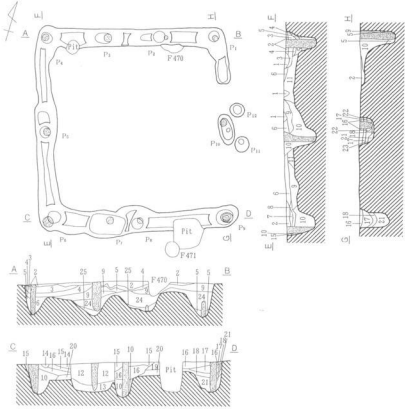
F541



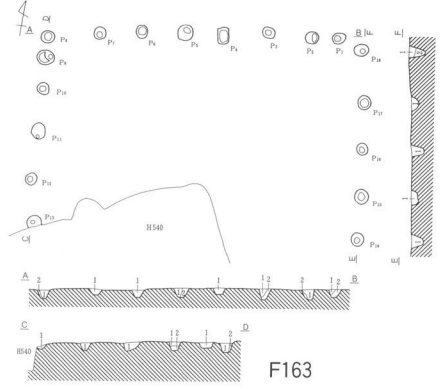
F601



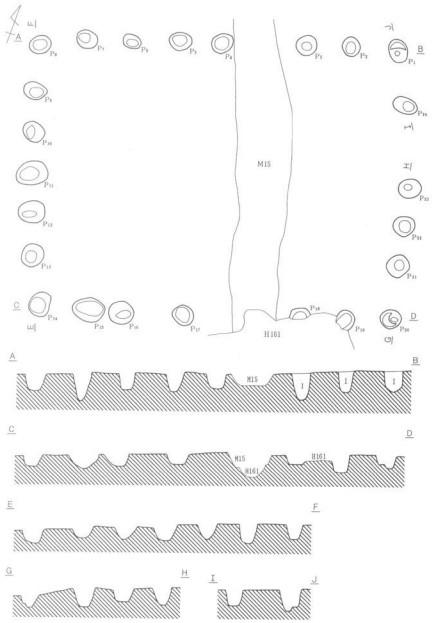
F788



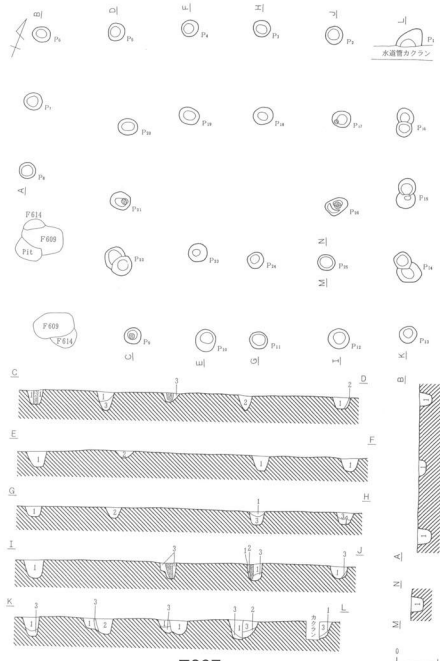
F483



F163



F109



F607

第45図 掘立柱建物址実測図(1)

戸址-1基である。B形態が圧倒的に多く、方形、長方形を呈するC・D形態は少数である。

上記の形態分類が時代や性格の区分と重なるものは以下のとおりである。

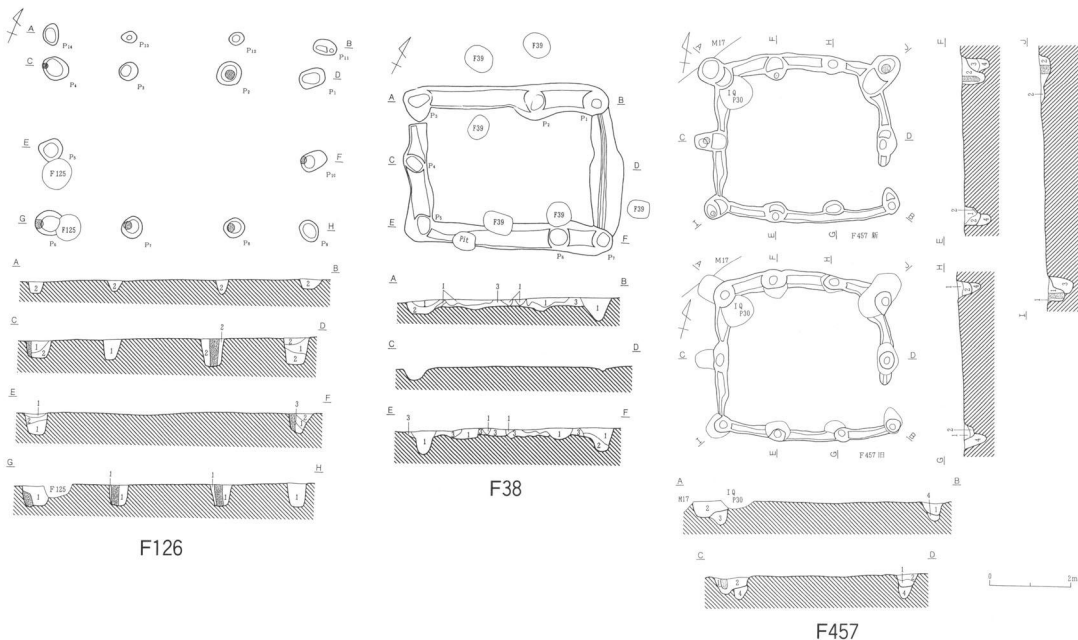
1. F形態=縄文時代の陥穴である。本遺跡から出土する縄文土器は中期後半から後期のものであるから、これらの陥穴も同時期の所産の可能性が高い。また、D163からは打製石斧が出土しており、陥穴の掘削に打製石斧が使用されていたことを示唆する。未発達田切りのM78が作り出す湿原に集まる動物を対象としたものと推測され、当遺跡には縄文時代の集落は存在しないことから、当遺跡外から、狩猟のために訪れていたのであろう。なお、長野県埋蔵文化財センターが調査した当遺跡(「長土呂遺跡群」)の報告書では、これらの陥穴を慎重を期して時期不明としているが、縄文時代として良いのではないだろうか。

2. E形態は奈良平安時代Ⅱ期～Ⅴ期の所産と思われるが、主体となる時期は奈良平安Ⅲ期～Ⅴ期である。本形態は第4節分類基準 3)土坑で述べているように、1986『池端・西御堂』においては羽毛田伸博により、牛馬を使用した雨乞等の呪術的な祭祀遺構とされ、1995『長野県考古学会誌75号』における花岡弘の論考においては、塵芥処理土坑、1996『立正史学』における中山晋の論考「古代日本の「氷室」の実体」においては氷室とされたものである。

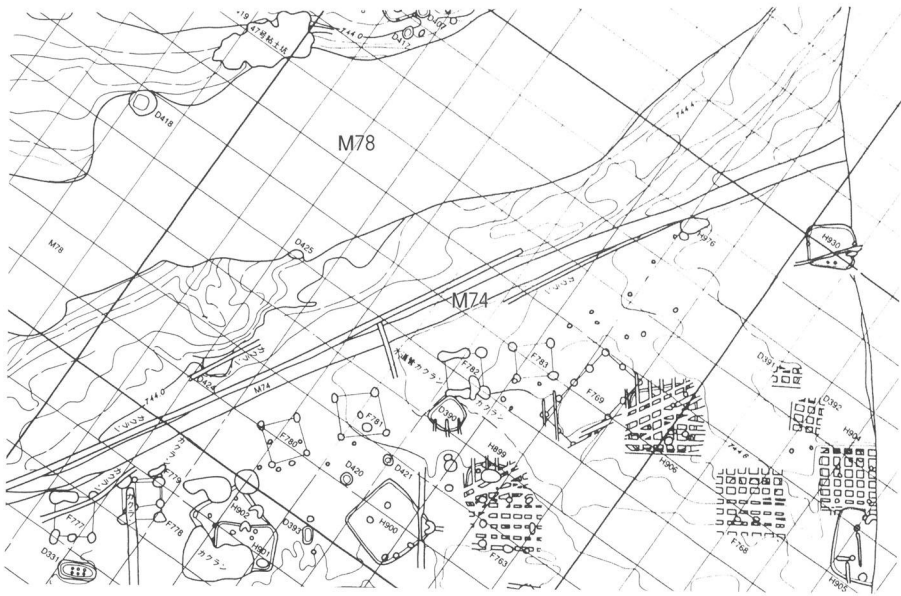
第47図に示したE形態土坑と溝址の関係を見ると、部分的な集中ヶ所は認められるもの、E形態の土坑は互いにある程度の距離を置いて溝址(人工・自然は問わない)上や、溝址に隣接・近接して配置されており、その性格は水に関係がありそうである。未発達田切りのや、大きな自然流路が存在する調査区東側にE形態土坑が分布しないことも示唆的である。もう少し具体的に言及するならば、E形態土坑は貯水槽の可能性があるのでないだろうか。いずれにせよ、今回E形態土坑として取り扱ったものは規模や出土遺物、形態に差異が認められるため、全てを同一に考えることはできないが、その性格の一端として、「貯水槽」の可能性を指摘しておく。

上記のように、形態分類が時代や性格とは一致しないものの、出土遺物等から時代や性格が明らかなのは以下のとおりである。

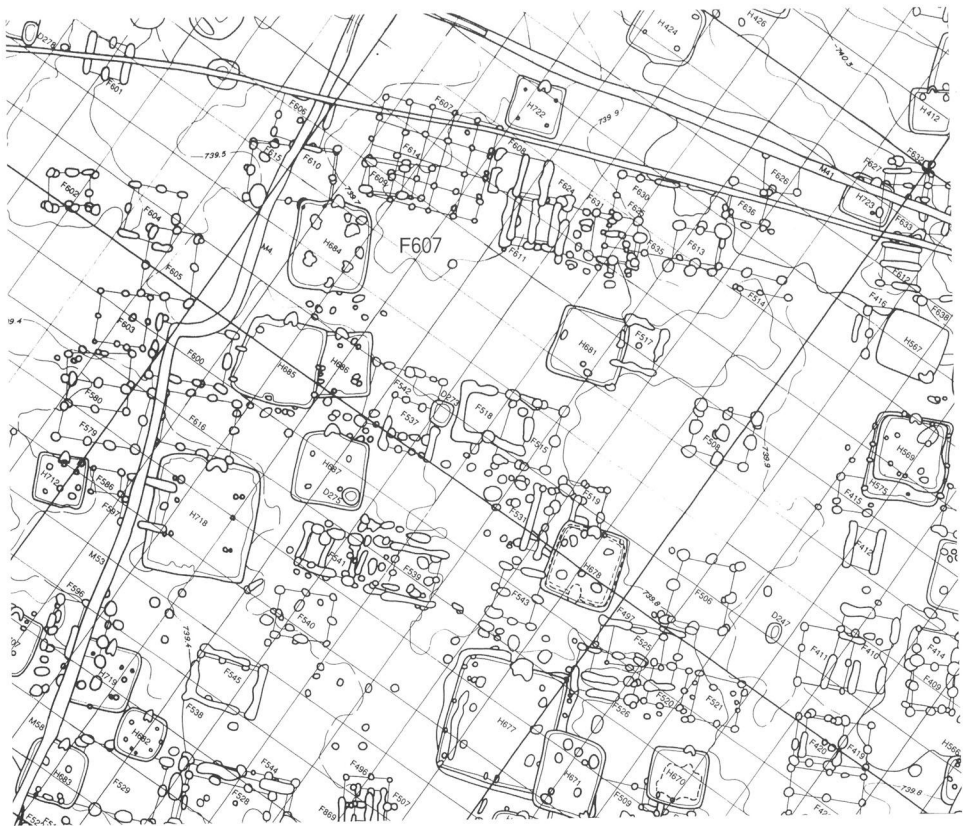
- 7A地区に存在した近世民家に関わる土坑-191・192・193・204・205・285・299、第1号井戸址が該当する。
- D24は時代は判然としないものの土坑墓であり、性格が明らかな土坑である。今回の調査では本址以外には墓は検出されていない。聖原遺跡の特徴のひとつである。
- D276は鍛冶址である。長野県埋蔵文化財センターの調査でも同様な遺構が1基確認されている。市、県併せて107,900㎡中に2ヶ所の鍛冶址あるいは鍛冶工房が存在したわけである。時期的には双方とも奈良平安時代Ⅴ期(9世紀前半)の年代が推測され、同時に存在していたものと思われる。科学的な分析は長野県埋蔵文化財センターの調



第46図 掘立柱建物址実測図(2)



M74・M78に添って配置された掘立柱建物址



F607周辺遺構分布状況

第47図 M74・M78、F607周辺遺構分布状況

査報告書に詳細が掲載されている。これらの鍛冶址の特徴は枚鉄の利用が確認できた点にある。鍛冶址以外からも本遺跡では人為的に使用不可能な状態（幾重にも折り畳んだり、折り曲げたりしたもの）にした鉄器が出土しており、再加工が決まった鉄器は使用不能な状態にし、鍛冶址で再生したようである。聖原遺跡の住居址から出土する豊富な鉄器の存在から、鍛冶址で再生あるいは製造された製品の供給先は聖原と聖原に近隣する遺跡であったと思われる。○D115・320は馬の墓である。時期は判断しかねるが、平安時代の可能性が高い。○D173は1.92×0.92mのB形態の土坑である。完形に近い須恵器の大甕が出土している。深度は0.36mであり、さして深くないことから、破壊され埋設された可能性が高い。また、比較的多くの灰釉陶器が共伴しており、これを年代の基準とするならば、奈良平安時代Ⅶ期が下限となる。

## 第5節 粘土坑

住居址のカマド構築土や、床面等に用いる粘土を採掘した坑を粘土坑とした。聖原遺跡が立地する田切台地は、浅間山の火砕流であるP1により形成されており、堆積した高温の火山灰中から吹き出した気体ないしは液体により、部分的に粘質土が生成されており、地山を掘り下げ、断面を確認するとロート状に吹き出した様子が観察されたが、地中深くから吹き出しているため、根元を確認することは不可能であった。平面形状は吹き出し口周辺が白色から黄色を呈し、これを取り巻く外周が赤色を呈する円形を基本とするが、自然により生成されるものであり、吹き出し口が複数存在する場合には不定形を呈する。

古代の人々が利用した粘質土は、上記の吹き出し口の周囲に存在する白色～黄色部分と赤色の部分であり、地表面から採掘を開始し、良質の粘土が採掘できれば繰り返し採掘を行い、良質の粘土が採掘できない場合には廃棄している。採掘という行為の結果として、遺構としては不整な平断面を呈することとなる。

粘土坑の採掘時期については、その性格上特定するのは難しいが、他の遺構との重複関係から、聖原遺跡に竪穴住居が構築された期間と同期間、いずれかの粘土坑が採掘されていたようである。また、その分布は、粘質土の生成過程から、自然による規制を受けているのは当然であるが、調査区中央の北端部分と、調査区南西部分（第49図参照）に集中する傾向が認められる。仮に調査区中央の北端部分をA地区、調査区南西部分をB地区とするならば、A地区は奈良・平安時代を通じて、粘土採掘場所として竪穴住居址の構築が規制されている様子が伺える。また、B地点は奈良・平安時代Ⅶ期以降竪穴住居址の構築が規制されている様子が伺える。一方、古墳時代にはそのような規制は伺えないといった現象も認められる。

このような粘土の採掘坑は小諸市中原遺跡群でも検出されており、粘土採掘坑から採取した試料と竪穴住居址のカマド構築土の分析比較が行われている。結果として、採掘坑の土に他の土を混ぜて使用した可能性を指摘している。この分析は1基の粘土採掘坑の試料2点をカマド構築土3点と比較しているため、サンプル数の少なさや、粘土採掘坑に残された粘土は、採掘された良質な部分とは異なるという可能性や、採掘坑毎の若干の違いを内包している場合もあり得るので、今後分析数を増やしていくことにより、異なる結果がもたらされるかも知れない。

## 第6節 溝址

溝址は調査年度や調査区の相違から、同一の溝址に複数の番号が付けられる結果を招いてしまったが、実数は40条である。自然流路と人工の溝址の2種類が存在するが、自然流路については、人手が加わっていないと断言はできない。東西方向に走る溝址は自然地形の傾斜に沿っており、南北方向に走る溝址は自然地形を無視している。このことから南北方向に走る溝址が人工である可能性を指摘できる。以下に時期・性格が推測されるものの概略を記す。

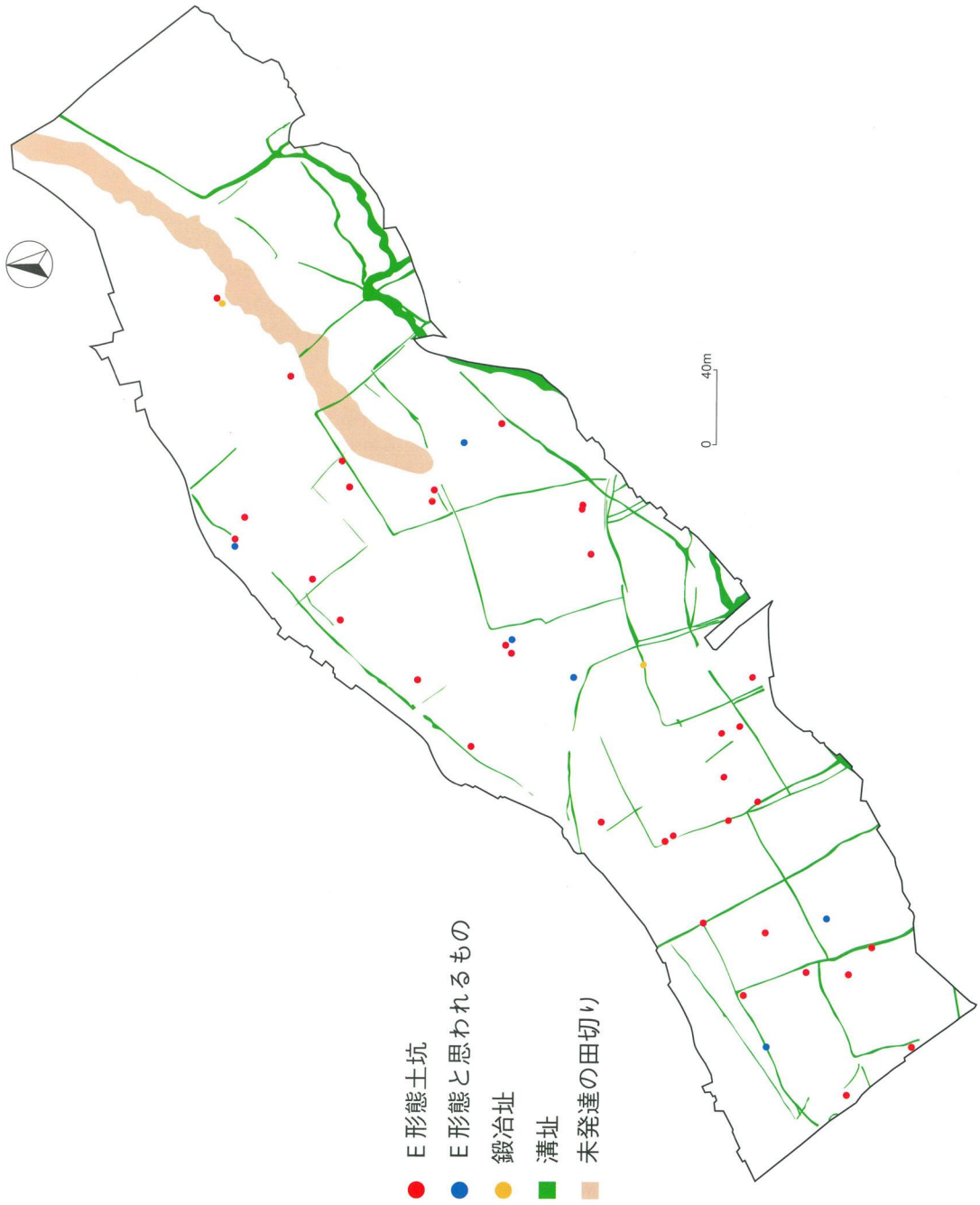
調査区北部を東西に走るM75・M43・M37・M20は部分的に断絶しているが、本来は1条の連続する溝である。覆土の大部分が砂であることから、流路であったことは間違いないが、微妙な地形の傾斜に干渉されず、ほぼ一直線に延びており、人工の水路である可能性も認められる。時期は判断しかねるが、井戸が存在しない当遺跡においては、このような水路により集落に水を供給していたのかも知れない。

同様な溝としては、M69・M74が該当する。ただし、M69・M74は人工の溝である。

M26・32・33・53・57・61は、古墳時代Ⅲ期以前から存在する古い流路である。両端部から流れ込んだ土砂により中央から埋まり始め、端部は水の進入の度、浸食と堆積を繰り返す不安定な状態であったことが他遺構との重複関係から推測される。

調査区を南北に走る人工の溝であるM18・M19は古墳時代Ⅳ期以降、奈良平安時代Ⅳ期以前の年代が他遺構との重





第48図 E 形態土坑、溝址分布図

複関係から否定できる。本址に西方向から直角に突き当たるM17も人工の溝址と思われるが、古墳時代Ⅲ期の竪穴住居址との重複関係しか認められず、これらよりは新しい。

東西・南北に「く」字状や「コ」字状に曲がるM13・M14やM24・M45、M28・M48、M41・42・58・63、M77・M40は他遺構との重複関係において切れることはあっても、切られることがないため、その上限は推測できるが下限は不明である。M13・M14、M24・M45、M41・42・58・63は奈良平安時代Ⅴ期より新しく、M28・M48、M77・M40は奈良平安時代Ⅵ期よりも新しい。

上記以外の溝址についても、年代的には奈平Ⅵ期よりは新しいものの、その下限は不明である。特定の場所を区画するような性格の溝址は調査区内には特定できない。区画溝により、隔絶する対象や必要がないことが聖原集落の特徴と言えるかも知れない。そしてそれは、聖原遺跡を佐久郡衛そのものに比定できない根拠のひとつでもある。

## 第7節 特殊遺構

特殊遺構とした中で、円形周溝のQ7、Q9、Q10についてふれておきたい。当遺跡では3基しか検出されていないが、市内のいくつかの遺跡において同様な遺構が検出されている。例えば、周防畑遺跡群入高山遺跡 EM1号円形周溝、芝宮遺跡群下曾根遺跡Ⅵ M4号溝址、一本柳遺跡群西一本柳遺跡Ⅲ・Ⅳ M7号・M9号溝址、栗毛坂遺跡群B地区 特殊遺構8などである。

時期的には古墳時代後期～平安時代に認められるようであるが、出土物が少なく時期が特定できるものは皆無のようである。規模的には、長径3m～9m、溝幅1m以内、深度50cm以内であり貧弱である。平面形は円ないし楕円形であるが、見方によっては隅丸方形に近いものも存在する。溝の深さは一定せず、断面も逆梯形が基本であるが、2段落の部分なども存在する。付属施設は基本的に認められないが、栗毛坂遺跡群B地区 特殊遺構8の場合は複数の柱穴を伴う。

性格は、形態からすれば円形周溝墓に近いことから、墓が想定されるが、いくつかの遺跡で検出されているにもかかわらず、墓坑や骨は検出されていないことから、周溝墓ではないものと考えられる。もう一つ形態的に類似する遺構として、群馬県「中筋遺跡」等で検出されている平地式建物がある。溝の幅が「中筋遺跡」よりも広すぎるが、可能性は高い。本址を平地式建物とした場合、検出される数の少なさや、火床が存在しないこと等から、住居とは考えにくい。また、乱雑とも言える溝の構築から考えると、構造的に強固な建物ではないように思われる。

現時点では結論は導き出せないが、類例の更なる蓄積を待ちたい。

## 第8節 金属器・金属製品

水はけの良い地質により、本遺跡からは比較的良好な状態で金属器・金属製品が数多く出土した。ここでは、第1節で明らかとした、土器編年に沿って、各時期毎の金属器・金属製品の変化及び特徴を明らかとしたい。

○古墳時代Ⅲ期 銅製品は出土していないため不明である。鉄器・鉄製品としては鍬、刀子、鎌、鍬先が出土している。鍬は無頸1、短頸4・7・8、長頸16・17が認められる。刀子は両関の1と片関の3、鎌は1・2が認められ、1は左、2には右左が存在する。紡錘車は認められず、石製・木軸のものが主体と想定される。その他に凹状の平面形態のU字状鋤先、方形の止金具が認められる。

○古墳時代Ⅳ期 銅芯金張りの耳環の他には銅製品は認められない。鉄器・鉄製品は鍬が無頸2、短頸8、長頸16・18が認められるが、無頸1や短頸4・7も存在するものと思われる。刀子は前時期に引き続き、1・3が認められる。鎌は2が左右共に存在する。紡錘車は本期が初現である。釘や銚も認められ、銚には木質が付着している。その他に、折り曲げられた鉄片が出土している。

○奈良平安時代Ⅰ期 銅製品は、帯金具の巡方、銅芯金張りの耳環が認められる。帯金具は本期が初現である。鉄器・鉄製品は鍬に長頸の16・19・20・22・23が認められ、無頸や短頸が認められないが、無頸1や短頸4・7、長頸18も存在するものと思われる。刀子は前時期に引き続き1・3が認められる。鎌も前時期に引き続き、2が左右共に存在する。その他に、紡錘車、U字状鋤先、釘、毛抜きが認められる。

○奈良平安時代Ⅱ期 銅製品は、馬鈴・帯金具の巡方が認められる。馬鈴は吊手部分を欠損するが、飯田市金山二子塚古墳出土品に近似する。鉄器・鉄製品は鍬が無頸1、短頸4・9、長頸22が認められる。出土はしていないが、短頸7や長頸16・18も存在するものと思われる。刀子は1～5全てが認められる。

刀子は本期に大きな画期が認められる。具体的には1から2への変化、4を介在しての無関5の出現である。鎌は2



第49图 粘土坑分布图

・3・6が認められる。2・6は左、3は右だけが存在する。刀子同様に鎌も本期に大きな画期が認められる。それは柄に対する背の内角が120°前後であった2から、130°を超える3への変化であり、同様の角度が100°ほどであった1から、2、3へと角度が順次大きくなっていく傾向が読みとれる。(本来は背ではなく刃で計測すべきであろうが、研ぎ減りによる変形が認められるため背で計測した)その他に、紡錘車・釘・鏝・馬具の轡・斧(板状・袋状)・鉄器を折り曲げた鍛冶素材や板状の鍛冶素材が認められる。

○奈良平安時代Ⅲ期 銅製品は帯金具の巡方裏止金具・鉸具が認められる。鉄器のうち、鏝は無頸は認められないが、1が存在するものと思われる。短頸は4・9が認められ、7も存在するものと思われる。長頸は16・18・21が認められ、22も存在するものと思われる。刀子は2・3・5が認められる。前期の項でも述べたが、1から2への変遷、4を介在しての無頸5への変遷が本期で完遂されている。鎌は2・3が認められ、各々に左右が存在するものと思われる。その他には紡錘車・釘が認められる。

○奈良平安時代Ⅳ期 銅製品は帯金具の巡方・丸軋の他に、皇朝十二銭が初現する。種類は和同開珎・隆平永寶である。鉄器・鉄製品のうち、鏝は無頸3、短頸7・12・13、長頸18・22・24が認められるが、無頸1、短頸4、長頸21も存在するものと思われる。鏝は本期と前期の間に画期が認められる。具体的には本期以降短頸が主体となること、短頸における新たな形態の出現。(12・13や9から10を介して11への変遷、14の出現と15への変化)長頸の衰退と20から21への変遷や22・23から24・25・26への変遷などである。刀子は前時期からの変化は認められず、2・3・5が認められる。鎌は2・3が認められるが、左だけとなる。その他には、紡錘車・U字状鋤先・袋状の斧・釘・鏝・火打金具・巡方が認められる。

○奈良平安時代Ⅴ期 銅製品は、帯金具の巡方・蛇尾、神功開寶・隆平永寶・富壽神寶・承和昌寶の皇朝十二銭、銅塊が認められる。鉄器・鉄製品のうち、鏝は短頸7・12・13・14、長頸21・26が認められるが、無頸1、短頸4も存在するものと思われる。刀子は前時期からの変化は認められない。鎌は全長の長い2・3とは異なり、全長が短く、柄に対する背の内角が広い5の初現に、画期が認められる。2・3は認められないが存在するものと思われ、前期同様に左しか存在しないと推測される。また、本期には剃刀の可能性を内包するが、手鎌と思われるものが認められる。その他には紡錘車・袋状の斧・釘・鏝・針・鑿・鎚・焼印・馬具関連金具・金具・鍛冶素材などの種類・量ともに豊富な出土が認められ、木工・鍛冶・馬・布などの生業の一端が垣間見られる。更に、長さ20cmに及ぶ釘の存在は規模の大きな建物の存在を想起させる。

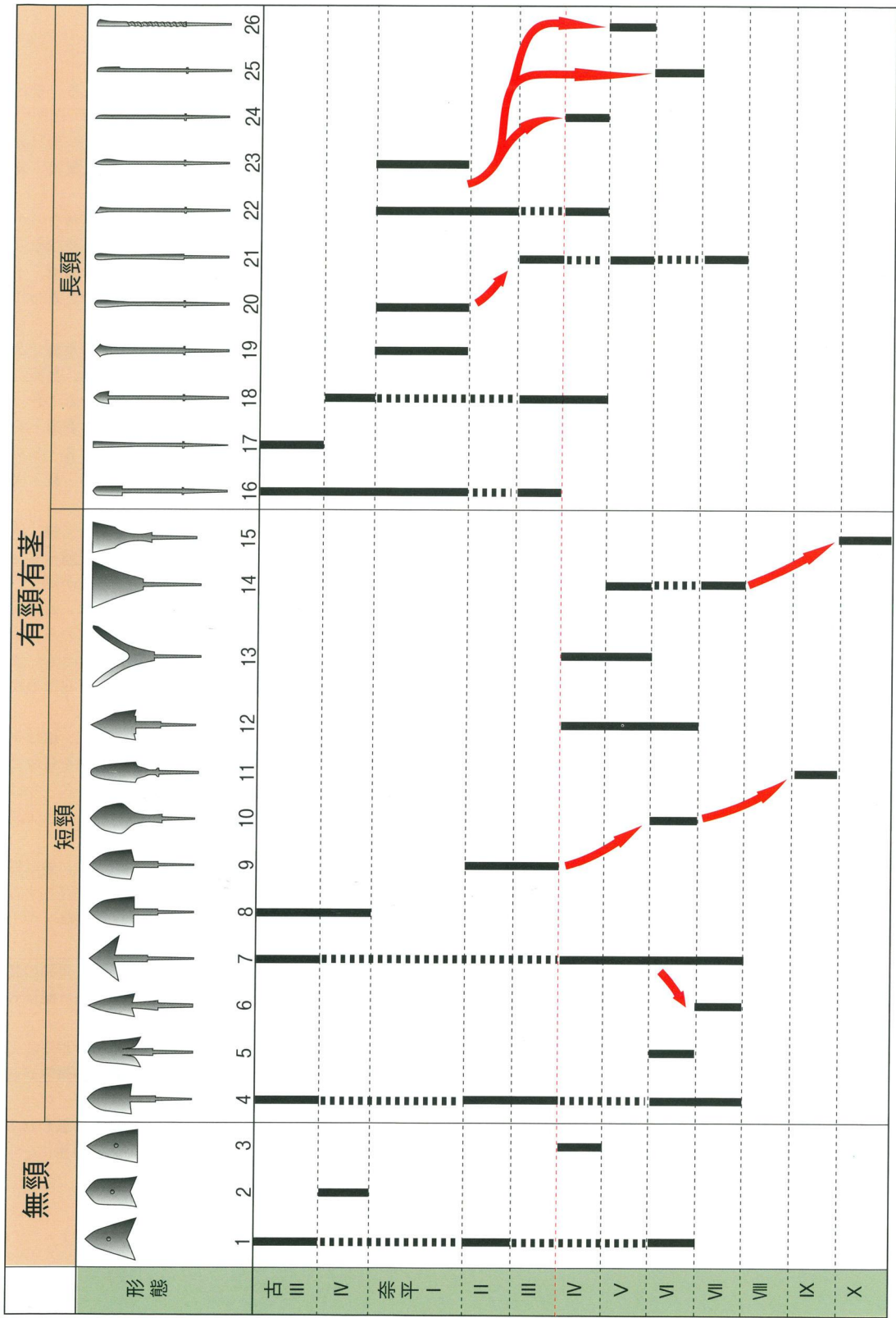
○奈良平安時代Ⅵ期 銅製品は帯金具の丸軋・蛇尾の裏止金具、碗、鈴が認められる。鉄器・鉄製品のうち、鏝は無頸1、短頸4・5・7・10・12、長頸25が認められるが、短頸14、長頸21も存在するものと思われる。本期を最後に無頸の鏝は認められなくなる。刀子は前時期からの変化は認められない。鎌は2が本期を最後に姿を消す。3・5は左右共に存在する。その他として紡錘車・袋状斧・釘・鏝・馬具関連金具・金具・針・鑿・錐・丸軋・鈴・釜・金鉗・鍛冶素材など前時期同様に種類・量ともに豊富な出土が認められる。

○奈良平安時代Ⅶ期 銅製品は帯金具の巡方裏止金具、刀装具の足金具が認められる。鉄器・鉄製品のうち、鏝は短頸の4・6・7・14、長頸の21が認められる。長頸は本期を最後に認められなくなる。刀子は2・3・5が存在するが、2は本期を最後に認められなくなる。鎌は左の3・5が認められる。その他として紡錘車・馬具関連金具・牽引金具などが認められる。

○奈良平安時代Ⅷ期 銅製品は認められない。鉄器・鉄製品のうち、鏝は出土が皆無のため不明であるが、短頸の10・11・14・15が存在するものと思われる。刀子は3・5が認められる。3は本期を最後に認められなくなる。鎌は3・4・5が認められる。その他として、紡錘車・釘が認められる。

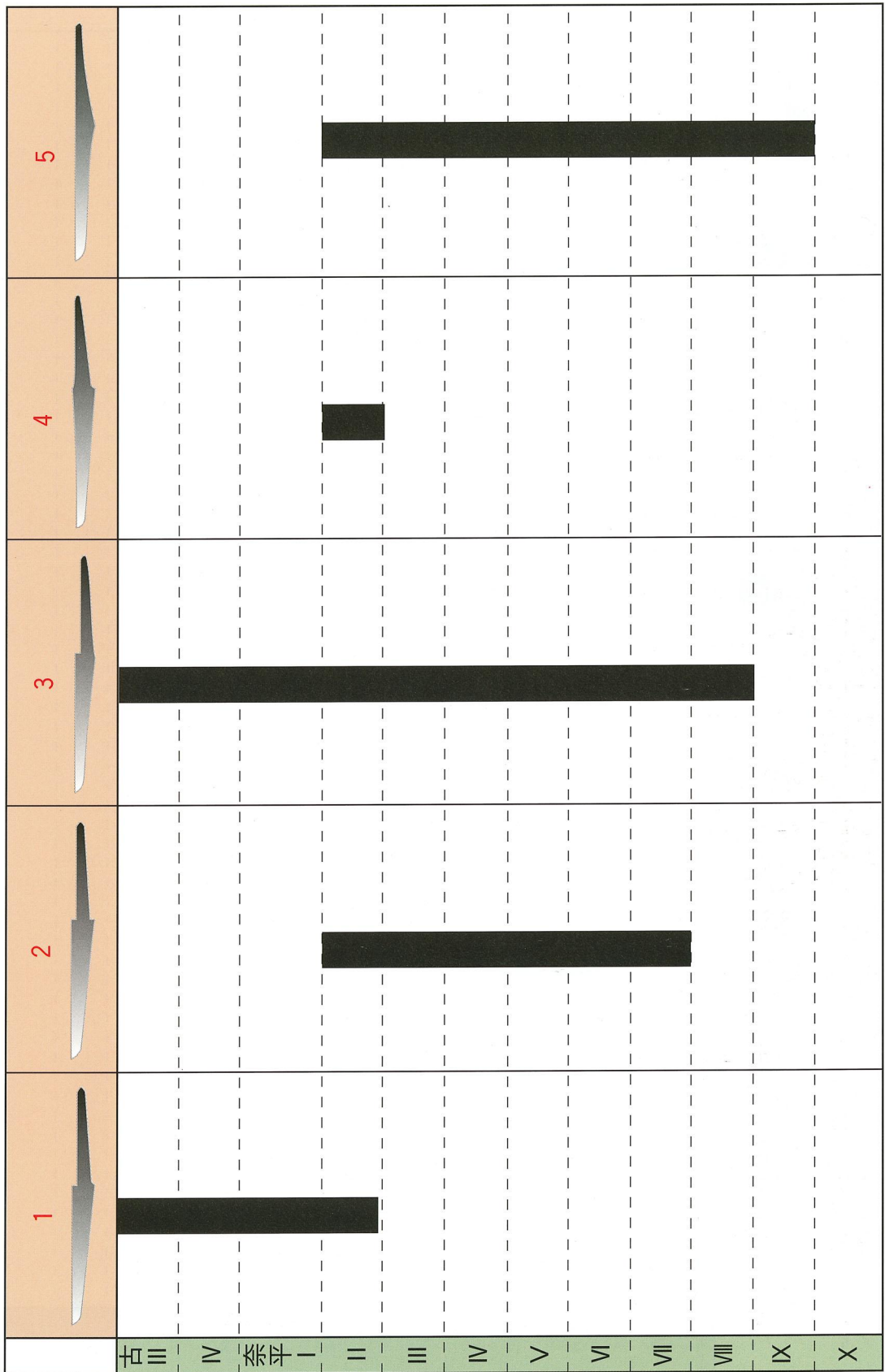
○奈良平安時代Ⅸ期 銅製品としては八稜鏡が認められる。鉄器・鉄製品のうち、鏝は短頸11のみが認められる。刀子は5が認められる。鎌は本期以降出土例がないため不明である。その他として、紡錘車の軸・釘・鏝・鉄鐸等が認められる。

○奈良平安時代Ⅹ期 銅製品は認められない。鉄器・鉄製品のうち、鏝は短頸15が認められる。刀子は5と思われるものが認められるが、茎部しか残存していないため、断定はできない。鎌・紡錘車は出土していない。その他にU字状鋤先・釘・鏝・馬具関連金具が認められる。

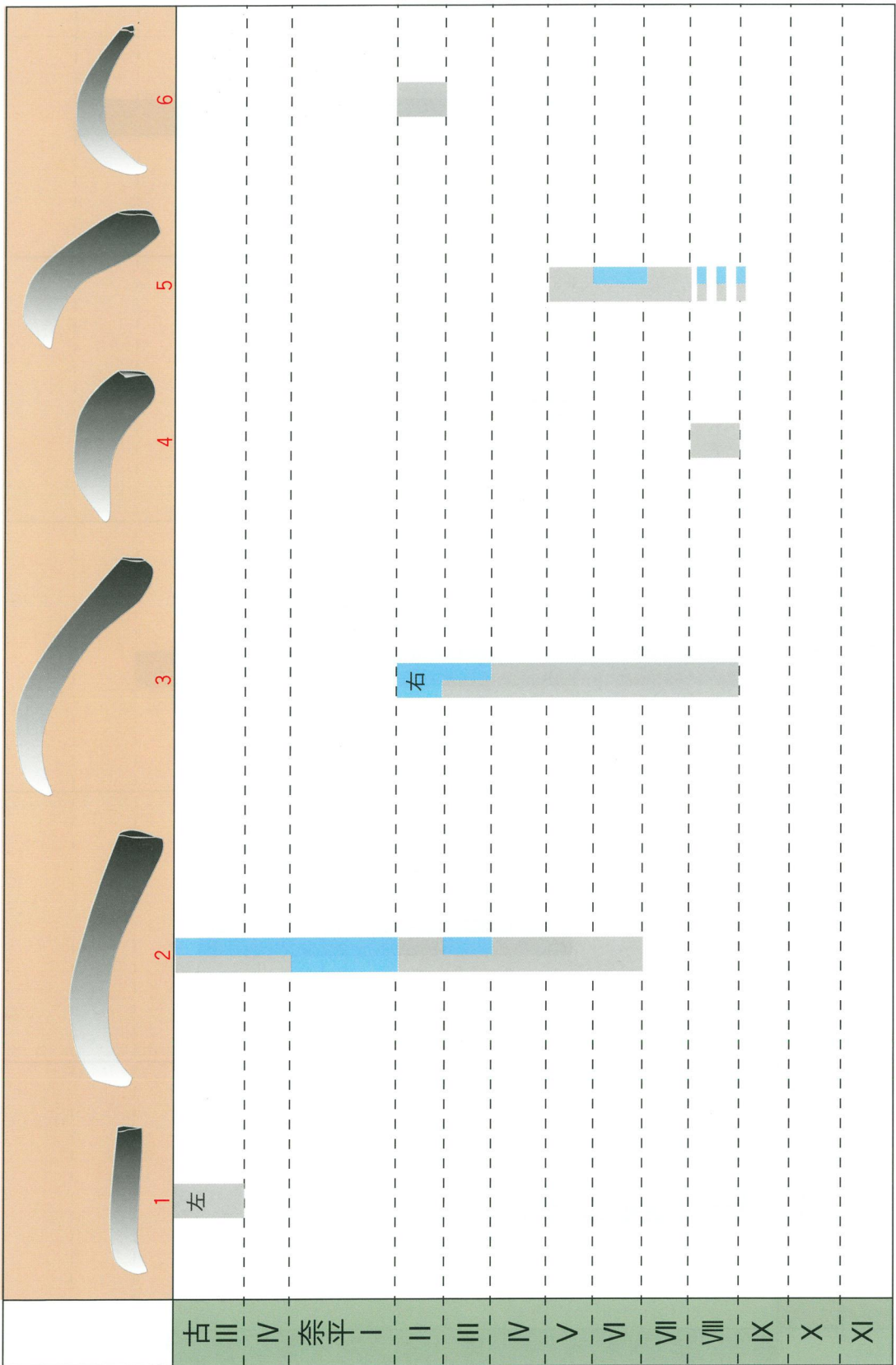


第50圖 鉄鏃消長圖





第51図 刀子消長図



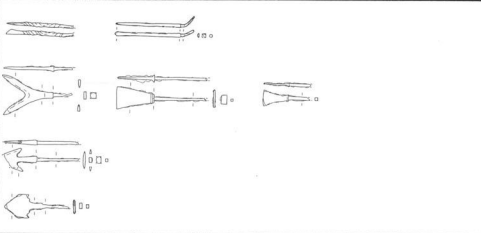
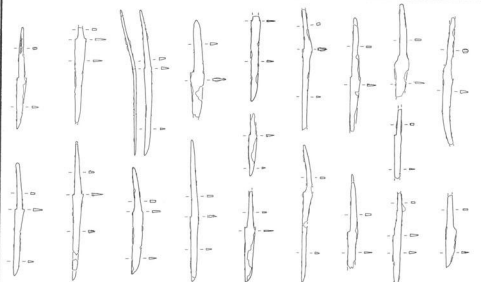

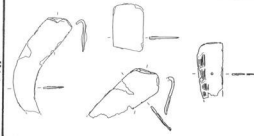
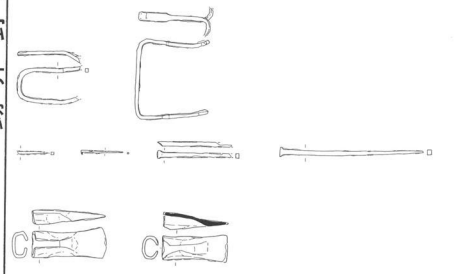
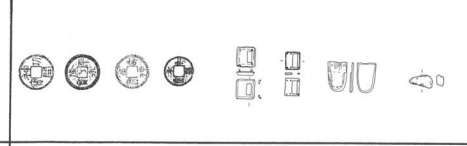
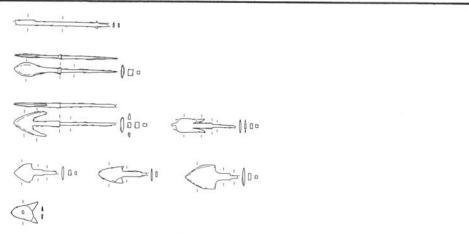
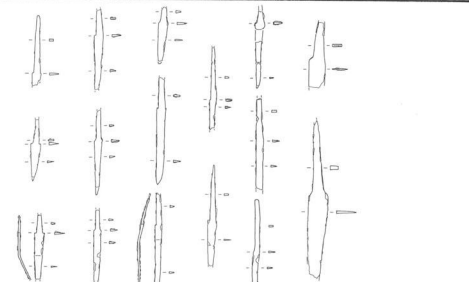


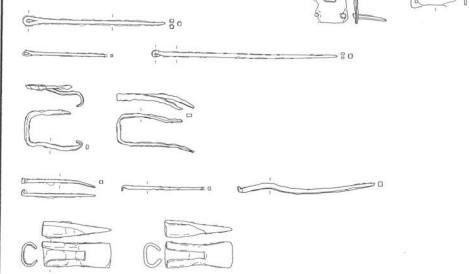
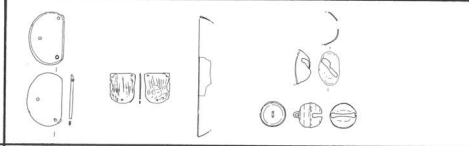
第52図 鎌消長図

鐵器・鐵製品					銅製品	
鍬	刀子	紡錘車	鎌	鋤・斧・釘・鏝等		
奈平Ⅴ期					奈平Ⅵ期	

第53図 金属器・金属製品編年表 1

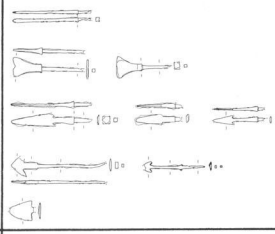
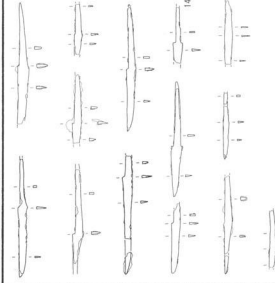
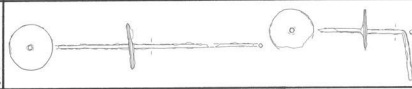
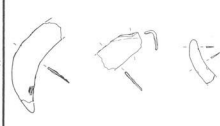
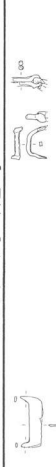
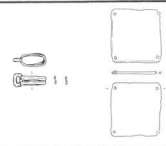

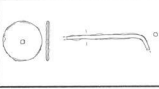
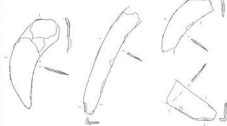

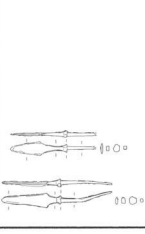

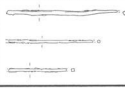




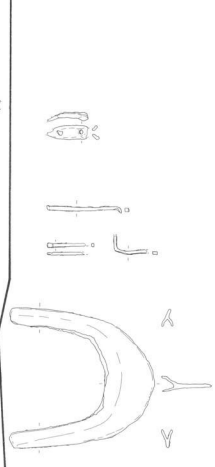
	鐵器・鐵製品				銅製品
	鍬	刀子	紡錘車	鎌	
奈平Ⅱ期					
奈平Ⅲ期					
奈平Ⅳ期					

第54図 金屬器・金屬製品編年表2

		鐵器・鉄製品				銅製品	
		鍬	刀子	紡錘車	鎌	鋤・斧・釘・鏃等	
奈平 V 期							
奈平 VI 期							

第55図 金属器・金属製品編年表 3



	鐵器・鐵製品				銅製品	
	鍬	刀子	紡錘車	鎌	鋤・斧・釘・鎚等	
奈平Ⅶ期						
奈平Ⅵ期						
奈平Ⅴ期						
奈平Ⅳ期						

第56図 金属器・金属製品編年表4

## 第9節 文字資料

ここで扱う文字資料とは、遺物にのこされた文字だけではなく、記号、絵、印、文字を書くための道具である硯なども含めている。

以下、各時期毎に文字資料を概観していく。

○古墳時代Ⅱ期 該当する住居址が少ないことも起因するのであろう、文字資料は皆無である。

○古墳時代Ⅲ期 本期では文字そのものがのこされた資料は存在しない。資料の大半を占めるのはヘラで記された「/」ないし、「×」などの記号であり、土器の焼成前に記されている。器種的には土師器や須恵器の坏や坏蓋であり、記される部位は内外の底面である。その他に、墨で描かれた記号ないし絵がH367出土の土師器杯口縁部に認められる。今回の調査で出土した最も古い墨書土器である。墨ではなく朱墨により記号ないし絵が描かれたものが認められる。H549、H642、H654から出土しており、H549のものは太く「一」を、H642は「米」記号、H654は全体は不明であるが、装飾的である。すべてが土師器杯であり、H654が内面のほかは、外面底部に描かれている。

○古墳時代Ⅳ期 須恵器坏の外面底部にヘラで記された「×」記号の資料が認められる。すべてが焼成前に記されている。

○奈良平安時代Ⅰ期 本期において初めて文字が認められる。ヘラで記された刻書と墨書があり、刻書はH505出土の須恵器坏の外面体部に「全」ないし「金」が焼成前に、墨書はH258とH717の2点が認められる。H258は「王」、H717は判読できない。器種は須恵器坏で外面底部に書かれている。その他にはヘラによる「\*」、「/」、「×」、「o」などの記号が認められる。器種は須恵器の壺Bや坏、有台坏で、部位は壺Bが外面体部の他は、内外面の底部である。すべてが焼成前に記されている。

○奈良平安時代Ⅱ期 前時期に認められるようになった文字は、本期において増加する。焼成前の刻書と、墨書があり、器種的には須恵器と土師器の坏、有台坏に認められ、部位は外面体部か底部である。「大」、「太」、「裏」、「十」、「尺」?、「万」、「土」、「田」などの他に、H63出土の土師器杯外面底部に刻書された「於寺」や、H677の須恵器坏外面体部に墨書された「寺」は本期の本遺跡内に寺が存在した可能性を示唆する資料として注目される。「於寺」を除き基本的に1文字が書かれるが、H50の「太」は外面体部と底部の2ヶ所に同じ文字が書かれている。底面の場合は判断できないが、外面体部の場合、「太」、「裏」、「寺」は横位に書かれている。また、本遺跡内で文字が書かれた証拠とも言える円面硯が2点出土している。焼成前にヘラで記された記号「/」、「×」は須恵器にのみ認められる。器種は坏、有台坏、坏蓋であり、部位は坏、有台坏は外面底部、坏蓋は内面天井部である。

○奈良平安時代Ⅲ期 前時期に比べ資料数は若干少なくなる。文字は刻書が、H105出土の須恵器有台坏外面底部に焼成前に記された「中伯」が1点認められるだけであり、他は墨書となる。墨書は土師器、須恵器の坏、有台坏の外面底部か体部に書かれており、「三」、「木」、「入」、「田」などが認められるが、判読できないものも存在する。H214が倒位、H220が横位の他は外面体部の墨書は正位に書かれている。焼成前にヘラで記された記号は須恵器の坏、有台坏、甕に「×」、「\*」認められる。部位はH220の甕が外面体部の他は、内外の底部であるが、H605やH718は内外面の底部に同じ記号が記されている。

○奈良平安時代Ⅳ期 前時期に比べ資料数は増加する。焼成前にヘラで記された記号は減少する。土師器杯、須恵器坏、有台坏、壺に記される。部位は土師器杯、須恵器坏、有台坏は外面底部、須恵器壺は外面体部である。種類は「×」だけである。墨書は土師器杯、須恵器坏、有台坏、坏蓋に書かれる。部位は外面体部か底部である。「赤」、「吉」、「久」、「中」、「手」、「金手」、「田」、「山神」、「芳」、「大」、の他に「↓」、「\*」などの記号も認められる。また、判読できないものも存在する。外面体部に書かれるものの内「赤」、「手」は横位、「久」は倒位のものが認められる。量的には「中」、「久」が他よりも多い。また、本期には「伯万私印」と彫られた石製印が存在する。このことは、本期頃に当遺跡には、伯麻呂という有力者が存在したことを示唆しており、極めて貴重な資料である。

○奈良平安時代Ⅴ期 前時期に比べ爆発的に資料数は増加する。焼成前にヘラで記された記号は前時期に引き続き減少する。須恵器甕・坏、土師器杯に認められ、種類は「×」、「井」などである。焼成後の刻書も認められ、H153出土の土師器皿には外面体部に横位で「主」、H204の坏には外面体部に倒位で「方」が刻まれている。また、土器ではないが、H332出土の砥石の1面には絵が刻まれている。ヘラ記号とは対照的に墨書は増加する。器種的には、土師器杯・皿・碗・坏蓋、須恵器坏・坏蓋に認められ、部位は外面体部や底部がほとんどであるが、H572出土の須恵器坏蓋は内面天井部である。基本的には正位のものが多いが、横位や倒位のものも存在する。文字数は1点のものが大半を占めるが、2文字や3文字のものも認められ、その場合、H161の「大方寺」やH439の「金手」のような連続し

た文字ではなく、H137の「乙」を2ヶ所やH153の「交」・「吉」などのように単文字を2ヶ所に書くものも存在する。具体的に書かれる文字は「↓」・「◎」・「乙」・「丙」?・「生」・「支」・「交」・「安」・「吉」・「貞」・「木」・「本」・「大」・「大方寺」・「仁」・「長」・「米」・「久」・「左」・「右」・「中」・「一」・「四」・「六」・「金手」・「土」・「芳」・「前」・「刀」・「主」・「舎」・「田」・「一王」・「万財」・「室」・「大?」・「疋」・「楨」・「子」など判読不可能なものも含め多種である。これらの中で特に多く見受けられるのは、「乙」・「中」・「金手」・「仁」などである。

以上のような文字資料とは大きく異なる資料が本期には認められる。H380出土の仏鉢形の甲斐型土器で、ヘラミガキあるいは暗文の手法により、土器の焼成前に文字が書かれている。内面底部中央には「佛」が一文字、外面には「甲斐国山梨郡大野郷戸?」「乙作八千」「此後?佛?為」「八千体?」など、多くの文字が書かれている。本資料の重要性は、古代甲斐国の地名が具体的に記されていること、甲斐国で作られ搬入された土器であることにある。このことから、当時の山梨県山梨市と、長野県佐久市の間に交流があったことが明らかとなったのである。いずれにせよ、文字の判読ができない部分もあり、今後の研究により、その内容や背景が明らかにされることを期待したい。

○奈良平安時代Ⅵ期 前時期と同様な傾向である。焼成前のヘラ記号は更に減少する。土師器甕外面体部や須恵器坏外面底部に「×」や「/」が記される。焼成後の刻書も少数ではあるが認められる。H184の土師器皿は外面体部に横位で「天」、H725の土師器杯は外面体部に2ヶ所、「九」が倒位で記されている。墨書土器は前時期同様に大量に認められる。器種的には土師器杯・碗・皿が大半を占め、須恵器坏、灰釉陶器皿が少量認められる。部位は外面体部や底部に限られる。正位のものが多いが、倒位・横位も認められる。前時期同様に1文字のものほとんどであるが、2文字のものも存在する。具体的には「生」・「衆」?・「芳」・「三」・「↓」・「卍」・「文」?・「牟」?・「吉」・「貞」・「在」・「丙」・「千」・「久」・「主」・「仁」・「前」・「加」・「物」?・「方」・「室」・「乙」・「令」・「山」・「義」・「西」・「上」・「大」・「田」・「忠」・「左」・「全」・「前仁」・「小郡」・「金手」・「義山」や判読不能なもの、記号など多種である。これらの中で特に多く見受けられるのは、「貞」・「前仁」である。

○奈良平安時代Ⅶ期 量的には大幅に減少する。焼成前のヘラ記号は少量が須恵器に認められる。坏外面体部・底部、壺外面底部などに、「×」・「卍」が記されている。墨書は土師器・須恵器に認められるが、須恵器は少量である。器種的には坏・碗であり、部位は外面体部・底部に正位ないし倒位に書かれている。1文字、1ヶ所が基本であるが、H882に「金手」と「?」がH414に「山大」と書かれたものが存在する。具体的には「山」・「丙」・「手」・「大」・「全」・「主」・「昇」?・「令」・「王」・「本」などであるが、特に多く見受けられるものは存在しない。

○奈良平安時代Ⅷ期 量的には更に激減する。刻書は一切見受けられない。墨書は土師器杯・碗、灰釉陶器皿・碗に認められる。部位は外面体部が主体であるが、H472に外面底部のものが1点認められる。正位・横位・倒位のもの存在する。H974におそらく「下」が2ヶ所に書かれたものが存在する他は、1ヶ所に書かれている。具体的には「一万」・「大」・「万」・「本」・「七八」である。

本期を最後に文字資料は認められなくなる。

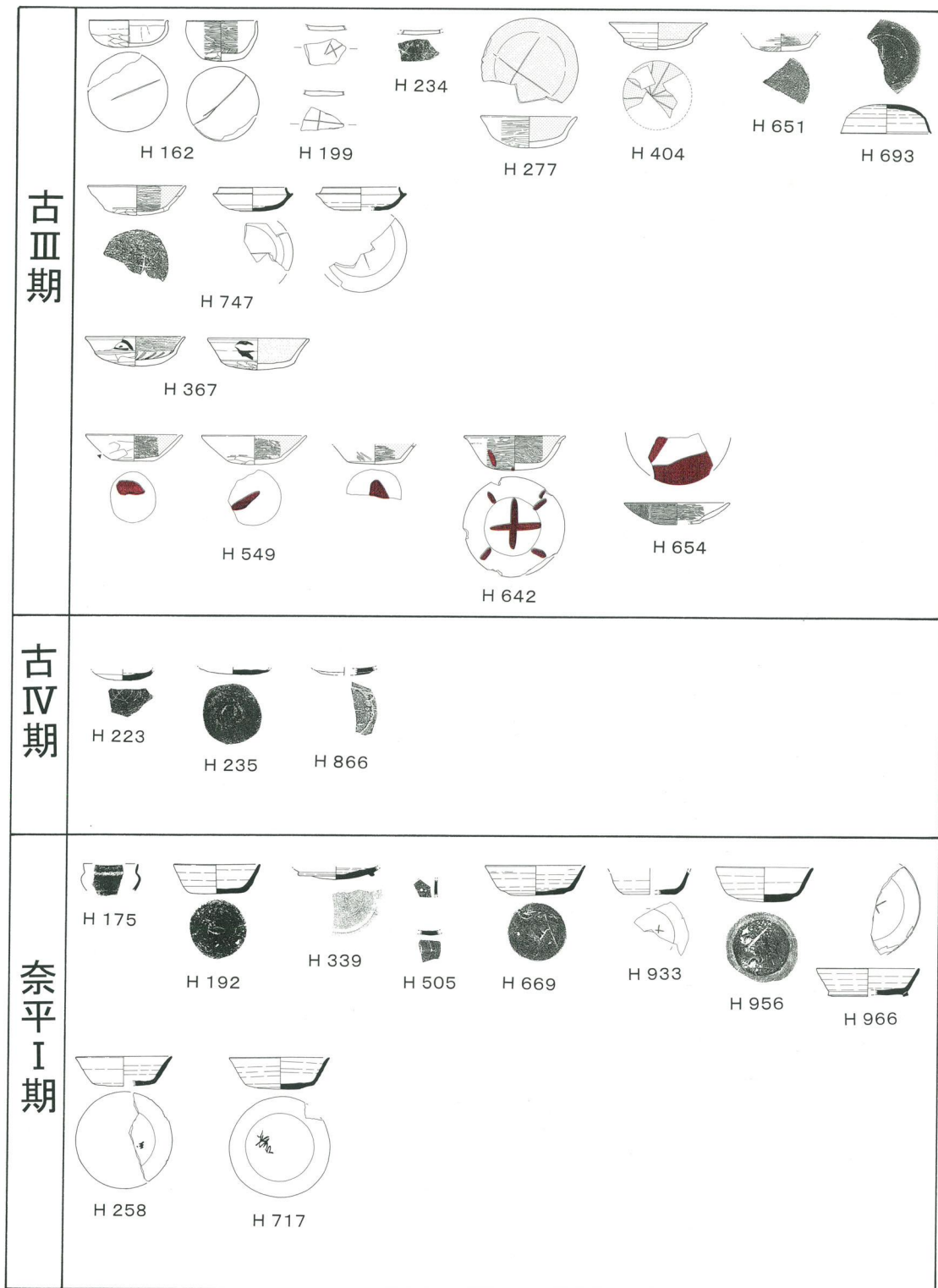
## 第10節 集落の変遷

第2節でも述べたように、竪穴住居址と共に集落を構成する重要な要素である掘立柱建物址については時期を特定することが困難であるため、本節では片手落ちではあるが、竪穴住居址の各時期の推移により、聖原遺跡の集落の変遷を見ていきたい。無論、10万㎡に届かんとする面調査が実施された本遺跡でさえも、集落は更なる広がりを見せており、ここで捉える事象が聖原遺跡の全容ではない。

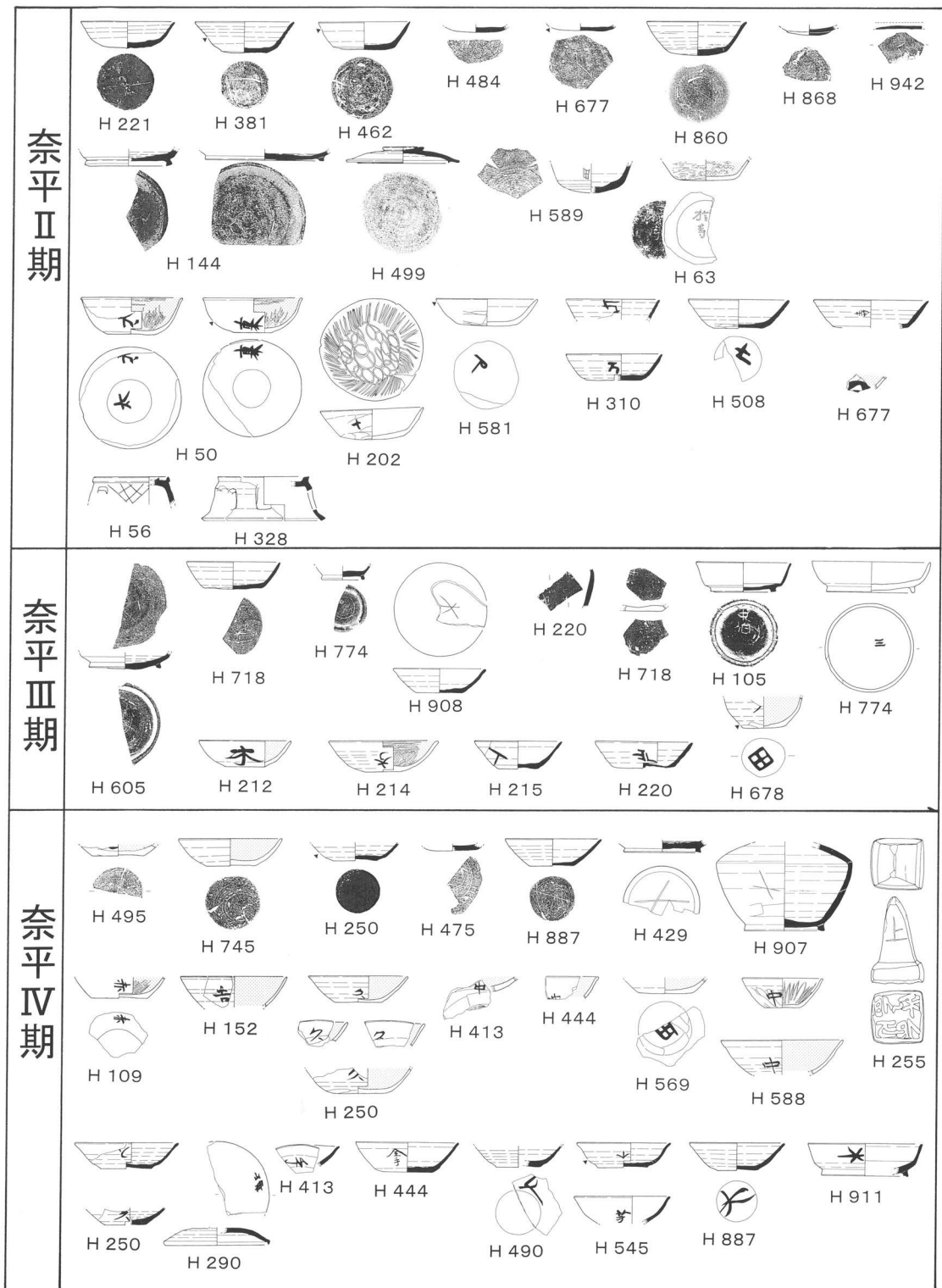
○古墳時代Ⅱ期 調査区の中央北西よりに3軒の住居址が散在する。土器様相から本期に分類した3軒ではあるが、時間軸上では、極めて古墳時代Ⅲ期に近く位置するのであろう。

○古墳時代Ⅲ期 調査区の約半分、南西部分に集中して、確実なものだけでも100軒を越える住居址が出現する。調査区の東北端から延びる未発達田切りの端部を境界に、これより南西半にのみ集落が展開することから、当時はこの未発達田切りの周辺は居住には適さない環境であったか、居住以外の目的に利用されていたようである。また、集落は東西方向を意識して展開しているようであり、細かく見れば3～4軒を最小単位に分類することも可能であろうが、大きく北部分と南部分に分かれているようである。いずれにせよ、本期に見られる唐突な集落の出現は、この集落が所謂「計画村落」であることを示している。

○古墳時代Ⅳ期 前時期には集落が展開していなかった調査区の東北半の未発達田切りを挟んだ北側に集落の中心が移動する。前時期に集落の中心であった調査区南西部分にも集落は展開しているが、密集度は低い。時間軸上において、前時期により近い部分の住居址が図上に反映されている可能性も高い。しかし、本期最大規模のH173号住居

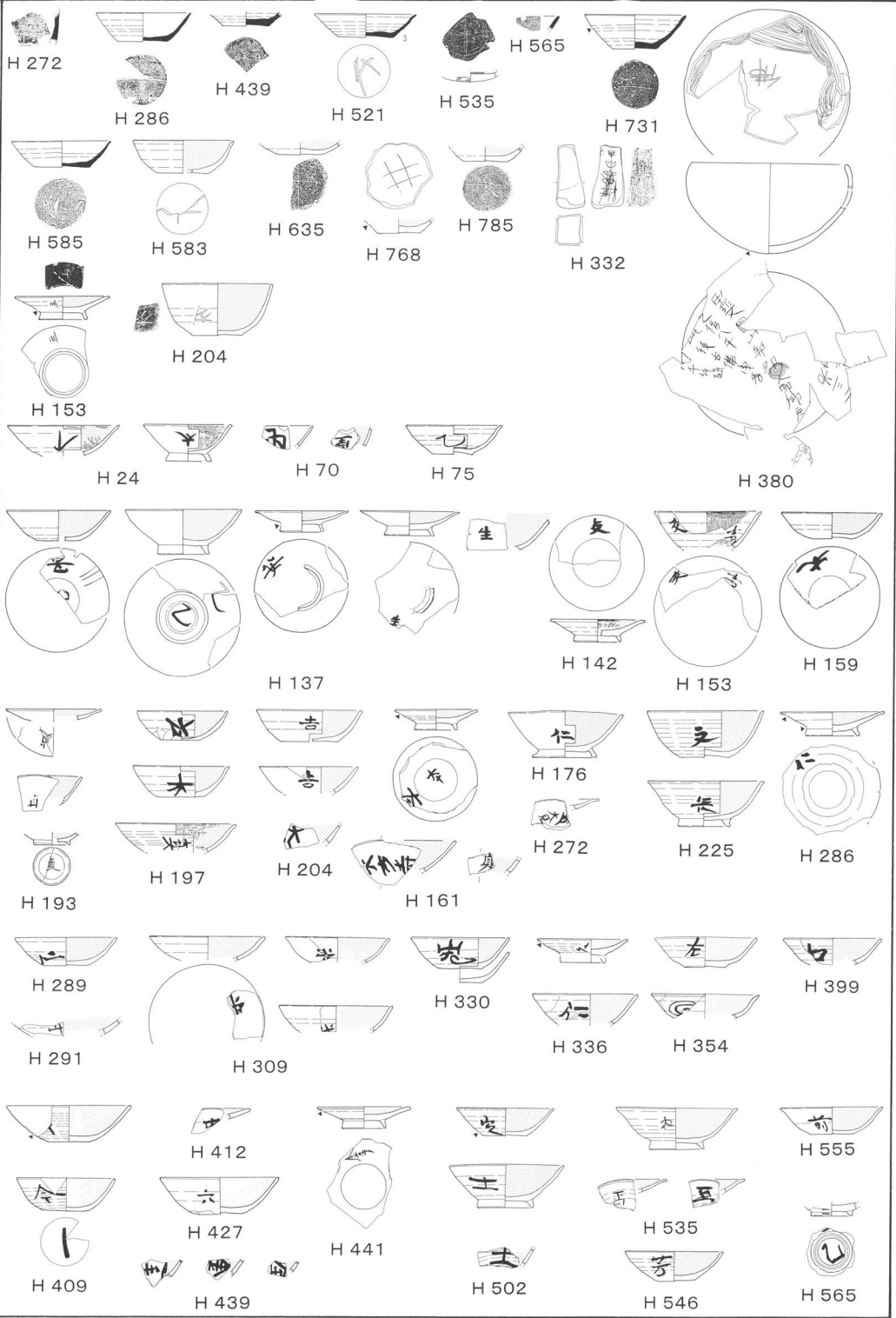


第57図 文字資料編年表 1



第58図 文字資料編年表2

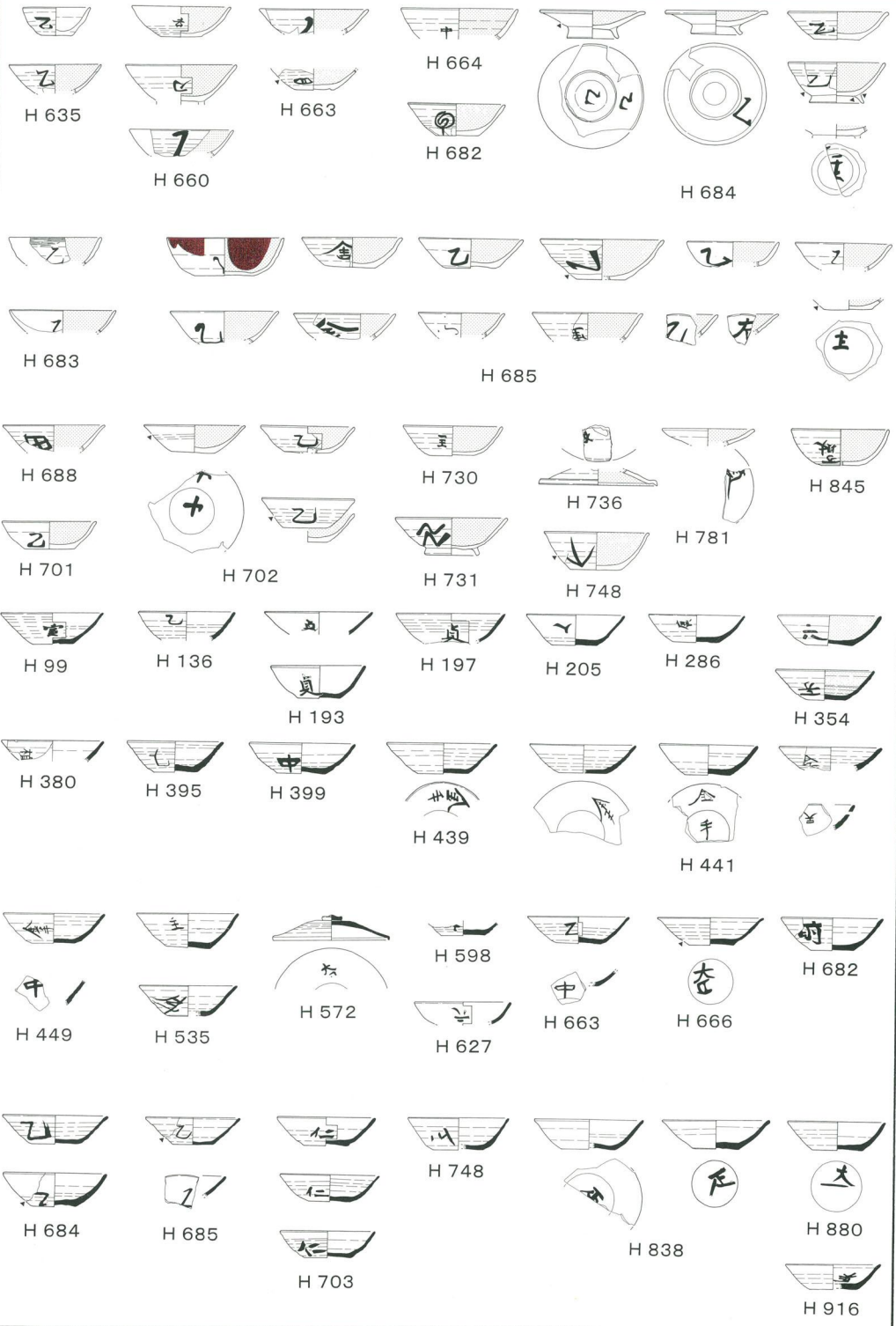
奈平V期



第59图 文字資料編年表 3

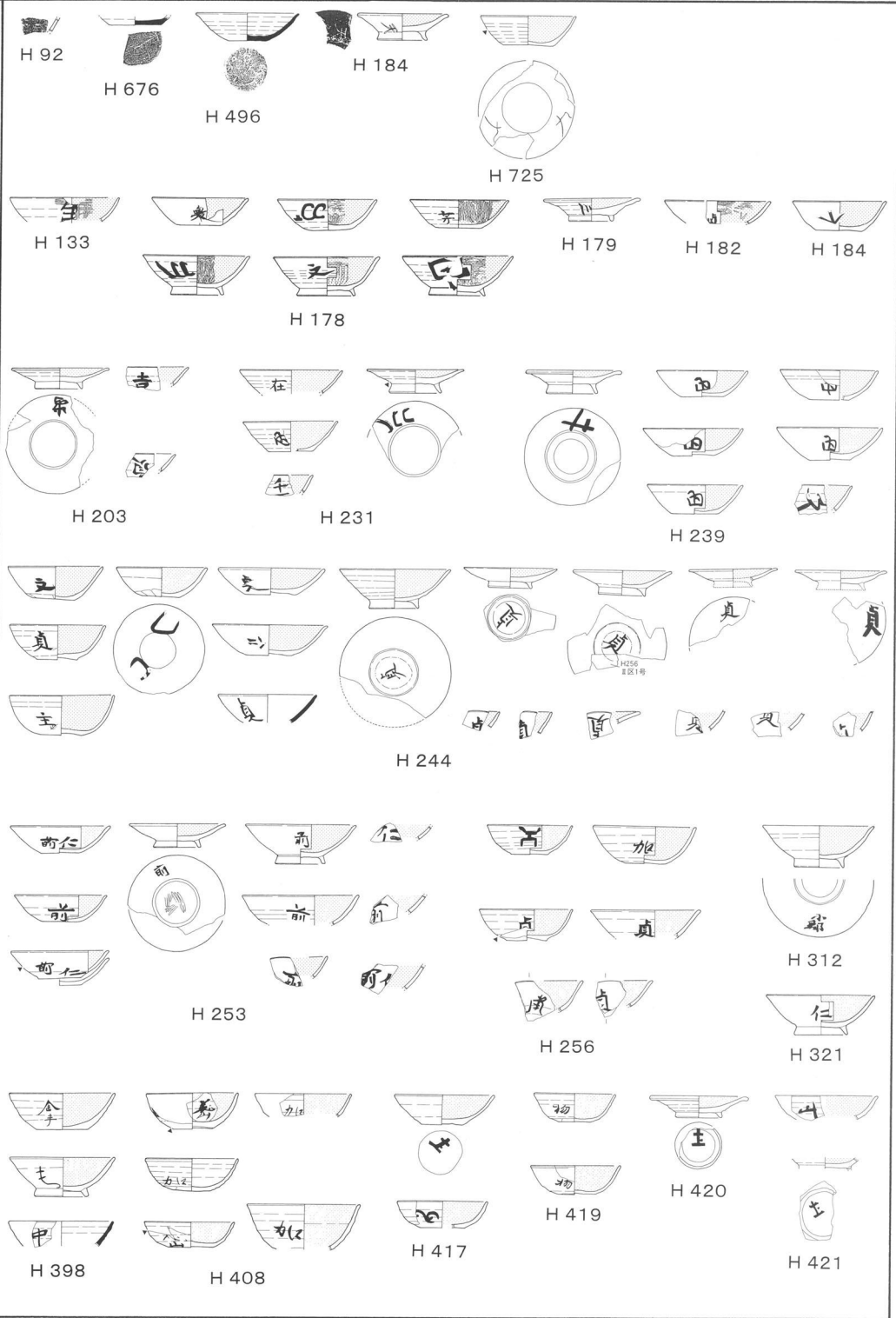


奈平V期



第60図 文字資料編年表 4

奈平VI期



第61図 文字資料編年表 5



奈平Ⅶ期	<p>H 237      H 814      H 228      H 233      H 237</p> <p>H 432      H 183      H 230</p> <p>H 241      H 405      H 414      H 422      H 460      H 498</p> <p>H 397</p> <p>H 811      H 855      H 882      H 961</p>
	<p>H 246</p> <p>H 974      H 233</p> <p>H 472      H 858      H 859</p> <p>H 403      H 854</p>
	<p>奈平Ⅸ期</p>

第63图 文字資料編年表 7

址は、調査区南西部分に位置しており、この区域が特別な場所である可能性もある。また、調査区東北半の未発達田切りを挟んだ南側にも3軒の住居址が認められ、この部分への集落の展開が始まったことが伺われる。本期においては未発達田切りに住居址は構築されないことから、この田切りは埋没せず、谷であったものと思われる。なお、県埋文センターの調査では、この田切り内に畝上の溝が発見され畑との見解が出されているが、周囲より低く水が集中する場所に畑を作るのは不自然であること、遺跡内には広い空地が存在することなどから、畑ではないものと考えられる。谷を迂回して行き来する煩雑さを解消するための、丸太を敷設した木道跡なども可能性があるのではないだろうか。

○奈良平安時代Ⅰ期 第68図に示したように、古墳時代Ⅲ・Ⅳ期の集落を合わせたような展開となり、大きく4ヶ所に集落は分かれる。前時期に集落が展開し始めた調査区東北半の未発達田切りを挟んだ南側部分も、他より閑散とした分布ではあるが、ひとつのまとまりが出来上がる。数的にも前時期と比べ急増しており、集落規模は拡大し始める。最も密集度が高いのは、調査区東北半の未発達田切りを挟んだ北側部分であるが、本期最大規模の住居址H131は調査区南西部分に存在する。前時期も含め、集落は古墳時代Ⅲ期と同様に東西を意識して展開しているようである。本期においても未発達田切りに住居址は構築されないことから、この田切りは埋没せず、谷であったものと思われる。

○奈良平安時代Ⅱ期 集落は大きく6ヶ所のまとまりとして捉えることができる。前時期まで集落が展開しなかった調査区中央南部分に新たなまとまりが出現する。本期は前期よりも更に住居址が増加しており、墨書・刻書土器や円面硯の出土が見られる。墨書・刻書土器の中には「寺」や「於寺」なども認められ、本期に当遺跡内に寺が存在したようである。しかも、「於寺」とは「うへの寺」という意味であることを考えると、対応する「したの寺」も存在した可能性があり、ふたつの寺が存在したようである。本期最大規模の住居址H667は調査区ほぼ中央に位置し、周囲には同時期の住居址は存在しないことから、他の住居址とは隔絶された特別な存在であることが伺われる。密集度が高い部分はH667を含む調査区中央南部分と、調査区西南端のまとまりである。なお、本期においても未発達田切りに住居址は構築されないことから、この田切りは埋没せず、谷であったものと思われる。

○奈良平安時代Ⅲ期 調査区全体に散在してはいるが、大きく4ヶ所のまとまりとして捉えることができる。本期最大規模の住居址H718は、前時期最大規模の住居址H667のやや西方に存在し、H667ほどではないが周囲には同時期の住居址は存在せず、他の住居址とは隔絶された特別な存在である。密集度は調査区南西部分が高く、未発達田切りを挟んだ北東部分の2ヶ所は密度が低い。本期においても未発達田切りに住居址は構築されないことから、この田切りは埋没せず、谷であったものと思われる。

○奈良平安時代Ⅳ期 前時期同様に大きく4ヶ所のまとまりとして捉えることができる。本期最大規模の住居址H250が調査区の南西に動いたためか、調査区中央のまとまりが拡大し、調査区南西端のまとまりが縮小した様相を呈する。墨書土器の大半は中央のまとまりから出土している。また、H250の北に位置する小型の住居址H255からは、「伯万私印」と刻まれた石製印が出土しており、H250を中心とする一帯が本期の集落の中心であったものと思われる。集落規模は本期と後続する奈良平安時代Ⅴ期においてピークに達する。なお、本期においても未発達田切りに住居址は構築されないことから、この田切りは埋没せず、谷であったものと思われる。

○奈良平安時代Ⅴ期 大きく3ヶ所のまとまりとして捉えることができる。未発達田切りを挟んだ両側と、それ以外である。本期最大規模の住居址H635は調査区の中央南端付近に位置するが、規模的にも立地的にも他の住居址との格差は認められない。本期に認められる、本遺跡を代表する出土遺物であろう、「甲斐国山梨郡大野郷・・・」が記された甲斐型土器は小型のH380より出土しており、立地は調査区中央北端付近の周囲に住居址が存在しない、隔絶されたもとれる場所ではある。それ以外に出土した墨書土器などの文字等が記された遺物は、調査区内から万遍なく出土しており、特定の傾向などは見いだせない。本期においても未発達田切りに住居址は構築されないことから、この田切りは埋没せず、谷であったものと思われる。

○奈良平安時代Ⅵ期 調査区北東端の未発達田切り南、調査区中央、調査区南西の3ヶ所にまとまりが認められる。銅製品・古銭、墨書土器等が特定の住居址から出土する傾向は見られない。本期最大規模の住居址H517は規模的にも、立地的にも特別な存在ではないようではある。本期においても未発達田切りに住居址は構築されないことから、この田切りは埋没せず、谷であったものと思われる。

○奈良平安時代Ⅶ期 前時期同様な位置に3ヶ所のまとまりが認められ、墨書土器等が特定の住居址から出土する傾向は見られない。本期最大規模の住居址H414は調査区中央のまとまりに存在し、規模は他と比べ大規模であり、周辺部は調査区の中で住居址の密集度は最も高く、特別な存在と捉えて良いようである。本期において初めて未発達田切り内に住居址が進出することから、谷から安定した平地に変容したものと思われる。

○奈良平安時代Ⅷ期 調査区南西のまとまりが消滅し、中央のまとまりは北端に縮小、収縮する。北東端のまとまりだけがわずかに規模を拡大する。集落の規模自体が前時期までと比べ極端に縮小している。本期最大規模の住居址H841は北東端のまとまりに位置するが、規模的にも立地的にも他との格差は認められない。前時期同様に未発達田切り内にも住居址が構築されている。

○奈良平安時代Ⅸ期 前時期に縮小した集落規模は本期になり、若干盛り返す。本期の集落の特徴は、調査区の南辺に集落が偏在することである。つまり、遺跡の立地する田切り台地の南端に住居址が集中し、北端には一切認められなくなる。調査区の北東部、中央部、南西部の3ヶ所にまとまりが見られ、本期最大規模の住居址H613は中央部のまとまりに位置する。規模的には中央部分のまとまり内では他と比べ、圧倒的に大規模であり、全体の中でも、南西部のまとまりに位置するH323とともに他とは異なる規模の住居址と言える。しかし、出土遺物の面から見ると、H613の西に位置するH615から、八稜鏡や白磁といった特殊な遺物が出土しており、H613は他と異なる特別な遺物が出土していない。H613・H615をひとつのまとまりとして、本期の集落の中心と捉えた方が良いのかも知れない。

○奈良平安時代Ⅹ期 集落全体の規模は縮小する。前時期同様に調査区の南辺に集落が偏在する。前時期には3ヶ所のまとまりが見られたが、調査区南西部のまとまりが消滅し、中央部と北東部の2ヶ所のまとまりとなる。本期最大規模の住居址はH560であるが、1軒だけが際だって大規模なわけではなく、立地上も特別な存在とは捉えられなし、特殊な遺物も認められない。

○奈良平安時代Ⅺ期 調査区北東部の、未発達田切りの南に2軒の住居址が認められるだけとなる。古墳時代Ⅱ期と同様に、時間軸上は奈良平安時代Ⅹ期に極めて近い部分に位置するのであろう。本期以降において、調査区内に集落は営まれていない。

## 第11節 瓦塔について

未発達田切りの西端部に位置する、F196掘立柱建物址、H735号住居址とその周辺の未発達田切りが埋没して形成された黒色帯から出土した複数の瓦塔片は、同一個体の可能性が高いものと思われる。

出土した部位は基壇（二重）、初軸の隅・面、屋蓋、九輪であり、県内出土の瓦塔資料としては、良好な資料であろう。焼成は土師質であり、屋蓋の一部には黒斑が認められるが、九輪には火襷が確認できることから、比較的高温で焼成されたものと思われる。基壇の一部には赤彩の痕跡らしきものも認められるが、断定できない。

屋蓋の屋根瓦は半裁竹管状工具の押し引きにより、丸瓦だけが表現されており、幅約1.1cmで、瓦の継ぎ目長は軒先が狭く約1cm前後、順次長くなり、1.5cm～2cm前後になっているが、出土資料から見る限り、不規則であるが、2cm前後の部分が多い。垂木は幅2cm前後の部分と、1.5cm前後の部分認められる。ヘラ状工具による削りだしにより表現されている。隅垂木は剥落したものが1点出土しており、後から貼付されたことが判明した。断面の観察から、屋蓋は垂木を含む本体に、瓦厚の粘土を貼り付け、瓦を創出したことがわかる。

九輪部分は第4分冊では、須恵器壺？として掲載してあるが、その後瓦塔の九輪であることに気がついた。九輪であるから本来は同一形状のものが9点存在したものと思われる。

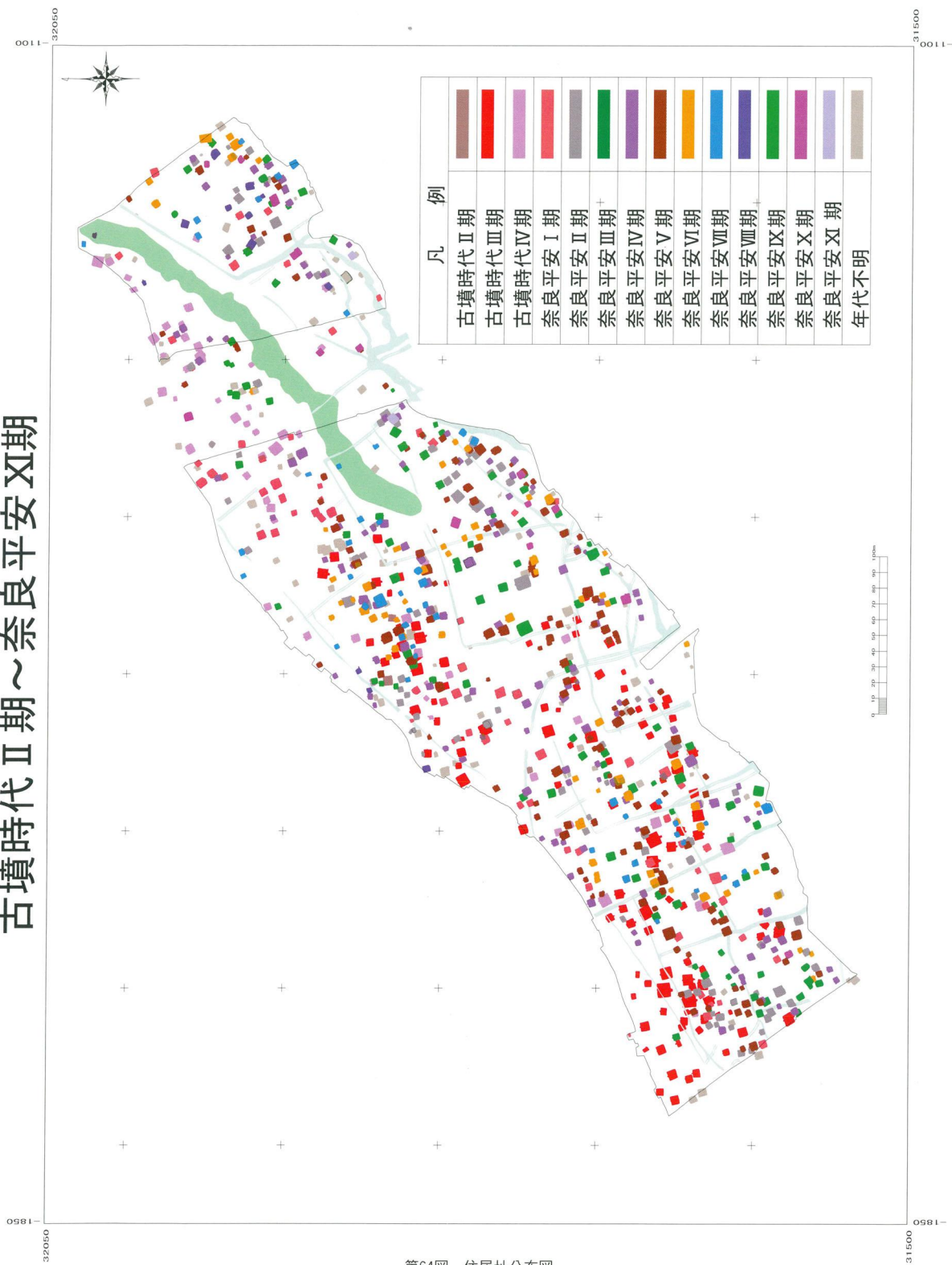
瓦塔を構成する部位としては宝珠、竜車、水煙、請花、伏鉢、露盤、二～五軸、初軸の組物部分や、屋蓋の隅棟部分や中心部分などの多くの未出土部分が存在しており、瓦塔の全容は知りようもないが、推定される高さは1m前後であろうと思われる。瓦や垂木の表現から、池田敏広氏の分類（池田1999年）に当てはめれば、瓦表現は幅広工具押し引きB手法、垂木表現はヘラ削り出しC1ないし、C2手法に該当し、一軒構成である。推定される年代は8世紀後半～9世紀中葉となる。これに調査により得られた情報を加味すると、今回出土した瓦塔の年代は、奈良平安時代V期～9世紀前半が比定される。

本節冒頭に記したF196やH735は寺ないし、それに付随あるいは関連する遺構であろう。出土した瓦塔はそこに安置されていたものと思われる。本遺跡から出土した、「於寺」刻書、「大方寺」・「寺」墨書は上記の遺構を指し示したものかも知れない。いずれにせよ、平安時代の東信濃佐久の地に仏教を信仰する人々が確実に存在した証拠と言えよう。

1) 1999年 研究紀要第7号関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較・検討 財団法人栃木県文化振興事業団・埋蔵文化財センター  
\* 出河裕典氏には当遺跡出土を瓦塔を実見して頂き、貴重な教示を受けた。

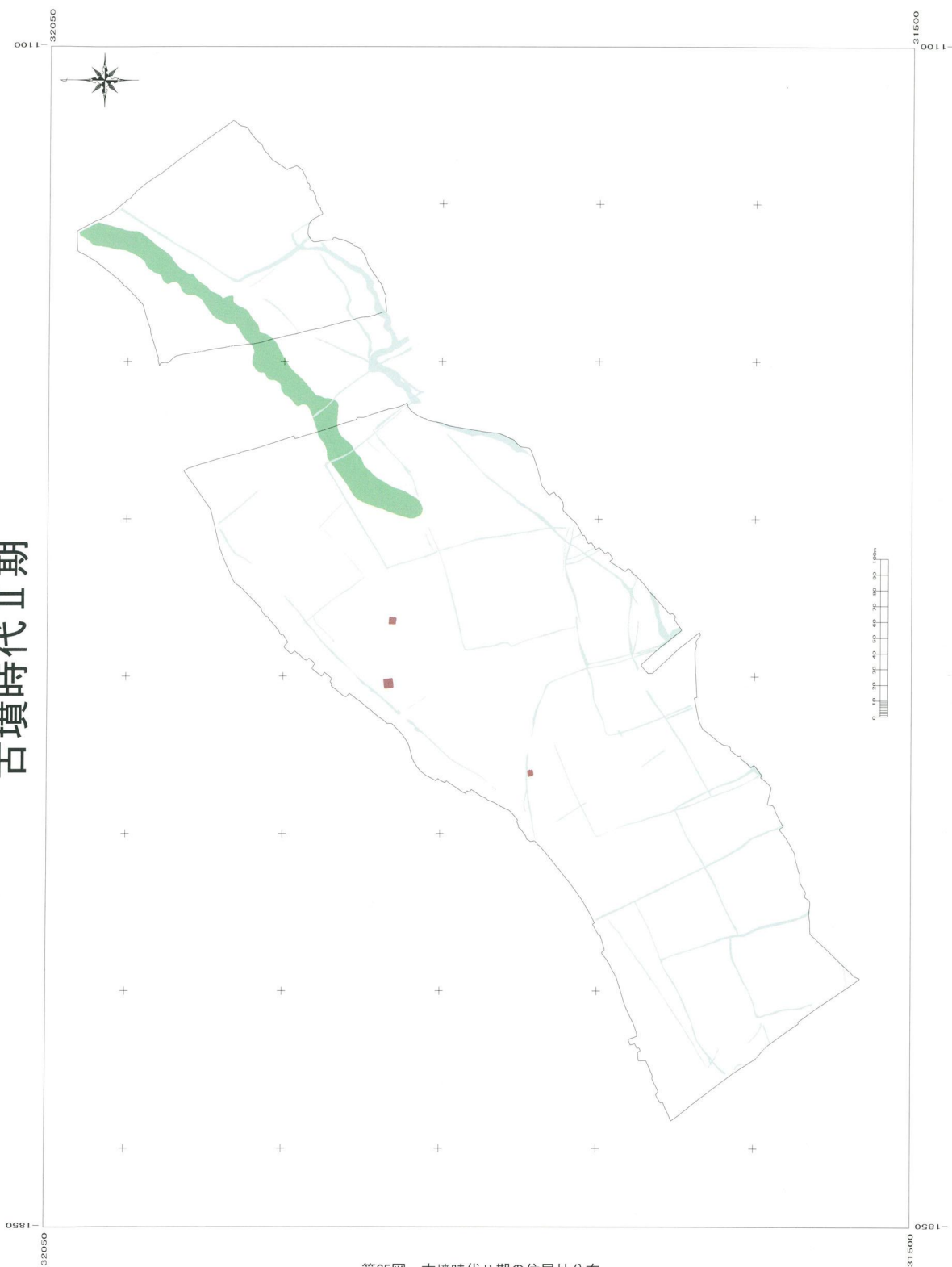


# 古墳時代Ⅱ期～奈良平安Ⅸ期



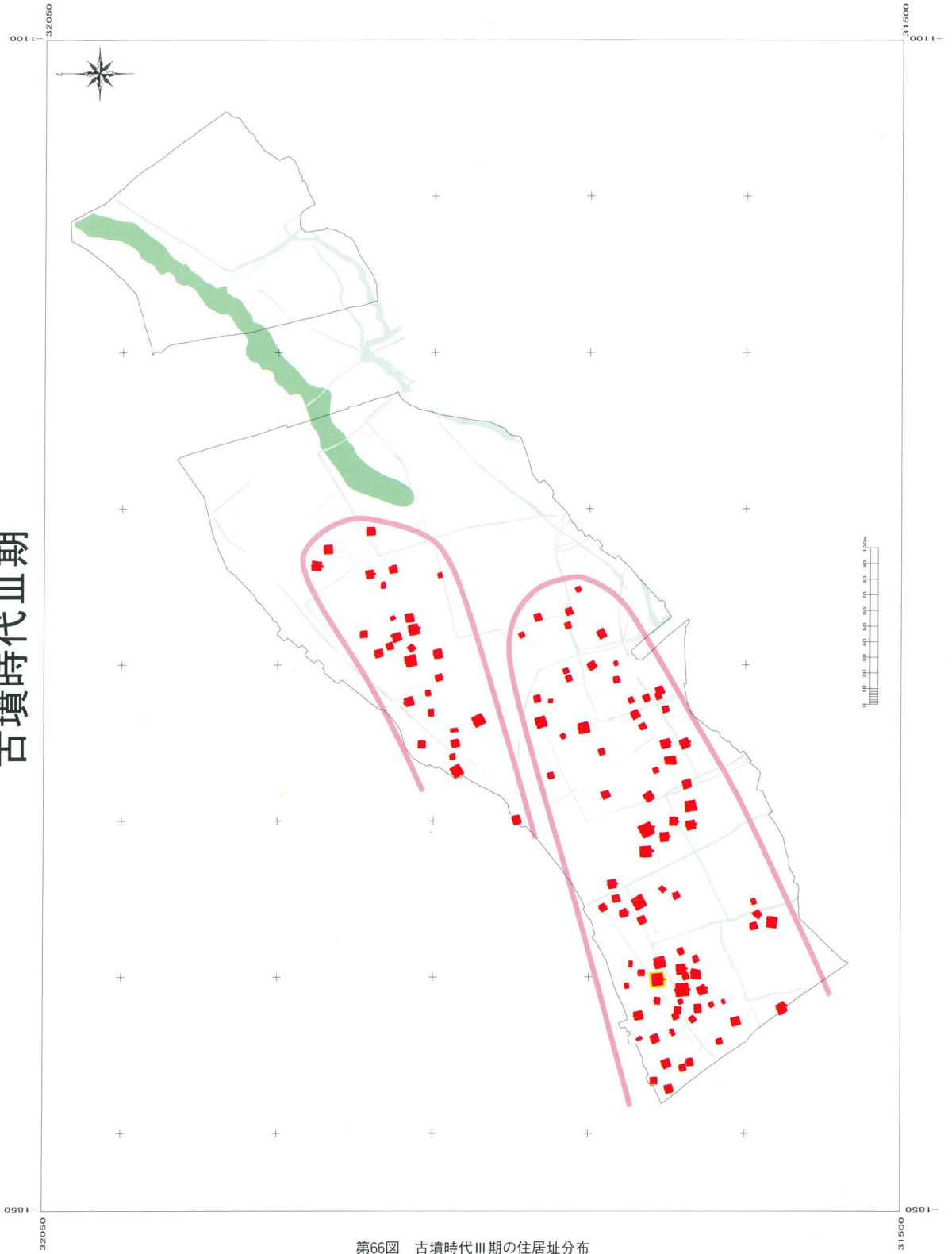
第64図 住居址分布図

# 古墳時代Ⅱ期



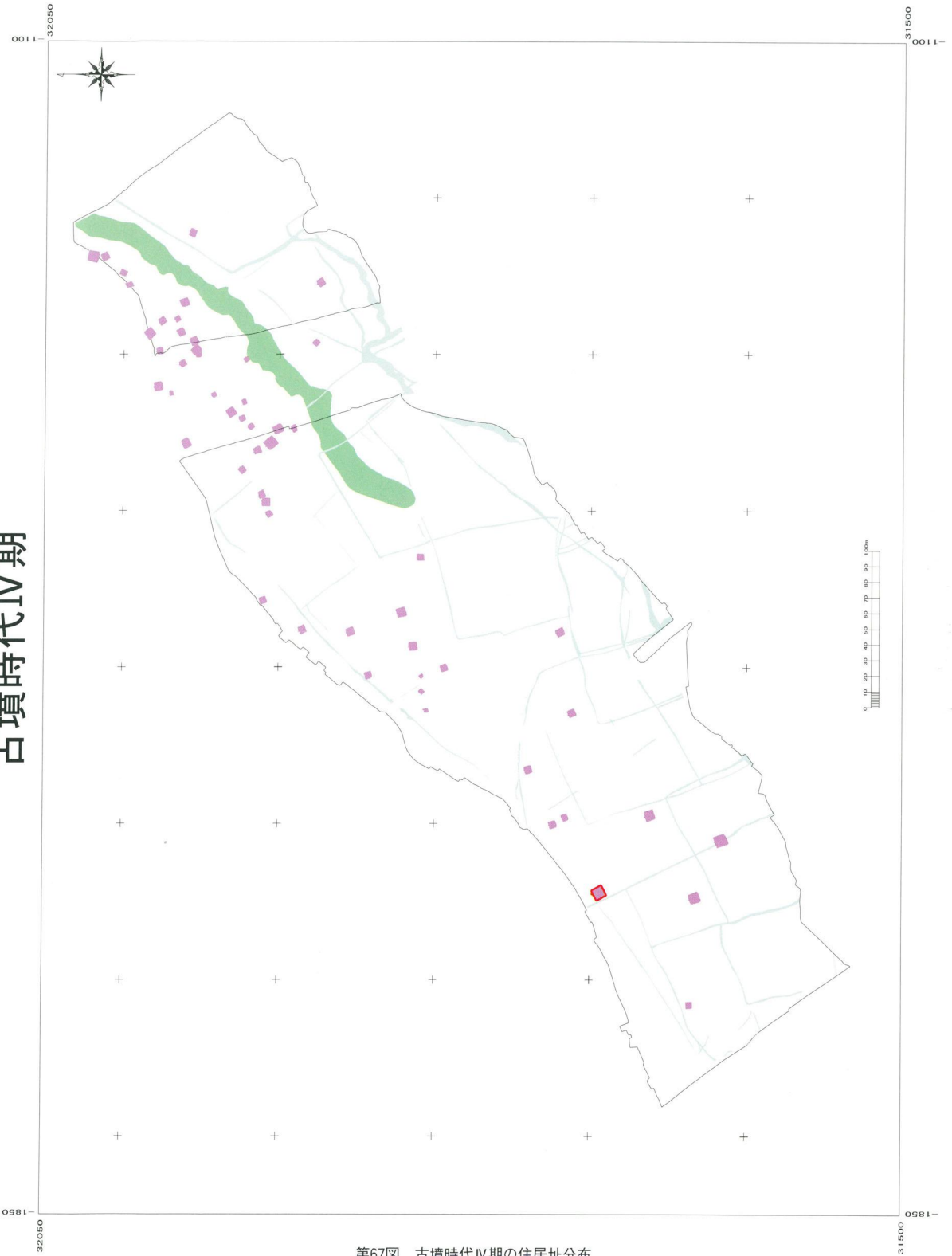
第65図 古墳時代Ⅱ期の住居址分布

古墳時代Ⅲ期



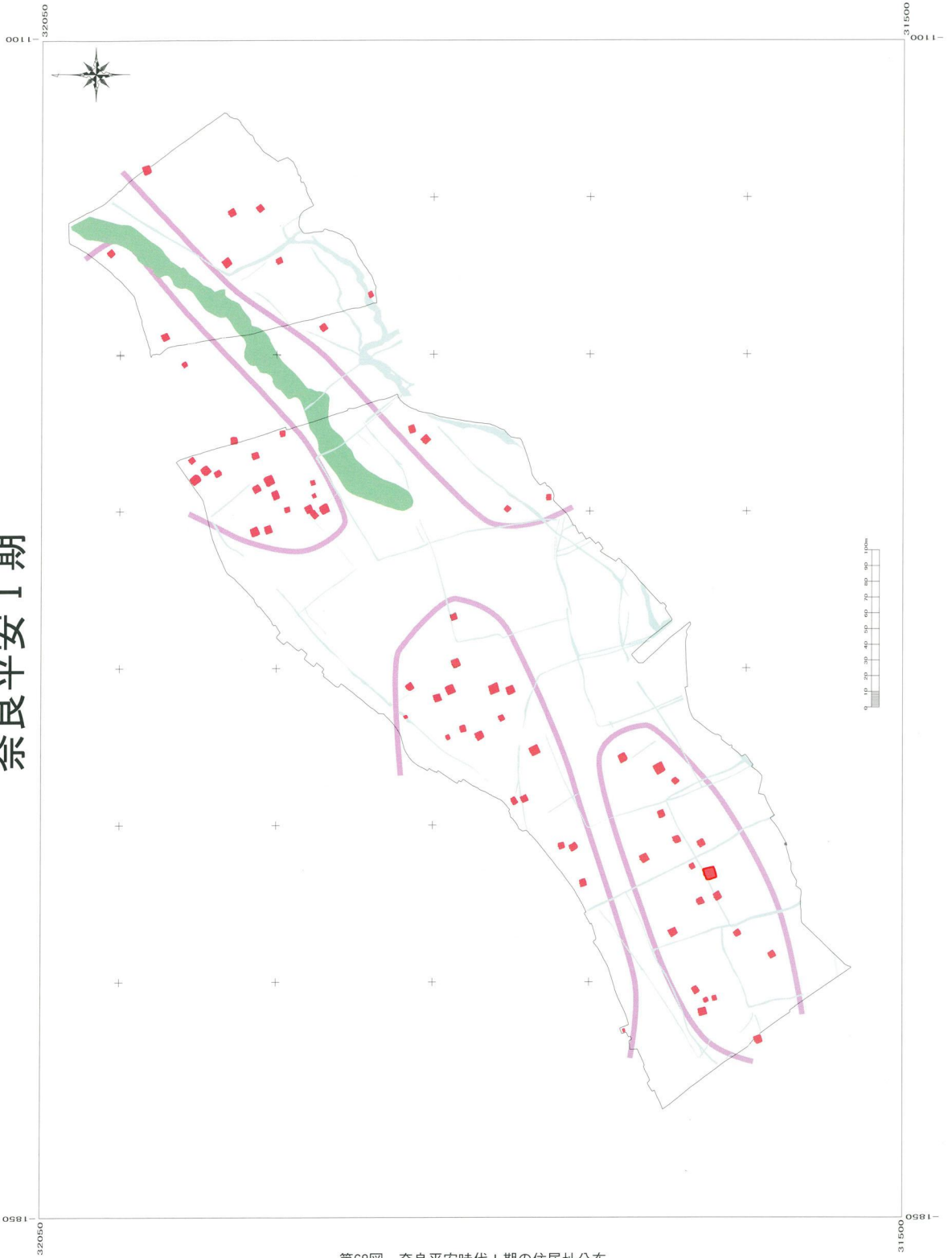
第66図 古墳時代Ⅲ期の住居址分布

古墳時代Ⅳ期



第67図 古墳時代Ⅳ期の住居址分布

奈良平安Ⅰ期



第68図 奈良平安時代Ⅰ期の住居址分布

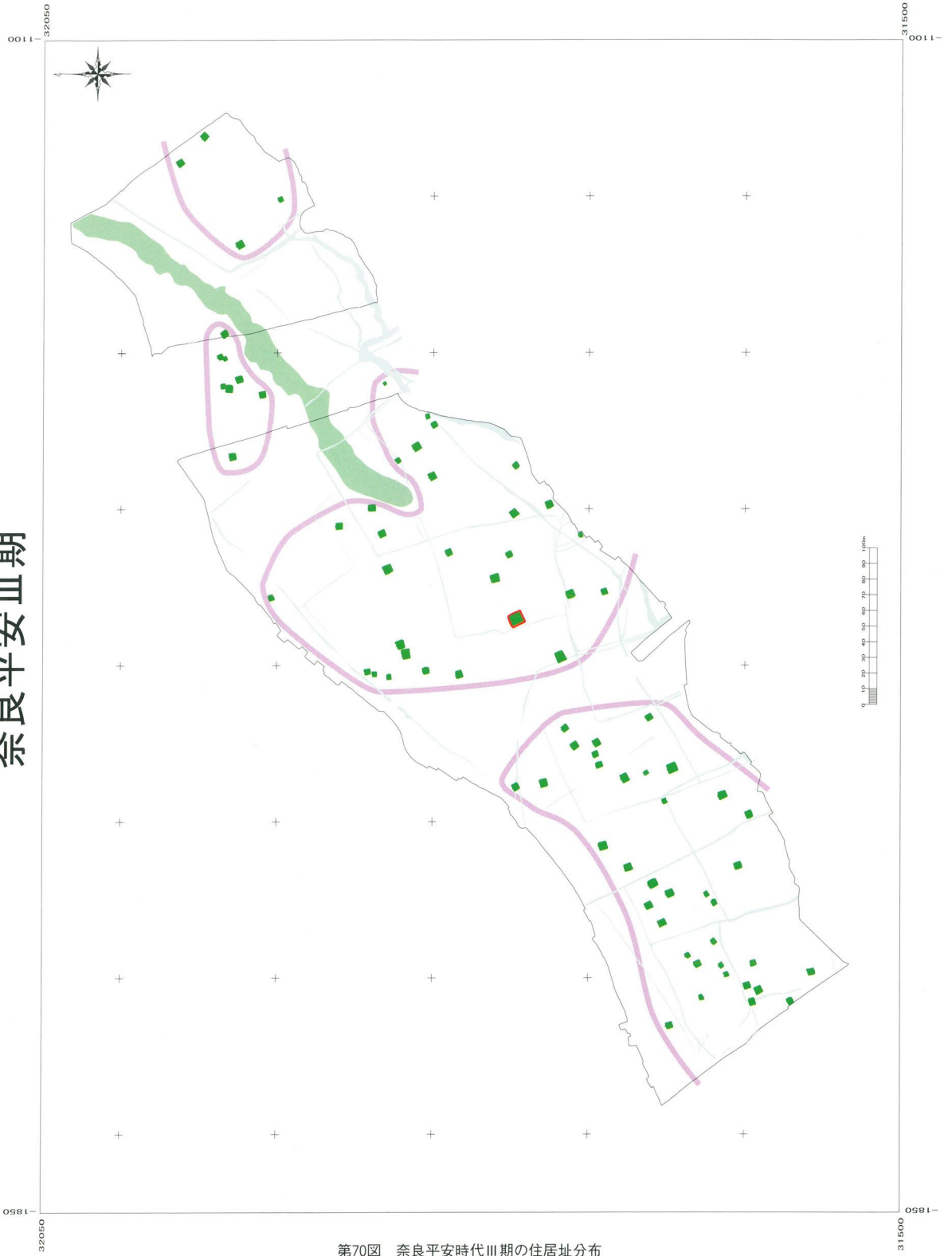
奈良平安Ⅱ期



第69図 奈良平安時代Ⅱ期の住居址分布

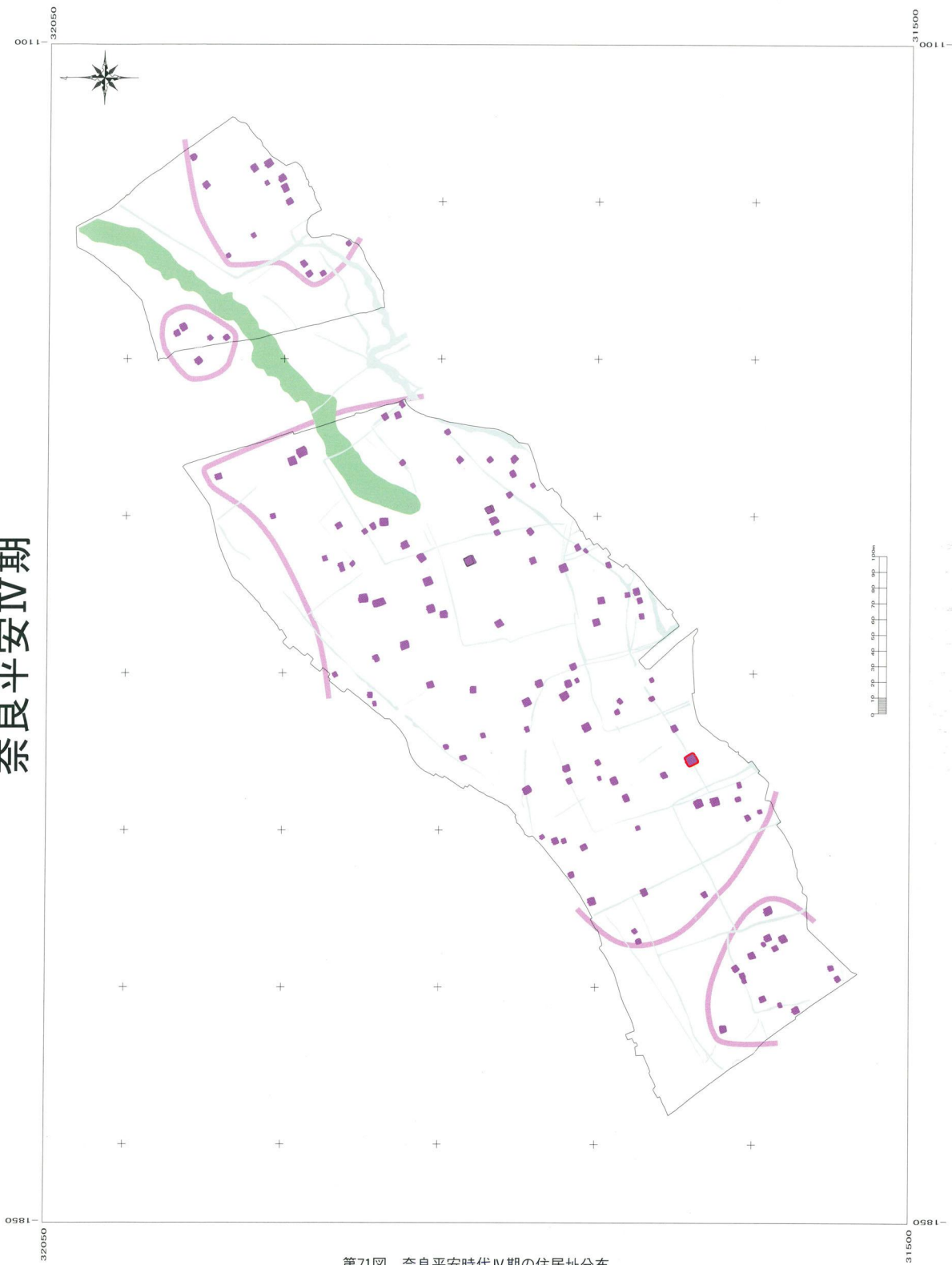


奈良平安Ⅲ期



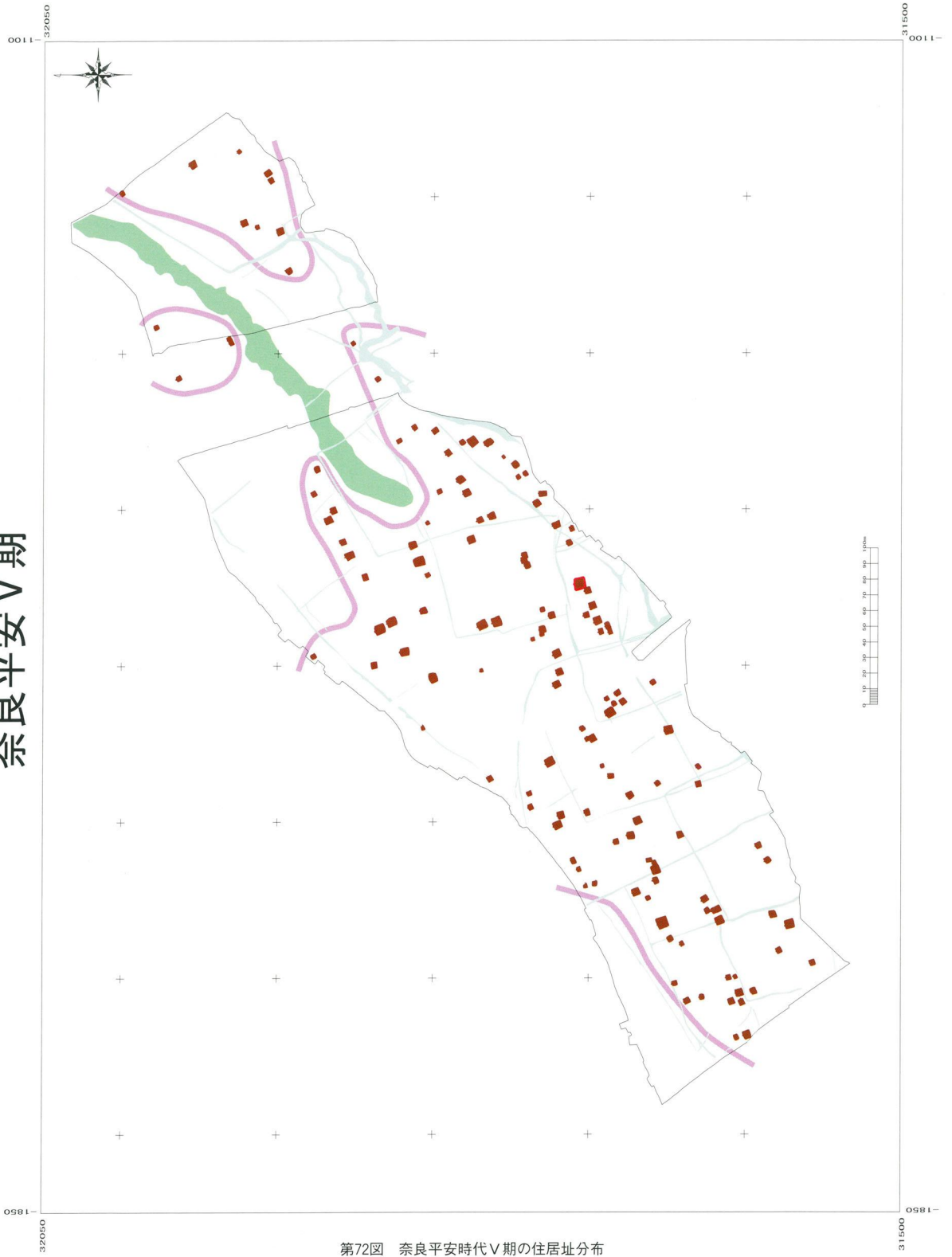
第70図 奈良平安時代Ⅲ期の住居址分布

# 奈良平安Ⅳ期



第71図 奈良平安時代Ⅳ期の住居址分布

奈良平安V期



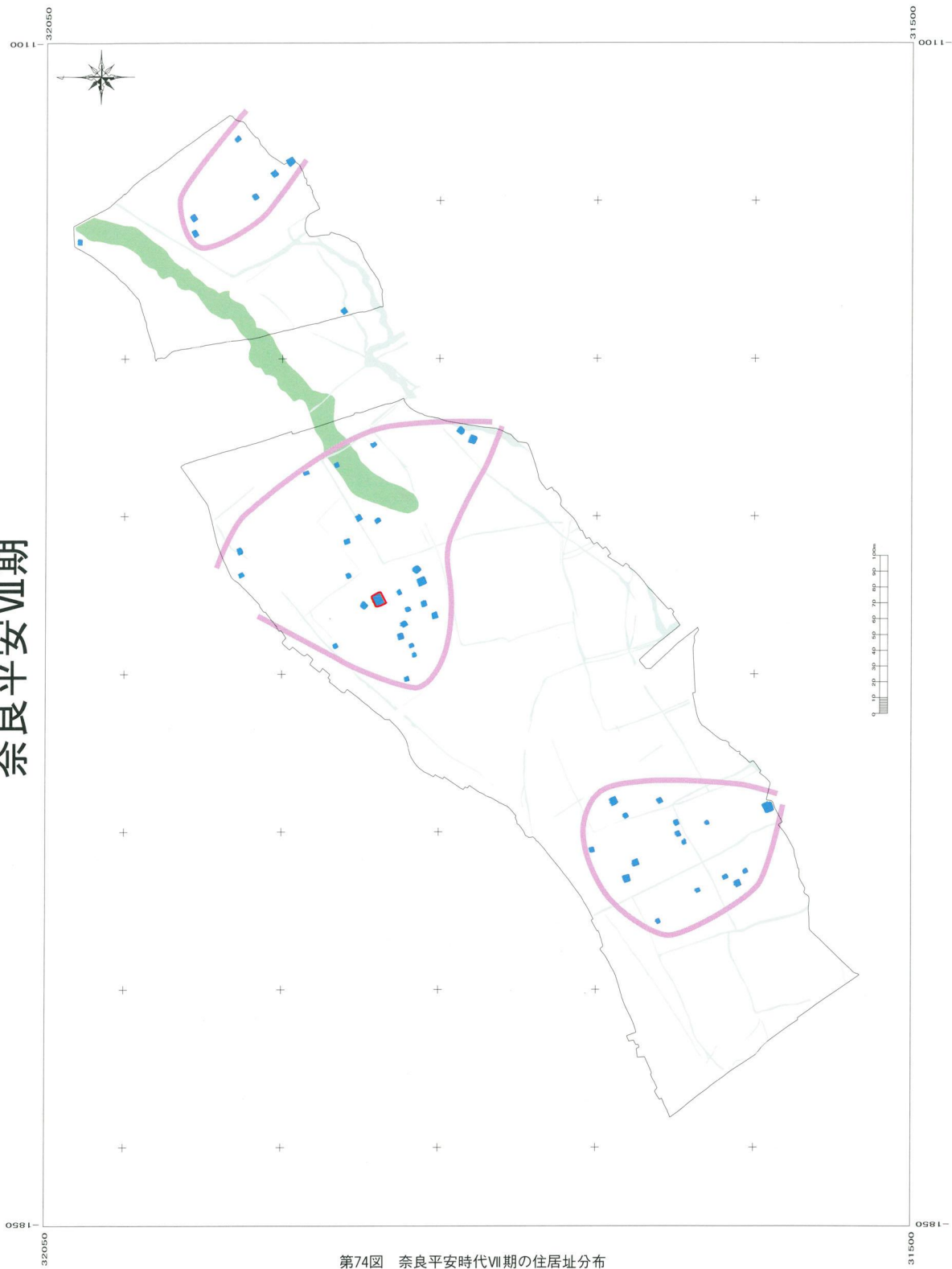
第72図 奈良平安時代V期の住居址分布

# 奈良平安Ⅵ期



第73図 奈良平安時代Ⅵ期の住居址分布

奈良平安VII期



第74図 奈良平安時代VII期の住居址分布

奈良平安Ⅷ期



第75図 奈良平安時代Ⅷ期の住居址分布



奈良平安区期



第76図 奈良平安時代区期の住居址分布

奈良平安X期



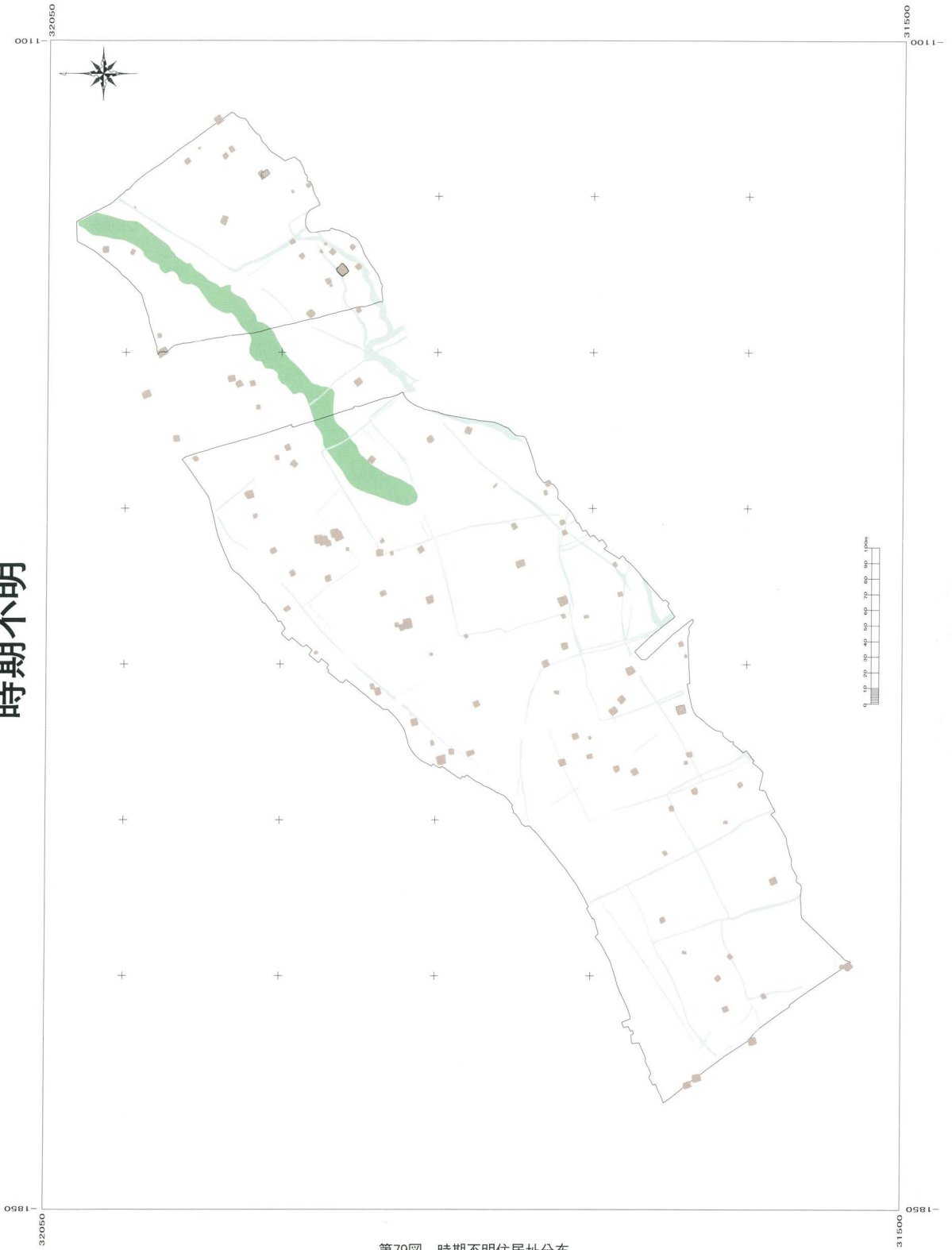
第77図 奈良平安時代X期の住居址分布

奈良平安Ⅷ期



第78図 奈良平安時代Ⅷ期の住居址分布

時期不明



第79図 時期不明住居址分布

## 第12節 まとめ

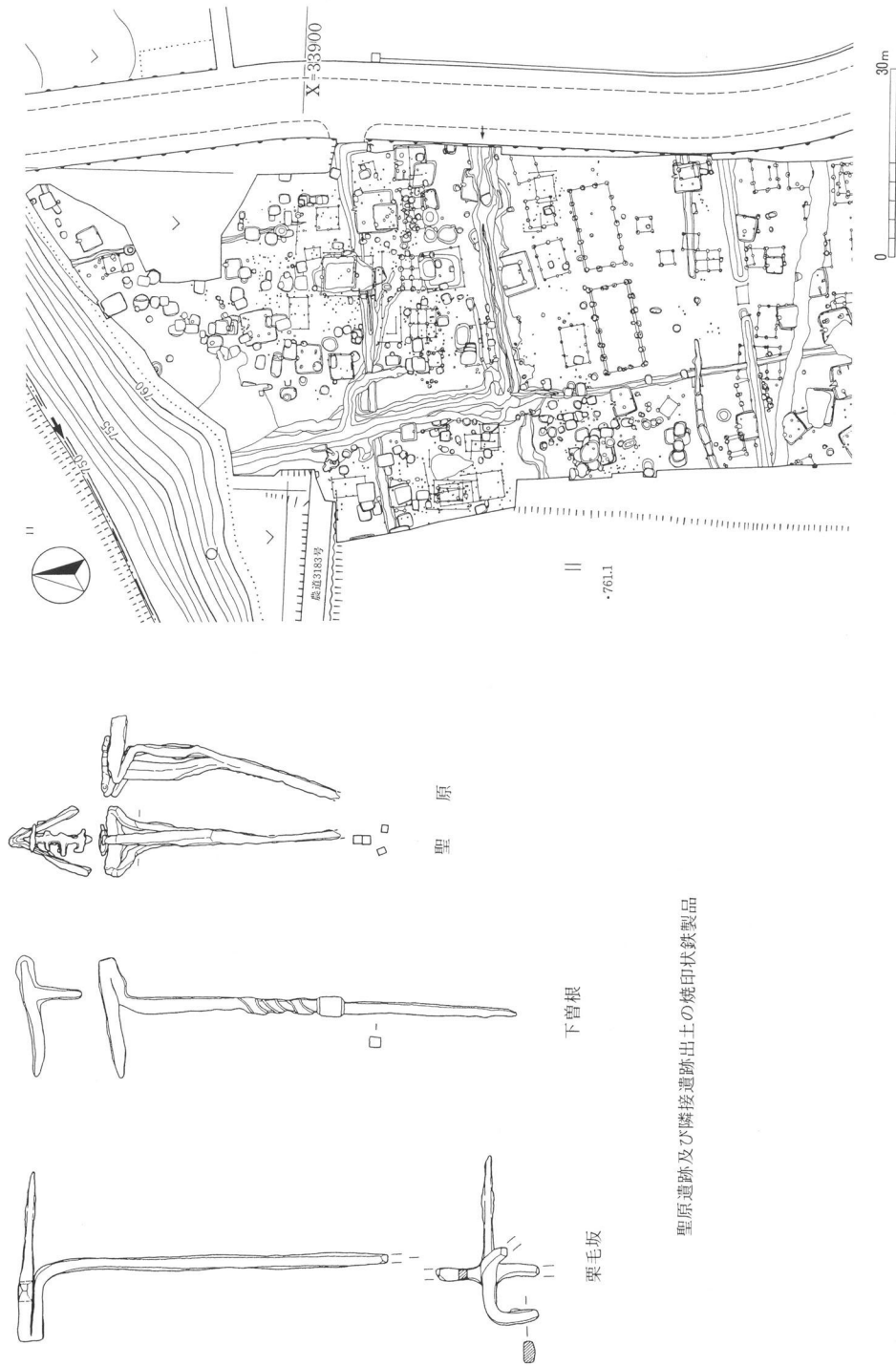
聖原遺跡の性格については、公式なコメントやアナウンスを我々当事者はしていない。しかし、調査が足掛け16年という長期に及んだため、多くの方々により位置付けが為されてきた。そのほとんどは、聖原遺跡を佐久郡衙に比定するものである。

県内において、郡衙と確実に推定される遺跡は、飯田市の恒川遺跡群以外は今のところ存在しない。聖原遺跡と恒川遺跡群の出土遺物を比較した場合、役所という性格を端的に表す道具である、硯の規模と量において恒川遺跡群が聖原遺跡を凌駕している。おそらくは、県内最多出土であろう皇朝十二銭や、腰帯金具、「伯万私印」の石製印、朱墨痕の認められる土器など、多分に官衙的な出土遺物も認められるものの、仮に硯を視点の中心に据えた場合でさえ、郡衙の中核とは考えづらい状況が認められる。

866年に定額寺となった『妙楽寺』は、当初は佐久郡司の氏寺として建立され、後に官寺（定額寺）に列せられたものと考えられている。あくまでもこのような前提にたって考えた場合、妙楽寺は佐久郡衙の近くに存在することになる。更に、定額寺であるのだから、瓦葺きの寺院であったであろうという推測の上に立ち、その所在地を推測すると、現在の長土呂集落の西北の台地に展開する「周防畑遺跡群」内の周防畑、洪右衛門、一本松地籍の布目瓦が散布する一帯が最有力地となる。この説を強力に後押しするかのように、周防畑工場敷地造成工事の残土中より「川原寺」式の軒丸瓦が1点出土していたことが、宇賀神誠司氏により公表された。瓦の編年からは7世紀末に比定される資料であり、貴重な発見であることは確かであるが、1点のみの出土であること、宇賀神氏が採取者ではなく、別の採取者からのいわば提供資料であり、採取時に他の遺物は存在しなかったか？等の状況が不明であることなどから考えると、この軒丸瓦を短絡的に妙楽寺に結びつけて考えるのは現状では無理がある。また、布目瓦の散布地とされる周防畑、洪右衛門、一本松地籍は、確かに散布地ではあるが、言われているような、多量の散布は現在認められないし、過去に認められた具体的な証拠もない。（既出資料は断片的で少量である）しかし、7世紀末という年代は郡衙が成立すると言われる年代—7世紀末～8世紀初め—に符合するし、布目瓦という特殊な遺物が少量であれ、特定の地域にまとまりをもって出土しているのだから、妙楽寺の有力候補地の一つであることは確かである。また、妙楽寺と切り離してみても、特別な場所である。



第80図 芝宮遺跡群の郡衙候補地



宮ノ反A遺跡の館跡

第81図 聖原遺跡及び隣接遺跡出土の焼印状鉄製品、宮ノ反A遺跡の館跡



田切谷を隔てて、聖原遺跡の北方の台地に展開する芝宮遺跡群は、長野県埋蔵文化財センターの芝宮遺跡群の調査や、佐久市による下曾根遺跡等の調査により、聖原遺跡に劣らぬどころか、凌駕するほどの大規模集落が展開することが明らかとなった。出土遺物も聖原同様に多分に官衙的であり、特に、下曾根遺跡M2号溝址からは大量の遺物が出土しており、大型の須恵器盤、円面硯、完形に近い複数の須恵器大甕などが、夥しい数の土師器、須恵器、鉄器などと共に認められた。この溝は長野県埋蔵文化財センターが調査した芝宮遺跡群の大溝に連結していくものと推測され、この溝により区画された内部も佐久郡衙の有力候補地である。

遺跡群を区画する田切りは、現在も成長を続けている。田切りに区画される台地の縁辺に、田切りにより切り取られた竪穴住居址が検出される例は複数あり、古代の田切りは現在より小規模であったことが明らかとなっている。今回の聖原遺跡の調査においても、台地中央を走る未発達田切りが検出されている。この田切りは発達せず、埋没したことが、時期毎の集落の展開により確認されている。聖原遺跡と芝宮遺跡群や栗毛坂遺跡群を隔絶する田切りや、芝宮遺跡群と周防畑遺跡群を隔絶する田切りが、古代において聖原遺跡の未発達田切り程度の規模であったとしたら、我々の考えている遺跡や遺跡群の範囲は根底から覆る。そして、その可能性は高いと言える。

現在、郡衙の成立は前記したように7世紀末～8世紀初めと考えられており、その廃絶は10世紀以前と考えられている。聖原遺跡の集落は、6世紀中頃～7世紀初頭＝古墳時代Ⅲ期に大規模集落として突如出現する。所謂「計画村落」である。しかし、この集落は7世紀代＝古墳時代Ⅳ期には若干縮小する。そして、8世紀第一四半期＝奈良平安時代Ⅰ期から膨張を始め、8世紀第四四半期＝奈良平安時代Ⅳ期～9世紀前半＝奈良平安時代Ⅴ期にピークに達する。後続する9世紀後半＝奈良平安時代Ⅵ期には若干の規模縮小であったが、10世紀以降は衰退していく。聖原遺跡の集落規模の変遷は、上記の郡衙の消長とあたかも連動したように推移している。

郡衙は「正倉」、「郡庁」、「館」、「厨」などの施設により構成されることが明らかとなっており、建物は掘立柱で、規模は方二町ないしそれ以上に相当する面積を占めるのが一般的と言われている。また、「正倉」は全国の発掘例から、総柱の高床式で、数棟ずつが直列ないし並列に整然と並ぶのが基本的である。聖原遺跡内にはこのような遺構は存在しないため、聖原遺跡を郡衙そのものに比定することは出来ない。しかし、前記した芝宮遺跡群の溝に囲まれた郡衙候補地は、溝で区画される範囲の直径が約240mであり、方二町という規模に符合する。更に、妙楽寺の有力候補地である、「周防畑遺跡群」内の周防畑、洪右衛門、一本松地籍には、聖原遺跡より地理的に近い。確証はなく、推測の域の見解であるが、現時点における佐久郡衙の推定地は、芝宮遺跡群の大溝と下曾根遺跡M2号溝址により区画された内部と考えるのが妥当なようである。

では、聖原遺跡の集落はどのような性格を有するのであろうか、郡衙には付属する様々な施設が存在することが明らかとなっている。聖原遺跡で2ヶ所検出された故鉄も原料にする鍛冶、多数出土した鉄製紡錘車や針などから推測される紡織、埋葬された骨や焼印状鉄製品から牛馬の飼育、円面硯や、墨書土器等の文字資料の出土から文字等による記録、鎌や鋤先の出土から農業などの生業が推測される。このような仕事を郡司の為に行う人々が暮らした住まいや工房などの仕事場が聖原遺跡の集落であったと考えることも可能であろうし、そのような人々を統括していた、有力者が、集落内に存在する大規模な竪穴住居の居住者であり、その中には「伯万私印」を所持した『伯麻呂』なる人物もある時期存在し、「大方寺」の墨書や、瓦塔などからその存在が明らかとなった寺を建立し、仏教を信仰し、9世紀前半には、仏鉢形甲斐型土器に記された、『甲斐国山梨郡大野郷戸？』から、甲斐国との交流があったのであろうことも推測できる。栗毛坂遺跡群、聖原遺跡を含む長土呂遺跡群、芝宮遺跡群、周防畑遺跡群、西近津遺跡群にまたがる一帯を佐久郡衙とそれに関連した諸施設と捉えることも可能であろう。(郡司の家も想定されるが、郡衙に隣接したり、郡衙内に存在する事例が多いことや、基本的に掘立柱の建物で構成される場合が多い事などから、除外した。)

しかし、一方では焼印状鉄製品は聖原遺跡に隣接する栗毛坂遺跡群、芝宮遺跡群からも異なる印面のものが出土しており、焼印を牛馬に押すという行為が、牛馬の所有者を明らかにするためのものと考えたと、聖原遺跡で飼育されていた牛馬は、印面に記された「金」の所有であり、郡司や郡衙とは無関係なものとなる。また、佐久郡司の氏寺が妙楽寺であったならば、規模こそ比較にならないであろうが、聖原遺跡に居住した有力者もまた、「大方寺」という氏寺(「於寺」刻書の解釈によっては、聖原遺跡内に上の寺と下の寺の二寺が存在した可能性もある)を有していたことや、石製ではあるが、「伯万私印」という私印を所持する状態は、郡衙とは無関係な有力者が形成した集落が聖原遺跡であるとも考えられる。このような権力者、あるいは有力者を所謂「富豪層」や「郷家」などの豪族と想定する捉えかたも可能である。

郡衙は基本的に掘立柱建物で構成されることは前記した。郷長クラスの居宅は山梨県一宮町「大原遺跡」の例では、竪穴住居であるが、発掘担当者が郷長クラスの館跡と捉える長野県小諸市「宮ノ反A遺跡」の館跡は、堀を周囲に巡

らし、建物は掘立柱である。両者は時代が異なるため、直接の比較にはならないが、聖原遺跡の住居は竪穴であり、掘立柱建物が1棟付随するのが基本である。規模には格差があり、各時期を通じ他と異なる規模の大きな住居が存在する。基本的には溝等により周囲を区画することは行わない。このような特徴は、聖原遺跡の有力者が「郷長」や「富豪層」クラスであることを反映しているものと考ええる。

以上雑駁ではあるが、聖原遺跡の性格については上記のとおり、二つの考え方が可能であることを提示してまとめとしたい。

## 引用・参考文献 (第1分冊～第5分冊共通)

- |                             |                              |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1966 陶邑古窯址群                 | 平安学園考古学クラブ                   |
| 1978 陶邑Ⅲ                    | (財)大阪文化財センター                 |
| 1981 シンポジウム盤状坏              | 東洋大学未来考古学研究会・相武古代研究会         |
| 1983 シンポジウム奈良・平安時代の諸問題      | 神奈川考古同人会                     |
| 1984 日本歴史2 古代2              | 東京大学出版会                      |
| 1986 信濃出土の土器に書かれた文字         | 上田市立信濃国分寺資料館                 |
| 1986 長野県考古学会誌 51号           | 長野県考古学会                      |
| －凸帯付四耳壺考－ 笹沢 浩              |                              |
| 1986 池畑・西御堂                 | 佐久埋蔵文化財調査センター                |
| 1987 前田遺跡                   | 御代田町教育委員会                    |
| 1987 長野県考古学会誌 55・56号        | 長野県考古学会                      |
| 1988 シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題   | 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会           |
| 1988 十二遺跡                   | 御代田町教育委員会                    |
| 1988 薊沢・蔦石                  | 佐久市埋蔵文化財調査センター               |
| 1988 長野県史 考古資料編 遺構・遺物       | 長野県史刊行会                      |
| 1988 中筋遺跡 第2次発掘調査概要報告書      | 群馬県渋川市教育委員会                  |
| 1988 長野県埋蔵文化財センター 紀要2       | (財)長野県埋蔵文化財センター              |
| －長野県の9世紀後半から12世紀の食膳具の様相－    | 原 明芳                         |
| 1989 前田遺跡                   | 佐久市教育委員会                     |
| 1989 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3 | 日本道路公団名古屋建設局・(財)長野県埋蔵文化財センター |
| 塩尻市内その2 吉田川西遺跡              |                              |
| 1989 根岸遺跡                   | 御代田町教育委員会                    |
| 1989 宮の上Ⅱ                   | 佐久埋蔵文化財調査センター                |
| 1989 漆紙文書の研究                | 平川 南 吉川弘文館                   |
| 1990 研究入門 須恵器               | 柏書房                          |
| 1990 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4 | 日本道路公団名古屋建設局・(財)長野県埋蔵文化財センター |
| 松本市内その1 総論編                 |                              |
| 1990 黒井峯遺跡発掘調査報告書           | 群馬県北群馬郡子持村教育委員会              |
| 1990 研究紀要7                  | (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団             |
| －ロクロ使用酸化焰焼成甕について－ 桜岡正信      |                              |
| 1990 聖原Ⅱ遺跡                  | 御代田町教育委員会                    |
| 1991 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2   | 日本道路公団東京第二建設局                |
| 佐久市内その2                     | 長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター     |
| 1991 石附窯址群Ⅲ                 | 佐久市教育委員会                     |
| 1991 土曜考古 第16号              | 土曜考古学研究会                     |
| －律令時代の身分表象(Ⅱ)－ 田中広明         |                              |
| 1991 争点日本の歴史 第三巻 古代編Ⅱ       | 吉村武彦・吉岡眞之編 新人物往来社            |
| 1992 研究報告 第4集               | 帝京大学山梨文化財研究所                 |
| －山梨県出土の墨書土器と線刻土器－ 平野 修      |                              |

- 1992 国道141号線関係遺跡 佐久市教育委員会
- 1992 聖原遺跡Ⅱ 佐久市埋蔵文化財調査センター
- 1993 中筋遺跡 第7次発掘調査報告書 群馬県渋川市教育委員会
- 1993 川原田遺跡 平安・中世編 御代田町教育委員会
- 1994 聖原遺跡Ⅶ・下曾根遺跡Ⅰ・前籐部遺跡2 佐久市教育委員会
- 1994 出川南遺跡Ⅳ・平田古墳群 松本市教育委員会
- 1995 佐久市志 歴史編(一)原始・古代 佐久市
- 1995 曾根新城遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ  
上久保田向遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ  
西曾根遺跡Ⅱ・Ⅲ 佐久市教育委員会
- 1995 東国土器研究4号 東国土器研究会
- 1995 長野県考古学会誌75 長野県考古学会  
—特異な土坑について— 花岡 弘
- 1995 中筋遺跡 第8次 第9次 群馬県渋川市教育委員会
- 1996 中筋遺跡 第11・12次発掘調査 群馬県渋川市教育委員会
- 1996 長野県考古学会誌79 長野県考古学会  
—佐久平における古墳時代の土器編年試案— 冨沢一明
- 1996 長野県の考古学 (財)長野県埋蔵文化財センター  
—銅鏡考— 原 明芳
- 1997 聖原Ⅹ 佐久市教育委員会
- 1997 出土した古代の土器 群馬県埋蔵文化財センター
- 1997 長野県埋蔵文化財センター 紀要6 (財)長野県埋蔵文化財センター  
—古墳時代後期の外来系土器— 藤原直人  
—長野県出土の皇朝十二銭— 西山克己
- 1997 遺跡・遺物から何を讀みとるか(Ⅰ) 資料集 帝京大学山梨文化財研究所
- 1997 文化財保存科学ノート 沢田正昭 近未来社
- 1998 古墳時代の土器 展示レポート2 群馬県埋蔵文化財センター  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 1998 考古学と自然科学 ①考古学と人類学 馬場悠男編 同成社
- 1998 北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1 日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局  
長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 1998 北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4 日本鉄道建設公団北陸新幹線建設局・長野市  
長野県教育委員会・(財)長野県埋蔵文化財センター
- 1998 長野市内その1 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 1998 研究紀要15  
—金属器模倣と金属器指向— 桜岡正信・神谷住明
- 1998 須恵器生産の研究 山田邦和 学生社
- 1998 研究紀要 第7号 三重県埋蔵文化財センター
- 1998 先史日本の住居とその周辺 浅川滋男編 同成社
- 1998 日本の三彩と緑釉 五島美術館
- 1999 西一本柳Ⅲ・Ⅳ 佐久市教育委員会
- 1999 国立歴史民俗博物館研究報告 第79集 国立歴史民俗博物館  
日本古代印の基礎的研究
- 1997 遺跡・遺物から何を讀みとるか(Ⅲ) 資料集 帝京大学山梨文化財研究所
- 1999 研究紀要 第7号 財団法人 栃木県文化振興事業団・埋蔵文化財センター  
—関東地方瓦塔編年と他地域瓦塔編年の比較検討— 池田敏宏
- 1999 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書17 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター  
佐久市内その3・小諸市内その1
- 1999 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書18 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター

- 佐久市内その4・小諸市内その2
- 2000 蛇塚 A 遺跡群 蛇塚遺跡・蛇塚古墳  
佐久市教育委員会
- 2000 信濃で文字が使われ始めた頃  
飯田市上郷考古博物館
- 2000 日本考古学 第9号  
日本考古学協会
- 墨書土器村落祭祀論序説— 高島英之
- 2001 上芝宮Ⅱ・Ⅲ・Ⅵ  
佐久市教育委員会
- 下曾根Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ
- 2001 榛名平遺跡  
佐久市教育委員会
- 2001 研究紀要 第16号  
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 須恵器のロクロ技術を考える— 岩田広明
- 2001 研究紀要 第9号  
財団法人 とちぎ生涯学習文化財団・埋蔵文化財センター
- 氷室研究の現状と課題— 中山 晋
- 2002 深堀Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ  
佐久市教育委員会
- 2002 研究紀要 第17号  
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 古代東国と豪族の家— 田中広明
- 2003 研究紀要21  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 月夜野型羽釜の生産と流通— 桜岡正信
- 2003 古代地方木簡の研究  
平川 南 吉川弘文館
- 2003 研究報告 第11号  
帝京大学山梨文化財研究所
- 曲刃鎌とU字形鋤先— 魚津知克
- 古墳時代中期における日韓鉄族の一樣相— 水野敏典
- 2004 研究紀要22  
群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 馬生贄祭祀遺構と「捏造」問題— 坂井 隆
- 古代上野における富豪層について— 神谷佳明
- 2004 山梨県史だより 第27号  
山梨県教育委員会 県史編さん室
- 多文字を記した甲斐型土器— 平野 修
- 2004 山梨県史 通史編1 原始・古代  
山梨県
- 2004 研究論集XX  
東京都埋蔵文化財センター
- 関東にみる新型土師器杯の出現— 鶴間正昭

# 第Ⅲ章 分 析

## 聖原遺跡出土土器内容物の調査・分析

(財)元興寺文化財研究所

- 1 分析資料
  - No 1 土器：聖原 H52 No 5 (写真 1)
  - No 2 土器：聖原 V T P 162 (写真 3)
  - No 3 土器：跡部 儘田 H26 No 1 (写真 5)
- 2 分析内容
  - 土器の内容物のマイクロSCOPE観察と写真撮影
  - 土器内容物のケイ光 X 線分析による元素分析
  - 土器内容物のフーリエ変換型赤外分光光度計による成分分析
- 3 使用機器及び分析条件
  - マイクロSCOPE ((株)キーエンス V H-7000)
  - エネルギー分散型ケイ光 X 線分析装置 (以下、X R F) (セイコーインスツルメント(株)製 S E A 5230)  
試料の微小領域に X 線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光 X 線を検出することにより元素を固定する。ナトリウムより重い元素が検出可能である。  
測定条件—モリブデン管球使用、真空、管電圧 45 k V
  - フーリエ変換型赤外分光光度計 (以下、F T-1 R) (日本電子(株)製 J I R-6000)  
試料に赤外線を照射し、そこから得られる分子の構造に応じた固有の周波数の吸収を解析し、化合物の種類を固定する。  
(測定条件：K B r 錠剤法 分解能  $2\text{ cm}^{-1}$  検出器 T G S)
- 4 方法及び結果
  - マイクロSCOPEで内容物を観察後、写真撮影を行った。その結果、すべての土器の内容物中に紙の繊維は観察されなかった (写真 2, 4, 6)。
  - 剥落した内容物を X R F で元素分析を行った。  
その結果、No 1 土器ではカルシウム (C a)、鉄 (F e)、マンガン (M n)、ケイ素 (S i)、アルミニウム (A l)、イオウ (S)、カリウム (K) が検出された。いずれも土壌成分と考えられた (図 1)。  
No 2 土器ではカルシウム (C a)、鉄 (F e)、ケイ素 (S i)、アルミニウム (A l)、イオウ (S)、マンガン (M n) が検出された。いずれも土壌成分と考えられた (図 2)。  
No 3 土器ではカルシウム (C a)、鉄 (F e)、ケイ素 (S i)、アルミニウム (A l)、リン (P)、イオウ (S)、チタン (T i)、マンガン (M n) が検出された。いずれも土壌成分と考えられた (図 3)。
  - 剥落した内容物を F T-1 R で成分分析を行った。  
その結果、No 1 土器では  $3430, 2930, 2850, 1700, 1630, 1460, 1380, 1270\text{ cm}^{-1}$  付近に吸収ピークが見られたことから、漆が含まれている可能性があると考えられた (図 4)。  
No 2 土器では  $3430, 2930, 2860, 1720, 1620, 1440, 1380, 1270\text{ cm}^{-1}$  付近の吸収ピーク、および皺のよった漆特有の黒い硬化物が見られることから漆が含まれていることが判った (図 5)。  
No 3 土器では  $3430, 2930, 2860, 1700, 1630, 1440, 1270\text{ cm}^{-1}$  付近に吸収ピークが見られたことから、漆が含まれている可能性があると考えられた (図 6)。

以上の結果により、内容物は漆が含まれる、または漆が含まれる可能性の高い土器であるが、紙の繊維がないため漆紙ではないと考えられた。



168mm

写真1 No.1 土器 (聖原H52No.5)



10mm

写真2 No.1 土器内部 (底面)





123mm

写真3 No.2 土器 (聖原V T P 162)



10mm

写真4 No.2 土器附着物下部



132mm

写真5 No.3土器（跡部徳田H26No.1）



132mm

10mm

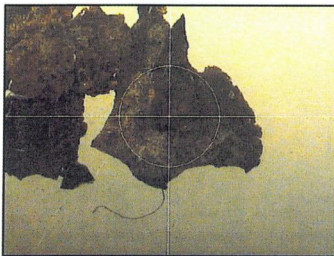
写真6 No.3土器内容物の底部



[測定条件]

測定装置	SEA5230
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	209
試料室雰囲気	真空
コリメーター	φ1.8mm
励起電圧(kV)	45
管電流(μA)	16
コメント	030163佐久聖原遺跡H52 No.5 土器内容物

[試料像]



視野：[XY]6.60 4.95(mm)

[スペクトル]

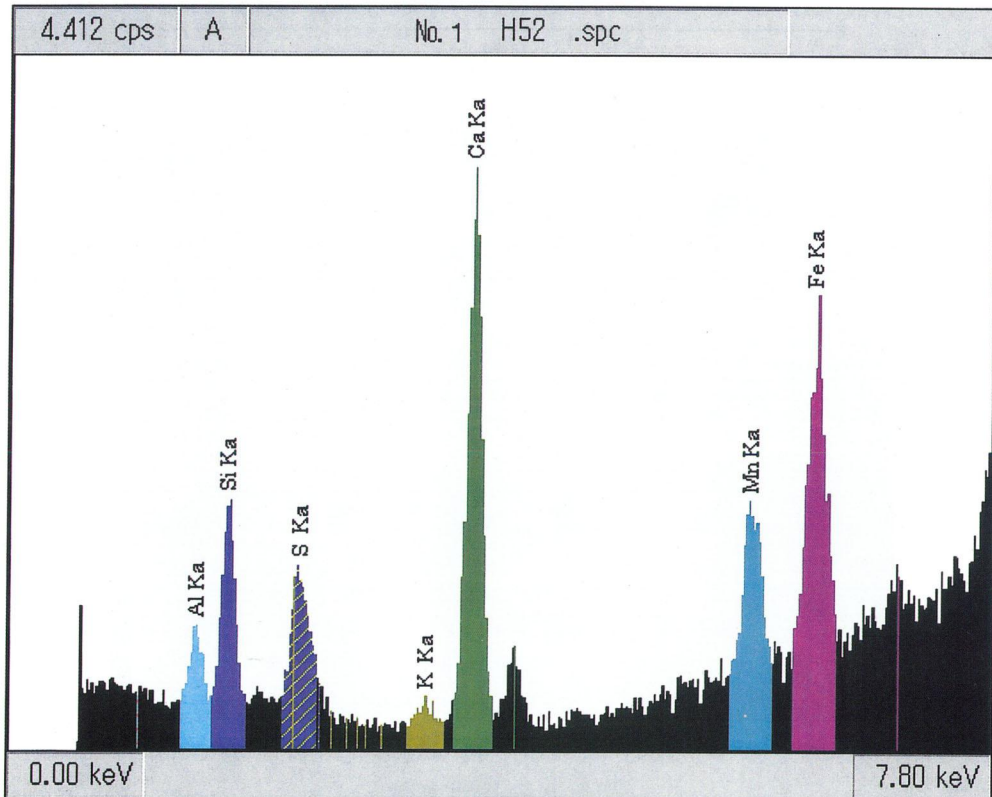
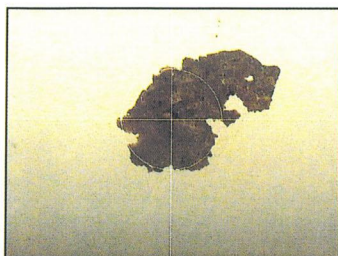


図1 No.1 土器内容物のXRF スペクトル

[測定条件]

測定装置	SEA5230
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	208
試料室雰囲気	真空
コリメーター	φ1.8mm
励起電圧(kV)	45
管電流(μA)	16
コメント	030163佐久聖原 VTP162土器内容物

[試料像]



視野: [X Y]6.60 4.95(mm)

[スペクトル]

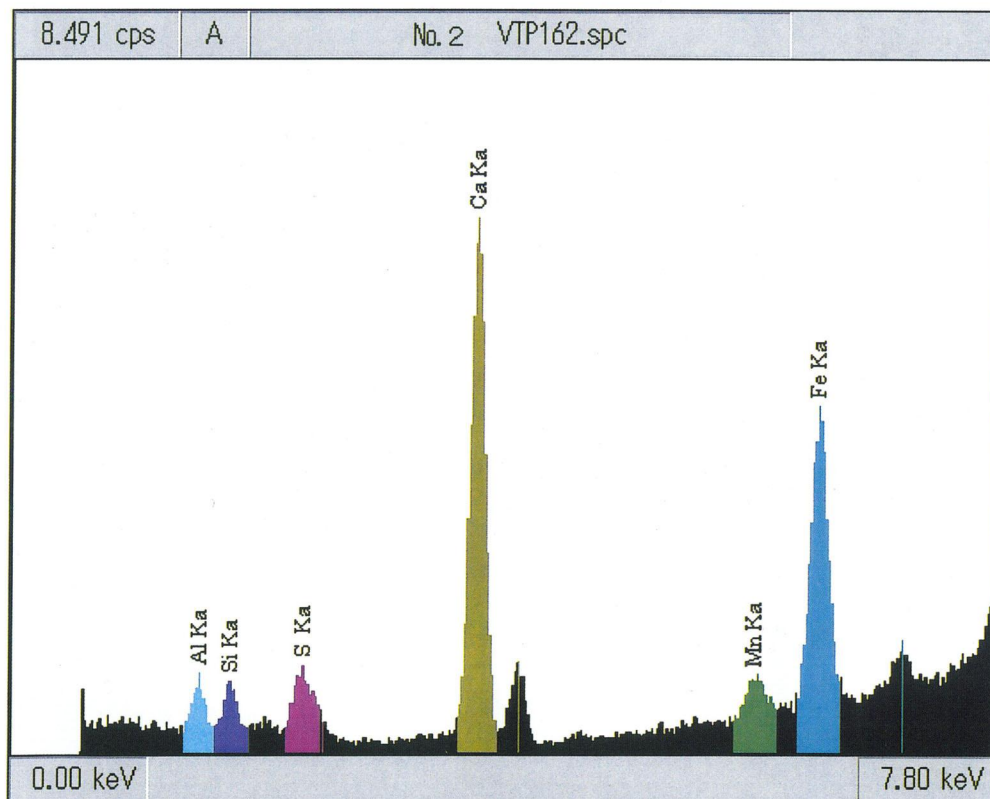
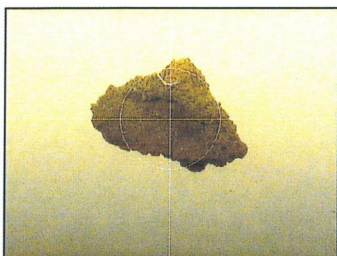


図2 No.2土器内容物のXRFスペクトル

[測定条件]

測定装置	SEA5230
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	210
試料室雰囲気	真空
コリメーター	φ1.8mm
励起電圧(kV)	45
管電流(μA)	16
コメント	030163佐久聖原 AAMH26土器内容物

[試料像]



視野：[X Y]6.60 4.95(mm)

[スペクトル]

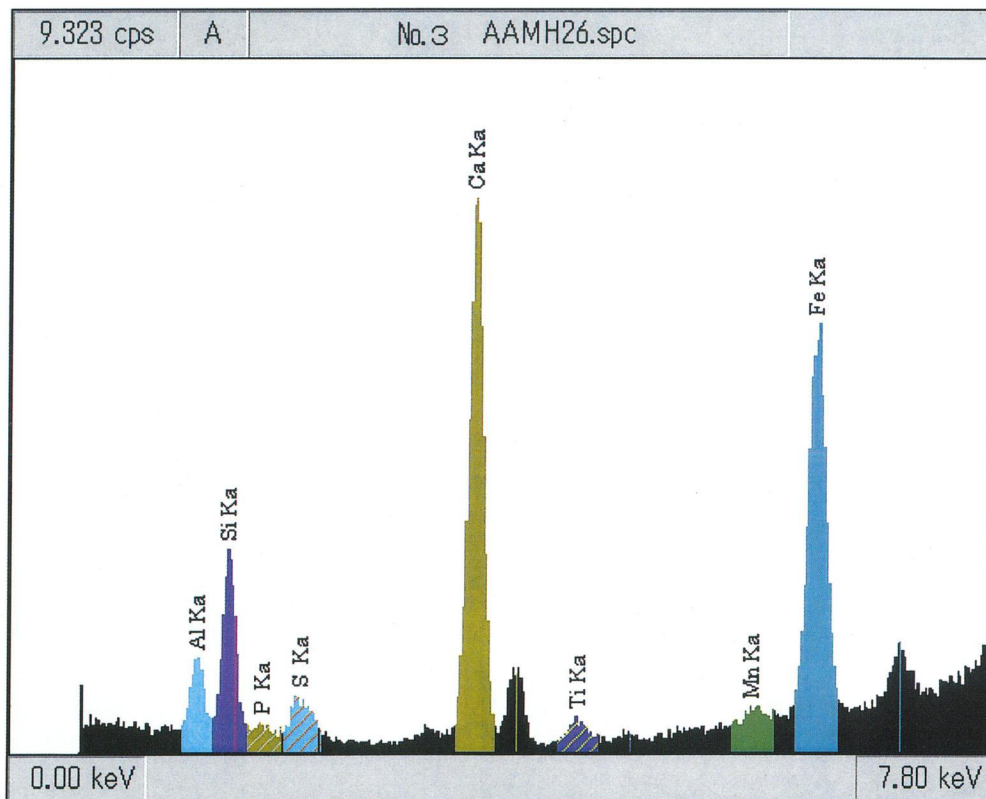


図3 No.3 土器内容物のXRF スペクトル

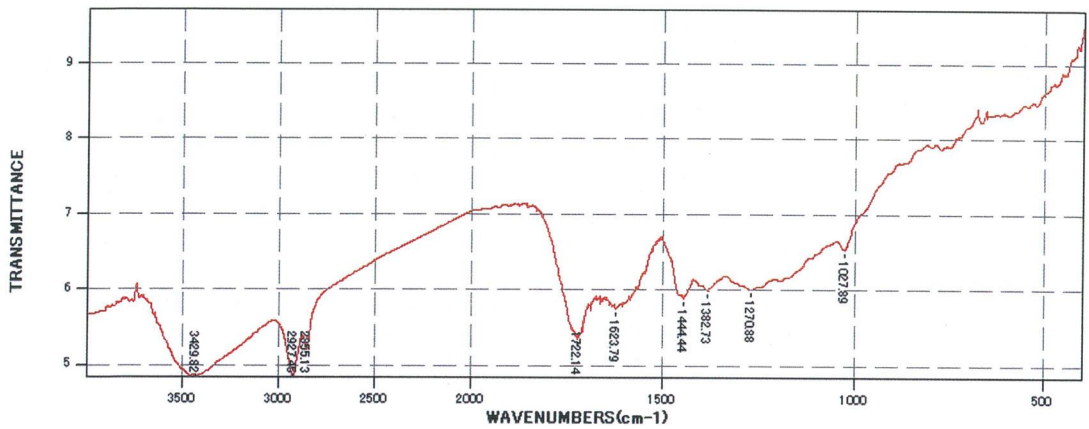


図4 No.1土器内容物のFT-IRスペクトル

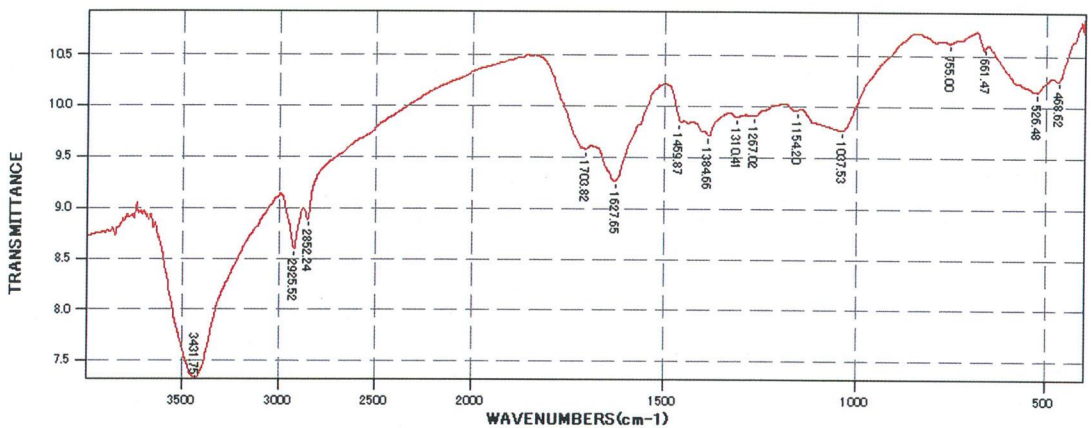


図5 No.2土器内容物のFT-IRスペクトル

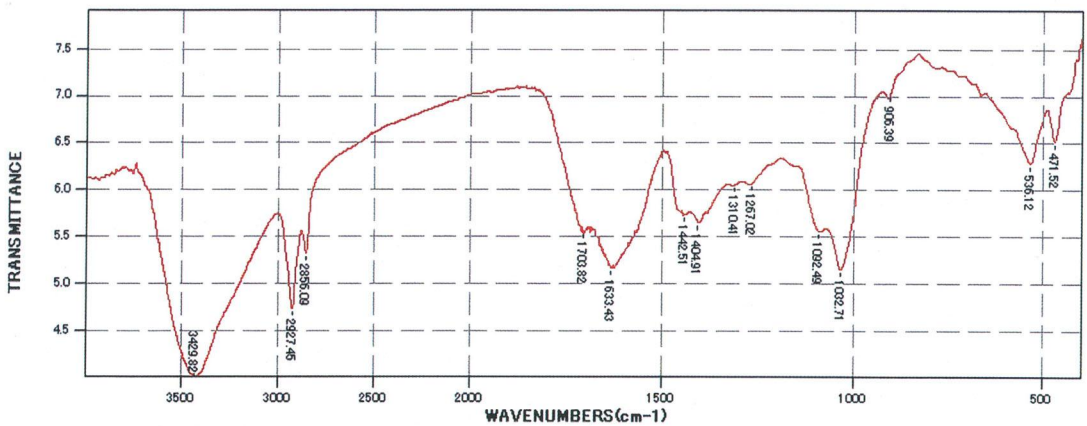


図6 No.3土器内容物のFT-IRスペクトル



# 聖原遺跡の自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

高橋 敦 田中義文 馬場健司

## 〈目次〉

はじめに	p.141
Ⅰ. 植物利用の検討	p.141
1. 試料	p.141
2. 分析方法	p.141
(1)樹種同定	p.141
(2)種実遺体同定	p.141
(3)灰像分析	p.141
3. 結果	p.141
(1)樹種同定・種実遺体同定	p.141
(2)灰像分析	p.162
4. 考察	p.163
(1)木材利用	p.163
(2)種実遺体	p.166
Ⅱ. 動物利用の検討	p.166
1. 試料	p.166
2. 分析方法	p.167
3. 結果	p.167
4. 考察	p.175
Ⅲ. 出土人骨の同定	p.176
1. 試料	p.176
2. 分析方法	p.177
3. 結果	p.177
4. 考察	p.177
引用文献	p.179~180
〈図表・図版一覧〉	
表1. 炭化材試料の同定結果	p.143~159
表2. 灰像分析結果	p.162
表3. 古墳時代の住居跡出土炭化材の遺構別種類構成	p.164
表4. 奈良・平安時代の住居跡出土炭化材の遺構別種類構成	p.165
表5. 検出貝類・獣骨の分類群一覧	p.167
表6. 動物遺存体検出状況	p.168~173
表7. 人骨同定結果	p.177
図版1~17	p.181~197
D24号土坑人骨出土状況	p.178
炭化材出土状況図(1)~(9)	p.198~206

## はじめに

長野県佐久市に所在する聖原遺跡は、長土呂遺跡群のほぼ中央に位置する。本遺跡周辺は、浅間山の軽石期の活動で噴出した第1小諸軽石流堆積物（荒牧，1993）により形成された台地が、その後の侵食等によって形成された田切り地形が発達する地域であり、本遺跡はこの田切りによって形成された台地上に立地している。これまでの発掘調査の結果、古墳時代～平安時代にかけての1200軒近くの住居跡の検出をはじめとして、当該期の石製印や墨書・刻書土器、さらに、八稜鏡や和銅開珎を含む皇朝十二銭等の金属遺物等の出土から佐久郡衛の有力な推定地とされている。今回の発掘調査においても、古墳時代後期～平安時代にかけての竪穴住居跡や掘立柱建物跡が大量に検出され、当該期の土師器や須恵器をはじめとして、陶器や石器、金属遺物も多量に出土する状況が確認されている。また、これらの遺構の調査では、住居構築材や燃料材に由来すると考えられる炭化在が検出される住居跡や、当時の食糧残渣と考えられる種実遺体や動物遺存体等の出土も確認されており、これらは生業活動の一端、特に植物・動物利用を検討する貴重な資料と考えられる。

したがって、本報告では、住居跡等から出土した炭化材や種実遺体の同定を行い、当時の植物利用の状況を把握するとともに、住居跡や土坑、溝等から出土した動物遺存体の鑑定を行い、これらの種類を明らかにする。また、中世の所産と考えられる土坑からは人骨が出土していることから、年齢や性別等の情報を得ることとした。

## I. 植物利用の検討

### 1. 試料

試料は、住居跡等から出土した炭化材を主体として、種実遺体、灰等の939点からなる。但し、これらの試料中には、土壌や黒曜石、不明遺物等も確認されたが、本項では植物利用の検討を目的としていることから、結果表には試料の質のみを記載し、分析対象からは除外している。

これらの試料のうち、炭化材については樹種同定を、種実遺体については種実遺体同定を行う。なお、灰については燃料材等に由来する植物体が残存する可能性があることから5点を選択して灰像分析を実施する。各試料の詳細は、樹種同定・種実遺体同定結果と共に表1に記す。また、灰像分析試料とした試料の詳細は、結果と共に表2に記す。

### 2. 分析方法

#### (1) 樹種同定

炭化材とされる試料中には、表面が炭化しているだけで、中は生木の状態のものが認められたことから、樹種同定は以下の方法によって行う。

生木試料は、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。一方、炭化材は、3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

#### (2) 種実遺体同定

双眼実体顕微鏡下でその形態的特徴から種類を同定する。

#### (3) 灰像分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となるが、植物遺体や植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い（例えば、バリノ・サーヴェイ株式会社，1993a）。そのため、珪化組織片の産状により当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

本分析では、灰とされる試料の観察の結果、ほとんどが灰化していることが認められたことから、分析処理は行わず試料採取を行うこととした。観察は、400倍の光学顕微鏡下で行い、分類は近藤・佐瀬（1986）を参考に同定を行う。

### 3. 結果

#### (1) 樹種同定・種実遺体同定

結果を表1に示す。炭化材は、針葉樹6種類（カラマツ・マツ属複雑管束亜属・モミ属・トウヒ属・ヒノキ属・ヒノ

キ科)、広葉樹35種類 (オニグルミ・サワグルミ・ハンノキ属ハンノキ亜属・カバノキ属・アサダ・クマシデ属イヌシデ節・ブナ属・コナラ属コナラ亜属クスギ節・コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ・エノキ属・ケヤキ・ニレ属・ヤマグワ・モクレン属・モモ・サクラ属・バラ科ナシ亜科・イヌエンジュ・キハダ・ヤマウルシ・ヌルデ・チドリノキ・カエデ属・トチノキ・アワブキ属・ニシキギ属・クロウメモドキ属・ミズキ属・ウコギ属・リョウブ・エゴノキ属・ハイノキ属サワフタギ節・トネリコ属・ムラサキシキブ属)とイネ科タケ亜科、イネ科に同定された。一方、種実遺体は3種類 (オニグルミ・モモ・トチノキ)に同定された。

なお、結果表には、1試料中に複数の種類が認められたものは、確認された全種類を記載している。また、保存状態が不良で、種類の同定に至らなかった試料は、観察できた範囲での結果を記し、組織が観察できなかった試料は不明としている。以下に、炭化材の主な解剖学的特徴と種実遺体の形態的特徴等を記す。

<炭化材>

・カラマツ (*Larix kaempferi* (Lamb.) Carriere) マツ科カラマツ属

軸方向組織は仮道管を主とし、晩材部付近に垂直樹脂道が認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞、仮道管、樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。放射組織の細胞壁は滑らかで、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はトウヒ型~ヒノキ型で、1分野に3-5個。放射仮道管の有縁壁孔のフチは主としてカラマツ型。放射組織は単列、1-20細胞高。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxylo*) マツ科

軸方向組織は仮道管を主とし、晩材部には垂直樹脂道も認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行は急~やや緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は柔細胞、仮道管、樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり、1分野に1個。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は通常仮道管のみで構成されるが、障害樹脂道が認められる試料もある。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅず状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1-4個。放射組織は単列、1-20細胞高。

・トウヒ属 (*Picea*) マツ科

軸方向組織は仮道管を主とし、晩材部付近には垂直樹脂道が認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は柔細胞、仮道管、樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。放射組織の細胞壁は厚く、じゅず状末端壁が認められる。放射仮道管の有縁壁孔のフチは主としてトウヒ型。分野壁孔はトウヒ型で、1分野に3-6個。放射組織は単列、1-20細胞高。

・ヒノキ属 (*Chamaecyparis*) ヒノキ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型~スギ型で1分野に1-3個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・ヒノキ科 (*Cupressaceae*)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独および2-4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-4細胞幅、1-40細胞高。

・サワグルミ (*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc.) クルミ科サワグルミ属

散孔材で、道管径は比較的大径、単独および2-4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。オニグルミに比較して道管壁が薄く横断面では多角形となる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus* subgen. *Alnus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1-30細胞高のものと集合放射組織とがある。

・カバノキ属 (*Betula*) カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2-4個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、

表 1. 炭化材試料の同定結果(1)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNH 1	1 A	H52	II-2		奈平Ⅳ	種実遺体	オニグルミ(核)
NNH 1	1 A	H55	2		奈平Ⅸ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH 1	1 A	H60		炭 1	奈平Ⅳ	炭化材	クリ
NNH 1	1 A	H60		炭 2	奈平Ⅳ	炭化材	クリ
NNH 1	1 A	H84	Ⅲ区床面	炭	古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 1	1 A	H87	カマド内		奈平Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節 クリ
NNH 1	1 A・5 C	H88	3区3層		古Ⅲ	炭化材	広葉樹(節)
NNH 3	4 B	H92	4区1層		奈平Ⅵ	炭化材	クマシデ属イヌシデ節
NNH 1	1 A	H93	3区2層		古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 1	1 A	H93		45	古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 1	1 A	H93		46	古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 1	1 A	H97	1区3層		古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 1	1 A・5 C	H99	4層	22	奈平Ⅴ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 1	1 A・5 C	H99		23	奈平Ⅴ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 1	1 A	H100		36	古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 1	1 A	H103		炭化物	奈平Ⅴ	炭化物	イネ科タケ亜科
NNH 1	1 A	H105	サブトレ 2	炭	奈平Ⅲ	炭化材	オニグルミ 広葉樹
NNH 1	1 A	H106		1	古Ⅲ	炭化材	イネ科
NNH 1	1 A	H108	2区1層		奈平Ⅳ	炭化材	不明
NNH 1	1 A	H114	Ⅱ区1層		奈平Ⅰ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH 1	1 A	H115	4区3層		奈平Ⅹ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH 1	1 A	H119	P-1		古Ⅳ	炭化材	針葉樹 コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 1	1 A	H126	床上	C炭	古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 1	1 A	H129		129	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH 1	1 A	H150	1区4層		古Ⅲ	炭化材	クリ カエデ属
NNH 1	1 A	H150	1, 4区		古Ⅲ	炭化材	カエデ属 イネ科
NNH 1	1 A	H157	3区1層		古Ⅲ	炭化材	広葉樹(散孔材)
NNH 1	1 A	H161		灰	奈平Ⅴ	灰	
NNH 1	1 A	H161		灰	奈平Ⅴ	灰	灰化物
NNH 1	1 A	H162	4区サブトレ		古Ⅲ	炭化材	モミ属 コナラ属コナラ亜属コナラ節 樹皮
NNH 1	1 A	H162	2区サブトレ		古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 1	1 A	H162	4層掘り出し部分		古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 1	1 A	H163	焼土中		古Ⅲ	炭化材	イネ科
NNH 1	1 A	H164		12	古Ⅲ	炭化材	イネ科タケ亜科 広葉樹(若年枝)
NNH 1	1 A	H164		13	古Ⅲ	炭化材	イネ科
NNH 1	1 A	H164		14	古Ⅲ	炭化材	ムラサキシキブ属
NNH 1	1 A	H164		15	古Ⅲ	炭化材	ムラサキシキブ属
NNH 1	1 A	H167	Ⅱ区1層		古Ⅲ	炭化材	カラマツ
NNH 1	1 A	H168	カマド内		奈平Ⅱ	炭化材	ヤマグワ
NNH 1	1 A	H171		19	古Ⅲ	炭化材	モミ属
NNH 1	1 A	H176	カマド	2	奈平Ⅴ	炭化材	バラ科ナシ亜科
NNH 3	1 A	H184		270	奈平Ⅵ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 3	4 B	H187	1区2層		古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 3	4 B	H187	2区2層	炭	古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 3	4 B	H187	Pit 1		古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節 クリ
NNH 3	4 B	H187	Pit 2		古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節 クリ
NNH 3	4 B	H187	Pit 3		古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 3	4 B	H187		1	古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 3	4 B	H187		2	古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH 3	4 B	H187		3	古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節



表1. 炭化材試料の同定結果(3)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNH3	4B	H187		64	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		65	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		66	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		67	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		68	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		69	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		70	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		71	古III	炭化材	広葉樹(散孔材)
NNH3	4B	H187		72	古III	炭化材	カエデ属
NNH3	4B	H187		73	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		74	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		75	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		76	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		77	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		78	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		79	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		80	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		81	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		82	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		83	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		84	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		85	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		86	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		87	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		88	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		89	古III	炭化材	広葉樹
NNH3	4B	H187		90	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		91	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		92	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		93	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		94	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		95	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		96	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		97	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		98	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		99	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		100	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		101	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		102	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		103	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		104	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		105	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		106	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		107	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		108	古III	炭化材	広葉樹
NNH3	4B	H187		109	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		110	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		111	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		112	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		113	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		114	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		115	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		116	古III	炭化材	広葉樹 イネ科
NNH3	4B	H187		117	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		118	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		119	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		120	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		121	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		122	古III	炭化材	イネ科タケ亜科
NNH3	4B	H187		123	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節



表 1. 炭化材試料の同定結果(4)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNH3	4B	H187		124	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		125	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		126	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		127	古III	炭化材	ヤマグワ
NNH3	4B	H187		128	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		129	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		130	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		131	古III	炭化材	ヤマグワ
NNH3	4B	H187		132	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		133	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		134	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		135	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		136	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		137	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		138	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		139	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		140	古III	炭化材	広葉樹
NNH3	4B	H187		141	古III	炭化材	広葉樹(環孔材)
NNH3	4B	H187		142	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		143	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		144	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		145	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		146	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		147	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		148	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		149	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		150	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		151	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		152	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		153	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		154	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		155	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		156	古III	炭化材	ヒノキ属
NNH3	4B	H187		157	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		158	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		159	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		160	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		161	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		162	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		163	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		164	古III	炭化材	ヒノキ属
NNH3	4B	H187		165	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		166	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		167	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		168	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		169	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		170	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		171	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		172	古III	炭化材	クリ
NNH3	4B	H187		173	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		174	古III	炭化材	クリ
NNH3	4B	H187		175	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		176	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		177	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		178	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		179	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		180	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		181	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		182	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		183	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		184	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節

表 1. 炭化材試料の同定結果(5)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNH3	4B	H187		185	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		186	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		187	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		188	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		189	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		190	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		191	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		192	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		193	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節 イネ科
NNH3	4B	H187		194	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		195	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		196	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		197	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		198	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		199	古III	炭化材	ヒノキ属
NNH3	4B	H187		200	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		201	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		202	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		203	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		204	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		205	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		206	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		207	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		208	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		209	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		210	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		211	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		212	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		213	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		214	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節 イネ科タケ亜科
NNH3	4B	H187		215	古III	炭化材	ヒノキ属 コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		216	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		217	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		218	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		219	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		220	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		221	古III	炭化材	広葉樹(散孔材)
NNH3	4B	H187		222	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		223	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		224	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		225	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		226	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		227	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		228	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		229	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節 イネ科
NNH3	4B	H187		230	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		231	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		232	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		233	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		234	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		235	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		236	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		237	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		238	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		239	古III	炭化材	クリ
NNH3	4B	H187		240	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		241	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節

表 1. 炭化材試料の同定結果(6)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNH3	4B	H187		242	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		243	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		244	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		245	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		246	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		247	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		248	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		249	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		250	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		251	古III	炭化材	クリ
NNH3	4B	H187		252	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 イネ科
NNH3	4B	H187		253	古III	炭化材	広葉樹
NNH3	4B	H187		254	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		255	古III	炭化材	カエデ属
NNH3	4B	H187		256	古III	炭化材	広葉樹(環孔材)
NNH3	4B	H187		257	古III	炭化材	広葉樹
NNH3	4B	H187		258	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		259	古III	炭化材	イネ科タケ亜科
NNH3	4B	H187		260	古III	炭化材	不明
NNH3	4B	H187		261	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		262	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		263	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		264	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		265	古III	炭化材	広葉樹(散孔材)
NNH3	4B	H187		266	古III	炭化材	広葉樹(散孔材)
NNH3	4B	H187		267	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	4B	H187		268	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		269	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		271	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		272	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		273	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		274	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		275	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		276	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		277	古III	炭化材	サクラ属
NNH3	4B	H187		278	古III	炭化材	カエデ属
NNH3	4B	H187		279	古III	炭化材	サクラ属
NNH3	4B	H187		280	古III	炭化材	サクラ属
NNH3	4B	H187		281	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		282	古III	炭化材	広葉樹(散孔材)
NNH3	4B	H187		283	古III	骨	骨
NNH3	4B	H187		284	古III	骨	骨
NNH3	4B	H187		285	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H187		286	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		287	古III	炭化材	ヒノキ属
NNH3	4B	H187		288	古III	炭化材	クリ
NNH3	4B	H187		289	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	4B	H187		290	古III	炭化材	サクラ属
NNH3	4B	H187		291	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		292	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		293	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		294	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		295	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H187		296	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIII	4B	H187	II区2層		古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIII	4B	H187	VI区2層		古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIII	4B	H190	P8		奈平V	砂	
NNH3	4B	H204	4区3層	炭	奈平V	炭化材	針葉樹
NNH1	1A	H209	2層		奈平V	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1A	H224	3区1層		奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

表 1. 炭化材試料の同定結果(7)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNH1	1A	H224	3区1層		奈平IX	炭化材	不明
NNH3	4B	H225	3区1層		奈平V	種実遺体	モモ(核)
NNH1	1B	H226	2区1層		古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230	1区2層		奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
							コナラ属コナラ亜属コナラ節
							バラ科ナシ亜科
NNH1	1B	H230	3区サブトレ		奈平VII	炭化材	ケヤキ
NNH1	1B	H230	IV区2層		奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		6	奈平VII	炭化材	キハダ
NNH1	1B	H230		43	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		44	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		45	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		46	奈平VII	炭化材	バラ科ナシ亜科
NNH1	1B	H230		47	奈平VII	炭化材	バラ科ナシ亜科
NNH1	1B	H230		48	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		49	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		50	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		51	奈平VII	炭化材	バラ科ナシ亜科
NNH1	1B	H230		52	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		53	奈平VII	炭化材	バラ科ナシ亜科
NNH1	1B	H230		54	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		55	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		56	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230			奈平VII	炭化材	ヒノキ属
							チドリノキ
NNH1	1B	H230		58	奈平VII	炭化材	カエデ属
NNH1	1B	H230		59	奈平VII	炭化材	サワグルミ
NNH1	1B	H230		60	奈平VII	炭化材	サワグルミ
NNH1	1B	H230		61	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		62	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		63	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		64	奈平VII	炭化材	バラ科ナシ亜科
NNH1	1B	H230		65	奈平VII	炭化材	不明
NNH1	1B	H230		66	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		67	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		68	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		69	奈平VII	炭化材	サワグルミ
NNH1	1B	H230		70	奈平VII	炭化材	クリ
NNH1	1B	H230		71	奈平VII	炭化材	ヒノキ属
NNH1	1B	H230		72	奈平VII	炭化材	ヒノキ属
NNH1	1B	H230		73	奈平VII	炭化材	サワグルミ
NNH1	1B	H230		74	奈平VII	炭化材	ケヤキ
NNH1	1B	H230		75	奈平VII	炭化材	カエデ属
NNH1	1B	H230		76	奈平VII	炭化材	カエデ属
NNH1	1B	H230		77	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		78	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		79	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		80	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		81	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		82	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		83	奈平VII	炭化材	カエデ属
NNH1	1B	H230		85	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		87	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		88	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		90	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		91	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		92	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		93	奈平VII	炭化材	キハダ
NNH1	1B	H230		94	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		98	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		101	奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

表1. 炭化材試料の同定結果(8)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNH	1B	H230		102	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		104	奈平Ⅶ	炭化材	キハダ
NNH1	1B	H230		105	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		107	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		108	奈平Ⅶ	炭化材	ヒノキ属
NNH1	1B	H230		109	奈平Ⅶ	炭化材	バラ科ナシ亜科
NNH1	1B	H230		111	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		112	奈平Ⅶ	炭化材	ヒノキ属
NNH1	1B	H230		113	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		114	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		115	奈平Ⅶ	炭化材	ヒノキ属
NNH1	1B	H230		116	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		117	奈平Ⅶ	炭化材	ヒノキ属
NNH1	1B	H230		118	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		122	奈平Ⅶ	炭化材	ヒノキ属
NNH1	1B	H230		123	奈平Ⅶ	炭化材	ヒノキ属
NNH1	1B	H230		124	奈平Ⅶ	炭化材	ヒノキ属
NNH1	1B	H230		125	奈平Ⅶ	炭化材	バラ科ナシ亜科
NNH1	1B	H230		126	奈平Ⅶ	炭化材	カラマツ
NNH1	1B	H230		127	奈平Ⅶ	炭化材	バラ科ナシ亜科
NNH1	1B	H230		128	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		130	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		131	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		132	奈平Ⅶ	炭化材	キハダ
NNH1	1B	H230		133	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		135	奈平Ⅶ	炭化材	バラ科ナシ亜科
NNH1	1B	H230		137	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		143	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		144	奈平Ⅶ	炭化材	アサダ
NNH1	1B	H230		145	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		146	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		147	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		148	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		149	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H230		150	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H230		151	奈平Ⅶ	炭化材	バラ科ナシ亜科 カエデ属
NNH1	1B	H230		152	奈平Ⅶ	炭化材	サワグルミ
NNH1	1B	H230		154	奈平Ⅶ	炭化材	ヒノキ属 カエデ属
NNH1	1B	H230		H132	奈平Ⅶ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H232	2区2層		古Ⅲ	炭化材	ミズキ属
NNH1	1B	H232	上面		古Ⅲ	炭化材	クリ
NNH1	1B	H232	1区3層		古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHⅢ	4B	H244	Ⅲ区サブトレ		奈平Ⅵ	炭化材	エノキ属
NNH1	1B	H250	1区		奈平Ⅳ	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H250		57	奈平Ⅳ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節 クリ
NNH1	1B	H254	3区トレ		古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H255	3区1層		奈平Ⅳ	炭化材	マツ属複雑管束亜属
NNH1	1B	H257		2	古Ⅲ	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	1B	H257		3	古Ⅲ	炭化材	トネリコ属
NNH1	1B	H260	カマド内		奈平Ⅲ	炭化材	オニグルミ コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	1B	H260		6	奈平Ⅲ	炭化材	トチノキ
NNH1	1B	H263	2区		奈平Ⅱ?	炭化材	イネ科
NNH1	1B	H263	Ⅱ区2層		奈平Ⅱ?	炭化材	ヤマウルシ
NNH1	2A	H269	Ⅱ区床面直上		古Ⅲ	炭化材	イネ科
NNH1	2A	H269	Ⅱ区床面直上		古Ⅲ	炭化材	ブナ属
NNH1	2A	H272	カマド付近		奈平Ⅴ	炭化材	カエデ属
NNHⅣ	6A	H278		5	古Ⅲ	炭化材	広葉樹(散孔材)

表1. 炭化材試料の同定結果(9)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNH1	6A	H278			古III	炭化材	モミ属 イネ科
NNH1	6A	H278			古III	炭化材	広葉樹(当年枝)
NNH1	6A	H278			古III	炭化材	ムラサキシキブ属 イネ科タケ亜科
NNH1	2A	H279	床面		奈平III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	2A	H280		10	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	2A	H280		11	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	2A	H281	III区1層		奈平IV	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	2A	H281	4区1層		奈平IV	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	2B	H311	3区1層		奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属
NNH1	2B	H311		32	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	2B	H311		39	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属
NNH1	2B	H314	1区		奈平VI	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	2B	H314	カマド	25	奈平VI	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	2B	H322	IV区1層		奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	2B	H323	3区1層		奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	2C	H335		6	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH	2A	H338	II区床面		古III	炭化材	イネ科タケ亜科
NNH3	2B	H351	P2		不明	炭化材	ヒノキ属
NNH3	2B	H352		炭No.1	奈平IV	炭化材	ケヤキ クリ 針葉樹
NNH1	2B	H352		1	奈平IV	炭化材	キハダ
NNH1	2B	H352		2	奈平IV	炭化材	クリ
NNH1	2B	H352		3	奈平IV	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節 キハダ
NNH1	2B	H352		4	奈平IV	炭化材	カラマツ コナラ属コナラ亜属コナラ節 クリ ヤマグワ キハダ イネ科タケ亜科
NNH1	2B	H352		5	奈平IV	炭化材	オニグルミ キハダ
NNH1	2B	H352	カマドフク土	炭	奈平IV	炭化材	オニグルミ
NNH1	2B	H352	サブトレ(小)		奈平IV	炭化材	オニグルミ
NNH1	2B	H352	サブトレ		奈平IV	炭化材	ヒノキ属
NNH1	2B	H352	1区2層		奈平IV	炭化材	オニグルミ
NNH1	2B	H352	I区3層		奈平IV	炭化材	ヤマグワ
NNH1	2B	H352	II区1層		奈平IV	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	2B	H352	II区2層		奈平IV	炭化材	オニグルミ
NNH1	2B	H352	4区3層		奈平IV	炭化材	オニグルミ キハダ
NNH1	2B	H352	土器内の土	1	奈平IV	炭化材	クリ
NNH1	2C	H369	1内の泥	1	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	2C	H369	1内の泥		古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	2C	H369	2内の泥	2	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	2C	H369	フク土	6	古III	炭化材	広葉樹
NNH1	2C	H373	4区2層		古III	炭化材	ヒノキ属
NNH1	3A	H385	1区2層		奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	3A	H386	カマド	4	奈平II	炭化材	トウヒ属
NNH1	3A	H387	I区サブトレ		奈平IV	炭化材	クリ
NNH1	3A	H389	カマド内		奈平III	炭化材	イネ科
NNH1	3A	H389	P7		奈平III	炭化材	キハダ
NNH1	3A	H393	1区検出面		奈平IV	種実遺体	トチノキ(果皮)
NNH1	3A	H393		16	奈平IV	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 ウコギ属 イネ科タケ亜科
NNH1	3A	H398		25	奈平VI	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H398		31	奈平VI	炭化材	クリ



表1. 炭化材試料の同定結果(10)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNH1	3A	H401	10層床下ビット		奈平III	灰	灰化物
NNH1	3A	H410		10	古III	炭化材	イネ科タケ亜科
NNH1	3A	H410		11	古III	カヤ材	イネ科
NNH1	3A	H414	カマド6層		奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H420		炭	奈平VI	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	3A	H420		スミ	奈平VI	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H421	II区掘り方		奈平VI	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H444		炭No.1	奈平IV	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H444	1区2層		奈平IV	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H444	2区2層		奈平IV	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H444	3区3層		奈平IV	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H444		2	奈平IV	炭化材	カバノキ属
NNH1	3A	H447	III区トレ		奈平III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H447	III区トレ		奈平III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H449		炭	奈平V	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H450	III区1層		奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H450	I-2		奈平VII	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH1	3A	H454		炭	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H456	2区2層		古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H457		炭	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H458	2区1層		奈平VI	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH1	3A	H465	3区2層		奈平IV	種実遺体	モモ(核)
NNH3	3A	H488	P6		古II	炭化材	広葉樹(散孔材)
NNH1	3A	H490		9	奈平IV	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	4A	H496		39	奈平VI	炭化材	ケヤキ
NNH3	4A	H496		40	奈平VI	炭化材	ヒノキ属
NNH3	4A	H496		41	奈平VI	炭化材	ヒノキ科
NNH3	4A	H496		42	奈平VI	炭化材	クリ
NNHIII	4A	H497	検出面		古III	炭化材	カバノキ属
NNH3	4B	H517	カマド内	炭化物	奈平VI	炭化材	アサダ
NNH3	4B	H536	1区トレンチ		奈平I	種実遺体	サクラ属(種子)
NNH3	4B	H538	カマド	灰	奈平I	灰	灰化物
NNH3	4B	H549		10	古III	炭化材	イネ科
NNH3	4B	H549		11	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	4B	H549		12	古III	炭化材	ヒノキ属 バラ科ナシ亜科
NNH3	4B	H549		13	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIII	5A	H553	I区2層		奈平V	炭化材	サクラ属
NNH3	5A	H554		炭	奈平II	炭化材	広葉樹(散孔材) 広葉樹(散孔材) イネ科
NNH3	5A	H554		炭	奈平II	炭化材	ブナ属 コナラ属コナラ亜属クヌギ節 カエデ属 アワブキ属 エゴノキ属 イネ科
NNH3	5A	H554				木製品	ウコギ属
NNHIII	5A	H554	カメAの中の砂		奈平II	炭化材	モモ
NNHIII	5A	H554			奈平II	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHIII	5A	H557	2カメの中の土		奈平II	土壌	
NNH3	5A	H560	P2		奈平X	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5A	H561		13	奈平VI	炭化材	種子(不明)
NNHIII	5A	H562	II区2層		奈平V	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5A	H570	3区1層		奈平II	炭化材	アサダ
NNHIII	5A	H574	IV区1層		奈平VI	炭化材	クリ
NNHIII	5A	H577	II区1層		奈平IV	種実遺体	モモ
NNH3	5A	H592	1区1層	炭	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5A	H604	4区1層		奈平X	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5A	H604	カマド		奈平X	炭化材	ハンノキ属ハンノキ亜属 コナラ属コナラ亜属コナラ節

表1. 炭化材試料の同定結果(11)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNHIII	5A	H604	III区1層		奈平X	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615	4区1層		奈平IX	種実遺体	オニグルミ(核)
NNH3	5B	H615	2区1層		奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615	P-1		奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 イネ科
NNH3	5B	H615	P1		奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 イネ科
NNH3	5B	H615	P4		奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615	P6		奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615	P6		奈平IX	不明	不明
NNH3	5B	H615		1	奈平IX	炭化材	広葉樹(散孔材)
NNH3	5B	H615		2	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		3	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		4	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		5	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		6	奈平IX	炭化材	広葉樹
NNH3	5B	H615		7	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		8	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		9	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		10	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		11	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		12	奈平IX	炭化材	モクレン属
NNH3	5B	H615		13	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		14	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		15	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		16	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		17	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		18	奈平IX	炭化材	モクレン属
NNH3	5B	H615		19	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 モクレン属
NNH3	5B	H615		20	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		21	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		22	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		23	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		24	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		25	奈平IX	炭化材	イネ科
NNH3	5B	H615		26	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		27	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		28	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		29	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		30	奈平IX	炭化材	モクレン属
NNH3	5B	H615		31	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		32	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		33	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		34	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		35	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		36	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		37	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		38	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		39	奈平IX	炭化材	サクラ属
NNH3	5B	H615		40	奈平IX	炭化材	サクラ属
NNH3	5B	H615		41	奈平IX	炭化材	広葉樹
NNH3	5B	H615		42	奈平IX	炭化材	針葉樹
NNH3	5B	H615		43	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		44	奈平IX	炭化材	クリ
NNH3	5B	H615		45	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		46	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 コナラ属コナラ亜属コナラ節

表 1. 炭化材試料の同定結果(12)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNH3	5B	H615		47	奈平IX	炭化材	クリ
NNH3	5B	H615		48	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		49	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		50	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		51	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		52	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		53	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		54	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		55	奈平IX	炭化材	クリ
NNH3	5B	H615		56	奈平IX	炭化材	クリ
NNH3	5B	H615		57	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		58	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		59	奈平IX	炭化材	イネ科
NNH3	5B	H615		60	奈平IX	炭化材	クリ
NNH3	5B	H615		61	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		62	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		63	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		64	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
				64			樹皮
				64			イネ科
NNH3	5B	H615		65	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		66	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		67	奈平IX	炭化材	サクラ属
NNH3	5B	H615		68	奈平IX	炭化材	サクラ属
NNH3	5B	H615		69	奈平IX	炭化材	サクラ属
NNH3	5B	H615		70	奈平IX	炭化材	クリ
NNH3	5B	H615		71	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		72	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		73	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		74	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		75	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		76	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		77	奈平IX	炭化材	ヤマグワ
NNH3	5B	H615		78	奈平IX	炭化材	イネ科
NNH3	5B	H615		79	奈平IX	炭化材	広葉樹
NNH3	5B	H615		80	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		81	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		82	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		83	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		84	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		85	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		86	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		87	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		88	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		89	奈平IX	炭化材	広葉樹(散孔材)
NNH3	5B	H615		90	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		91	奈平IX	炭化材	サクラ属
NNH3	5B	H615		92	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		93	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		94	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		95	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		96	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		97	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		98	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		99	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		100	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		101	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		102	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		103	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		104	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		105	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

表 1. 炭化材試料の同定結果(13)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNH3	5B	H615		106	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		107	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		108	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		109	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		110	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		111	奈平IX	炭化材	サクラ属
NNH3	5B	H615		112	奈平IX	炭化材	サクラ属
NNH3	5B	H615		113	奈平IX	炭化材	広葉樹
NNH3	5B	H615		114	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		115	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		116	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		117	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		118	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		119	奈平IX	炭化材	広葉樹(散孔材)
NNH3	5B	H615		120	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		121	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		122	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		123	奈平IX	炭化材	ケヤキ
NNH3	5B	H615		124	奈平IX	炭化材	広葉樹
NNH3	5B	H615		125	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		126	奈平IX	炭化材	サクラ属
NNH3	5B	H615		127	奈平IX	炭化材	サクラ属
NNH3	5B	H615		128	奈平IX	炭化材	サクラ属
NNH3	5B	H615		129	奈平IX	炭化材	サクラ属
NNH3	5B	H615		130	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		131	奈平IX	炭化材	サクラ属 樹皮
NNH3	5B	H615		132	奈平IX	炭化材	イネ科
NNH3	5B	H615		133	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		134	奈平IX	炭化材	広葉樹(散孔材)
NNH3	5B	H615		135	奈平IX	炭化材	ヌルデ
NNH3	5B	H615		136	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		137	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節 樹皮
NNH3	5B	H615		138	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		139	奈平IX	炭化材	ヤマグワ
NNH3	5B	H615		140	奈平IX	炭化材	カエデ属
NNH3	5B	H615		141	奈平IX	炭化材	ケヤキ サクラ属 イネ科タケ亜科
NNH3	5B	H615		142	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		143	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		144	奈平IX	炭化材	カエデ属
NNH3	5B	H615		145	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		146	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		147	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		148	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		149	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		150	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		151	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		152	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		153	奈平IX	炭化材	ヤマグワ
NNH3	5B	H615		154	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		155	奈平IX	炭化材	サクラ属
NNH3	5B	H615		156	奈平IX	炭化材	広葉樹
NNH3	5B	H615		157	奈平IX	炭化材	イネ科
NNH3	5B	H615		158	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		159	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		160	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		161	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節 イネ科

表1. 炭化材試料の同定結果(14)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNH3	5B	H615		162	奈平IX	炭化材	クリ
NNH3	5B	H615		163	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		164	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		165	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		166	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		167	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		168	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		169	奈平IX	炭化材	広葉樹
NNH3	5B	H615		170	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		171	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		172	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		173	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		174	奈平IX	炭化材	サクラ属 広葉樹(環孔材)
NNH3	5B	H615		175	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		176	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		177	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		178	奈平IX	炭化材	イネ科
NNH3	5B	H615		179	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		180	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		181	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		182	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		183	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		184	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		185	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		186	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		187	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		188	奈平IX	炭化材	ウコギ属
NNH3	5B	H615		189	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		190	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		191	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		192	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		193	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		194	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H615		195	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		196	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		197	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		198	奈平IX	炭化材	イネ科 樹皮
NNH3	5B	H615		199	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H615		200	奈平IX	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H629	4区1層		奈平IV	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節 イネ科タケ亜科
NNH3	5B	H635	P1		奈平V	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5B	H636	P3		奈平IV	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5B	H636		炭No.2	奈平IV	炭化材	クリ
NNH3	5B	H636		2	奈平IV	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5C	H639		19	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5C	H643		5	古III	炭化材	クリ
NNH3	5C	H651		14	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-1	古III	炭化材	イネ科タケ亜科
NNH3	5C	H654		C-2	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-3	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節 イネ科
NNH3	5C	H654		C-4	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-5	古III	炭化材	クリ 広葉樹 イネ科
NNH3	5C	H654		C-6	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-7	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-8	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節

表 1. 炭化材試料の同定結果(15)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNH3	5C	H654		C-9	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5C	H654		C-10	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
							クリ
							イネ科
NNH3	5C	H654		C-11	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
							イネ科
NNH3	5C	H654		C-12	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
							イネ科
NNH3	5C	H654		C-13	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-14	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-15	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5C	H654		C-16	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-17	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-18	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3	5C	H654		C-19	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5C	H654		C-20	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5C	H654		C-21	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
							イネ科
NNH3	5C	H654		C-22	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-23	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-24	古III	炭化材	イネ科タケ亜科
NNH3	5C	H654		C-25	古III	炭化材	イネ科タケ亜科
NNH3	5C	H654		C-26	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-27	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-28	古III	炭化材	ニシキギ属
NNH3	5C	H654		C-29	古III	炭化材	広葉樹(散孔材)
NNH3	5C	H654		C-30	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5C	H654		C-31	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
							広葉樹(散孔材)
NNH3	5C	H654		C-32	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-33	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
							イネ科
NNH3	5C	H654		C-34	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5C	H654		C-35	古III	炭化材	ニシキギ属
NNH3	5C	H654		C-36	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-37	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-38	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-39	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-40	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-41	古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654		C-42	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
							イネ科
NNH3	5C	H654	P3		古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNH3	5C	H654	P6		古III	炭化材	イネ科
NNH3	5C	H654	P-9		古III	炭化材	イネ科
NNH1	5C	H654	3区2層		古III	炭化材	イネ科
NNHIII	5C	H669		5	奈平I	炭化材	クロウメモドキ属
NNHIV	6A	H693		1	古III	炭化材	キハダ
NNHI	6A	H693		6	古III	不明	不明
NNHIV	6A	H693		7	古III	炭化材	不明
NNHIV	6A	H693		スミB	古III	炭化材	ハイノキ属サワフタギ節
							コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIV	6A	H693		スミB	古III	ワラ?	イネ科
NNHIV	6A	H693		スミC	古III	カヤ材	イネ科
NNHIV	6A	H693		スミD	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIV	6A	H693			古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIV	6A	H700		9	古III	不明	不明
NNHIV	6A	H703		堀片	奈平V	炭化材	ケヤキ
NNHIV	6A	H705	III区2層		古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIV	6A	H706		1	古III	炭化材	広葉樹(散孔材)
NNHIV	6A	H706		2	古III	炭化材	クリ



表1. 炭化材試料の同定結果(16)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNHV	6A	H706		4	古III	種実遺体	不明
NNHV	6A	H706		8	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHV		H706		9	古III	炭化材	クリ
NNHV	6A	H706		18	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHV	6A	H713		1	奈平I	炭化材	クリまたはコナラ節
NNHV	6A	H718	IV区3層		奈平III	炭化材	不明
NNHV	7A	H729		2	奈平IV	炭化材	イネ科タケ亜科
NNHV	7A	H729		3	奈平IV	炭化材	イネ科タケ亜科
NNHV	7A	H729		4	奈平IV	炭化材	クリ
NNHV	7A	H729		5	奈平IV	炭化材	イネ科タケ亜科
NNHV	7A	H729		5	奈平IV	炭化材	イネ科タケ亜科
NNHV	7A	H729		6	奈平IV	炭化材	リョウブ
NNHV	7B	H739		2	不明	炭化材	クリ
NNHV	7B	H739		3	不明	炭化材	モミ属
NNHV	7B	H739		4	不明	炭化材	モミ属
NNHV	7B	H739		5	不明	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHV	7B	H739		6	不明	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHV	7B	H739	P-1		不明	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHV	7B	H742		ワラ灰	古IV	カヤ材	イネ科
NNHV	7B	H742		ワラ灰	古IV	カヤ材	イネ科
NNHV	7B	H747		12	古III	炭化材	カエデ属
NNHV	7B	H747		13	古III	炭化材	イネ科タケ亜科
NNHV	7B	H747		14	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHV	7B	H747		15	古III	炭化材	イネ科タケ亜科
NNHV	7B	H747		16	古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHV	7B	H747		17	古III	炭化材	イネ科タケ亜科
NNHV	7B	H747	III区3層		古III	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHV	7B	H748	II区3層	スミ	奈平V	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHV	7B	H751	P2			炭化材	イネ科タケ亜科
NNHV		H766	I区1層			炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHV	8A	H768	1号床下土坑			種実遺体	モモ(核)
NNHV	8A	H788	III区			炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHV	8A	H792	III区			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHV	8A	H792	I区			炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHV	8A	H793	カマド袖下			焼土	
NNHV	8A	H796	IV区掘り方			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHV	8A	H800	IV区3層			種実遺体	モモ(核)
NNHV	9A	H802	II区4層			炭化材	イヌエンジュ
NNHV	9A	H804	P36層			炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHV	9A	H810	I区1層	炭		炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHV	9A	H810	V区3層			炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHV	9A	H810	IV区サブトレ			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHV	9A	H815	P10	炭		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHV	9A	H825	III区2層			炭化材	クリ
NNHV	9A	H827	2区北側堀張			炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHV	9A	H827	P			炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHV	9A	H827	カマド			炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHV	9A	H827	P4			炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHV	9A	H827	IV区			炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHV	9A	H829				炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHVIII	11A	H848	1区2層			炭化材	サクラ属
NNHVIII	11A	H860	1区1層			黒曜石	
NNH	VIII	H861	I	炭		炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節 ムラサキシキブ属
NNHVIII	11A	H861	II区			炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHVIII	11A	H862	第4カマド2層			焼土	
NNHVIII	11B	H869				種実遺体	破片(クルミ?)
NNHVIII	11B	H893	床下土坑	灰		灰	灰化物
NNHVIII	11A	H898	床下土坑			土壌	
NNHVIII	11A	H898	床下土坑			土壌	
NNHVIII	11A	H899	D1			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節

表1. 炭化材試料の同定結果(17)

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	時	試料の質	樹種
NNHVIII	12A	H912		3		炭化材	ヒノキ属
NNHVIII	12A	H917	IV区6層			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHVIII	12A	H921	III区サブトレ			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHVIII	12A	H922	I区サブトレ	炭		炭化材	ムラサキシキブ属
NNHIX	13A	H937	1区1層			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIX	13A	H937	1区2層			炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHIX	13A	H942	カマド	灰		炭化材	サクラ属
NNHIX	13A	H942	カマド灰層			炭化材	エノキ属
NNHIX	13A	H943	III区2層			黒曜石	
NNHIX	13A	H947	カマド	灰		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
						灰	
NNHIX	13A	H950	カマド	灰		炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIX	13A	H950	灰層カマド			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIX	13A	H950	灰層カマド			炭化材	クリ
NNHIX	13A	H952	灰層			炭化材	クリ
NNHIX	13A	H954	II区2層			炭化材	ムラサキシキブ属
NNHIX	13A	H955	カマド灰層			炭化材	クリ
NNHIX	13A	H955	カマド灰層			炭化材	エノキ属
						骨片	不明(哺乳類)
						焼土	焼土
NNHIX	13A	H955	カマド灰層			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
						灰	
NNHIX	13A	H965	カマド	焼土		生木	広葉樹
NNH1	1B	H				炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3		A191	カマド	2		炭化材	マツ属複雑管束亜属
NNH3		F383	P-5			炭化材	ニレ属
NNH3		F383	P6			炭化材	クリ
NNH1		D46	3区3層			炭化材	ヤマグワ
NNHIII		D204	2層			灰	灰化物
NNHIII		D204				土壌	
NNHIV	6A	D276	炭のそば			炭化材	クリ
NNHIV	6A	D276				炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIV	6A	D276				炭化材	クリ
NNHIV	6A	D276				炭化材	クリ
NNHIV	6A	D276				炭化材	クリ
NNHIV	6A	D276				炭化材	針葉樹
NNHIV	7A	D282	II区			炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNHIV	7B	D286		竹		生木	イネ科タケ亜科
						炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHVIII	11B	D377				炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
NNH3		M38				炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIII	5A	VD P71				炭化材	エノキ属
NNHIII	4A	VM P128	フク土			炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHIII	4B	VT P101				炭化材	ケヤキ
NNHVIII	12A	12A P39				炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節
NNHVIII	11B	X Y27グリッド				炭化材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は同性、1－4細胞幅、1－30細胞高であり目立たない。

・アサダ (*Ostrya japonica* Sarg.) カバノキ科アサダ属

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2－4個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1－3細胞幅、1－30細胞高。

・クマシデ属イヌシデ節 (*Carpinus* subgen. *Euarpinus*) カバノキ科

散孔材で、管孔は放射方向に2－4個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列状～交互状に配列する。放射組織は異性、1－3細胞幅、1－40細胞高のもの集合放射組織とがある。

・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2－3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織は同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1－3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1－20細胞高のもの複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1－2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1－20細胞高のもの複合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*) ブナ科

環孔材で、複合放射組織を有することから、上記クヌギ節かコナラ節と考えられるが、夏材部における小道管の配列が観察できなかったため、分けることができず、コナラ亜属とした。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1－4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1－15細胞高。

・エノキ属 (*Celtis*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は2－3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1－10細胞幅、1－50細胞高で鞘細胞が認められる。

・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は1－2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1－8細胞幅、1－50細胞高。しばしば結晶を含む。

・ニレ属 (*Ulmus*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1－2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1－6細胞幅、1－40細胞高。

・ヤマゲワ (*Morus australis* Poiret) クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は1－5列、孔圏外への移行は緩やか、年輪界へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1－6細胞幅、1－50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2－4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1－2細胞幅、1－40細胞高。

・モモ (*Prunus salicina* Lindley) バラ科サクラ属

環孔性散孔材で、年輪のはじめにやや大型の道管が4－5列配列した後、急激に管径を減じて、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1－6細胞幅、1－60細胞高。

・サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2-8個が複合し、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-30細胞高。

・バラ科ナシ亜科 (Rosaceae sibfam. Maloideae)

散孔材で、管壁は中庸~薄く、横断面では多角形、単独および2-5個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。

・イヌエンジュ (Maackia amurensis Rupr. et Maxim. subsp. buergeri (maxim) Kitamura) マメ科イヌエンジュ属

環孔材で、孔圏部は1-4列、孔圏外でやや急激に管径を減じた後、多数の道管が集まって接線方向、斜方向に複合し、木口面で帯状の模様をつくる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。小道管は階層状に配列し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性または同性、1-8細胞幅、1-80細胞高。

・キハダ (Phellodendron amurense Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は2-5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。

・ヤマウルシ (Rhus trichocarpa Miq) ウルシ科ウルシ属

環孔材で、孔圏部は2-4列、孔圏外への移行は緩やかで、年輪界に向かって管径を漸減させ、年輪界付近ではかなり小径となる。晩材部の小道管は、単独または2-4個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-3細胞幅、1-20細胞高で、時に上下に連結する。

・ヌルデ (Rhus javanica L.) ウルシ科ウルシ属

環孔材で、孔圏部は2-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。小道管の管壁厚は中庸で2-3個が複合し、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-40細胞高。

・チドリノキ (Acer carpinifolium Sieb. et Zucc.) カエデ科カエデ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列~交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-10細胞幅、1-100細胞高を越える。細胞壁の厚さが異なる2種類の本繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・カエデ属 (Acer) カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列~交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の本繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・トチノキ (Aesculus turbinata Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1-15細胞高で階層状に配列する。

・アワブキ属 (Meliosma) アワブキ科

散孔材で、管孔は単独または2-6個が複合して散在する。道管は単穿孔または階段穿孔を有し、階段穿孔の段数は5前後、壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型の異性、1-3細胞幅、1-50細胞高。

・ニシキギ属 (Euonymus) ニシキギ科

散孔材で、道管は小径、単独または2-3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1-20細胞高。

・クロウメモドキ属 (Rhamnus) クロウメモドキ科

紋様孔材で、年輪の始めに多数の道管が集まった後、火炎状・稲妻状等の紋様状に配列する。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-15細胞高。

・ミズキ属 (Cornus) ミズキ科

散孔材で、道管はほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~交互状に配列する。放射組織は異性、1-5細胞幅、1-30細胞高。

・ウコギ属 (Acanthopanax) ウコギ科

散孔材～紋様孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が斜～放射方向に複合して、全体として接線・斜方向の帯状に配列し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～8細胞幅、数細胞高のものから広放射組織までである。

・リョウブ (Clethra barbinervis Sieb. et Zucc.) リョウブ科リョウブ属

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った円形。道管はほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状～階段状に配列する。放射組織は異性、1～4細胞幅、1～30細胞高。

・エゴノキ属 (Styrax) エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2～4個が複合して散在し、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。

・ハイノキ属サワフタギ節 (Symplocos sect. palura) ハイノキ科

散孔材で、道管は小径で、単独または2～5個が複合して散在し、年輪界付近で径を減じる。道管は階段穿孔を有し、対列状～階段状となる。放射組織は異性、1～4細胞幅、1～20細胞高で時に上下に連結する。

・トネリコ属 (Fraxinus) モクセイ科

環孔材で、孔圏部は2～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～40細胞高。

・ムラサキシキブ属 (Callicarpa) クマツヅラ科

散孔材で、横断面では多角形、管孔は単独および2～3個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。

・イネ科タケ亜科 (Gramineae subfam. Bambusoideae)

組織は軸方向のみで放射方向の組織は認められない。軸方向組織は、維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもつ。

・イネ科 (Gramineae)

維管束が基本組織の中に散在する不斉中心柱をもち、タケ亜科の組織によく似ている。草本質で、タケ亜科とした試料よりも薄く脆いものをイネ科とした。

<種実遺体>

・オニグルミ (Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana (Maxim) Kitamura) クルミ科クルミ属

核が検出された。褐灰色で木質。非常に堅い。大きさは2.5cm程度。側面の両側に縫合線が発達する。広卵形で、基部は丸くなっているが先端部は尖る。表面は荒いしわ状となり、縦方向に溝が走っている。

・モモ (Prunus persica Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)が検出された。褐色～黒褐色で大きさは2.5cm程度。核の形は楕円形でやや扁平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

・トチノキ (Aesculus turbinata Blume.) トチノキ科トチノキ属

種皮の破片が検出された。大きさは1cm程度で、薄く堅い。表面には黒く艶のある部分と、黒褐色でざらつく部分とがある。

(2) 灰像分析

結果を表2に示す。いずれの灰からも珪化組織片として、栽培植物であるイネ属に形成される珪酸体や短細胞列、機動細胞列が検出される。

表2. 灰像分析結果

年度	調査区	遺構名	出土位置	番号	検出された種類
NNH	1A	H161		灰	イネ属珪酸体・短細胞列・機動細胞列
NNH I	1A	H161		灰	イネ属珪酸体・短細胞列・機動細胞列
NNH II	3A	H401	10層床下ビット	10層	イネ属珪酸体・短細胞列・機動細胞列
NNH III		D204	2層		イネ属珪酸体・短細胞列・機動細胞列
NNH VIII	11B	H893	床下土坑	灰	イネ属珪酸体・短細胞列・機動細胞列

#### 4. 考察

##### (1) 木材利用

本遺跡の発掘調査成果（佐久市土地開発公社・佐久市教育委員会，2002,2003,2004）によれば、住居跡の年代観は、古墳時代～奈良・平安時代とされ、さらに、出土遺物や遺構等の検討により、更に年代観が細別されている。ここでは、これらの細別された時代観に準拠し、各時代・時期毎の住居跡における木材利用を検討する。

古墳時代は、分析対象試料が得られた住居跡は計43軒（Ⅰ期：0軒、Ⅱ期：1軒、Ⅲ期40軒、Ⅳ期2軒）、試料数は462点（Ⅰ期：0点、Ⅱ期：1点、Ⅲ期457点、Ⅳ期：4点）である（表3）。各時代の木材利用の傾向は、Ⅱ期の住居跡は種類不明1点のみであり不明であるが、Ⅲ期は457点と当該期の試料の大部分を占め、その内訳はH187住居跡で311点、H654住居跡で57点と2軒の住居跡から出土した炭化材によって構成される。最も試料の多いH187住居跡は、コナラ節が約8割を占め、コナラ節が多用される。また、H654住居跡では屋根材の可能性があるイネ科やタケ亜科を除くと、大部分の炭化材がコナラ節である。このことから、古墳時代Ⅲ期では、コナラ節の木材が多く利用されていたと考えられる。コナラ節の木材は、重硬で強度の高い材質を有しており、二次林の構成種として本遺跡周辺でも比較的普通に見られた種類と推測される。これらの点を考慮すると、遺跡周辺で比較的入手の容易である種類の中から強度の高い木材を利用していた可能性がある。なお、Ⅳ期では、4点中1点が種類不明、2点が屋根材の可能性があるイネ科、種類まで同定できたのはコナラ節の1点であった。コナラ節を利用する点でⅢ期と類似するが、試料数が少ないためⅢ・Ⅳ期における種類構成の差異等を言及することはできない。

奈良・平安時代では、分析対象試料が得られた住居跡は計78軒（Ⅰ期：5軒、Ⅱ期：7軒、Ⅲ期：8軒、Ⅳ期：17軒、Ⅴ期：15軒、Ⅵ期：11軒、Ⅶ期：6軒、Ⅷ期：0軒、Ⅸ期6軒、Ⅹ期：3軒、Ⅺ期：0軒）、試料数は473点（Ⅰ期：5点、Ⅱ期：19点、Ⅲ期：14点、Ⅳ期：160点、Ⅴ期：17点、Ⅵ期：17点、Ⅶ期：105点、Ⅷ期：0点、Ⅸ期：230点、Ⅹ期：6点、Ⅺ期：0点）である（表4）。このうち、Ⅸ期のH615住居跡で222点と当該期の試料の半数を占め、次いで、Ⅶ期のH230住居跡の99点、Ⅳ期のH352住居跡の25点、Ⅱ期のH554住居跡の12点と、まとまった試料が得られている。ここでは、前述の4軒の住居跡における木材の種類構成の傾向を把握する。Ⅱ期のH554住居跡ではイネ科や種類不明4点を除く、8点から7種類の樹種が確認された。Ⅳ期のH352住居跡では、タケ亜科や種類不明を除いた23点から8種類の樹種が確認されており、木材の種類数の多い傾向が伺われる。一方、Ⅶ期のH230住居跡では、種類不明1点を除く98点から12種類の樹種が確認され、Ⅸ期のH615住居跡ではイネ科、タケ亜科、樹皮、種類不明30点を除く、192点から10種類の樹種が確認された。H554住居跡やH352住居跡と同様に、利用される木材の種類数が多い点は共通する傾向として指摘できるが、一方で、これらの木材にクヌギ節・コナラ節が比較的多く認められる点はやや異なる傾向と言える。また、住居跡の平面形態や面積、主柱穴の配置等の分類（佐久市土地開発公社・佐久市教育委員会，2002,2003,2004）を参考に、当該期の住居跡の傾向を検討すると、H554・H352・H230住居跡がA（隅丸方形）、H615住居跡はB（隅丸長方形）であり、面積はH230が最も小さく（ $5.0\text{m}^2$ ）、順にH352（ $10.6\text{m}^2$ ）、H615（ $22.8\text{m}^2$ ）、H554（ $36.70\text{m}^2$ ）となる。また、主柱穴の配置は、H554はA3、H615はA、この他は不明とされる。これらの分類と本分析によって確認された木材の構成や種類数の比較では、住居跡の規模や主柱の配置による差異を見出すことはできない。このことから、現段階ではⅡ・Ⅳ期の住居跡とⅦ・Ⅸ期の住居跡に認められた共通する傾向と差異がどのような背景に起因するかは不明である。

ところで、聖原遺跡周辺における古墳時代～平安時代の住居跡から出土した構築材と考えられる木材（炭化材）の分析事例を見ると、下聖端遺跡では古墳時代及び平安時代の住居構築材の分析調査成果では、古墳時代中期末の住居跡ではコナラ節を主とし、平安時代中期の住居跡では、点数に対して種類数が比較的多く、クヌギ節・コナラ節の利用もあまり見られないことが確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1992a）。下聖端遺跡で認められた古墳時代の住居構築材の樹種構成は、本遺跡のH187・H654住居跡で認められた傾向と調和的であり、平安時代中期の樹種構成は、本遺跡のH352・H554住居跡の結果に類似する。

佐久市周辺における分析事例では、古墳時代では、和田原遺跡（小諸市）の古墳時代初頭の住居跡4軒（82点）、塚田遺跡（御代田町）の古墳時代初頭のH4住居跡（244点）、竹花遺跡（小諸市）の古墳時代後期の住居跡（44点）がある（パリノ・サーヴェイ株式会社，1989a，1994a，1994b）。これらの調査成果によれば、いずれもコナラ節を主とした種類構成が確認されており、本遺跡で認められた古墳時代の木材利用の傾向と調和的である。一方、奈良・平安時代の事例では、大塚原遺跡・竹花遺跡（小諸市）における奈良時代の6軒の住居跡から出土した炭化材各1点（計6点）、十二遺跡（御代田町）における奈良時代のH58住居跡（9点）、根岸遺跡（御代田町）の9世紀のH11住居跡（10点）、広畑遺跡（御代田町）の9世紀のH1住居跡（49点）等がある（パリノ・サーヴェイ株式会社，1988,1989b，1989c，1994b）。これらの調査成果によれば、奈良時代では、コナラ節・クヌギ節の比率は少なく、全体的に



表 3. 古墳時代の住居址出土炭化材の遺構別種類構成

時期・遺構	樹種	カラマツ	モミ属	ヒノキ属	カハノキ属	ブナ属	クスギ節	コナラ節	クリ	ヤマクワ	サクラ属	ナン亜科	キハダ	カエデ属	ニシキギ属	ミズキ属	サワフタギ節	トネリコ属	ムラサキギン属	樹皮	タケ亜科	イネ科	種類不明	材以外	合計	
古 II 期	H488																						1		1	
古 III 期	H93						2	2																		4
	H100							1																		1
	H106																						1			1
	H126							1																		1
	H150								1						2								1			4
	H157																							1		1
	H162		1					3													1					5
	H163																							1		1
	H164																			2		1	1	1		5
	H167	1																								1
	H171		1																							1
	H187			5			7	242	7	2	4				3							3	21	15	2	311
	H226							1																		1
	H232							1	1								1									3
	H254							1																		1
	H257							1											1							2
	H269						1																	1		2
	H278		1																	1		1	1	2		6
	H280							2																		2
	H335							1																		1
	H338																						1			1
	H369							3																1		4
	H373			1																						1
	H410																						1			2
	H454							1															1			1
	H456							1																		1
	H457							1																		1
	H497					1																				1
	H549			1				2				1											1			5
	H639							1																		1
	H643								1																	1
	H651																							1		1
	H654						1	16	2						2							3	30	3		57
	H693							3					1					1					2	2		9
	H700																							1		1
	H705							1																		1
	H706							2	2															2		6
	H747						1	2							1							3				7
	H84							1																		1
	H88																							1		1
古 IV 期	H119						1																1		2	
	H742																					2			2	
合計		1	3	7	1	1	11	291	14	2	4	1	1	6	2	1	1	1	3	1	13	64	31	2	462	



種類数の多い傾向を示し、平安時代ではクヌギ節・コナラ節を中心とした種類構成を示し、奈良時代の樹種構成は本遺跡のⅡ・Ⅳ期の傾向と類似し、平安時代の樹種構成は本遺跡のⅦ・Ⅸ期で認められた傾向と類似する。したがって、本遺跡で認められた時期別の木材利用の傾向は、本遺跡内だけではなく佐久盆地一帯の広範囲の動向を示している可能性がある。

なお、今回の分析調査では、奈良・平安時代Ⅱ期のH554住居跡からモモの木材が1点確認されている。モモの木材が古代の住居跡内から出土した例は、大境遺跡（旧更埴市）や半田中原・南原遺跡（群馬県渋川市）、芝山遺跡（群馬県北橋村）等で報告例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993b；橋本ほか、1994；藤根、1994）。特に、大境遺跡では、柱材として出土しており、住居跡の主要な構築材としても利用されていたことが伺われる。モモは、中国から渡来した栽培植物とされ、花を観賞用に、果実を食用・薬用に用いるが、木材は特定の用途を持たず、これまでに行われた分析調査でもモモを住居構築材に用いる例は多くはない。構築材として利用可能な木材の大きさ等を考慮すると、本遺跡周辺でモモが栽培され、それらの木材を利用したことが推測される。

また、H554住居跡では、住居構築材と考えられる試料内に、径7～8mmの棒状の加工材（広葉樹のウコギ属）が認められた。横断面の観察では樹芯は認められず、年輪がほぼ平行に入ることから、大きな材から削り出し等の加工が行われたことが推定される。径の大きさ等から構築材の一部ではなく、木製品が炭化・残存した可能性があるが、細片で端部が確認できないため全体の形状については不明であり、現段階では用途等の詳細も明らかにできない。

## (2) 種実遺体

いずれも住居跡から出土した試料であり、これらの試料の時代観について所属する遺構を参考として見ると、古墳時代は1点（Ⅲ期：1点）、奈良・平安時代は7点（Ⅰ期：1点、Ⅳ期：4点、Ⅴ期1点、Ⅸ期1点）、さらに、時期不明3点からなる。

古墳時代は、H706（Ⅲ期）から出土している。種類は不明であったことから、本遺跡の当該期における植物利用、とくに種実遺体の利用状況は不明である。なお、本遺跡周辺及び佐久市周辺における調査事例をみると、下聖端遺跡（佐久市）において古墳時代中期の住居跡から出土した種実遺体の同定が行われ、イネ（米）、コムギ、オオムギ、マメ類、タデ類、ソバ、エゴマ、ヤマブドウ、モモ、ウメ近似種、ハシバミが確認されている（氏原・廣瀬、1992）。また、東下原遺跡（小諸市）の古墳時代後期の住居跡の竈からはモモが、竹花遺跡（小諸市）の古墳時代後期の住居跡からオニグルミの種実が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1994b）。前述した種実のうち、オニグルミ、ハシバミ、ヤマブドウを除く種類は、いずれも栽培種であることから、本地域や周辺ではこれらの種類が栽培されていた可能性がある。ハシバミやヤマブドウは、山地の落葉広葉樹林の林縁部等に生育する種類である。また、オニグルミとハシバミは子葉が生食可能で、ヤマブドウも液果で果実が生食可能である。これらの種類は、遺跡周囲の山林に生育していた可能性がある。

一方、奈良・平安時代の時期別に検出された種実の構成を見ると、サクラ属（Ⅰ期）、オニグルミ、モモ、トチノキ（Ⅳ期）、モモ（Ⅴ期）、オニグルミ（Ⅸ期）となる。これらの種類のうち、オニグルミとトチノキは自生種であり、周囲の山地の溪畔等水分条件の良い場所に生育していたと考えられる。また、モモは前述のように栽培種であることから、当該期にも周囲で栽培されていたことが考えられる。

ところで、トチノキは灰汁抜きを必要とするものの、食用可能であり収量が多く長期の保存も可能であることから、オニグルミと共に重要な植物食糧の一つであったと考えられる。モモは、その用途として食用や、屋代遺跡群における検出例から、祭祀的な利用の可能性も指摘されている（辻ほか、1999）。当該期における遺跡周辺及び佐久市周辺における調査事例を見ると、芝宮遺跡・中原遺跡群（佐久市）で7～9世紀の住居跡内土壌の水洗選別で得られた種実遺体の同定が行われ、アワ・キビ・イネ・オオムギ、コムギ、ムギ類、モモ、オニグルミ、ヤマブドウが確認されている（藤原、1999）。また、竹花遺跡（小諸市）の奈良時代後半～平安時代の住居跡からはオニグルミ、モモ、スモモ、大塚原遺跡では奈良時代後半の住居跡からサクラ属が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社、1994b）。これらの調査成果を見ると、種実遺体の種類は基本的に古墳時代と同様であることから、栽培種の利用及びオニグルミ、トチノキ、ヤマブドウなど、周囲の山野に自生する可食植物も利用が継続して行われていたと考えられる。

## Ⅱ. 動物利用

### 1. 試料

試料は、住居跡（39軒）、土坑（20基）、溝（17本）、および包含層から出土した獣骨・貝類等の動物遺存体85試料である。これらの試料中には、1試料中に複数点の骨片が認められるものがあり、土壌が付着した状態、あるいは土壌

ごと採取されており、遺構単位で一括試料として取上げられたもの、遺構内で地点毎に取上げられたものからなる。これらの試料の肉眼観察では、ピビアナイト（藍鉄鉱）の析出が見られないことから、地下水の影響を受けない、比較的乾燥した環境にあったと判断される。ただし、植物根等が貫通した痕跡や、ネズミ類の齧り痕が認められる資料もあり、埋没過程や土壌中において植物や動物の影響を受けていることが考えられる。また、遺存状況は不良であり、破損や劣化が進み、現状で触れただけで崩壊しそうなものや、歯牙のように比較的堅固な試料など様々である。これらの試料は、所属時期の不明なものもあるが、古墳時代から奈良・平安時代の所産とされる遺構から検出されている。試料の詳細は、結果と共に示す。なお、文中に示したNoは、遺物ラベルに表記された番号を踏襲している。

## 2. 分析方法

試料に付着する土壌を、筆や竹串により除去する。一般工作用セメダインや水溶性ボンドにより接合し、形状の復原を行う。その後、現生骨格標本や骨格図との比較により種と部位を同定する。並行して、獣骨に残る破損痕跡や成長状態などの観察と計測を行う。脆弱化している試料については、補強を目的としてアセトンで薄めたパラロイド B72（アクリル系樹脂）を塗布する。

記載にあたり、骨格各部の名称は加藤（1983）、家畜解剖学分科会（1978）を参考にする。また、動物種名は、海産貝類は奥谷ほか（2000）、淡水産貝類は波部・小菅（1967）、野生哺乳類は阿部ほか（1994）、家畜は宇田川（1971）に準拠している。また、骨の計測は基本的に Driesch（1976）に従い、デジタルノギスを用いる。

ニホンジカの年齢については、萌出状況、咬耗状態、歯冠高などにに基づき、大泰司（1980）に従って推定する。イノシシの年齢は、歯の萌出や咬耗状態に基づき、林ほか（1977）に従って推定する。ウマの年齢については、歯牙の場合は西中川ほか（1991）による中央部の高さからの年齢推定式 I、四肢骨の場合は Scmid（1972）のまとめた骨端癒合年齢データに基づき推定する。ウシの年齢も Scmid（1972）のデータに基づき推定する。ウシ、ウマの体高は西中川ほか（1991）の推定方法を用い、さらにウマの場合は林田・山内（1957）による推定方法も併用する。ウシ、ウマの遺存体と現生する在来牛馬との比較には、西中川ほか（1998）、西中川ほか（1991）による在来牛馬計測値を引用する。

## 3. 結果

検出された動物種名一覧を表 5 に示し、各試料の同定結果を表 6 に示す。遺構や包含層などから出土した動物遺存体 85 試料からは、2 門 3 綱 5 目 6 科 6 種の動物種が確認された。また、遺構・グリッド単位で算出した各種の最少個体数は、マルタニシ 168 個、イヌ 1 体、ウマ 40 体、ウシ 12 体、ニホンジカ 12 体、イノシシ 7 体である。

貝類のうち、マルタニシは淡水産である。奥谷（1983）によれば、本種は水田や沼に普通に見られ、食用になる。この他、二枚貝綱では、目以下不明と、マルスダレガイ目の一種と考えられるものが検出される。

哺乳類では、野生動物と家畜が確認される。ニホンジカには幾つかの亜種があり、本州に分布するホンシュウジカは常緑広葉樹林、落葉広葉樹林などに生息するとされる（阿部ほか、1994）。ホンシュウジカは体高 83–86cm、体重 40–80kg とされる（林、1968）。イノシシは常緑広葉樹林、落葉広葉樹林、里山の二次林、低山帯と隣接する農耕地、平野部に生息し、中国地方産の雄は体高 60–80cm、体重 50–150kg とされる（阿部ほか、1994）。ウマは 4 世紀末–5 世紀、ウシは弥生時代後期以降に出現し、いずれも 5 世紀中頃以降から全国的に普及したと考えられている家畜とされる（松井、1991；西中川ほか、1991；松井・久保、1999）。イヌは縄文時代早期から確認されている家畜である。阿部ほか（1994）によれば、現在では各地に野生化した個体が分布するとされている。以下に、比較的良好な状態で検出され、まとまりを持つ試料を主とし、遺構毎（住居跡・土坑・溝跡）に記載を行う。

表 5. 検出貝類・獣骨の分類群一覧

軟体動物門 Phylum Mollusca	
腹足綱 Class Gastropoda	
盤足目 Order Discopoda	
タニシ科 Family Vivipariidae	
マルタニシ <i>Cipangopaludina chinensis malleata</i>	
二枚貝綱 Class Bivalvia	
マルスダレガイ目の一種？ <i>Veneroida sp.?</i>	
脊椎動物門 Phylum Vertebrata	
哺乳綱 Class Mammalia	
ネコ目（食肉目） Order Carnivora	
イヌ科 Family Canidae	
イヌ <i>Canis familiaris</i>	
ウマ目（奇蹄目） Order Perissodactyla	
ウマ科 Family Equidae	
ウマ <i>Equus caballus</i>	
ウシ目（偶蹄目） Order Artiodactyla	
ウシ科 Family Bovidae	
ウシ <i>Bos taurus</i>	
シカ科 Family Cervidae	
ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>	
イノシシ科 Family Suidae	
イノシシ <i>Sus scrofa</i>	

表 6. 動物依存体検出状況(1)

遺構・地区	出土地点	分類群	部位	左右	部分	被熱	備考	時期		
H52		No.12	ウシ	歯牙	臼歯片			奈平Ⅳ期		
H59		カマド	獣類	不明	破片			古Ⅲ期		
H70		I区2層	ウマ	上顎歯	右 P <sup>2-4</sup> ・M <sup>1-3</sup>		13~15才	奈平Ⅴ期		
					左 P <sup>3-4</sup> ・M <sup>1-3</sup>		13~15才			
H98	1	カマド	獣類	不明	破片	焼		古Ⅲ期		
H162		カマドNo.109	獣類	不明	破片	焼		古Ⅲ期		
		カマドNo.108	獣類	四肢骨	破片	焼				
		No.110	獣類	不明	破片	焼				
H170	I A	カマド	獣類	不明	破片	焼		古Ⅲ期		
			獣類	不明	破片	焼				
H175		カマドNo.4内	二枚貝類	殻	破片	?	淡水産?	奈平Ⅰ期		
H183	4 B	No.2	ウマ	上顎歯	臼歯片			奈平Ⅶ期		
H220	4 B	カマド	獣類	不明	破片	焼		奈平Ⅲ期		
H223		カマド	イノシシ	基節骨	ほぼ完全	焼		古Ⅳ期		
H260		No.14	ウシ	踵骨	右		?	奈平Ⅲ		
			ウシ	中心第4足根骨	右	前面	?			
			ウシ	第2・第3足根骨	右	完	?			
			ウシ	中足骨	右	pro・骨体	焼		体高113~118以上	
			ウシ?	不明		破片	焼		焼骨有り	
			炭化材							
H329	2 B	No.27	ウシ/ウマ	四肢骨	骨体片			奈平Ⅳ		
		II区	獣類	四肢骨	破片					
H366		No.8内	獣類	不明	破片	焼	焼骨片含む	奈平Ⅰ		
H398		No.7	ウシ/ウマ	四肢骨	骨体片			奈平Ⅵ		
H414	3 A	P.5	獣類	四肢骨	破片			奈平Ⅶ		
H444	3	No.5	ウシ	中足骨	骨体			奈平Ⅳ		
H465	3 A	カマドNo.19	獣類	不明	破片	焼	焼骨	奈平Ⅳ		
		No.1	ニホンジカ	下顎歯	左 M.3		未咬耗			
		No.1	ニホンジカ	歯牙		臼歯片				
H493	4 A	III区トレ	ウマ	上顎歯	左 P <sup>2</sup> ・P <sup>4</sup>		6~8才	古Ⅳ		
			ウマ	上顎骨		破片				
			No.4	獣類	下顎骨		破片			
			No.4-1	ウマ	上顎歯	右 P <sup>3</sup>			6~8才	
			No.4-2	ウマ	上顎歯	右 M <sup>1</sup>			6~8才	
			No.4-3	ウマ	上顎歯	右 M <sup>2</sup>			6~8才	
			No.4-4	ウマ	上顎歯	右 M <sup>3</sup>			6~8才	
			No.4-5	ウマ	上顎歯	左 P <sup>3</sup>			6~8才	
			No.4-6	ウマ	上顎歯	右 P <sup>4</sup>			6~8才	
			No.4-7	ウマ	上顎歯	左 M <sup>1</sup>			6~8才	
			No.4-8	ウマ	上顎歯	左 M <sup>2</sup>			6~8才	
			No.4-9	ウマ	上顎歯	左 M <sup>3</sup>			6~8才	
			ウマ	下顎骨	右	骨体内側				
			ウマ	下顎骨	左	骨体外側				
			ウマ	下顎骨		破片				
			ウマ	下顎骨	右	骨体外側				
			ウマ	歯牙	左	切歯				
			No.5-1	ウマ	下顎歯	左 M <sub>3</sub>			6~8才	
			No.5-2	ウマ	下顎歯	左 M <sub>2</sub>			6~8才	
			No.5-3	ウマ	下顎歯	左 M <sub>1</sub>			6~8才	
			No.5-4	ウマ	下顎歯	左 P <sub>4</sub>			6~8才	
			No.5-5	ウマ	下顎歯	左 P <sub>3</sub>			6~8才	
			No.5-6	ウマ	下顎歯	左 P <sub>2</sub>			6~8才	
			No.5-7	ウマ	下顎歯	右 I <sub>1</sub>			6~8才	
			ウマ	下顎歯	右 I <sub>2</sub>		6~8才			
			No.5-8	ウマ	下顎歯	右 M <sub>3</sub>			6~8才	
			No.5-9	ウマ	下顎歯	右 M <sub>2</sub>			6~8才	
			No.5-10	ウマ	下顎歯	右 M <sub>1</sub>			6~8才	
No.5-11	ウマ	下顎歯	右 P <sub>4</sub>		6~8才					
No.5-12	ウマ	下顎歯	右 P <sub>3</sub>		6~8才					
No.5-13	ウマ	下顎歯	右 P <sub>2</sub>		6~8才					
No.5-14	ウマ	下顎歯	右 I <sub>3</sub>		6~8才					
H517	4 B	II区I層	獣類	不明	破片			奈平Ⅵ		
H547	4 B	No.4	獣類	不明	破片	焼		奈平Ⅵ		
H548	4 B	I区1・2層	マルスダレガイ科?		左 前縁・殻頂		殻高28.8mm	奈平Ⅴ		
H554	5 A	No.10	獣類	不明	破片			奈平Ⅱ		
H556	5 A	No.1	獣類	四肢骨	骨体			奈平Ⅴ		
H560	5 A	P.1	ニホンジカ	上腕骨	左 dis			奈平Ⅹ		
		P.2	獣類	不明	破片					
H563	5 A	No.1	ウマ	肩甲骨	左 関節窩・骨体前縁			奈平Ⅸ		
H591	5 A	カマド	ニホンジカ	踵骨		踵骨隆起	焼	未癒合の骨端	奈平Ⅳ	
			ニホンジカ?	距骨?		破片	焼			
			獣類	不明		破片	焼			
H601	5 A	II区	ウマ	臼歯	破片			奈平Ⅵ		
H615	5 B	P.1	獣類	不明	破片			奈平Ⅸ		
		P.2	獣類	不明	破片					
H685	5 D	No.5	ウシ/ウマ	四肢骨	骨体		大腿骨?	奈平Ⅴ		
		No.8	獣類	不明	破片					
		No.37	ニホンジカ	下顎歯	左 骨体片・P <sub>4</sub> ・M <sub>1-2</sub>		2~2.5才			
		歯No.3	ニホンジカ	下顎歯	右 M.3		10.5~11.5才			
		歯No.4	ニホンジカ	下顎歯	左 骨体・P <sub>3-4</sub> ・M <sub>2-3</sub>		10.5~11.5才			
		I区2層	獣類	四肢骨	骨体					

pro: 近位端、dis: 遠位端、I: 切歯、C: 犬歯、P: 小臼歯、M: 大臼歯、m: 乳臼歯 (上付き数字は上顎歯、下付き数字は下顎歯)

表 6. 動物依存体検出状況(2)

遺構・地区	出土地点	分類群	部位	左右	部分	被熱	備考	時期
H686	5 D	カマド	ウシ/ウマ	四肢骨		骨体片		奈平Ⅳ
H688	5 D	Na.1	ニホンジカ	角		破片		奈平Ⅴ
		Na.2	ウシ	中足骨	右	pro・骨体・dis	体高122cm前後	
		Na.3	獣類	不明		破片		
		Na.4	獣類	四肢骨		骨体片		
H696	6 A	カマドNa.1	ニホンジカ	角(落角)		角座・第1又	不明	
H718	6 A	Na.7	ウマ	踵骨	右	破片		奈平Ⅲ
		Na.8	ニホンジカ?	踵骨?	右	破片		奈平Ⅲ
			獣類	不明		破片		
		Na.9	獣類	四肢骨		骨体片		
H758	8 A	P3	ニホンジカ	角(落角)	右	角座・第1枝・第2又	—	
H768	8 A	2号床下土坑	ウマ	臼歯		破片	? 炭化物付着	—
H931	13 A	Na.1	ウシ/ウマ	頭蓋骨		鼓室部?		—
		Na.2	不明			破片		
		Na.3	ニホンジカ/ウシ?	下顎骨	右	下顎枝		
		Na.4	ウマ	脛骨	左	骨体		
		Na.5	ウマ	踵骨	左	破片		
		Na.5	ウシ/ウマ?	不明		破片		
			ウマ	脛骨	左?	dis内側		
		Na.6	ウマ	第3足根骨	右		幅44.6mm以上	
H955	13 A	カマド	イノシシ	下顎骨		下顎枝片	焼	—
			獣類	歯牙		歯根	焼	
			獣類	不明		破片	焼	
			不明			破片		
H974	13 A	Na.1	獣類	不明		破片		—
		Na.2	獣類	四肢骨		破片		
		Na.3	獣類	不明		破片		
		Na.4	獣類	不明		破片		
D46		Na.8	ウシ/ウマ	四肢骨		骨体・骨端		—
		Na.7	ウマ	下顎歯	左	P <sub>2-4</sub>	3~4才	
		Na.9	ウシ/ウマ	四肢骨		骨体		
		Na.10	ウマ	大腿骨	左	骨体		
D48	1 B	Na.16	獣類	不明		破片	骨体中央部に切断痕 礫や土器片と共存	—
D115		ウマ	肩甲骨	右	dis・骨体前縁			—
		ウマ	肩甲骨	左	関節上結節・後縁など			
		ウマ	上腕骨	右	pro・dis・骨体			
		ウマ	上腕骨	左	dis			
		ウマ	橈骨・尺骨	右	pro・骨体		推定全長276.4mm	
		ウマ	橈骨・尺骨	左	pro			
		ウマ	中手骨	右	pro		推定全長188.7mm	
		ウマ	中手骨	左	pro・骨体			
		ウマ	中手骨		骨体・dis		推定全長177.0mm	
		ウマ	寛骨	左?	寛骨臼			
		ウマ	大腿骨	左	pro骨頭片			
		ウマ	膝蓋骨	左				
		ウマ	脛骨	右	pro?・dis			
		ウマ	踵骨	右			全長98.0±mm	
		ウマ	距骨	右				
		ウマ	中心・第3足根骨	左			中心足根骨に第3足根骨の一部が癒着	
		ウマ	第2・第3中足骨	左	pro		推定全長240.3mm	
		ウマ	基節骨		完		全長76.4mm	
		ウマ	基節骨		ほぼ完全			
		ウマ	中節骨		pro		近位端幅44.7±mm	
		ウマ	種子骨					
		ウマ	四肢骨		破片			
		ウマ	中手/中足骨		dis			
		ウマ?	寛骨	左	坐骨片?			
ウマ?	脛骨?		骨体					
ウシ/ウマ	肋骨		破片					
ウシ/ウマ?	肩甲骨	左	破片					
ウシ/ウマ?	上腕骨	右	骨体					
ウマ?	橈側手根骨?	右	破片					
ウマ?	第3手根骨	右	破片					
ウシ/ウマ	脛骨	左	pro					
ウシ/ウマ?	手根/足根骨?		破片					
ウシ/ウマ	手根/足根骨							
ウシ/ウマ	四肢骨		破片					
ウシ/ウマ?	四肢骨?		骨端					
ウシ/ウマ?	不明							
ウシ/ウマ	不明		骨片					
ウシ/ウマ	不明		破片					
D137	II B	Na.1	獣類	不明		破片		—
		Na.2	獣類	頭蓋骨		破片	鼓室部など	
		Na.3	獣類	四肢骨		骨体		
D156	2 C		ウシ	下顎歯	左	M <sub>1-3</sub>	2才以上	—
D169	3 A	獣骨A	イノシシ	下顎骨	左	M <sub>2-3</sub> 部分	3.5才前後、M <sub>3</sub> 歯冠幅38.2mm・歯冠幅17.8mm	—
			イノシシ	歯牙		破片		—
		獣骨B	イノシシ	下顎歯	右	M <sub>3</sub>	3.5才前後、歯冠幅39.2mm・歯冠幅17.2±mm	—
D170			ウマ	歯牙		破片		—

pro:近位端、dis:遠位端、I:切歯、C:犬歯、P:小臼歯、M:大臼歯、m:乳臼歯(上付き数字は上顎歯、下付き数字は下顎歯)



表6. 動物依存体検出状況(3)

遺構・地区	出土地点	分類群	部位	左右	部分	被熱	備考	時期	
D175	E区	ニホンジカ	角		角枝		切断痕	—	
D178	No.8	ウマ	歯牙		臼歯片				
		ウマ	大腿骨	右	骨体・dis				
	No.26	ウマ	膝蓋骨	右					
		ウマ	脛骨	右	pro・骨体・dis片		pro未化骨、3.5才未満		
		ウシ/ウマ	四肢骨		破片				
2A	ウシ/ウマ	四肢骨		骨端		橈骨proか?			
	ウシ/ウマ	四肢骨		破片					
D197	4A	No.1	獣類	四肢骨		骨体・骨端			
		No.2	ウシ	上顎歯	左	M		大臼歯	
		No.4	ウマ	中手骨		骨体・dis		推定全長235.6mm	
		ウマ	中足骨	左	骨体				
		ウシ/ウマ	脛骨		骨体				
		No.10	獣類	四肢骨		骨体片			
		No.13	獣類	不明		破片			
		No.14	ウシ	中手/中足骨		骨体・前面		dis近く、前面	
		No.15	獣類	不明		破片			
		No.18	ウシ/ウマ	四肢骨		骨体			
		ウシ/ウマ?	脛骨?		骨体				
		No.19	獣類	四肢骨		骨体片			
		No.20	獣類	不明		破片			
		No.21	ウシ	肩甲骨	右	骨体			
			ウシ	肩甲骨	左	骨体			
	ウシ		大腿骨	左	骨体				
	ウシ		脛骨	右	骨体		骨体中央部幅40.9mm		
	ウシ		四肢骨		破片				
	No.23	ウシ	中心第4足根骨	右					
		ウシ/ウマ	手根/足根骨?						
		ウシ/ウマ	不明		破片				
		ウシ/ウマ?	不明		破片				
		獣類	不明		破片				
	No.27	獣類	不明		破片				
	No.34	獣類	四肢骨		骨体				
	No.47	ウシ/ウマ	上腕骨		骨体				
	No.49	獣類	不明		破片				
	No.50	ウマ	下顎歯	左	m <sub>1-3</sub>		2才前後		
		ウマ	下顎歯	左	臼歯		未萌出		
	ウマ	顎骨		破片					
	No.51	獣類	四肢骨		破片				
	No.52	ウシ	下顎歯	左	P <sub>1</sub> ・M <sub>1-2</sub>				
		ウシ	顎骨		破片				
	No.54	ウマ	大腿骨	右	骨体				
	No.55	ウシ/ウマ	四肢骨		骨体				
	No.58	獣類	不明		破片				
	No.59	獣類	不明		破片				
	No.60	ウシ/ウマ?	上腕骨		骨体				
	No.65	獣類	不明		破片				
	No.71	ウシ/ウマ	脛骨		骨体				
No.73	獣類	不明		骨体?					
No.74	獣類	不明		破片					
No.76	獣類	不明		破片					
No.77	ウシ/ウマ	脛骨	左	骨体					
No.79	ウシ/ウマ	上腕骨?		骨体					
No.80	獣類	四肢骨		骨体片					
No.84	ウシ/ウマ	脛骨		骨体					
D197		ウシ?	橈骨	右	骨体外側片				
D198	4A	No.5	ウシ	右	骨体・右M <sub>1-2</sub>		比較的高齢、口之島牛雌程度の大きさ	—	
			ウシ	左	骨体・左P <sub>2-3</sub> ・M <sub>1-3</sub>				
D205	4A	マルタニシ	殻		殻頂部(74個体69.3g)		殻長40.8~19.5mm(30mm前後のもの多い)	—	
		マルタニシ	殻		破片(19.9g)				
		マルタニシ	殻		殻頂部(94個体51.6g)				
		マルタニシ	殻		破片(27.7g)				
D247	5A	No.1	獣類	頭蓋骨	破片		—		
D248	5A	No.2	ニホンジカ	角	左	落角か?	—		
D253	5A	上面1層	ウシ/ウマ	脛骨		骨体	—		
D275	5D	No.1	ニホンジカ	角		破片	切断痕	—	
		No.2	ニホンジカ	橈骨・尺骨	左	dis	スパイラル割れ、尺骨後面と橈骨内側に切創		
		No.3	ニホンジカ	脛骨	右	pro	近位端幅63.5mm		
D276	6A	I区1層	ウマ	歯牙		破片		—	
		骨	ウマ	大腿骨	右	骨体			
		No.1	ウシ/ウマ	肩甲骨	左	骨体・後縁			
		No.5	獣類	不明		破片			
		No.6	ウシ	橈骨・尺骨	左	pro・骨体			
D282	7A	No.3	ウシ	下顎歯	右	I・P・m <sub>2</sub> ・M <sub>1</sub>		I・Pは未萌出、2~2.5才 Pは未萌出、2~2.5才	—
			ウシ	下顎歯	左	P・M <sub>1</sub>			
			ウシ	歯牙		破片			
		獣類	不明		破片				
		No.4	ウマ	上顎歯		破片		左前頭骨角突起・頭頂骨左側頭骨など	
			ニホンジカ♂	頭蓋骨		破片			
		No.5	ウマ	下顎骨	左右	骨体			
			ウマ	下顎歯	右	I <sub>1-2</sub> ・P <sub>2-4</sub> ・M <sub>1-3</sub>		12~13才	
			ウマ	下顎歯	左	P <sub>2-4</sub> ・M <sub>1-3</sub>			
			獣類	四肢骨		骨体			
獣類	不明			破片					

pro: 近位端、dis: 遠位端、I: 切歯、C: 犬歯、P: 小臼歯、M: 大臼歯、m: 乳臼歯(上付き数字は上顎歯、下付き数字は下顎歯)

表 6. 動物依存体検出状況(4)

遺構・地区	出土地点	分類群	部位	左右	部分	被熱	備考	時期	
D 282	I 区	ウマ?	上腕骨		骨体			-	
	II 区	獣類	四肢骨		骨体片				
	III 区	ウマ	橈骨・尺骨	左	骨体				
	IV 区	ウシ	中手骨	左	pro・骨体・dis				
		ウマ	上顎歯	左					
ウシ/ウマ		四肢骨		骨体片					
D 297	8 A	No. 1	ウシ/ウマ		破片			-	
			ウシ/ウマ		破片				
			ウマ	上腕骨	右	pro	未化骨		
		ウマ	橈骨	右	完				
		ウマ	尺骨	右	pro				
		ウマ	不明		破片				
		No. 2	ウマ	橈側手根骨	右	ほぼ完全			
			ウマ	第 2 手根骨	右	ほぼ完全			
			ウマ	第 3 手根骨	右	内側片			
		No. 2	ウマ	手根骨?		破片			
			ウマ	中手骨	右	pro・骨体	第 2・第 3・第 4 中手骨		
		No. 3	ウマ	中手骨	右	dis・破片	第 3 中手骨		
			ウマ	基節骨		完			
		No. 4	ウマ	中節骨		完			
			ウマ	肩甲骨	右	骨体			
ウマ	第 4 手根骨		右	完					
D 320	9 A	床	ウマ		破片			-	
			ウシ/ウマ	四肢骨		破片			
		骨・アゴ	ウシ/ウマ	不明		破片			
			ウマ	上・下顎骨	左右	骨体・歯牙			
		歯 1-14	ウマ	下顎骨	左	切歯部			
			ウマ	頭蓋骨		破片	主に顎骨		
			ウマ	上顎歯	左	M <sup>3</sup>			
			ウマ	上顎歯	左	M <sup>2</sup>			
			ウマ	上顎歯	左	M <sup>1</sup>			
			ウマ	上顎歯	左	P <sup>4</sup>			
			ウマ	上顎歯	左	P <sup>3</sup>			
			ウマ	上顎歯	左	P <sup>2</sup>			
			ウマ	上顎歯	右	M <sup>3</sup>			
			ウマ	上顎歯	右	M <sup>2</sup>			
			ウマ	上顎歯	右	M <sup>1</sup> ・上顎骨片			
			ウマ	上顎歯	右	P <sup>4</sup>			
			ウマ	上顎歯	右	P <sup>3</sup>			
			ウマ	上顎歯	左	I <sup>3</sup>	未咬耗 4、5才未満		
			ウマ	上顎歯	右	P <sup>2</sup>			
			ウマ	上顎歯	右	I <sup>1-2</sup>			
D 320	9 A		歯 15-17	ウマ	上顎歯	左	I <sup>1</sup>		-
				ウマ	上顎歯	左	I <sup>2</sup>		
		ウマ		下顎歯	右	I <sub>2</sub>			
		ウマ		上顎歯	左	I			
		歯 18	ウマ	上顎歯	右	I <sup>3</sup>			
			ウマ	下顎歯	左	I <sub>1</sub>			
			ウマ	歯牙		C	上下左右不明		
		骨 1	ウマ	橈骨	右	pro・骨体			
			ウマ	上腕骨	右	骨体			
			ウマ?	上肢骨?		破片			
		骨 2	ウマ?	中手骨?		骨体片			
			ウマ	中手骨		dis・骨体			
		骨 3	ウマ?	種子骨					
			ウマ?	四肢骨		骨体・骨端・破片			
			獣類	四肢骨		破片			
		骨 4	獣類	不明		破片			
			獣類	椎骨?		破片			
			ウマ	距骨	右				
			ウマ	脛骨		dis・内側片			
		骨 5	ウマ	中心足根骨	右	ほぼ完全			
			ウマ	第 3 足根骨	右	ほぼ完全			
			ウマ	中足骨	右	pro・骨体			
			ウマ	不明		破片			
		骨 6	獣類	不明		破片			
			ウマ	脛骨	右	ほぼ完全	pro 未化骨、3.5才以下		
			ウマ	脛骨	左	pro 片	未化骨		
			ウマ	第 3 足根骨	左	破片			
		骨 7	ウマ	中心足根骨	左	破片			
			ウマ	中足骨	右	ほぼ完全			
			ウシ/ウマ?	不明		破片			
		骨 8	ウマ	寛骨	左	寛骨臼			
			ウマ	大腿骨	左	完	pro 未化骨、3.5才以下		
		骨 9	ウマ	大腿骨	右	骨体			
			ウマ	上腕骨	左	dis			
		骨 10	ウマ	橈骨・尺骨	左	pro			
			ウマ	上肢骨?		破片			
		骨 11	ウマ	肩甲骨	左	骨体・dis			
			獣類	不明		破片			
		骨(獣骨)	ウマ?	不明			四肢骨の骨端		
		骨(獣の歯)	ウマ	下顎歯	左	I <sub>2</sub>			
骨(獣の歯)	ウマ	下顎歯	左	I <sub>3</sub>	未咬耗 4.5才以下				

pro: 近位端、dis: 遠位端、I: 切歯、C: 犬歯、P: 小臼歯、M: 大臼歯、m: 乳臼歯 (上付き数字は上顎歯、下付き数字は下顎歯)

表 6. 動物依存体検出状況 (5)

遺構・地区	出土地点	分類群	部位	左右	部分	被熱	備考	時期	
M13	1	No. 1	ウマ	上腕骨	右	dis			—
			ウマ	橈骨・尺骨	右	pro			
			ウマ	脛骨	左	dis・内側			
			ウマ	距骨	左				
			ウマ	中心足根骨	左	前面片			
			ウマ	中足骨		pro・骨体			
			ウマ?	不明		破片		四肢骨など	
		ウシ/ウマ?	脛骨		骨体				
		No. 2	ウマ	上腕骨	左	骨体			
			ウマ	寛骨	右	寛骨臼・腸骨			
		No. 3	ウマ	歯牙		破片		未萌出	
			ウマ	肩甲骨	右	dis・後縁			
		No. 4	ウマ?	上腕骨		骨体			
			ウマ?	不明		破片			
		No. 5	ウマ	頭蓋骨		破片		顎骨など	
			ウマ	頭蓋骨	左	鼓室部			
		No. 6	ウマ	上顎歯	右	P <sup>2-4</sup> ・M <sup>1-3</sup>		15~16才前後	
ウマ	上顎歯		左	I <sup>1-2</sup>					
ウマ	下顎歯		右	I <sup>1-3</sup> ・P <sup>2-4</sup> ・M <sup>1-3</sup>		12才前後			
ウマ	上顎歯		右	I					
No. 7	ウマ	上顎歯	右	I					
M17		獣類	四肢骨		破片		—		
M18	1 A	1 区	ウシ/ウマ?	上腕骨	骨体		—		
M20			ウマ	中足骨	pro・骨体		—		
M25	2 B	1 区	ウマ	下顎歯	右	P <sub>2</sub> ・P <sub>3</sub> ?		11才前後	
			ウマ	下顎歯	左	p <sub>4</sub> ・M <sub>1</sub>			
			ウマ	下顎		臼歯片			
	1 B	11 区	ウマ	角?		破片			
			ウマ	下顎歯	右	臼歯・臼歯片			
	2 B	IV 区No. 1	ウマ	歯牙		切歯			
			獣類	不明		破片		四肢骨など	
M25	2 B	IV 区No. 2	ウマ	下顎歯	右	P <sub>3-4</sub> ・M <sub>1-3</sub>		13.7才前後	
			ウマ	下顎歯	左	P <sub>2-4</sub> ・M <sub>1-3</sub>			
			ウマ	下顎歯	左	P <sub>2</sub>		No. 1 の下顎と同一個体?	
			ウマ	下顎骨	左	切歯部・骨体片			
			ウマ	下顎骨		破片			
M34	2 B	III 区	ウマ	土器片				—	
			ウマ	上顎歯	右	M <sup>2-3</sup>		14~15才前後	
			ウマ	上顎歯	左	M <sup>3</sup> ・I <sup>3</sup> ?			
M38	5 B	一括	獣類	四肢骨		骨体		ウマ中手骨?	
			ウマ	上顎歯	右	P <sup>2</sup>			
			ウマ	中手骨?		骨体			
			ウシ	上腕骨	右	骨体			
			ウシ/ウマ?	上腕骨	右	骨体			
			ウシ/ウマ?	四肢骨		骨体			
			ウシ/ウマ	不明		破片			
		5 B	ウシ	下顎歯	右	P <sup>4</sup> ・M <sup>1</sup> /M <sup>2</sup>			
			ウシ	下顎歯?		臼歯片			
			ウシ	脛骨	右	骨体			
			ウマ	上顎歯	右	P <sup>1</sup>		15.8才前後	
			ウマ	上顎歯	左	M <sup>1</sup>			
			ウマ	下顎歯	左	I <sub>3</sub> ・P <sub>2</sub> ・P <sub>4</sub> ・M <sub>1-3</sub>		3~4才	
			ウマ	下顎歯	左	M <sub>3</sub>		10.3才前後	
			ウマ	橈骨	左				
			ウマ	脛骨	左	pro・骨体(2)			
			ウシ/ウマ	顎骨		破片		1点は全長約330mm	
M40	5 A	1 区	獣類	不明		破片		—	
			ウマ	歯牙		臼歯片			
			ウマ	上顎歯	左	M <sup>3</sup>			
M41	6 A		ウマ	上顎歯	右	P <sup>2-4</sup> ・M <sup>1-3</sup>		11~12才前後	
			ウマ	上顎歯	左	P <sup>4</sup> ・M <sup>1-3</sup>			
			ウマ	下顎歯	右	P <sub>2-4</sub> ・M <sub>1-3</sub>		9~11才前後	
			ウマ	下顎歯	左	M <sub>1</sub>			
		一括	ウマ	歯牙		切歯			
			ウマ	下顎骨	左	骨体・P <sub>2-4</sub> ・M <sub>1-3</sub>		10~11才前後	
			ウマ	下顎骨	右	骨体片			
			ウマ	上顎骨		破片			
M52	5 A	No. 1	ウマ	上顎骨	左	破片・P <sup>4</sup>		12~13才前後	
			ウマ	下顎歯	右	P <sub>2-4</sub> ・M <sub>1-3</sub>		3~4才前後	
		No. 2	ウマ	歯牙		破片			
			ウマ	下顎歯	左	I			
		No. 3	ウマ	下顎骨		切歯部			
			ウシ/ウマ	不明		破片			
		No. 4	ウマ	上顎歯	左	P <sup>2-4</sup> ・M <sup>1-3</sup>		4~5才前後	
ウマ	歯			破片					
No. 5	ウマ	上顎歯	右	M <sup>2-3</sup>		4~5才前後			
一括	ウマ	下顎骨		骨体片					
	獣類	不明		破片					
M59	検		ウマ	歯牙		破片		—	
			ウマ	上顎歯	左	P <sup>2-4</sup> ・M <sup>1-3</sup>			
			ウマ	上顎歯	右	臼歯片			
M60	8 A		ウシ	上顎骨	右	破片		—	

pro: 近位端、dis: 遠位端、I: 切歯、C: 犬歯、P: 小臼歯、M: 大臼歯、m: 乳臼歯 (上付き数字は上顎歯、下付き数字は下顎歯)

表 6. 動物依存体検出状況(6)

遺構・地区	出土地点	分類群	部位	左右	部分	被熱	備考	時期				
M60	8 A		ウシ	上顎歯	右	P <sup>2-4</sup> ・M <sup>1-3</sup>		-				
			ウシ	下顎歯	左	M <sub>3</sub>						
			ウマ	上腕骨	左	骨体						
			ウマ	中手/中足骨								
M61	8 A		イノシシ	上腕骨	右	骨体	pro・dis 未化石、1.5才以下	-				
M64	8 A		ウマ	上顎歯	右	P <sup>?</sup> ?		-				
			ウマ	上顎歯	左	M <sup>?</sup>						
			ウマ	上顎歯	右	臼歯片						
			ウマ	歯牙		破片						
M65	9 A		ウマ	上顎歯	右	P <sup>?</sup>		9~11才前後				
			ウマ	上顎歯	左	臼歯片						
			ウマ♂	下顎歯	右	I <sub>1-3</sub> ・C・P <sub>2</sub> ・P <sub>3</sub> ・M <sub>1-3</sub>						
			ウマ♂	下顎歯	左	I <sub>2-3</sub> ・C・P <sub>2-4</sub> ・M <sub>1-2</sub>						
			ウマ	下顎骨		破片			切歯部など			
			イノシシ(幼獣)	頭蓋骨					新生児段階、2個体			
			イノシシ(幼獣)	下顎骨	右	完(2)						
			イノシシ(幼獣)	下顎骨	左	完						
			イヌ	下顎骨	左	骨体・M <sub>2</sub>						
			イヌ	歯牙		犬歯						
			ニホンジカ/ウマ?	脛骨	左	骨体						
M66	9 A		ウマ	下顎歯	右	P <sub>4</sub>	歯根未発達	-				
			ウシ/ウマ	四肢骨		骨体	おそらく橈骨					
M69	9 A		ウマ	下顎骨	左右	骨体		-				
			ウマ	下顎骨		破片(9.4g)						
			ウマ	下顎歯	左	I <sub>1-3</sub>						
			ウマ	下顎歯	右	P <sub>2</sub> ・M <sub>3</sub>						
			ウマ	下顎歯	右	M <sub>2</sub>	3~4才前後					
			ウマ	頸椎		椎体・後関節突起(2)						
			ウマ	胸椎		椎体ほか(8)						
			ウマ	椎骨		椎体						
			ウマ	大腿骨	左	dis						
			ウマ	大腿骨	左	pro・骨体						
			ウマ	脛骨	左	dis・骨体	推定全長311.5mm、体高117.4cm					
			ウマ	踵骨	左	関節部分						
			ウマ	距骨	左							
			ウマ	中足骨	左	pro・骨体						
			ウマ	下肢骨?		破片						
			ウシ/ウマ	四肢骨		骨体						
			ウシ/ウマ	椎骨		破片						
ウシ/ウマ	不明		破片									
Q 7	7 B	No.1	ウマ	大腿骨		dis		-				
			ウマ	下顎歯	右	P <sub>2</sub> ・P <sub>4</sub> ・M <sub>1</sub>						
			ウマ?	下顎骨		破片						
		ウシ/ウマ	四肢骨		破片							
		No.2	ウマ	上顎歯	右	P <sup>2-4</sup> ・M <sup>1-3</sup>						
			ウマ	歯牙		切歯(2)						
ウシ/ウマ	肩甲骨		左	dis								
			ウシ/ウマ	不明		破片						
I N I 9	II A		ウシ	上顎骨		破片		-				
			ウシ	尺骨	右	骨体						
			ウマ	上顎歯	右	P <sup>2</sup> ・P <sup>3</sup> /P <sup>4</sup>	未萌出					
			ウマ	上顎歯	右	m <sup>1-3</sup> ・M <sup>1</sup>						
			ウマ	上顎歯	左	P <sup>2</sup> ・P <sup>3</sup> /P <sup>4</sup>	未萌出					
			ウマ	上顎歯	左	m <sup>1-3</sup> ・M <sup>1</sup>						
			ウマ	下顎骨	左右	骨体・下顎枝						
			ウマ	下顎骨		破片						
			ウマ	下顎歯	右	M <sub>1-2</sub>	M <sub>2</sub> は未咬耗					
			ウマ	下顎歯	左	I <sub>3</sub>	未咬耗					
			ウマ	下顎歯		破片	未萌出の永久歯片					
			ウマ	下顎歯		臼歯	未萌出					
			ウマ	歯牙		切歯	未萌出					
			ウマ	歯牙		乳切歯						
			ウマ	歯牙		破片						
			ウマ	寛骨	右	寛骨臼・坐骨						
			ウマ	寛骨	左	寛骨臼・坐骨・腸骨						
			ウマ	基節骨		完						
			ウマ?	不明		破片						
			ウシ/ウマ	四肢骨		骨体						
			ウシ/ウマ	肋骨		骨体片						
			ウシ/ウマ	不明		破片						
			ウシ/ウマ	頸椎		椎体						
			ウシ/ウマ	胸椎		椎体						
			IIWう3			獣類	不明			破片	焼	-
			IVSき2			ウマ	上顎歯		左	M <sup>?</sup>		-
			VI V う 7	13 A		ウマ	下顎歯		左	P <sub>4</sub>		-
ウシ/ウマ	四肢骨					骨体						
VIW<6	8 A		ウマ	下顎歯		臼歯片		-				
			ウマ	下顎歯	左	大臼歯	M <sub>2</sub> ?					
VI Y P 67	5 A		ニホンジカ	中足骨	左	pro・骨体・dis	エゾシカ♂と同じくらいの大きさ	-				
IX D < 6	12 A		ウマ	上顎歯	右	P <sup>4</sup> ・M <sup>1-3</sup>		-				
			ウマ	上顎歯	左	M <sup>1-3</sup>						
H881	11 A	I 区トレ	イノシシ	橈骨	右	骨体・骨端		-				
XYき7 P 28			獣類	四肢骨		骨体片		-				

pro: 近位端、dis: 遠位端、I: 切歯、C: 犬歯、P: 小臼歯、M: 大臼歯、m: 乳臼歯(上付き数字は上顎歯、下付き数字は下顎歯)

## 1) 住居跡

### ・ H70住居跡

ウマの左右上顎臼歯と部位不明の歯牙片が検出される。重複する部位がないので、最少個体数は1体である。これらは大きさや咬耗の程度が類似することから、同一個体に由来すると考えられる。歯牙計測値による年齢推定の結果、13-15才の成獣と推定される。

### ・ H175住居跡

二枚貝の殻片が検出される。小片のため種は不明であるが、殻が薄いことから、イシガイ科のドブガイやカラスガイの可能性もある。

### ・ H260住居跡

ウシの右後肢骨や部位不明破片がまとまって検出される。重複する部位がないことから、最少個体数は1体である。足根骨と中足骨は、同じ右側であることや大きさに大差がないことから、同一個体に由来する可能性が高い。足根骨は灰白色～淡褐色を呈し、程度が軽いが焼けている可能性がある。中足骨は遠位端を欠く。骨体の下部が黒色を呈し、その周辺も橙褐色であることから、焼けていることがわかる。遠位端が失われるのは、火を受けたことで炭化して脆くなり、崩壊したためと思われる。近位端幅46.6mm、近位端前後径44.7mmであり、体高は113-118cm程度と推定される。ただし、被熱により収縮しているため、本来はこれより大きくなると考えられる。

足根骨から中足骨にかけては肉量が少ない部分である。足根骨の上部にあたる大腿骨、脛骨などに付着した肉を目的として右後肢全体を持ちこみ、利用価値の低い足根骨以下を切り離して火中に投入した、という行為が想定できる。これが妥当であれば、右踵骨の後半部が欠損するのは、踵骨の中ほどで切断されたためとも考えられる。ただし、骨表面に破損痕跡は確認できない。

### ・ H493住居跡

ウマの左右上顎歯、左右下顎歯、上下顎骨片、および種不明獣類の下顎骨片が検出される。ウマ左右上顎歯および左右下顎歯は、重複する部位がないことから、最少個体数は1体である。これらの歯牙は、大きさや咬耗の程度が類似することから、同一個体に由来する可能性が高い。出土状況図によれば、No.4の上顎臼歯、No.5の下顎臼歯は、ほぼ歯列を保って出土する。それぞれ顎骨片を伴うことから、頭蓋骨があったと推定される。上顎歯列と下顎歯列が20cm程度離れて出土しているが、歯の並び方より上顎歯列の咬合面が下向きであると推測されることから、当初から上顎骨と下顎骨は離れた位置に置かれたと解釈できる。なお、年齢は、上顎歯の計測値から、6-8才の成獣と推定される。性別は、犬歯が検出されないことから雌の可能性もある。

### ・ H548住居跡

二枚貝の左殻片が検出される。鉸歯の形状や殻外表面の輪肋の状態などがマルスダレガイ科のオキアサリに類似することから、マルスダレガイ科の海産貝の可能性もある。本地域が海の無い立地であることを考えると、沿岸地域から搬入されてきた可能性がある。殻高は28.8mmである。

### ・ H685住居跡

北壁のカマド跡付近を中心に、ウシあるいはウマの四肢骨片、種不明獣類の骨片、ニホンジカの下顎骨が散在して検出される。ニホンジカの最少個体数は2体である。No.3とNo.4のニホンジカの下顎骨は、50cm程度離れた位置で出土するが、歯牙の保存状態や咬耗状況が類似し、いずれも10.5-11.5才と推定されることから、同一個体に由来する可能性がある。No.37のニホンジカ左下顎骨は、第4小臼歯が未萌出であり、第3乳臼歯の歯根が残存することから、2才前後の若い個体と推定される。

### ・ H688住居跡

ニホンジカの角片、ウシの右中足骨、種不明獣類の四肢骨破片・部位不明破片が検出される。これらは、出土状況図をみると、住居跡内にまとまりなく散在している。No.2のウシ右中足骨は、近位端から遠位端まで残存し、ほぼ全体の形状が復原できたが、後面が欠損する。推定全長が220mm前後であることから、体高は122cm前後と推定される。見島牛程度の小型のウシである。

H758の東南部に位置するピットP3からは、ニホンジカの右角が検出される。これは落角であり、角座から第1枝、第2又までの部分である。本遺跡からは、D175やD275で、加工痕跡のある鹿角片が出土していることから、本試料は加工素材として備蓄されていた可能性がある。

## 2) 土坑

### ・ D46

ウマの左下顎歯・左上腕骨・左下顎骨のほか、ウシかウマか判別できない四肢骨が検出される。ウマは、重複する部

位が無いことから、最少個体数は1体である。ただし、同一個体に由来するかは判断できない。No7のウマ左下顎歯は、計測値から3-4才の若い個体に由来すると推定される。No14のウマ左上腕骨には、骨体の中央部に切断痕跡が残る。刃物創の観察からは、骨体側面に斜め上方から切り付け、その衝撃で割ったと推測される。

・D115

長方形に近い形状の土坑であり、ウマの四肢骨、ウマの可能性のある四肢骨、ウマかウシか判別できない肋骨・四肢骨・部位不明骨が検出される。出土状況図を見る限り、骨は比較的まとまって埋納され、ある程度の解剖学的位置は保つ部分もあるようだが、取上げ時に遺物番号が付けられていないため、個々の骨の位置関係はわからない。ウマの四肢骨は、重複する部位がないことから、最少個体数1体である。頭部や椎骨が含まれないことから、四肢骨と肋骨の一部だけが埋納された土坑と考えられる。

肩甲骨・上腕骨の遠位端と橈骨・指骨の近位端、中手骨・中足骨の近位・遠位両端の骨化が終了していることから1.5才以上であるが、歯牙がないため詳細な年齢推定はできない。右橈骨・右中手骨・左中足骨・右踵骨の推定全長から推定される体高は、106-119cmになる。トカラ馬程度の小型馬である。

・D197

やや楕円形を呈する土坑内から、礫などと共にウシの歯牙や四肢骨、ウマの歯牙や四肢骨、種不明獣類の骨などが検出される。出土状況図によれば、獣骨の出土状況には特にまとまりが見られないが、No21のウシ四肢骨のみ、同一地点に重なって検出されている。ウシ、ウマ共に最少個体数は1体である。

ウシは、重複する部位がないが、同一個体かどうか判断できない。No52は第4小臼歯が萌出・咬耗することから、少なくとも3才以上である。No21の四肢骨も関節部分が破損するため、体高などの推定はできない。

ウマも重複する部位が見られないが、同一個体かどうか判断できない。No50の左下顎骨は、第1-3乳臼歯があることから、2才前後と推定される。No4の中手骨は、推定全長235.6mmであり、体高は117.3cmと推定される。トカラ馬程度の小型馬である。

・D320

長方形の土坑から、ウマの頭蓋骨や四肢骨、種不明獣類の骨が検出される。出土状況図によれば、頭蓋骨に隣接して前肢骨がまとまり、そこから50cm程度離れた位置に後肢骨がまとまっている。特にNo4, 6, 9では、隣接する骨がまとまって検出され、解剖学的位置を保っていたことが推測される。ウマは、重複する部位がないことから、最少個体数1体である。

このウマは、犬歯が検出されることから、雄の可能性が高い。また、年齢は、上腕骨と脛骨の近位端の骨化が終了していないことから、3.5才以前である。

頭蓋骨は、歯牙の計測値から3.5-4.5才前後と推定される。歯牙には歯根が発達せず、上顎第3大臼歯の遠心端には咬耗が達していない。このように、頭蓋骨と四肢骨の推定年齢には微妙な差があるが、骨化年齢や歯の咬耗には個体差があることを考えれば、これらの頭蓋骨と四肢骨は3.5才前後の同一個体に由来するという解釈も可能である。この考えに立てば、D320は若い雄ウマ1頭を埋納した可能性がある。

3) 溝跡

・M13

ウマの頭蓋骨や四肢骨、種不明獣類の骨が検出される。重複する部位がないが、以下に述べる理由で同一個体に由来しないと考えられる。

No6の頭蓋骨のうち、右上顎骨は、歯牙の計測値から15-16才と推定される。一方、右下顎骨は、歯牙の計測値から12才前後と推定される。両者は同じ番号で取上げられていることから、近接した位置から検出されたことが伺えるが、年齢に差があるため、別個体に由来すると考えられる。

なお、右下顎第1大臼歯遠心側面と第2大臼歯近心側面に、異常な磨り減りが観察される。第2大臼歯が正常な位置よりやや第1大臼歯側に傾いて萌出したため、両者が接する面が異常に擦れる結果になったと考えられる。

・M52

上面からウマの頭蓋骨や種不明獣類の骨が検出される。No1, 2, 6は左右の下顎骨であり、まとまって出土する。No4, 5は左右の上顎骨であり、出土状況図によれば、歯列を保っている。上下の顎骨は30cmほど離れた位置にあるが、歯牙の計測値から推定される年齢に近いことから、同一個体に由来する可能性がある。



#### 4. 考察

本遺跡から認められた動物遺存体は、獣骨と貝類である。貝類では、マルタニシの出土量が多い。哺乳類では最も多いのがウマであり、ウシがそれに次ぐ。哺乳類に見られるこのような傾向は、御代田町鑄師屋遺跡群の平安時代以降の遺跡（宮崎，1989）、小諸市竹花遺跡の古墳時代から奈良・平安時代の遺構（金子，1994）などでも認められる。ここでは、検出された遺存体に基づき、本遺跡における動物利用について考える。まず、貝類では、D205においてマルタニシの多量出土が目立つ。本種の生態から、遺跡周辺に水田や池沼があれば比較的容易に採取できたと考えられる。完全な形状を保つ殻も見られることから、意図的に殻を破壊するような利用方法は取られていなかったと考えられる。本種は食用になり、一括して廃棄したことを伺わせる出土状態を示すことから、当時食用にされたものと考えられる。小諸市竹花遺跡でも、土坑から少なくとも20個体のマルタニシが一括出土している（金子，1994）。また、H175では、淡水産の可能性がある二枚貝が、H548では海産の可能性がある二枚貝が検出されている。淡水産の二枚貝は、更埴市屋代遺跡群および窪河原遺跡において古代後半から中世の出土が知られている（高橋，2000）。隣接する芝宮遺跡群や中原遺跡群でも、タニシ類とみられる貝類が検出されている（藤原，1999）。これらの事例からもわかるように、本地域のような内陸地域では普通に採取・利用されていたようである。一方、海産の可能性がある二枚貝は、海産であるならば、当時の流通を考える上で貴重な試料であり、どのような経路で搬入されたのか興味深い。前述した中原遺跡群や芝宮遺跡群では、海産とみられる貝類、ニシン科とみられる魚骨が出土しており、さらに更埴市に位置する古墳時代後期の城の内遺跡から海水魚骨、塩尻市の奈良-平安時代の平出遺跡からサルボウなどが出土している。今後、調査を進めていく中で情報が蓄積されることで、より詳細な検討が可能となり、その上で当時の動物利用を改めて検討していきたい。

哺乳類では、ウマが卓越していた。ニホンジカ・イノシシとウマ・ウシには、後述するように、出土状況から推察される扱われ方に違いがあり、これは当時の人々の認識や利用方法の違いの現れと考えられる。

住居跡から検出されるニホンジカやイノシシの骨の多くは焼骨であり、カマド等の施設で焼かれたものと考えられる。また、ニホンジカとイノシシはまとまって検出される例がなく、部分的な骨が散在した状態であった。このことから、基本的にニホンジカとイノシシは1体分や半身、あるいは肢部などの単位で埋納されることがなかったと考えられる。ニホンジカの利用方法については、明瞭な切創が残される試料（D275No3）があり、食用として解体処理されていた可能性が高い。さらに、D175やD257で加工痕跡のある鹿角がみられることから、骨角器素材としても利用されていたことが明らかである。一方、イノシシは出土点数が少なく、明瞭な解体痕跡を残す試料がないため、利用方法について考察することを控える。

これに対して、ウマやウシの骨は焼骨の割合が少なく、特にウマでは皆無である。D46No14の左上腕骨に切断痕跡が見られた他は、明瞭な解体痕跡は見られない。また、出土状況に関しては、ニホンジカやイノシシと同様に、部分的な骨が礫などと共に散在した状態で出土する場合と、同一個体由来の可能性がある高い歯牙や骨が、まとまりを持って出土する場合がある。前者の場合は、死亡したウマやウシの骨の一部を、他の獣骨や廃棄物などと共に入括して廃棄されたものと考えられる。後者の場合は、1体分や半身、あるいは肢部などの単位で埋納された可能性がある。例えば、D320はウマ1頭を、D115はウマの頭部を除いた胴部と四肢を埋納した土坑と考えることができる。また、住居跡でも、H493ではウマの頭蓋骨が置かれていたと考えられるなど、同様の例がある。住居跡に関しては、発掘調査時の所見により、土が埋積する過程の窪みに入れられた出土状況であったとされることから、住居跡と土坑は同様の認識で使われたとも考えられる。

これらのウマ、ウシは家畜であり、その生前の利用方法は、本遺跡の生業ともからむ重要な問題である。特にウマは騎乗や軍事的利用など、権力と結びつく時代もあり、その用途については遺跡の性格を十分に考慮しなければならない。特に、長土呂遺跡群の位置する浅間山南麓には、平安時代以降において、塩野牧や長倉駅といったウマの繁殖・利用に関する施設が置かれていたと考えられている（御代田町教育委員会，1989）。宮崎（1989）によれば、御代田町鑄師屋遺跡群出土のウマは、長倉駅あるいは塩野牧に何らかの関連を持つと考えられている。本遺跡の所在する長土呂遺跡群は、鑄師屋遺跡群と近距離に位置するため、今回分析した試料も牧や駅などの公的な施設と係わりがある可能性も考慮する必要がある。

### Ⅲ. 出土人骨の同定

#### 1. 試料

試料は、中世の所産とされる I A 区 D24号土坑から出土した人骨であり、部位毎に取上げられた9試料（No1-9）

表7. 人骨同定結果

遺跡名	区	遺構	試料名	左右	部位	部分	数量	備考	日付	時期
NNH1	IA	D24	1		後頭骨	破片	1		89.06.25	中世
			1	右	蝶形骨	卵円孔付近	1		89.06.25	
			1		蝶形骨	破片	1		89.06.25	
			1	右	側頭骨	鼓室部片	1		89.06.25	
			1		側頭骨/後頭骨	静脈洞溝	1		89.06.25	
			1		側頭骨?	鼓室部周辺?	2		89.06.25	
			1		頭骨	破片	多	30.10g	89.06.25	
			1		不明	破片	多	18.90g	89.06.25	
			1		椎弓部	破片	1		89.06.25	
			1		基節/中節骨	近位端欠	1		89.06.25	
			1		末節骨	ほぼ完形	1		89.06.25	
			1. 左眼窩		頭骨	破片	1		89.06.25	
			1. 上歯	右	上顎骨	破片	1	C-P2植立, M1-2歯槽吸収?	89.06.25	
					上顎骨	破片	11 <sup>+</sup>			
					歯牙	ほぼ完存	10			
			頭蓋骨		頭骨	破片	9 <sup>+</sup>		89.06.25	
			2. 左側下顎骨		顎骨	破片	1		89.06.25	
					歯牙	ほぼ完存	5			
			2. 右側下顎骨	右	下顎骨	破片	1	C-M3植立, 他破片10 <sup>+</sup>	89.06.25	
			3		不明	破片	40		89.06.25	
			4		四肢骨	破片	多	17.39g	89.06.25	
			5	左	大腿骨	骨体	1		89.06.25	
					四肢骨	破片	34 <sup>+</sup>		89.06.25	
			6		四肢骨	破片	8	他微細片多	89.06.25	
			7		四肢骨	破片	3	他微細片多	89.06.25	
			8. 右眼窩	右	頬骨-上顎洞	破片	1		89.06.25	
			9		不明	破片	24 <sup>+</sup>		89.06.25	
			サブトレII	左	側頭骨	鼓室部片	1		89.04.25	
			H99		歯牙	ほぼ完存	3			
			骨と歯		不明	破片	57 <sup>+</sup>			

と、同遺構内部から一括採取された試料（サブトレII H99 骨と歯）からなる。これらの試料は、いずれも細片化しており、1試料中に複数点の骨片が認められる。

## 2. 分析方法

試料を土壤中より抽出し、乾いた刷毛等により付着した土壌を除去する。一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。試料を肉眼で観察し、形態の特徴から種類および部位を同定する。なお、破片数の多い試料に関しては、表中に「多」と記載し、備考欄に重量 (g) を示す。なお、同定・解析は、東京慈恵会医科大学解剖学講座第1の竹内修二氏の協力を得ている。

## 3. 結果

結果を、試料毎に表7に記す。以下に、部位毎に結果を示す。

### ・頭蓋骨

右頬骨から上顎洞壁片、後頭骨片、蝶形骨片、側頭骨片（左右鼓室部周辺など）、上顎骨片、下顎骨片、遊離歯牙が検出される。左眼窩とされた試料は、おそらくその周辺とみられるが、骨の形態から部位を特定するに至らない。側頭骨では、鼓室部あるいはその周辺などが検出される。右上顎骨は、破片であるが、犬歯、第1, 2小臼歯が植立する。なお、第1大臼歯の歯槽は吸収している。早い段階から脱落していたと考えられる。右下顎骨では、犬歯から第3大臼歯までが植立する。

### ・脊椎骨

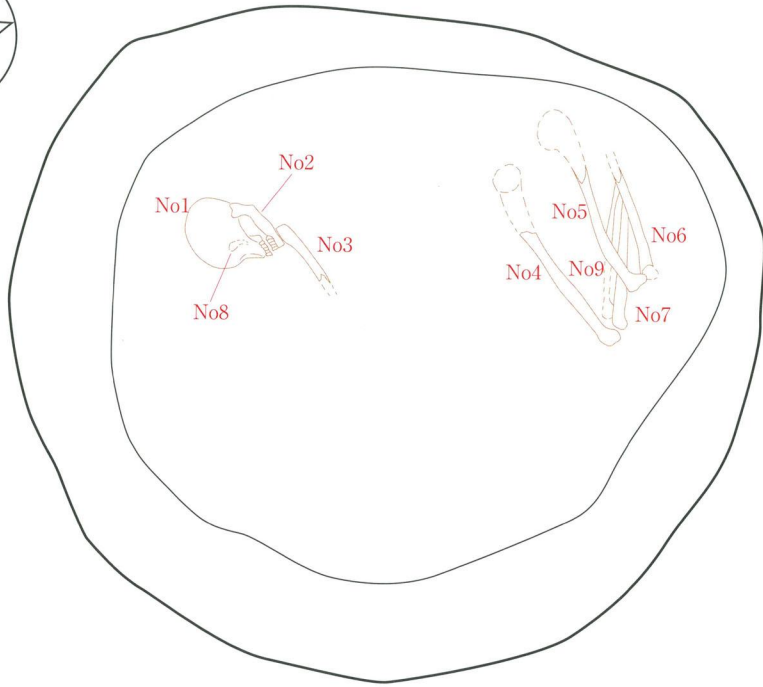
椎弓部の破片が検出された程度にとどまる。

### ・四肢骨

左大腿骨の骨体が確認される程度である。この他、四肢骨の破片が検出されたが、部位、部分を明らかにするほどの遺存状態でない。

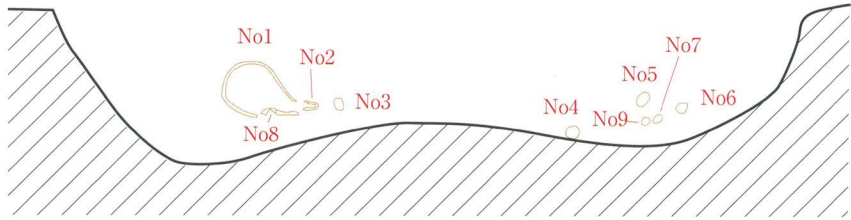


A



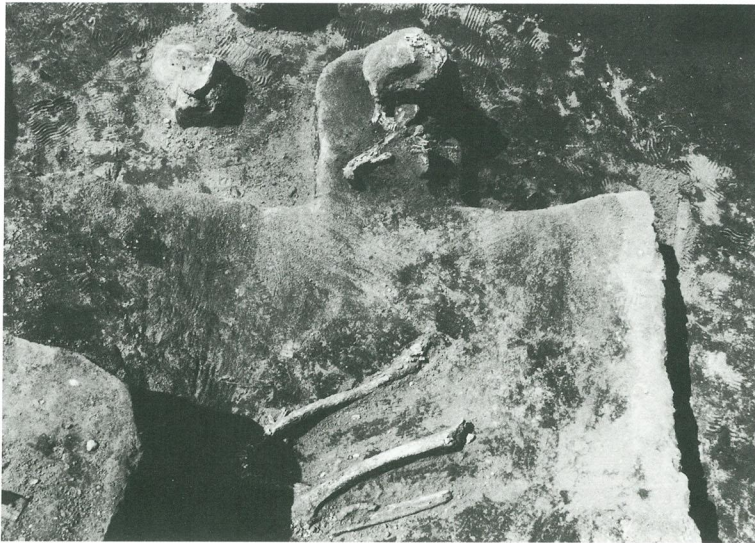
B

A



B

0 50cm



D24号土坑人骨出土状况

#### 4. 考察

D24号土坑の人骨は重なる部位がなく、ほぼ全身の骨格部位が存在していると思われる点から、1個体が埋葬されていたと考えられる。確認できた部位から性別を推定することができないが、第3大臼歯が既に萌出している。Brothwell (1981) の調査例に基づくと、被葬者は成人に達していると考えられる。一方、頬骨-上顎洞壁の破片において頬骨上顎縫合の癒合がほとんど見られない。また、小臼歯および大臼歯に顕著な咬耗の痕跡が認められない。歯牙の咬耗状態は食生活などに依存しているが、緩やかであるが、年を重ねるごとに着実に進行するとされる(例えば、片山, 1990)。これらのことを含めると、被葬者は、老年(60歳以上)まで至っていないと推測される。

#### 引用文献

- 阿部 永・石井 信夫・金子 之史・前田 喜四郎・三浦 慎吾・米田 政明, 1994, 「日本の哺乳類」, 東海大学出版会, 195 p.
- Brothwell, D. R. , 1981, Digging up bones. Oxford University Press.
- Driesch, Angela von den, 1976, A Guide of the Measurement of Animal Bones from Archaeological Sites. Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University, 134p.
- 藤根 久, 1994, 出土柱材の樹種. 「長野県更埴市 屋代遺跡群 大境遺跡 I V・V」, 更埴市教育委員会, 66.
- 藤原 直人, 1999, 芝宮遺跡群・中原遺跡群出土の動植物遺体-古代の食生活を考える-. 榑原功一(編)「帝京大学山梨文化財研究所研究集報告集2 食の復元 -遺跡・遺物から何を読み取るか」, 岩田書院, 171-185.
- 波部 忠重・小菅 貞男, 1967, 「標準原色図鑑全集3 貝」. 保育社, 223 p.
- 橋本 真紀夫・馬場 健司・中根 秀二・高橋 敦・田中 義文, 1994, 自然科学分析. 「渋川市発掘調査報告書第41集 半田中原・南原遺跡」, 群馬県渋川市教育委員会, 731-753.
- 林田 重幸・山内 忠平, 1957, 馬における骨長より体高の推定法. 鹿児島大学農学部学術報告, 6, 鹿児島大学農学部, 146-156.
- 林 良博・西田 隆雄・望月 公子・瀬田 季茂, 1977, 日本産イノシシの歯牙による年齢と性別の判定. 日本獣医学雑誌, 39-2, 165-174.
- 林 壽郎, 1968, 「標準原色図鑑全集20 動物II」. 保育社, 228 p.
- 家畜解剖学分科会, 1978, 「家畜解剖学用語」. 日本中央競馬会弘済会.
- 加藤 嘉太郎, 1983, 「家畜比較解剖図説 上巻」, 養賢堂, 290 p.
- 金子 浩昌, 1994, 竹花遺跡・大塚原遺跡出土動物遺体の種類. 「東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原」, 長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書, 小諸市教育委員会, 609-612.
- 片山 一道, 1990, 骨古人骨は語る-考古学ことはじめ. 株式会社同朋舎出版, 210 p.
- 近藤 鍊三・佐瀬 隆, 1986, 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, 31-64.
- 西中川 駿・上村 俊雄・松元 光春, 1988, 「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の起源、系統に関する研究-とくに日本在来種との比較」. 昭和63年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書, 鹿児島大学農学部獣医学科, 95 p.
- 西中川 駿・本田 道輝・松元 光春, 1991, 「古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」. 平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書, 鹿児島大学農学部獣医学科, 197 p.
- 松井 章, 1991, 家畜と牧-馬の生産. 「古墳時代の研究4 生産と流通I」, 雄山閣出版株式会社, 105-119.
- 松井 章・久保 和士, 1999, 家畜その2-ウマ・ウシ. 「考古学と自然科学2 考古学と動物学」, 西本 豊弘・松井 章編, 同成社, 169-208.
- 宮崎 重雄, 1988, 鑄師屋遺跡群出土の馬歯・馬骨と獣骨類について. 「鑄師屋遺跡群 根岸遺跡」, 長野県北佐久郡御代田町根岸遺跡発掘調査報告書, 御代田町教育委員会, 297-310.
- 御代田町教育委員会, 1989, 「鑄師屋遺跡群 根岸遺跡」. 長野県北佐久郡御代田町根岸遺跡発掘調査報告書.
- 奥谷 喬司, 1983, 「自然観察シリーズ18 日本の貝」, 小学館, 162 p.
- 奥谷 喬司・窪寺 恒己・黒住 耐二・斎藤 寛・佐々木 猛智・土田 英治・土屋 光太郎・長谷川 和範・濱谷 巖・速水 格・堀 成夫・松隈 明彦, 2000, 「日本近海産貝類図鑑」. 奥谷喬司編, 東海大学出版会, 1173 p.
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 1988, 十二遺跡出土炭化材の樹種同定. 「鑄師屋遺跡群 十二遺跡 -長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書-」, 御代田町教育委員会, 393-399.
- パリオ・サーヴェイ株式会社, 1989 a, 和田原遺跡出土炭化材同定. 「小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第13集 和

田原遺跡群 和田原・中原遺跡群 鎌田原 ー長野県小諸市和田原・鎌田原遺跡発掘調査報告書ー, 小諸市教育委員会, 83-88.

パリオ・サーヴェイ株式会社, 1989b, 広畑遺跡出土炭化材の樹種同定. 「広畑遺跡 ー長野県北佐久郡御代田町広畑遺跡発掘調査報告書ー」, 御代田町教育委員会, 35-40.

パリオ・サーヴェイ株式会社, 1989c, 根岸遺跡出土炭化材の樹種同定. 「長野県北佐久郡御代田町大字御代田所在 鋳師屋遺跡群根岸遺跡発掘調査報告書」, 御代田町教育委員会, 291-293.

パリオ・サーヴェイ株式会社, 1992a, 下芝宮遺跡・下聖端遺跡炭化材同定報告. 「佐久市埋蔵文化財調査報告書第9集 国道141号線関係遺跡 ー本文編ー」, 佐久市教育委員会・佐久市埋蔵文化財センター, 355-391.

パリオ・サーヴェイ株式会社, 1992b, 下聖端遺跡出土種子同定報告. 「佐久市埋蔵文化財調査報告書第9集 国道141号線関連遺跡 ー本文編ー」, 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター, 418-421.

パリオ・サーヴェイ株式会社, 1993a, 自然科学分析からみた人々の生活. 慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, 慶應義塾, 347-370.

パリオ・サーヴェイ株式会社, 1993c, 芝山遺跡 炭化材・種子同定. 「北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書第11集・北橋遺跡群発掘調査報告書Ⅲ 芝山遺跡 平成2・3年度県営富士見・北橋地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」, 北橋村教育委員会, 164-170.

パリオ・サーヴェイ株式会社, 1994a, H-4号住居址から出土した炭化構築材の樹種. 「塩野西遺跡群 塚田遺跡」, 長野県御代田町教育委員会, 344-353.

パリオ・サーヴェイ株式会社, 1994b, 過去の植物利用について. 「小諸市埋蔵文化財発掘調査報告書第17集 東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原 ー長野県小諸市東下原・大下原・竹花・舟窪・大塚原遺跡発掘調査報告書ー」, 小諸市教育委員会, 613-624.

Scmid, Elisabeth, 1972, Atlas of Animal Bones. Elsevier Publishing Company, 159p.

佐久市土地開発公社・佐久市教育委員会, 2002, 長土呂遺跡群 聖原遺跡 第1分冊 (佐久市埋蔵文化財調査報告書第103集). 539p.

佐久市土地開発公社・佐久市教育委員会, 2003, 長土呂遺跡群 聖原遺跡 第2分冊 (佐久市埋蔵文化財調査報告書第107集). 452p.

佐久市土地開発公社・佐久市教育委員会, 2004, 長土呂遺跡群 聖原遺跡 第3分冊 (佐久市埋蔵文化財調査報告書第116集). 436p.

高橋 理, 2000, 屋代遺跡群・窪河原遺跡出土貝類遺存体. 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書27 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 (含む大境遺跡・窪河原遺跡) ー古代2・中世・近世編」, 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター, 219.

辻 誠一郎・南木 睦彦・住田 雅和・辻 圭子・福田 美和, 1999, 屋代遺跡群の古代の大型植物遺体群. 「長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書42 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 ー更埴市内その5 ー 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 (含む大境遺跡・窪河原遺跡) ー古代1編ー 本文」, 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター, 303-323.

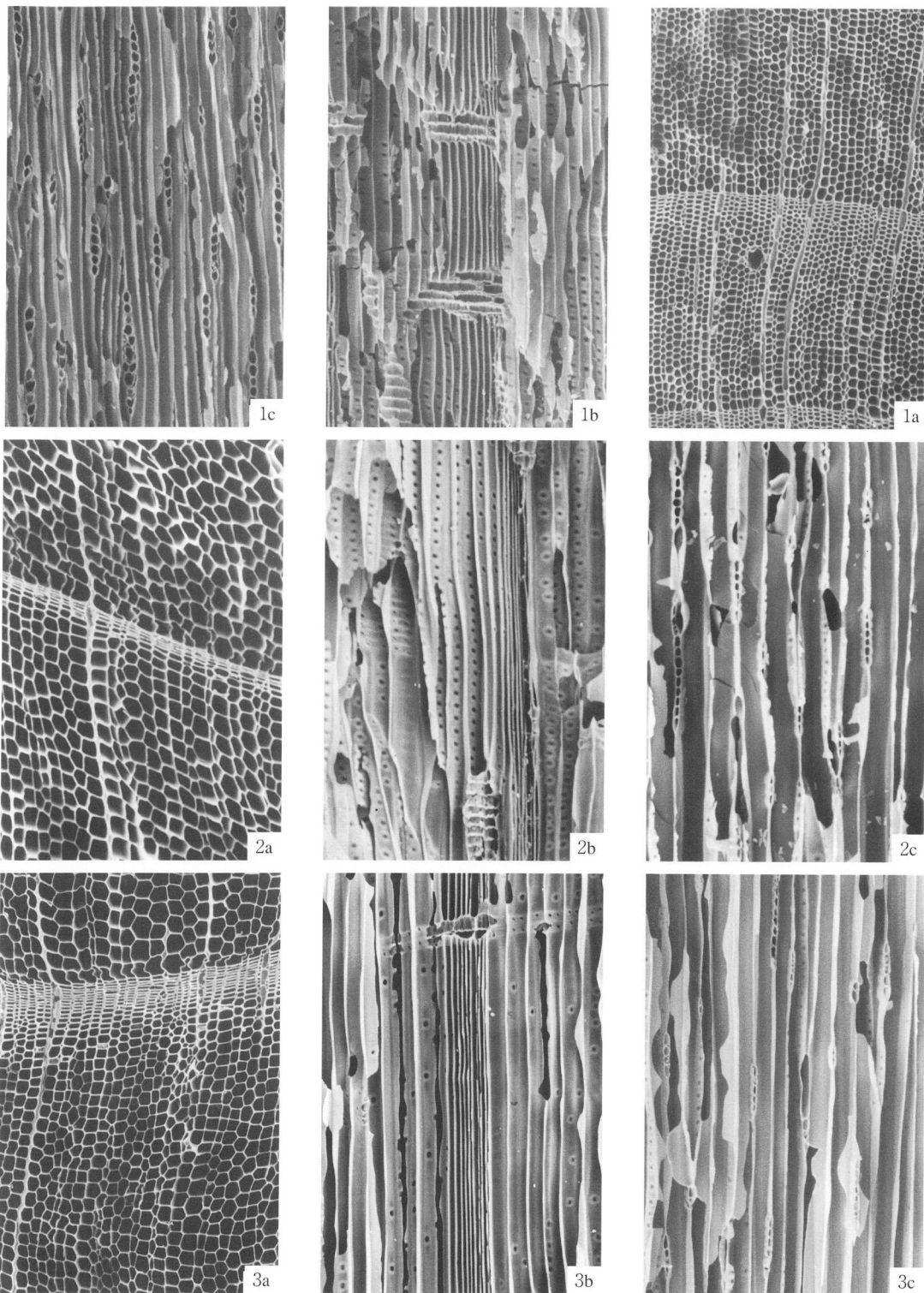
氏原 暉男・廣瀬 玉紀, 1992, 下聖端遺跡出土炭化種子について. 「佐久市埋蔵文化財調査報告書第9集 国道141号線関連遺跡 ー本文編ー」, 佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財調査センター, 400-417.

宇田川 竜男, 1971, 「標準原色図鑑全集18 飼鳥・家畜」. 保育社, 176p.

藤原直人, 1999, 芝宮遺跡群・中原遺跡群出土の動植物遺体

ー古代の食生活を考えるー. 榎原功一編, 「食の復元ー遺跡・遺物から何を読みとるか 研究集会報告集2」, 岩田書院, 171-185.

図版1 炭化材(1)

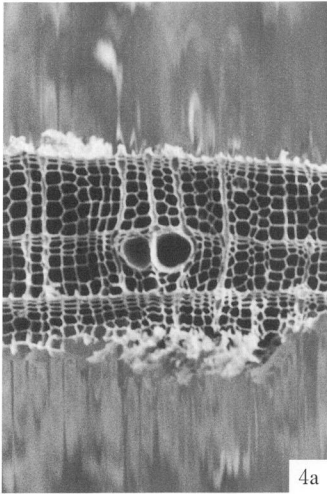


1. カラマツ (H352 炭No.4)
  2. マツ属複維管束亜属 (H255 3区1層)
  3. モミ属 (H171 No.19)
- a : 木口, b : 柁目, c : 板目

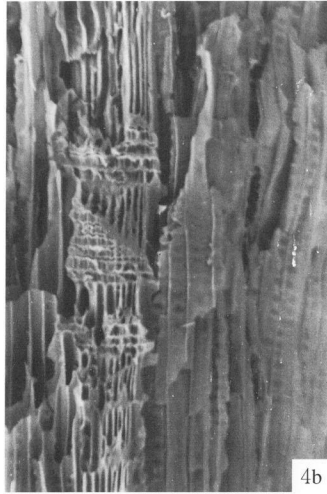
100µm : a  
100µm : b,c



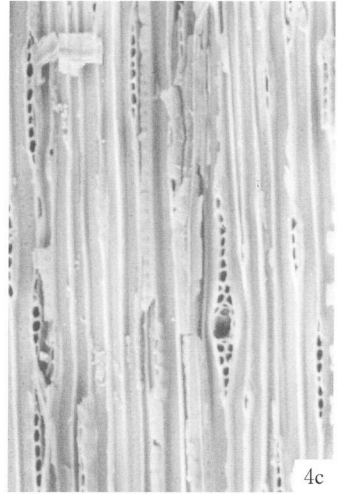
図版2 炭化材(2)



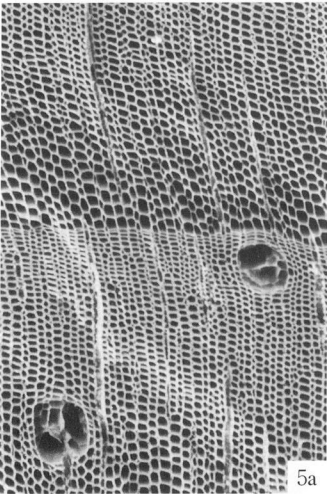
4a



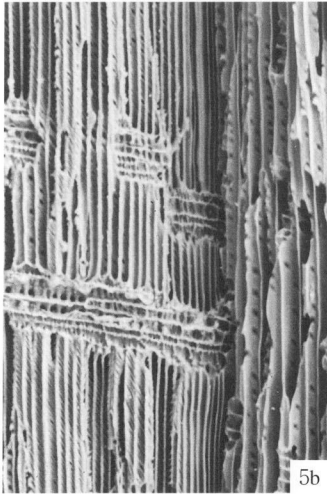
4b



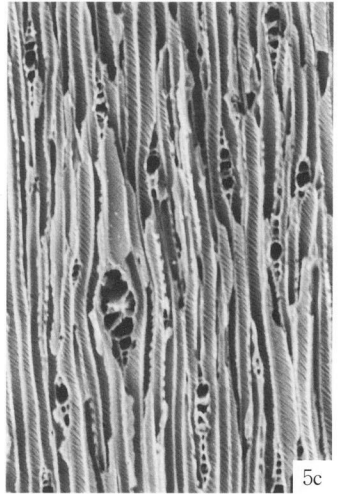
4c



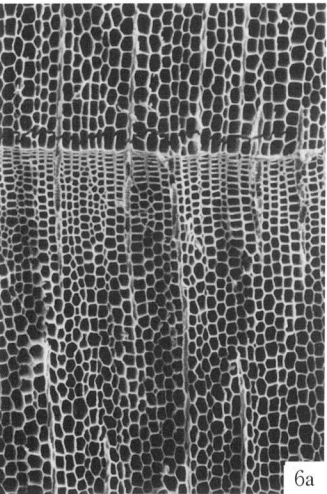
5a



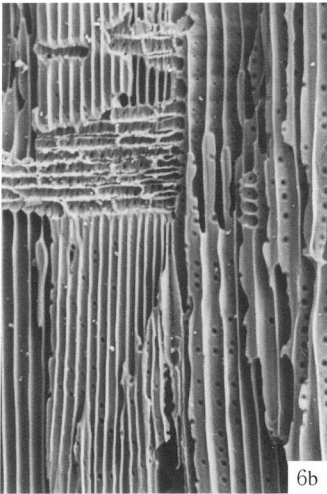
5b



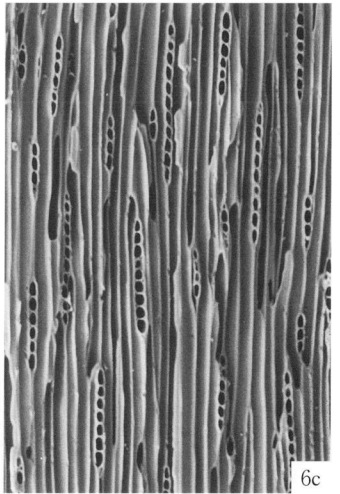
5c



6a



6b



6c

4. トウヒ (H386 No.4)

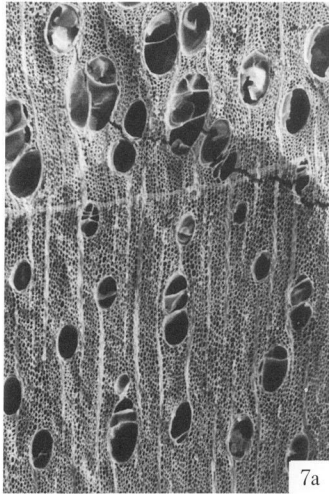
5. ヒノキ属 (H230 No.154)

6. ヒノキ属 (H496 No.42)

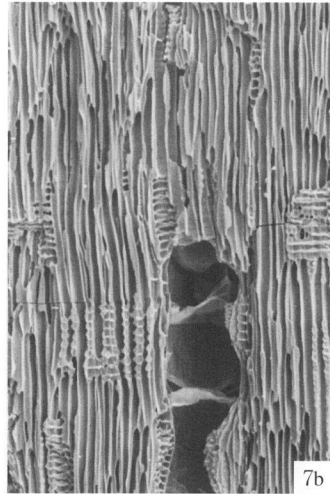
a : 木口, b : 柁目, c : 板目

100μm : a  
100μm : b,c

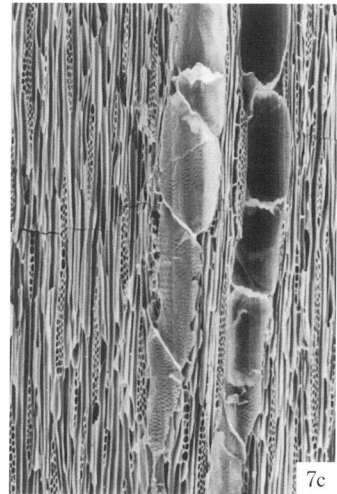
図版3 炭化材(3)



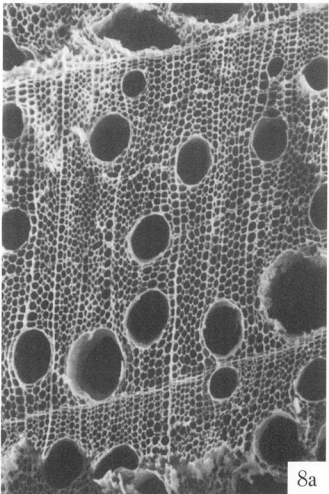
7a



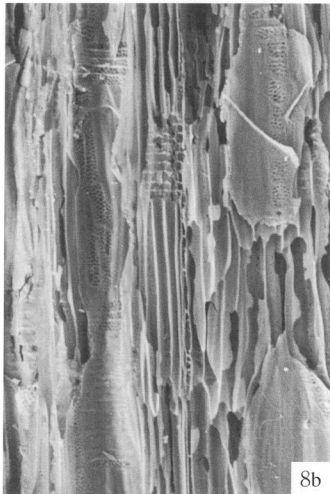
7b



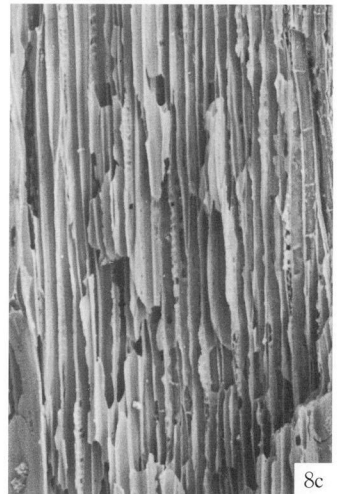
7c



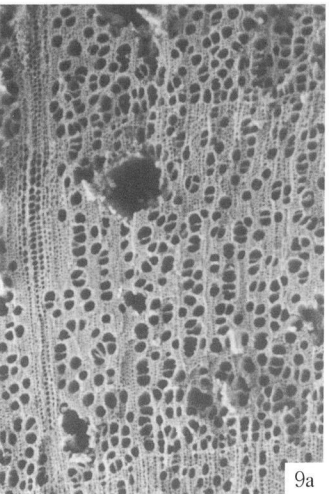
8a



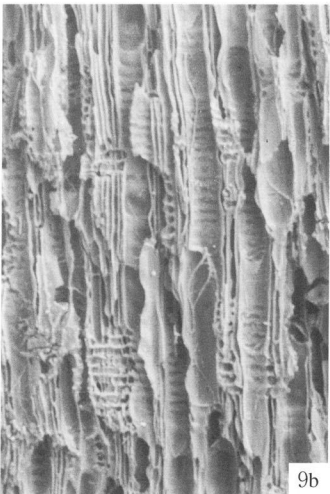
8b



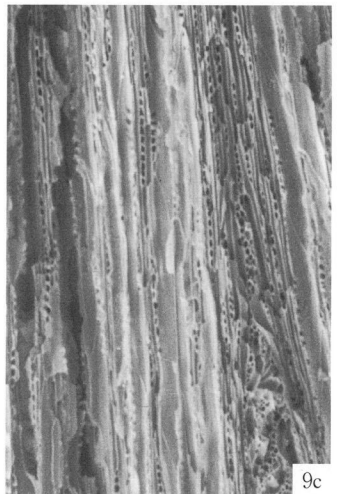
8c



9a



9b

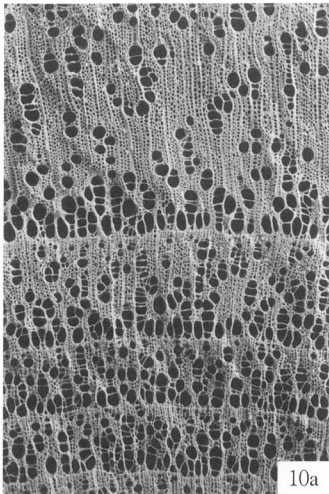


9c

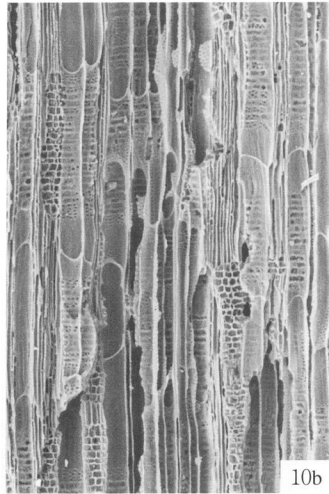
7. オニグルミ (H352 サブトレ)  
 8. サワグルミ (H230 152)  
 9. ハンノキ属ハンノキ亜属 (H615 4区1層)  
 a: 木口, b: 柱目, c: 板目

200μm : a  
 200μm : b,c

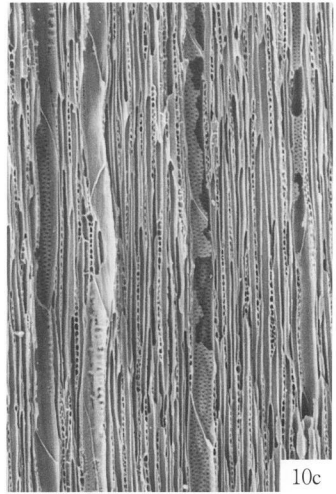
図版4 炭化材(4)



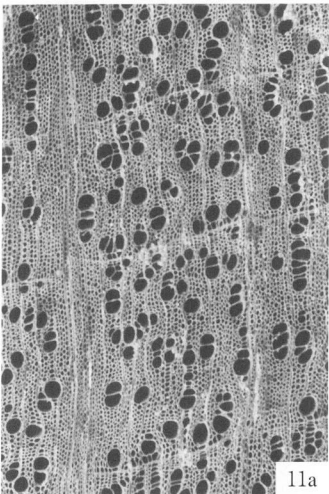
10a



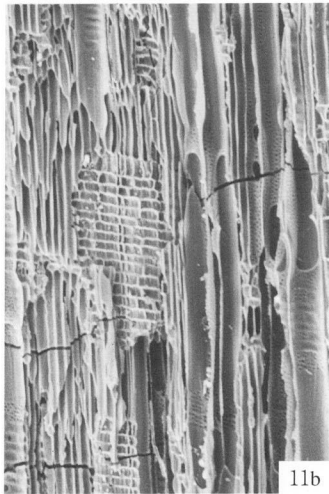
10b



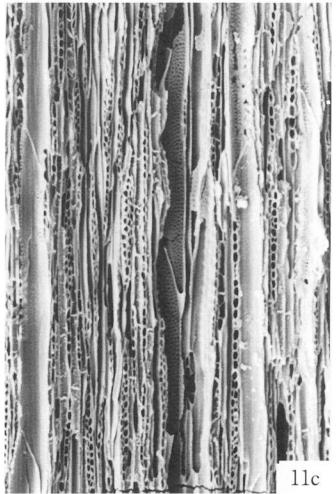
10c



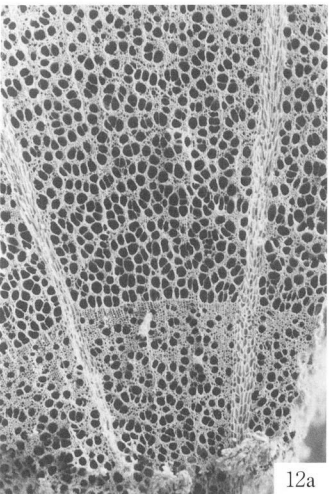
11a



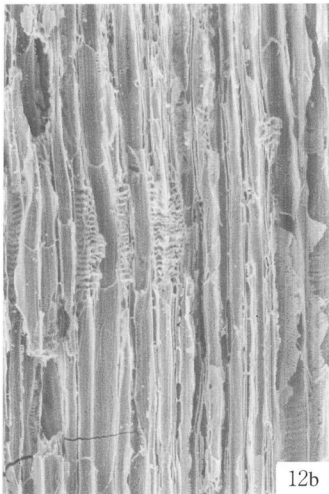
11b



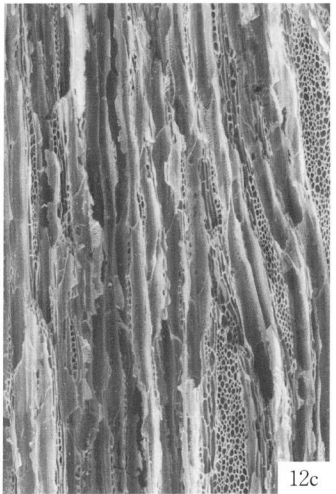
11c



12a



12b



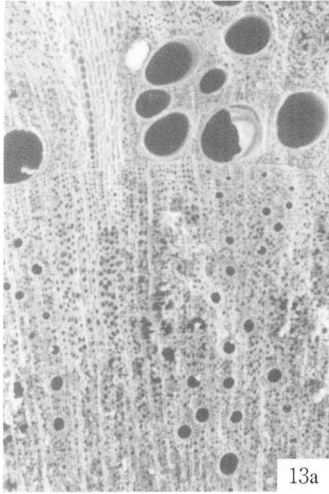
12c

10. アサダ (H536 1区トレンチ)  
 11. クマシデ属イヌシデ節 (H92 4区1層)  
 12. プナ属 (H560 P 2)  
 a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200μm : a  
 200μm : b,c



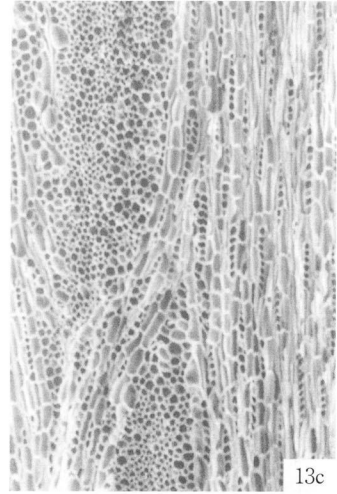
図版5 炭化材(5)



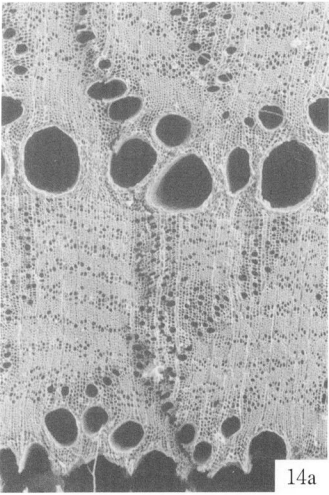
13a



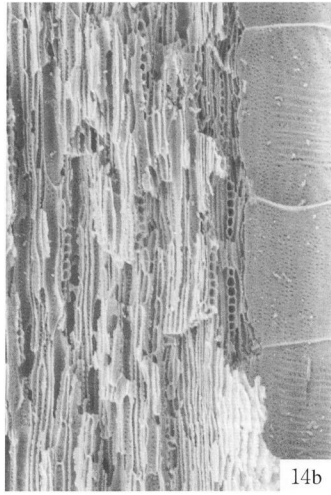
13b



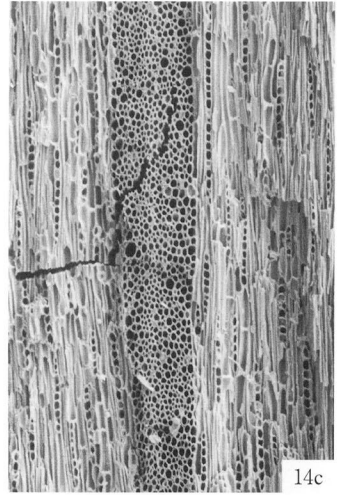
13c



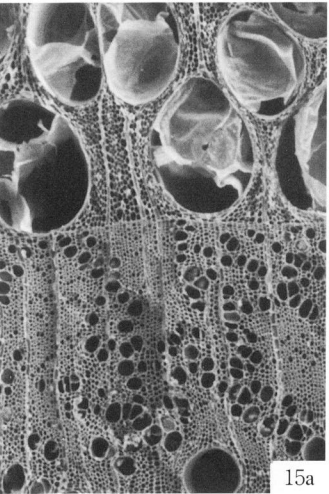
14a



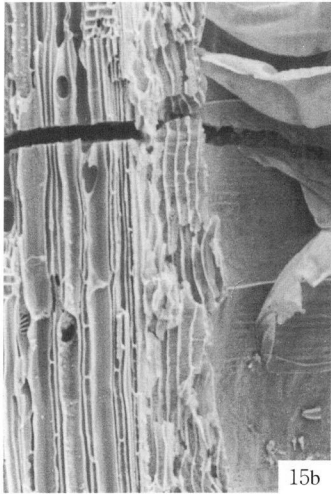
14b



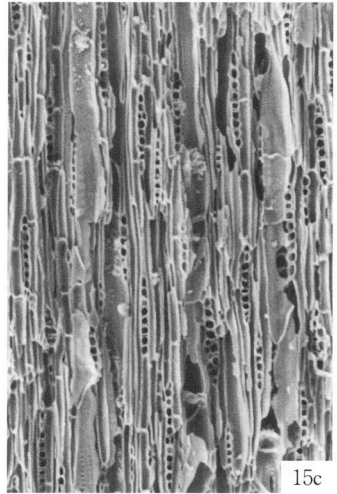
14c



15a



15b

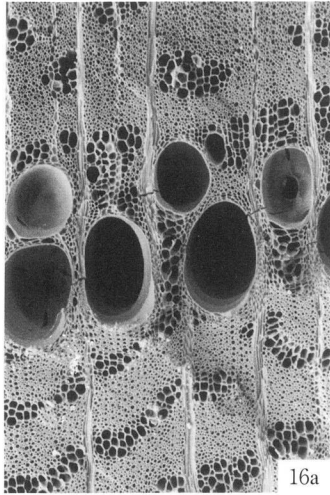


15c

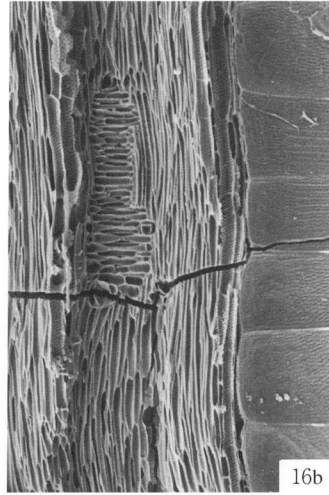
13. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (H615 No.58)  
 14. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (H615 No.109)  
 15. クリ (F383 P.6)  
 a : 木口, b : 柁目, c : 板目

100μm : a  
 100μm : b,c

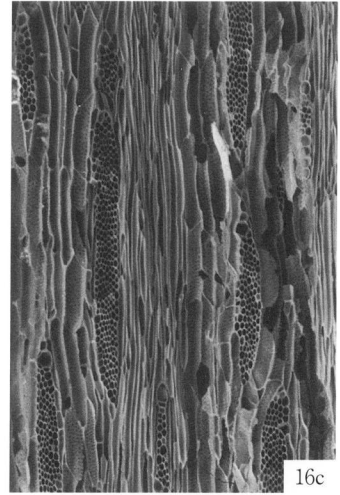
図版 6 炭化材(6)



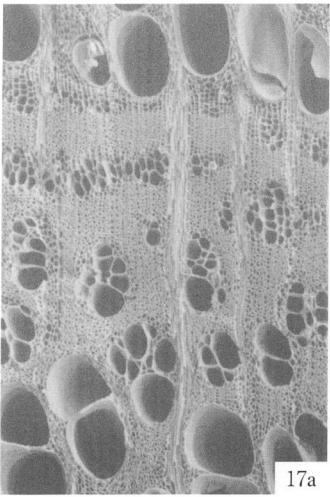
16a



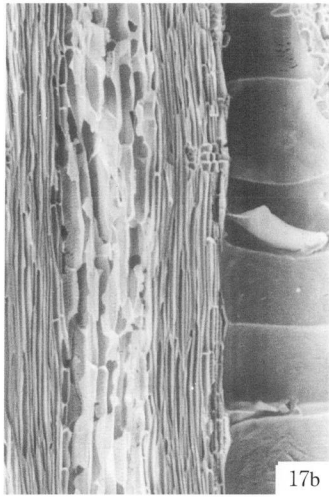
16b



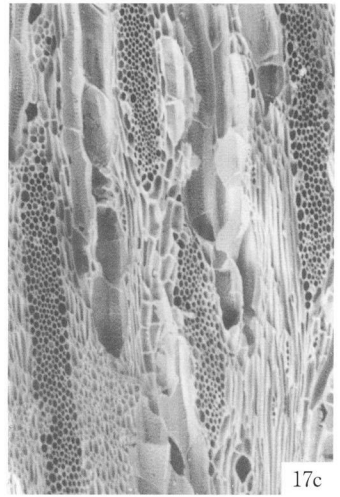
16c



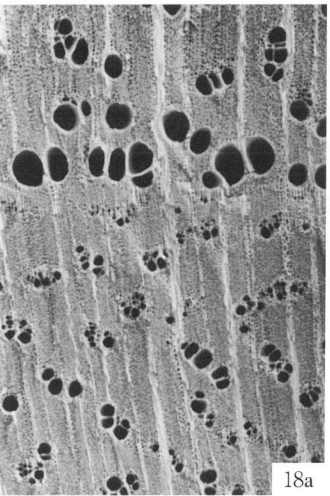
17a



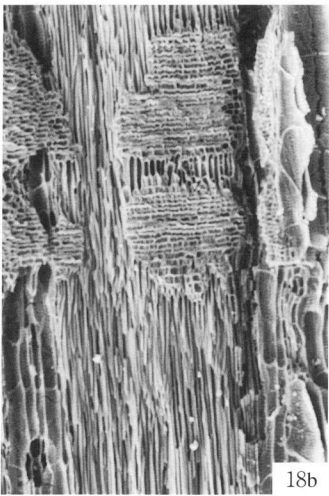
17b



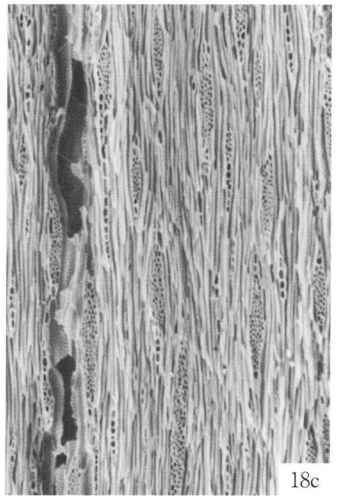
17c



18a



18b



18c

16. ケヤキ (H230 3区)

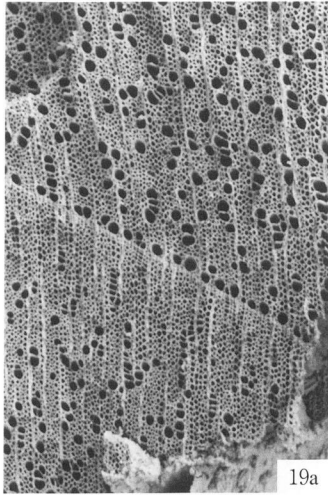
17. ニレ属 (H383 P5)

18. ヤマガワ (D46)

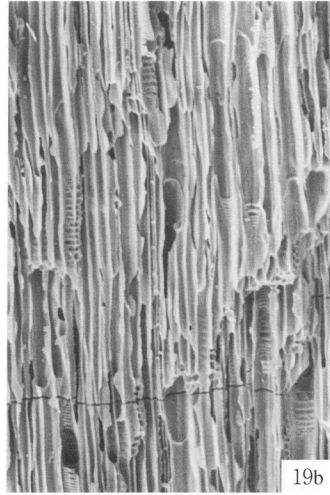
a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200μm : a  
200μm : b,c

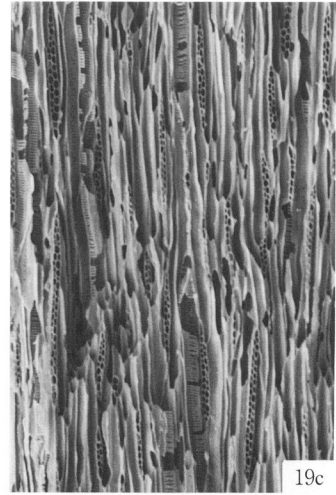
図版7 炭化材(7)



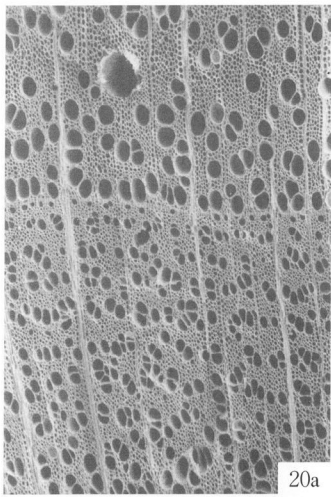
19a



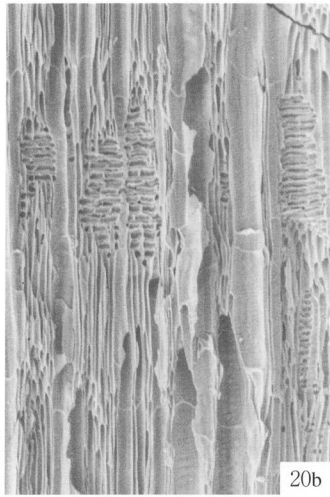
19b



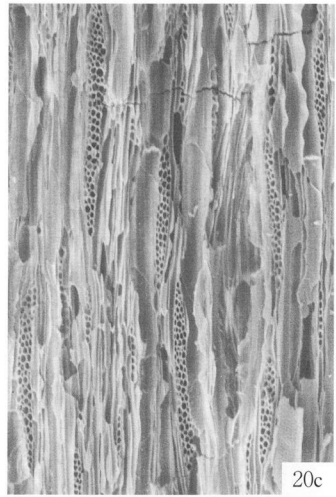
19c



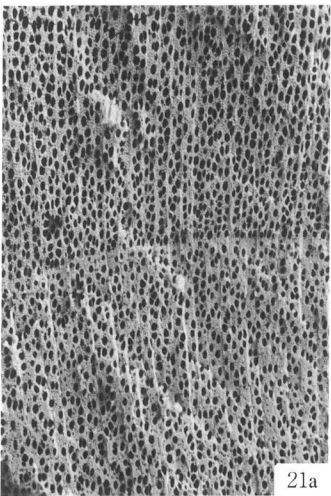
20a



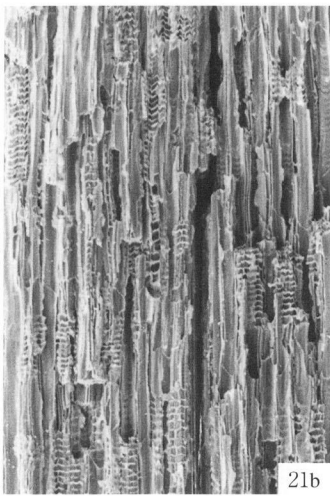
20b



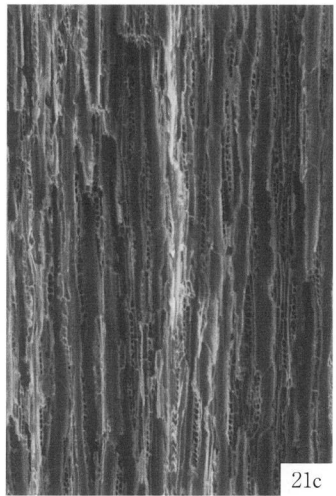
20c



21a



21b



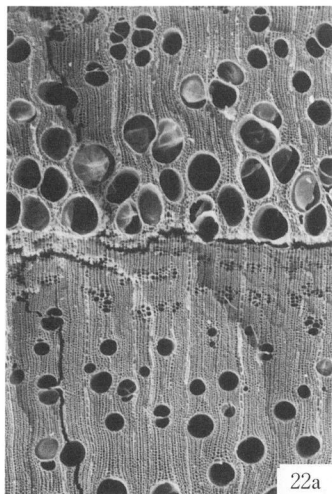
21c

19. モクレン属 (H615 No.19)  
 20. サクラ属 (H615 No.156)  
 21. バラ科ナシ亜科 (H230 No.151)  
 a : 木口, b : 柁目, c : 板目

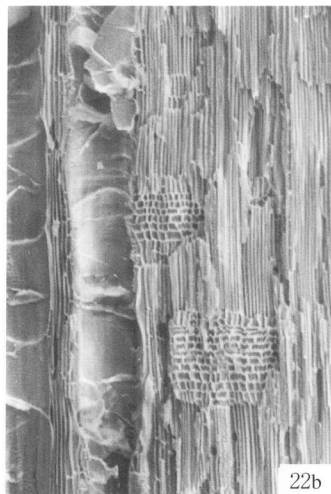
200μm : a  
 200μm : b,c



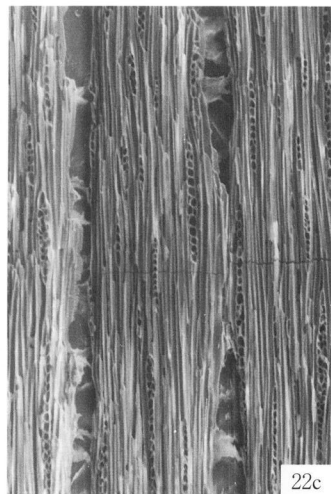
図版8 炭化材(8)



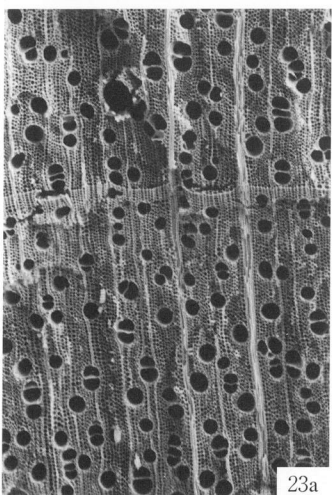
22a



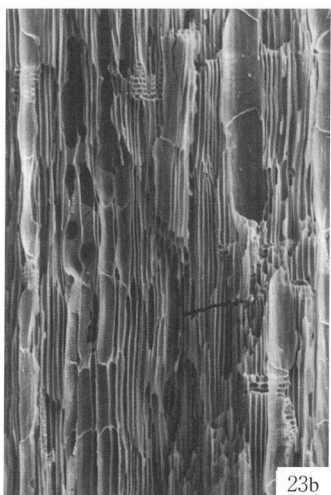
22b



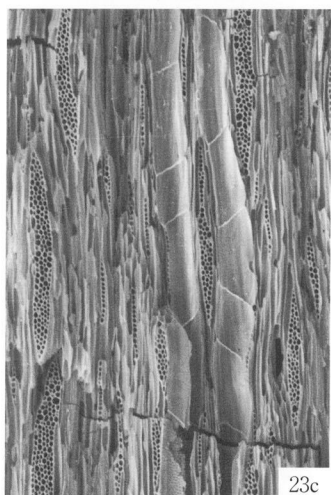
22c



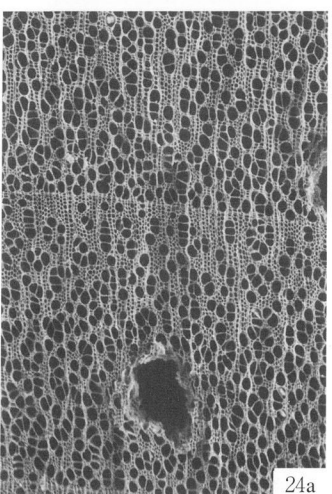
23a



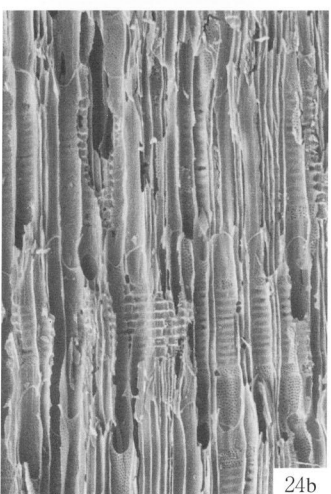
23b



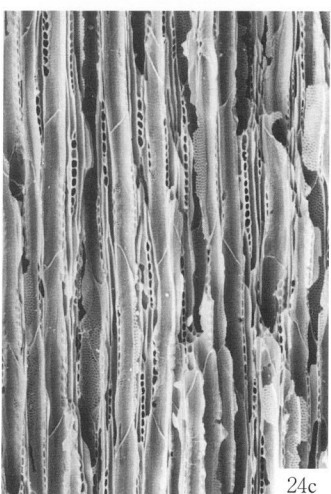
23c



24a



24b

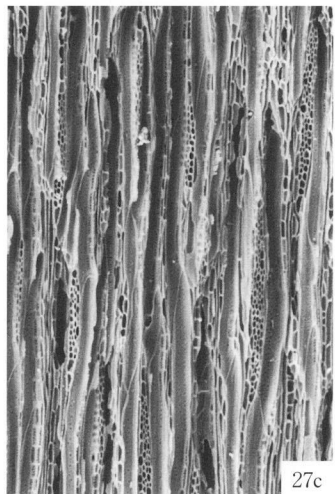
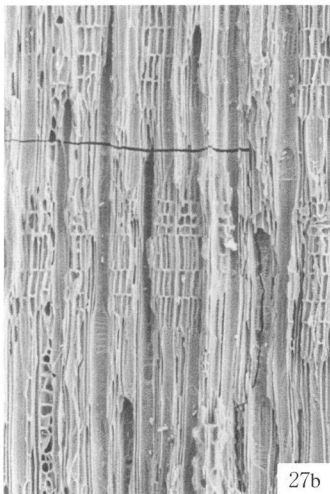
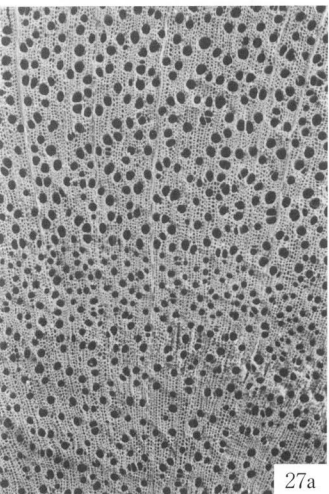
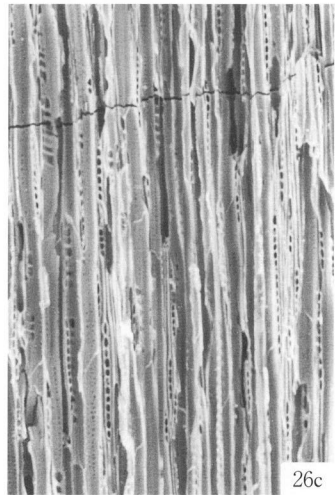
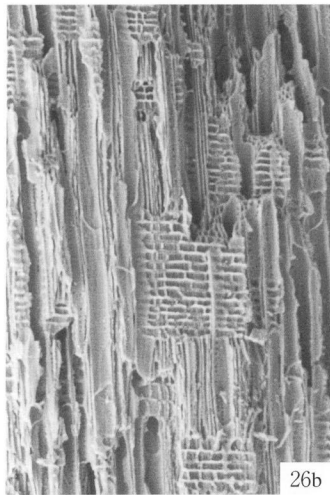
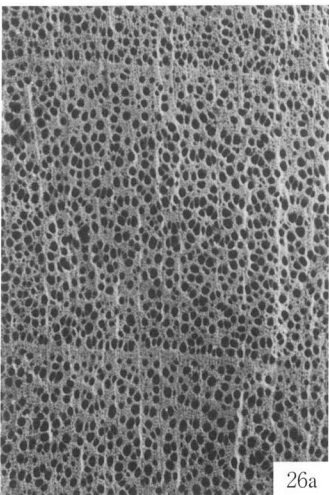
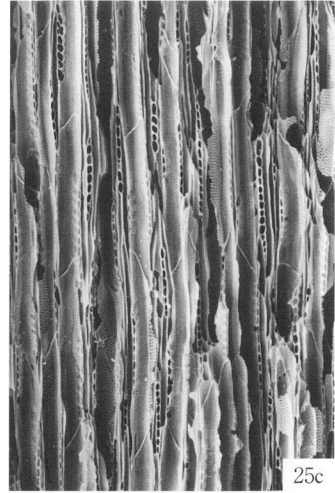
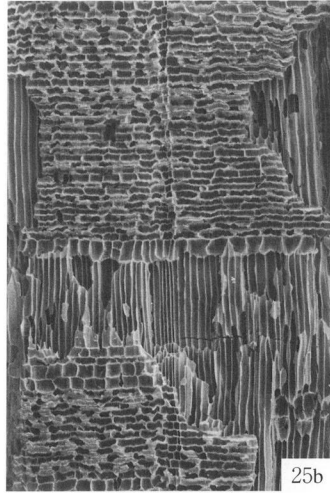
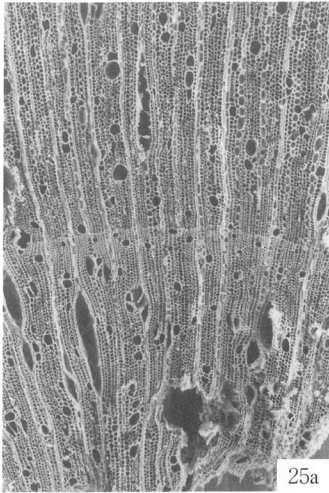


24c

22. ヌルデ (H615 No.136)  
 23. カエデ属 (H230 No.151)  
 24. トチノキ属 (H260 No.6)  
 a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200μm : a  
 200μm : b,c

図版9 炭化材(9)



25. アワブキ (H560 P2)

26. ニシキギ属 (H654 C-28)

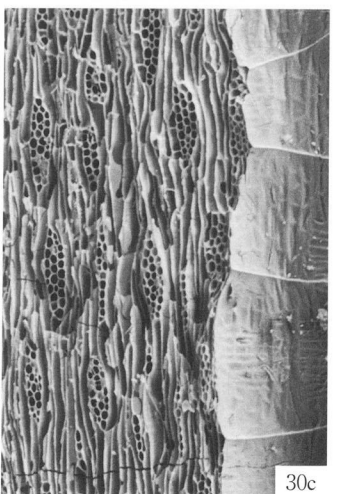
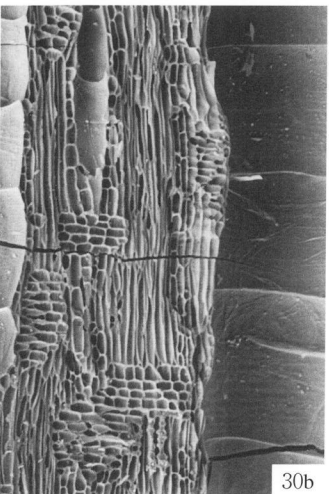
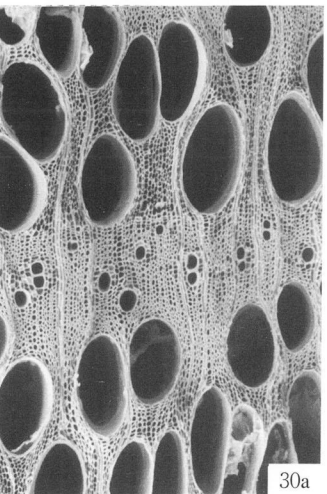
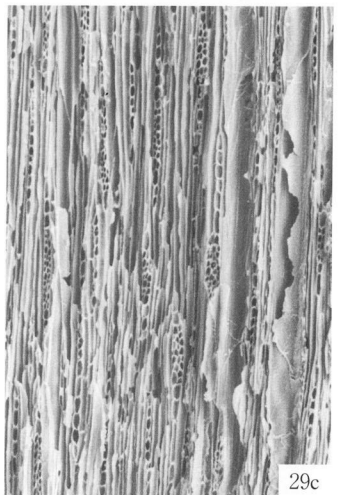
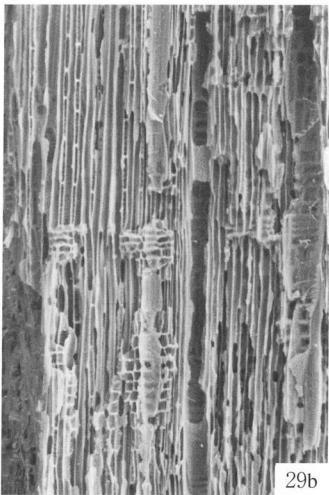
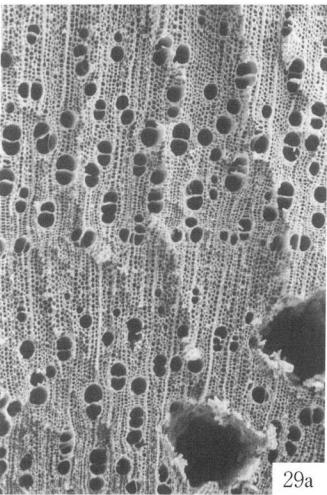
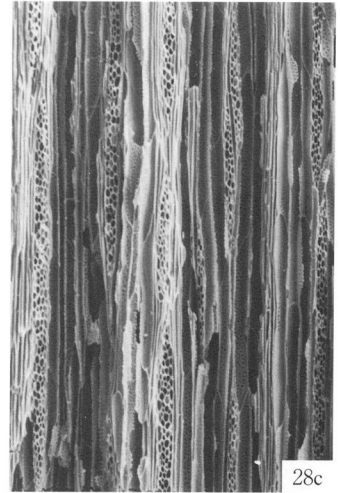
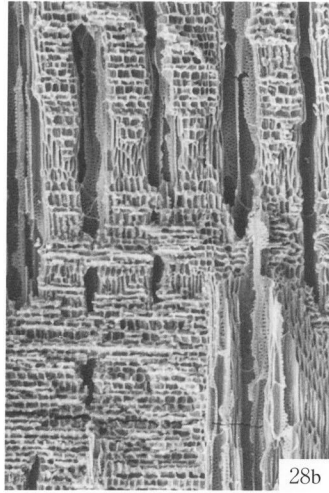
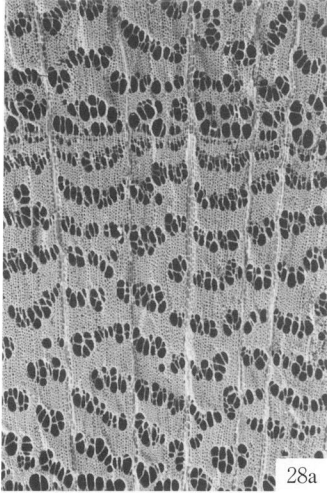
27. ミズキ属 (H232 2区2層)

a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200μm : a

200μm : b,c

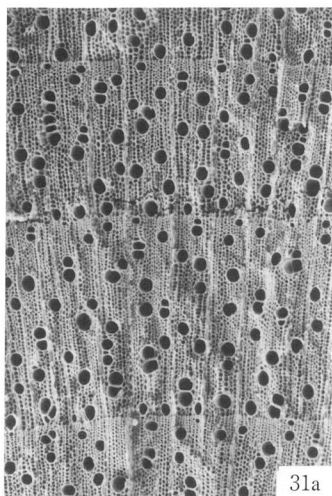
図版10 炭化材(10)



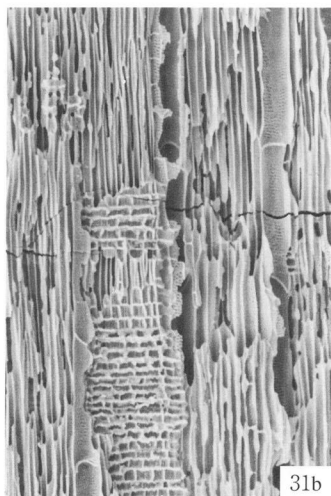
28. ウコギ属 (H560 P 2)  
 29. エゴノキ属 (H560 P 2)  
 30. トネリコ属 (H257 No.3)  
 a : 木口, b : 柁目, c : 板目

200μm : a  
 200μm : b,c

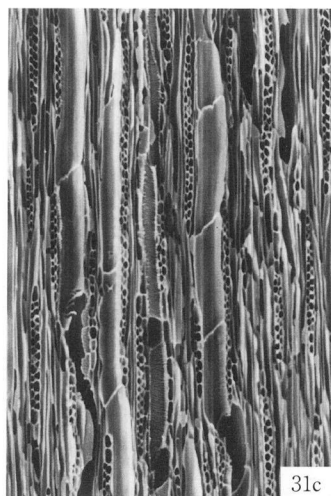
図版11 炭化材(11)



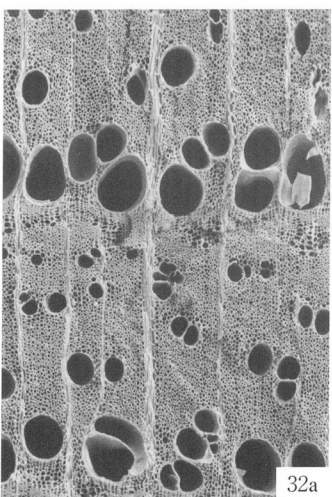
31a



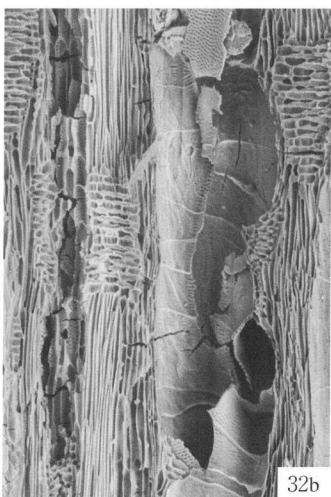
31b



31c



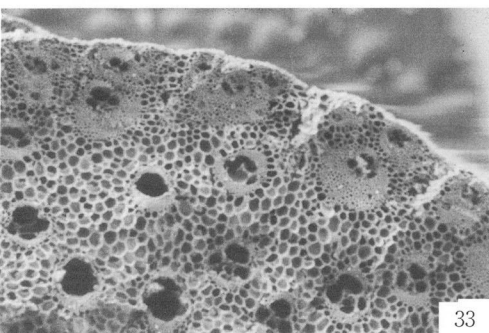
32a



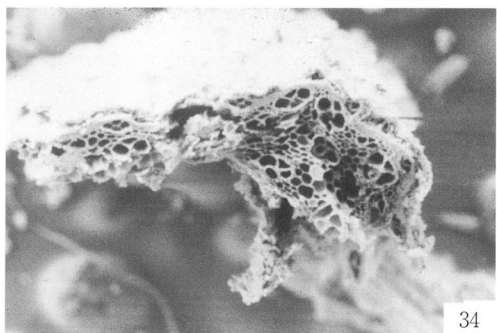
32b



32c



33



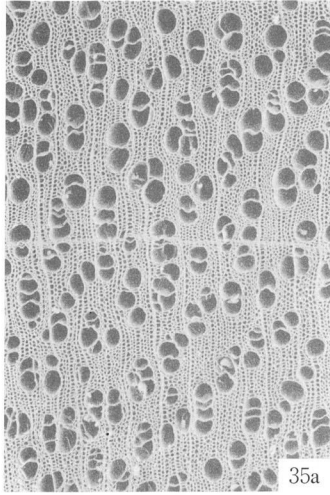
34

31. ムラサキシキブ属 (H592 1区1層) a : 木口, b : 柁目, c : 板目  
 32. クサギ属 (H255 3区1層) a : 木口, b : 柁目, c : 板目  
 33. イネ科タケ亜科 (H615 No.142) 横断面  
 34. イネ科 (H615 No.60) 横断面

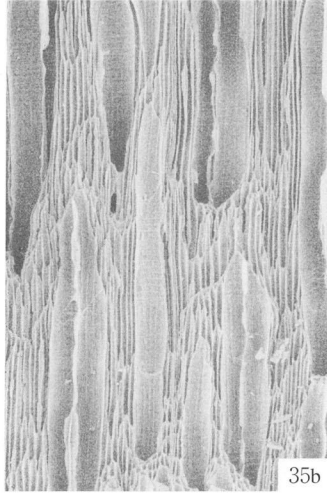
200μm : a  
 200μm : b,c



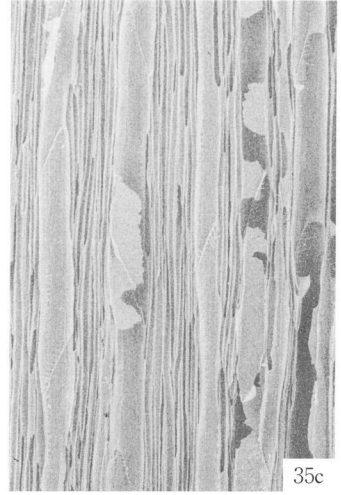
図版12 炭化材(12)



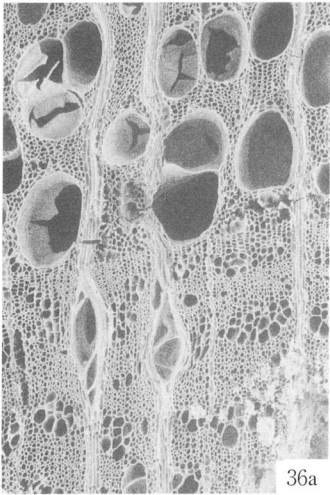
35a



35b



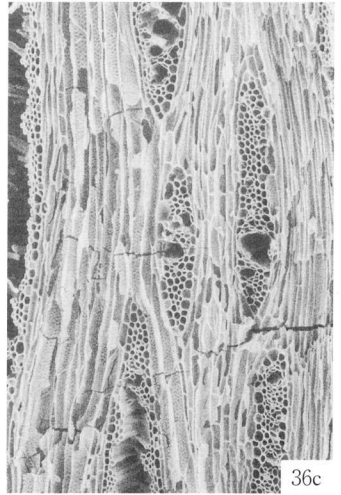
35c



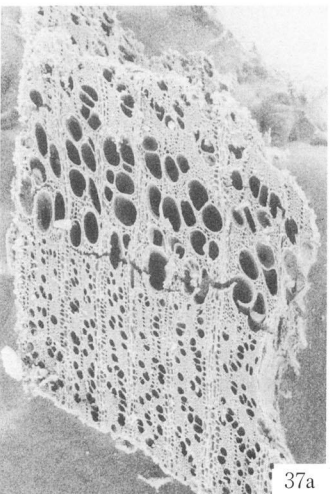
36a



36b



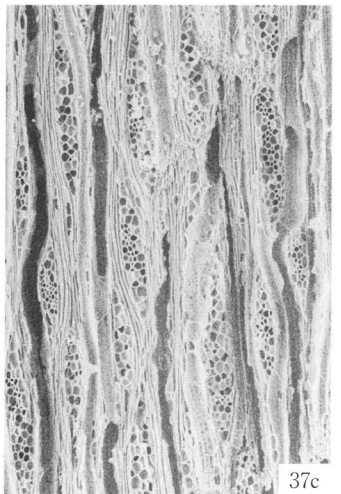
36c



37a



37b

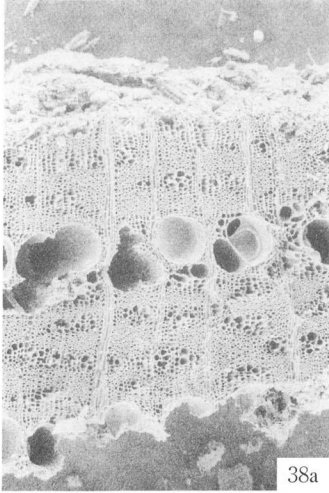


37c

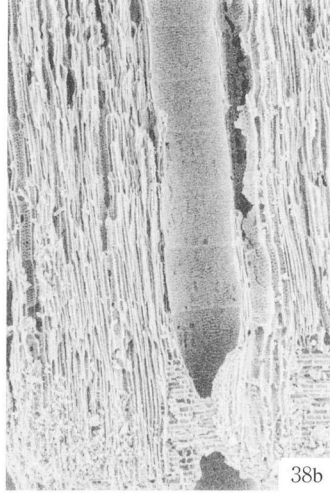
35. カバノキ属 (H497 検出面)  
 36. イヌエンジュ属 (H802 II区4層)  
 37. クロウメドキ属 (H669 No.5)  
 a : 木口, b : 柱目, c : 板目

200μm : a  
 200μm : b,c

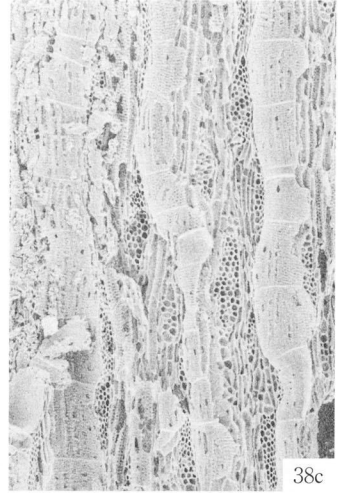
図版13 炭化材(13)



38a



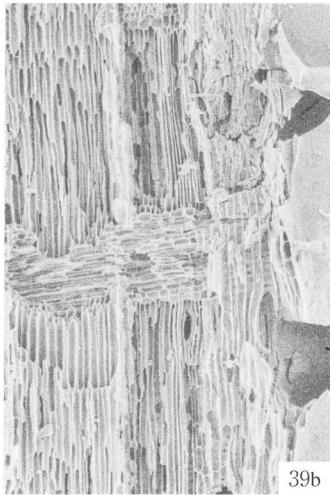
38b



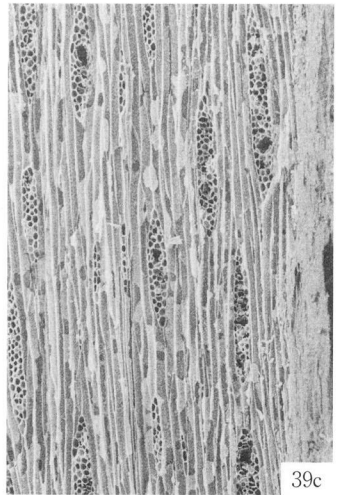
38c



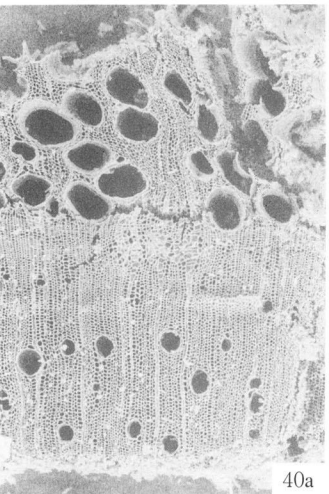
39a



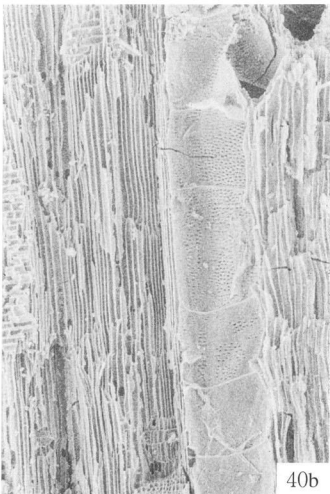
39b



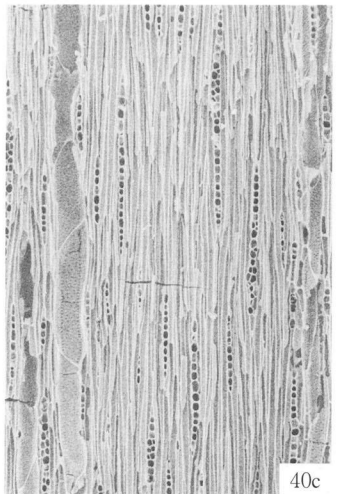
39c



40a



40b



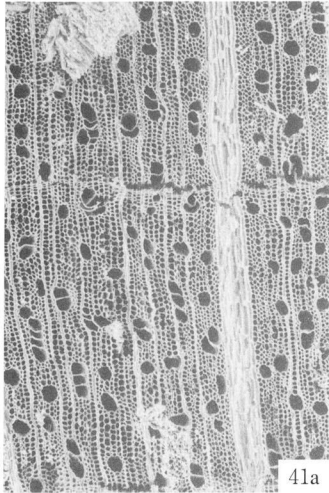
40c

38. ヤマウルシ (H263 II区2層)  
 39. エノキ属 (VDP71)  
 40. リョウブ (H729 No.6)  
 a : 木口, b : 柁目, c : 板目

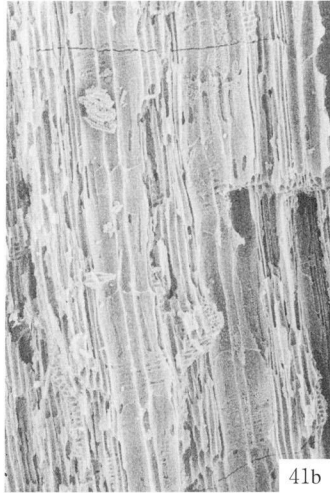
200μm : a  
 200μm : b,c



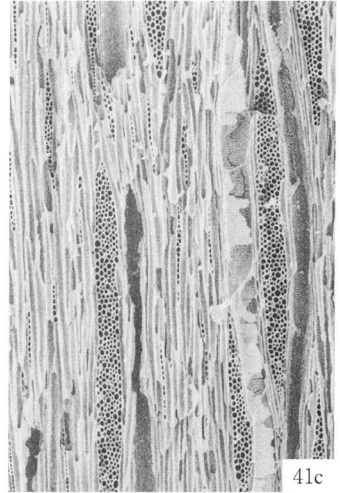
図版14 炭化材(14)



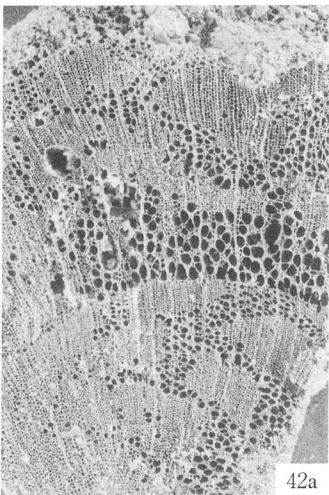
41a



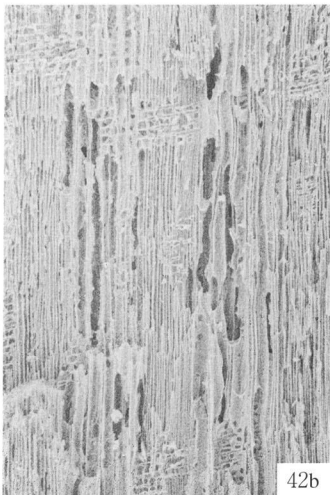
41b



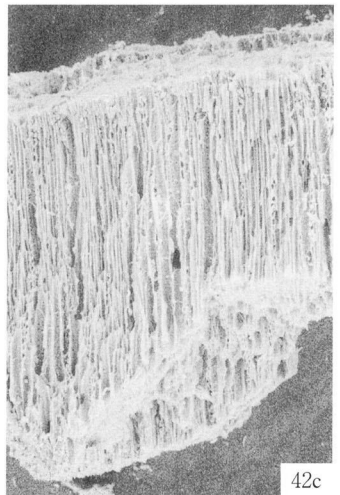
41c



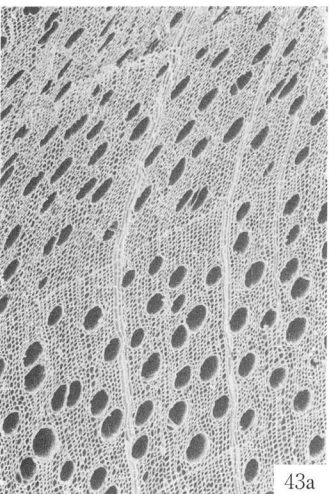
42a



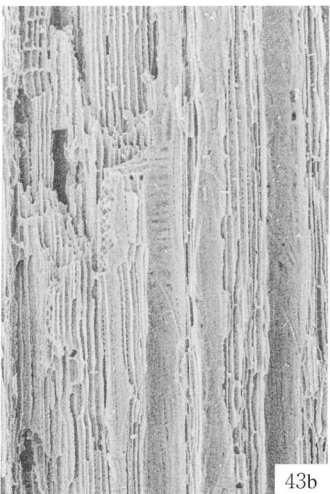
42b



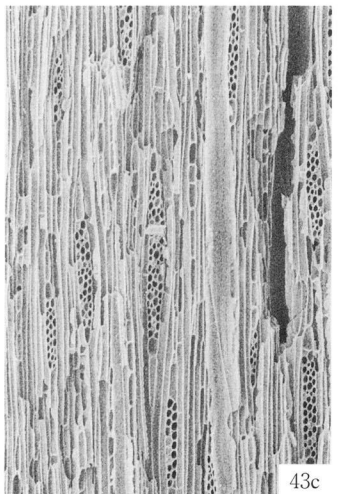
42c



43a



43b

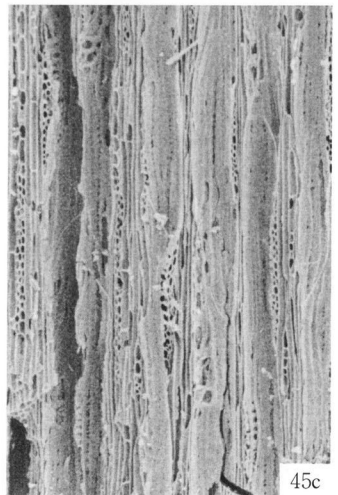
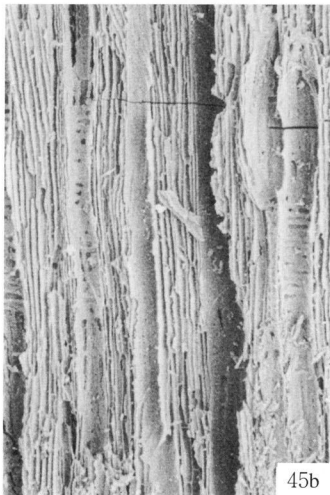
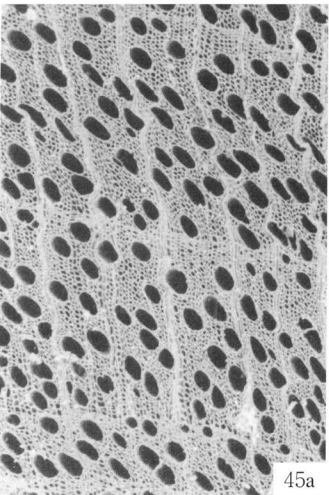
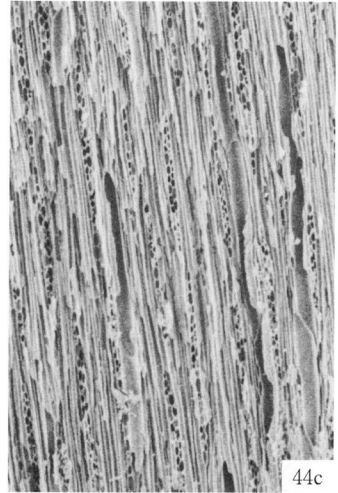
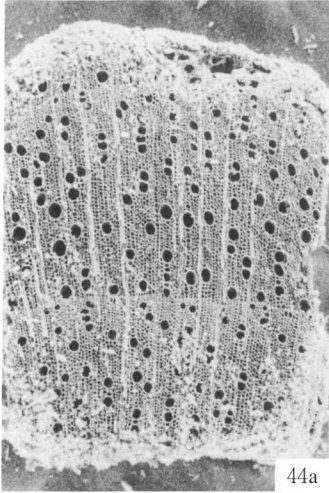


43c

41. キハダ (H693 No.1)  
 42. モモ (H554 カメAの中の砂)  
 43. チドリノキ (H230 No.57)  
 a : 木口, b : 柱目, c : 板目

200μm : a  
 200μm : b,c

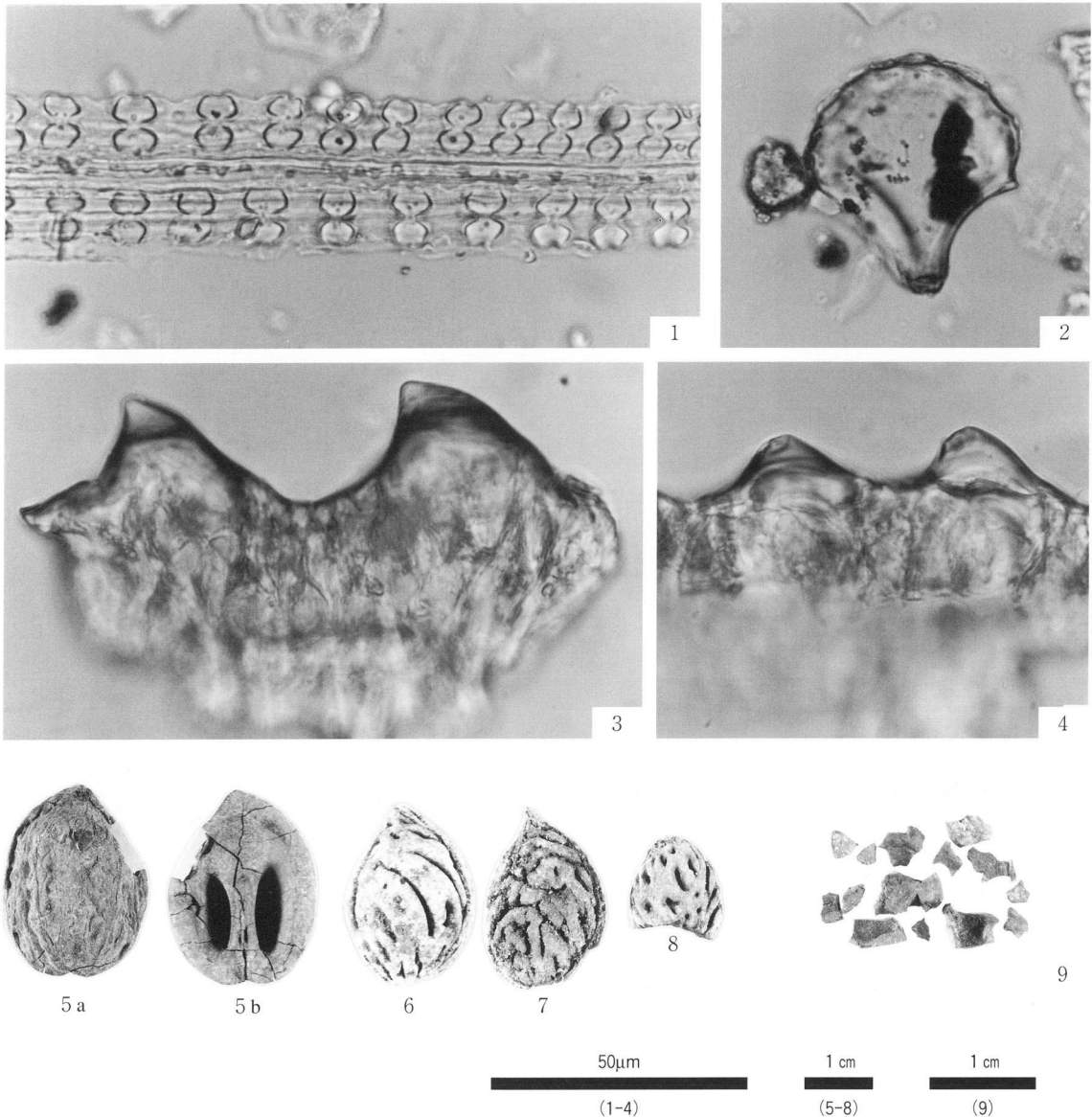
図版15 炭化材(15)



44. ムラサキシキブ属 (H278)  
 45. ハイノキ属サワフタギ節 (H693 スミB)  
 a : 木口, b : 柾目, c : 板目

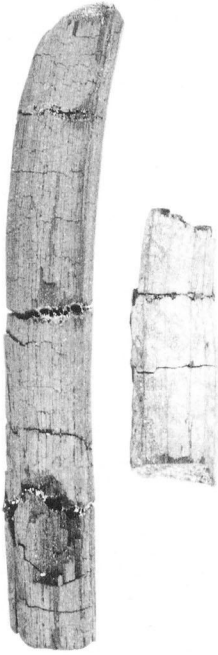
200μm : a  
 200μm : b,c

図版16 植物珪酸体・種実遺体



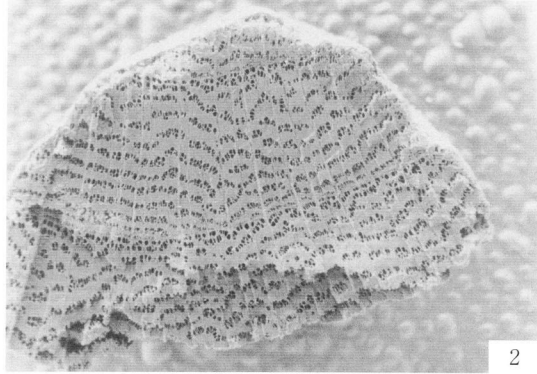
- 1. イネ属短細胞列 (H402; 床下)
- 3. イネ属穎珪酸体 (H161; 灰)
- 5. オニグルミ (H52; II-2)
- 7. モモ (H768; 1号床下土坑)
- 9. オニグルミ: 破片 (H869)

- 2. イネ属機動珪酸体 (H161; 灰)
- 4. イネ属穎珪酸体 (H401; 床下)
- 6. モモ (H577; II区1層)
- 8. モモ: 破片 (H800; IV 3層)



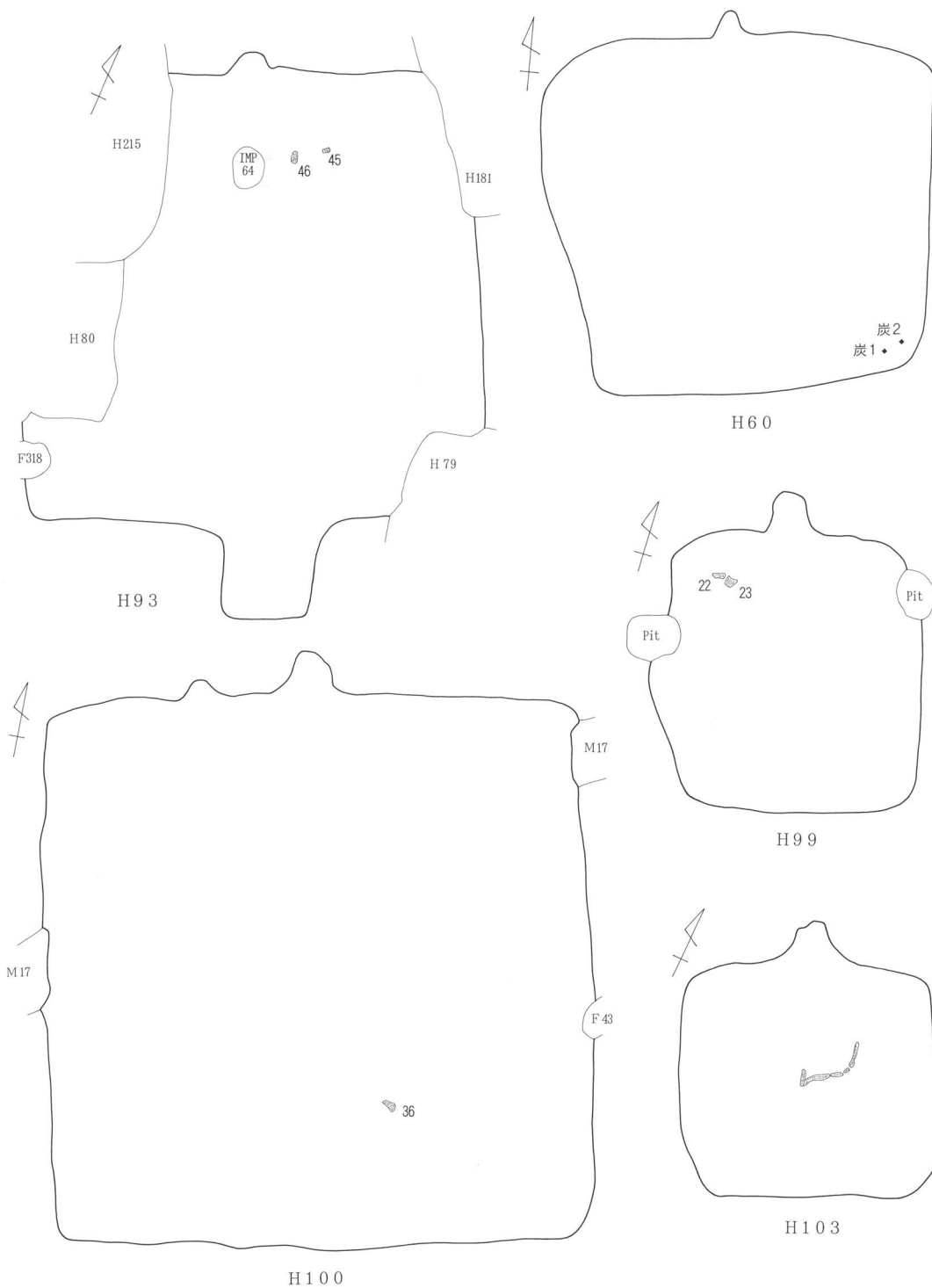
1

- 1. 木製品 (H554; 炭)
- 2. 木製品 (H554; 炭)

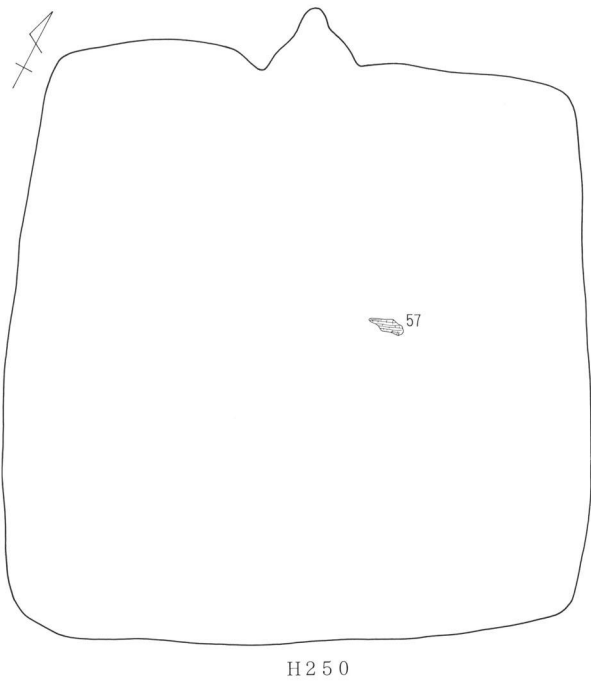
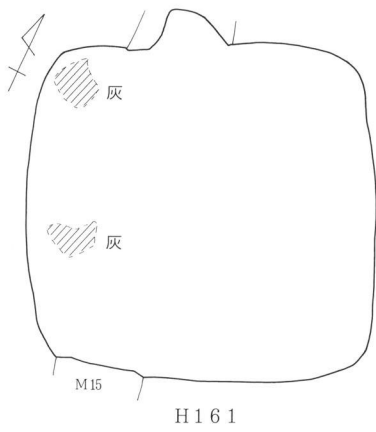
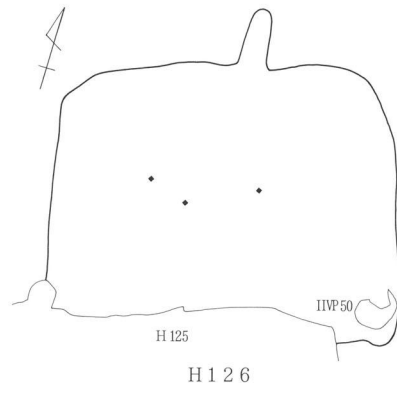
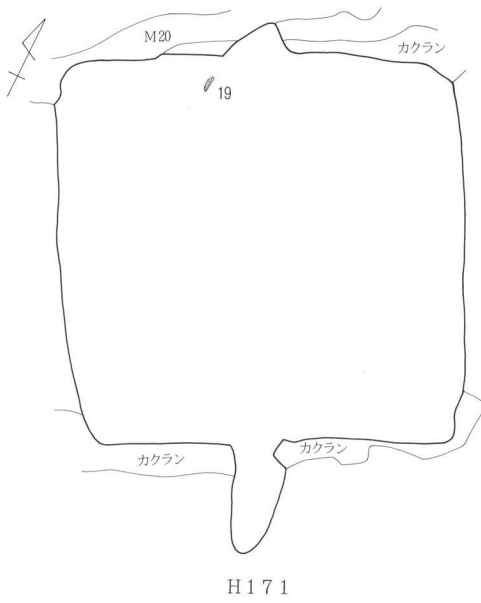
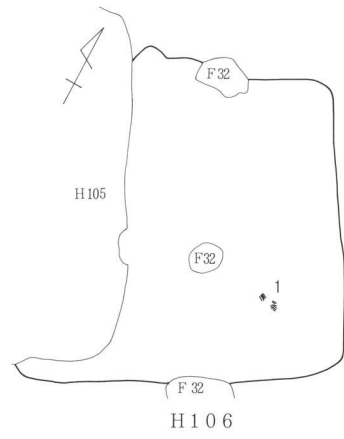
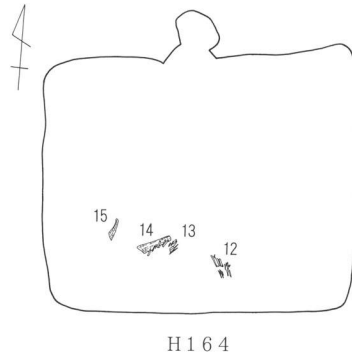
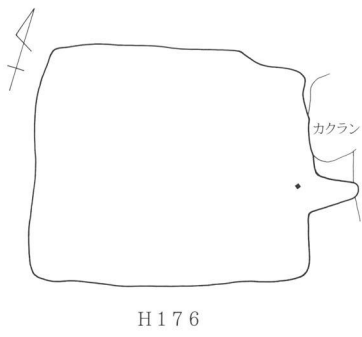


2



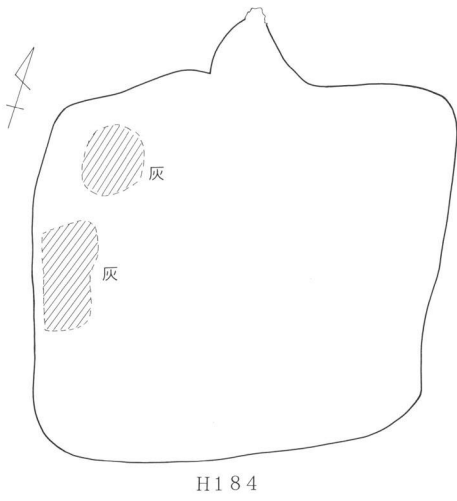


炭化材出土状況図(1)

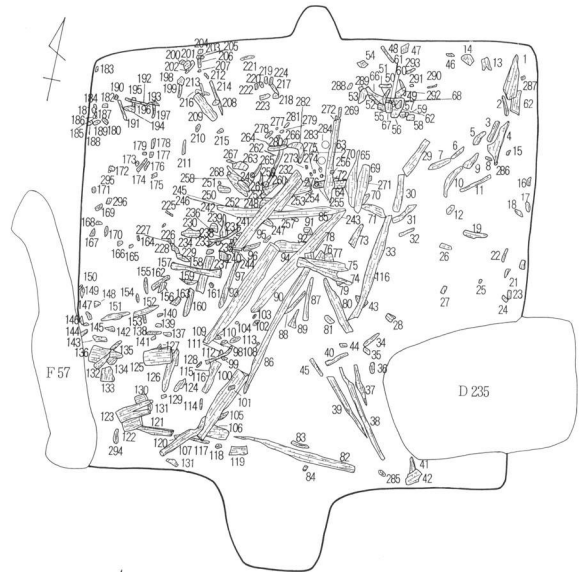


炭化材出土状況図(2)

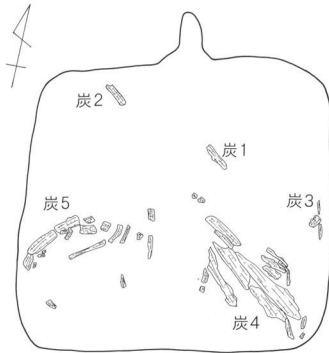




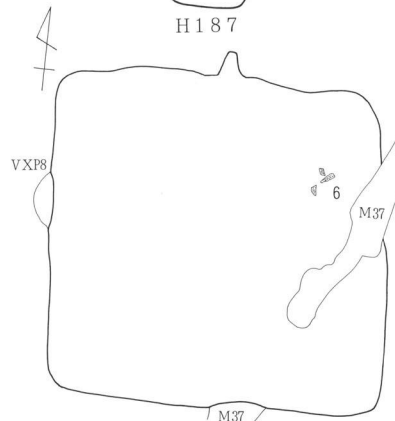
H184



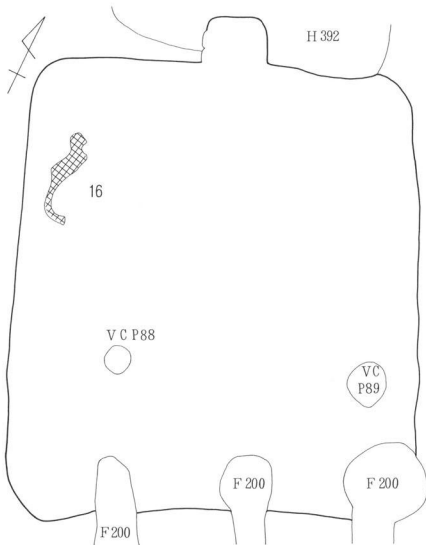
H187



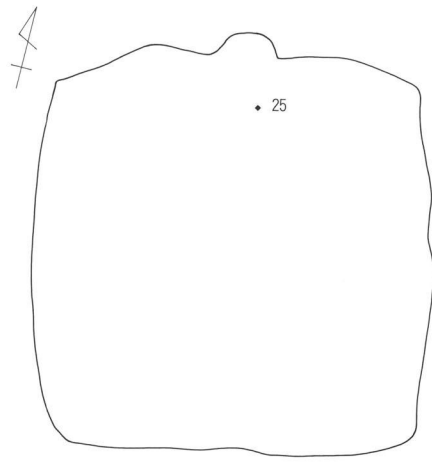
H352



H335

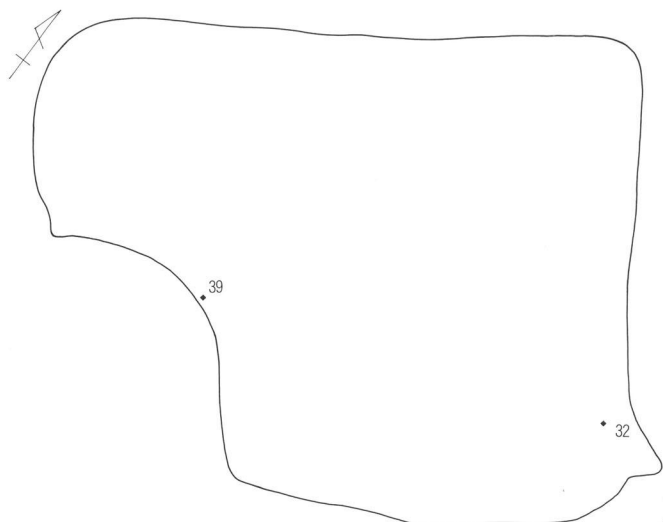


H393

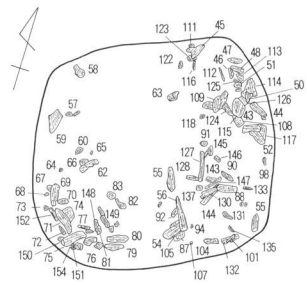


H314

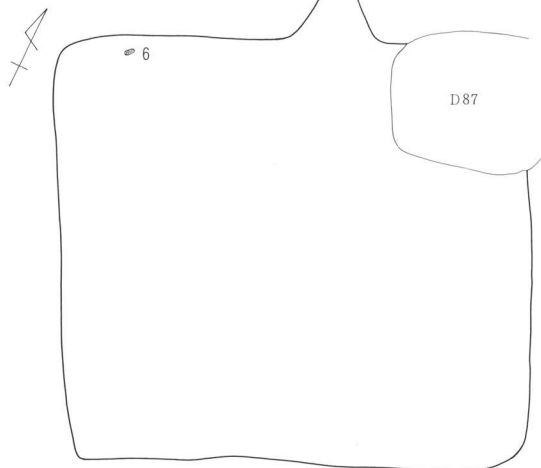
炭化材出土状況図(3)



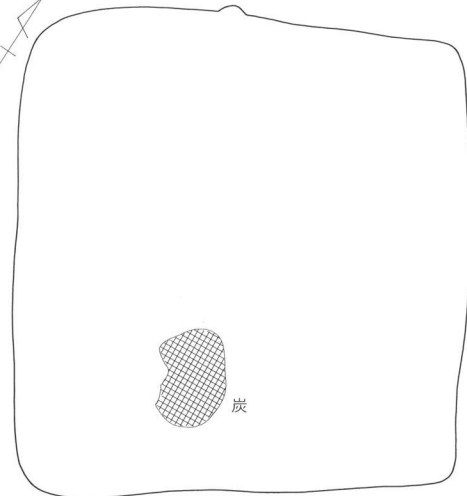
H311



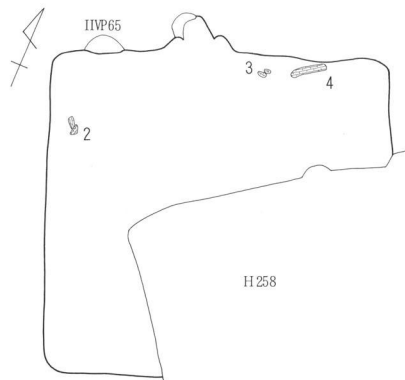
H230



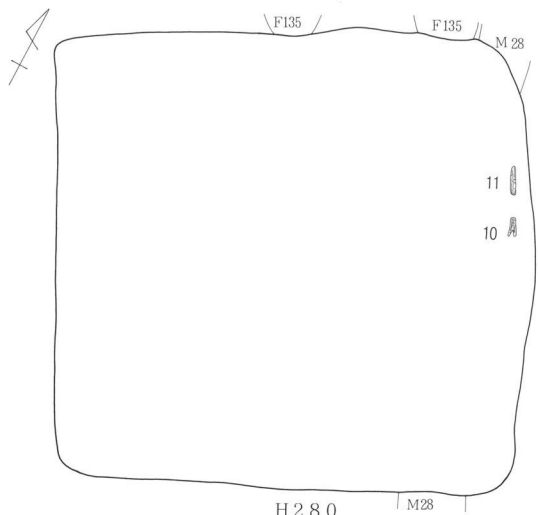
H260



H278

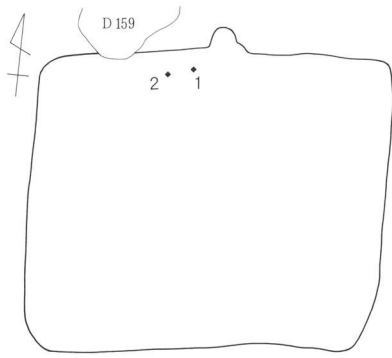


H257

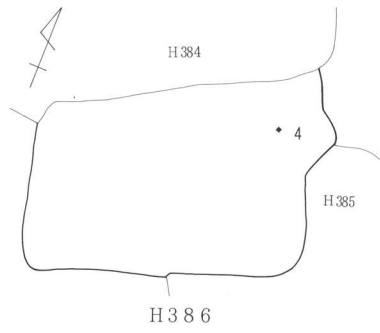


H280

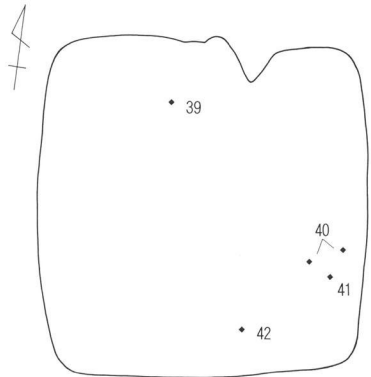
炭化材出土状況図(4)



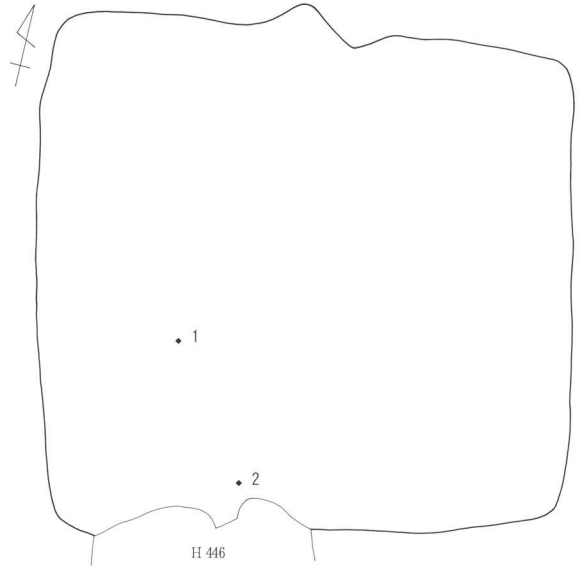
H369



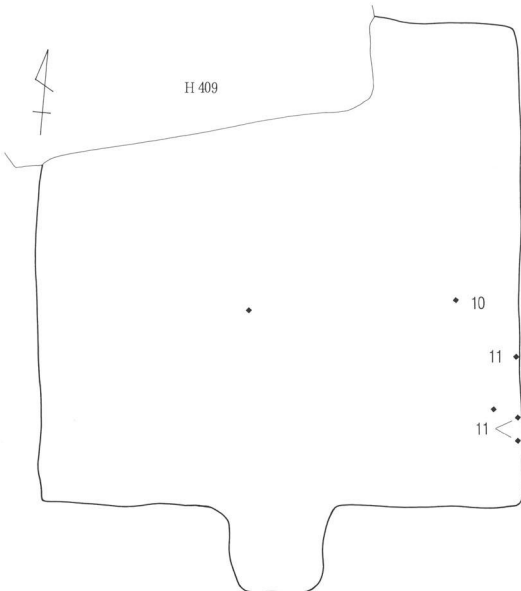
H386



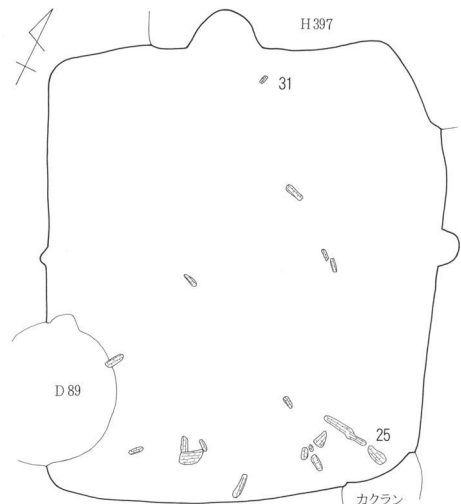
H496



H444

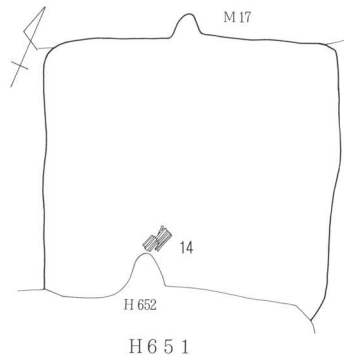
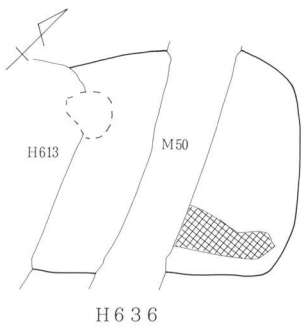
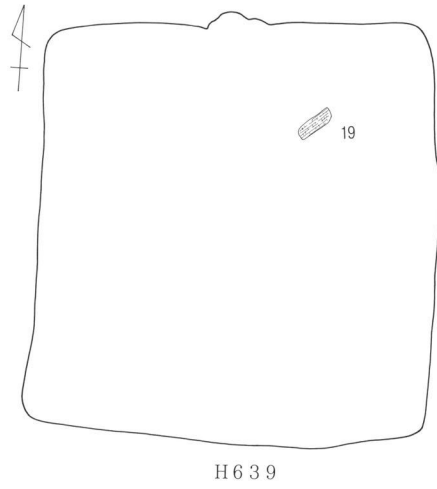
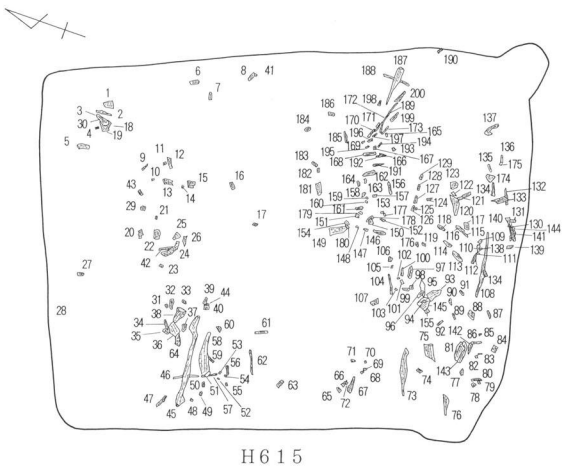
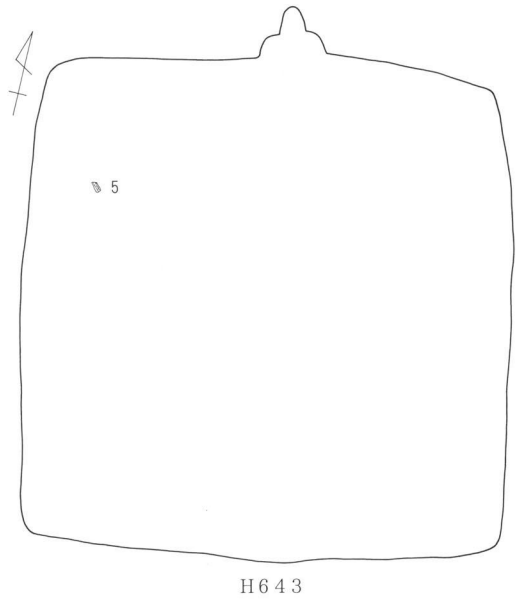
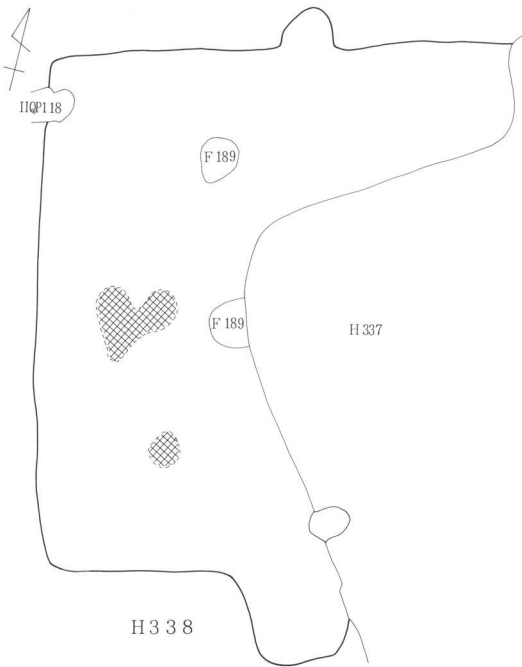


H410

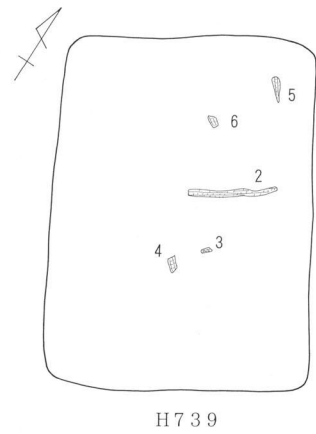
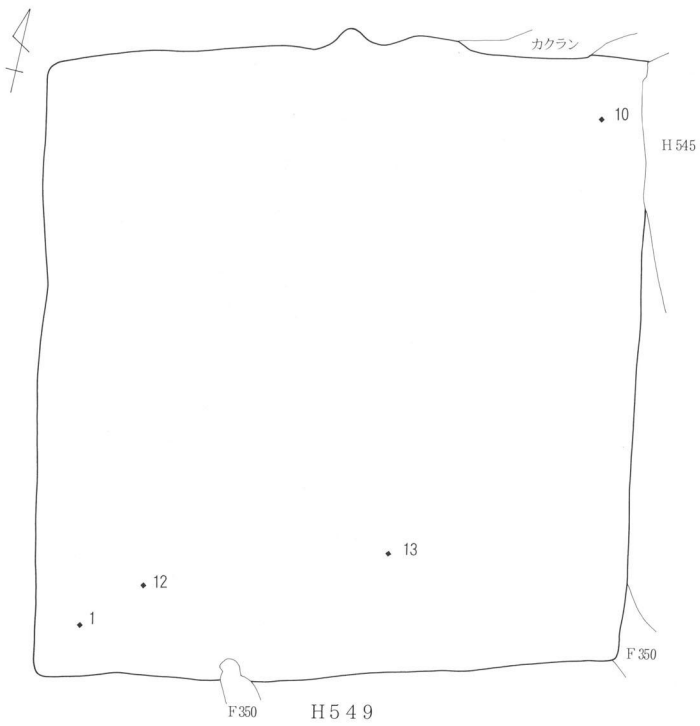
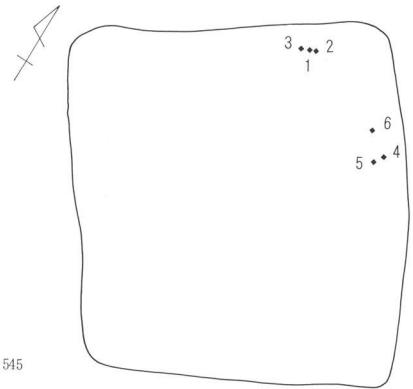
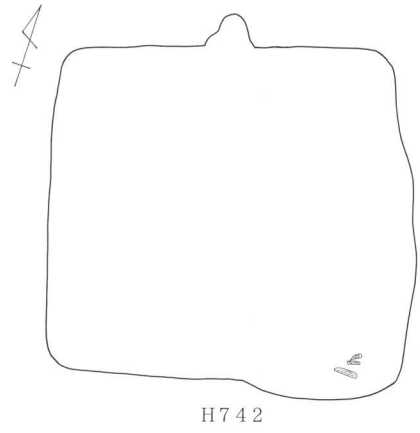
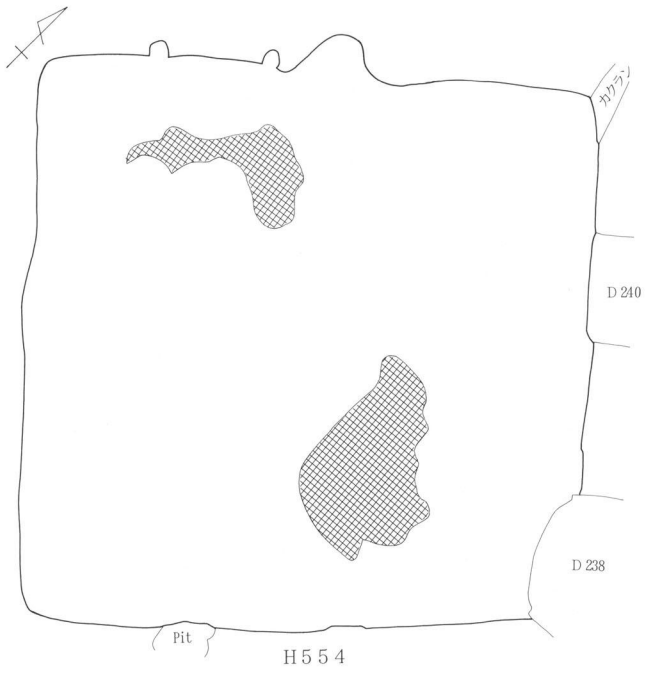


H398

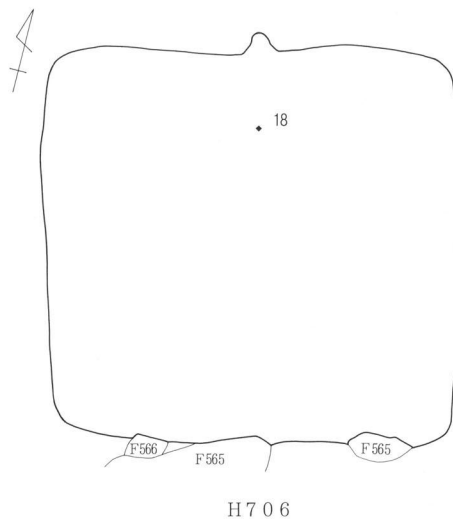
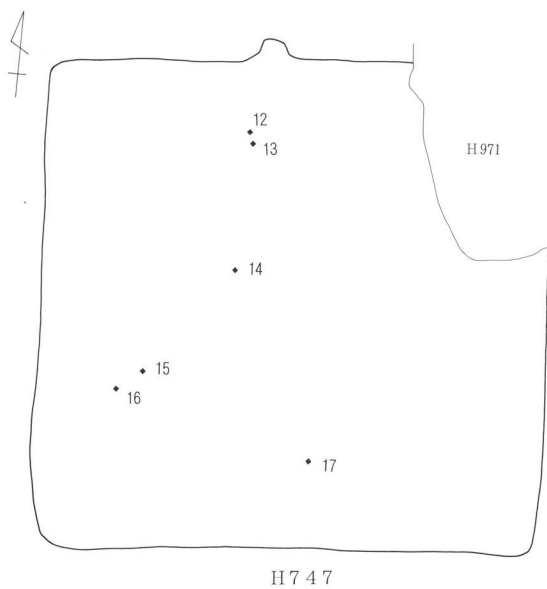
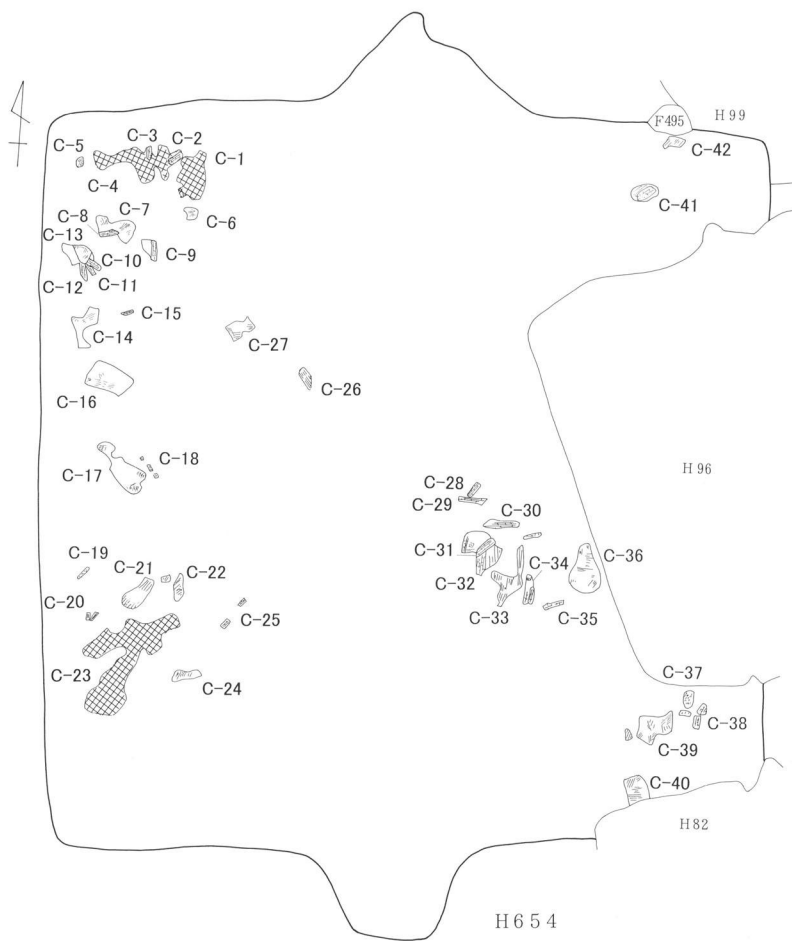
炭化材出土状況図(5)



炭化材出土状況図(6)

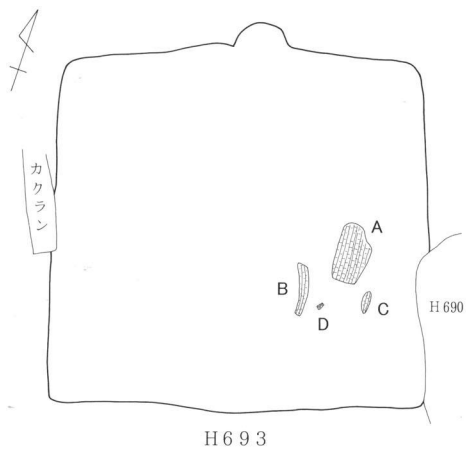


炭化材出土状況図(7)

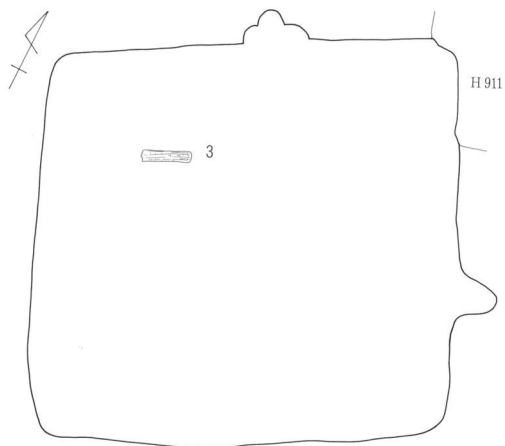


炭化材出土状況図(8)



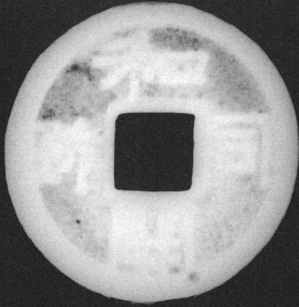


H693

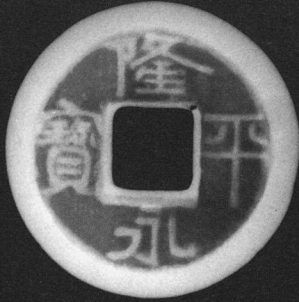


H912

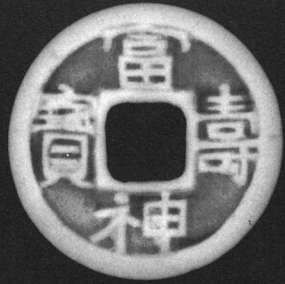
炭化材出土状況図(9)



H795



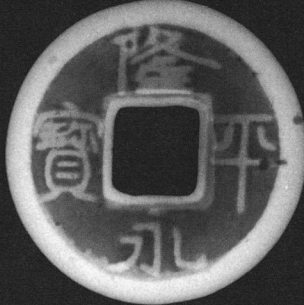
H489



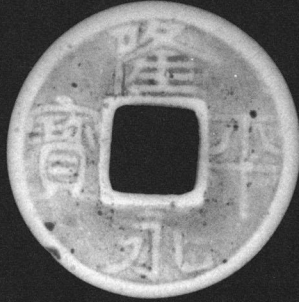
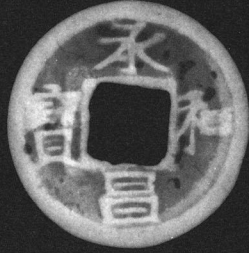
M40



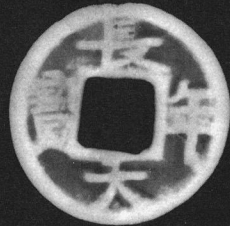
H309



H198



F498

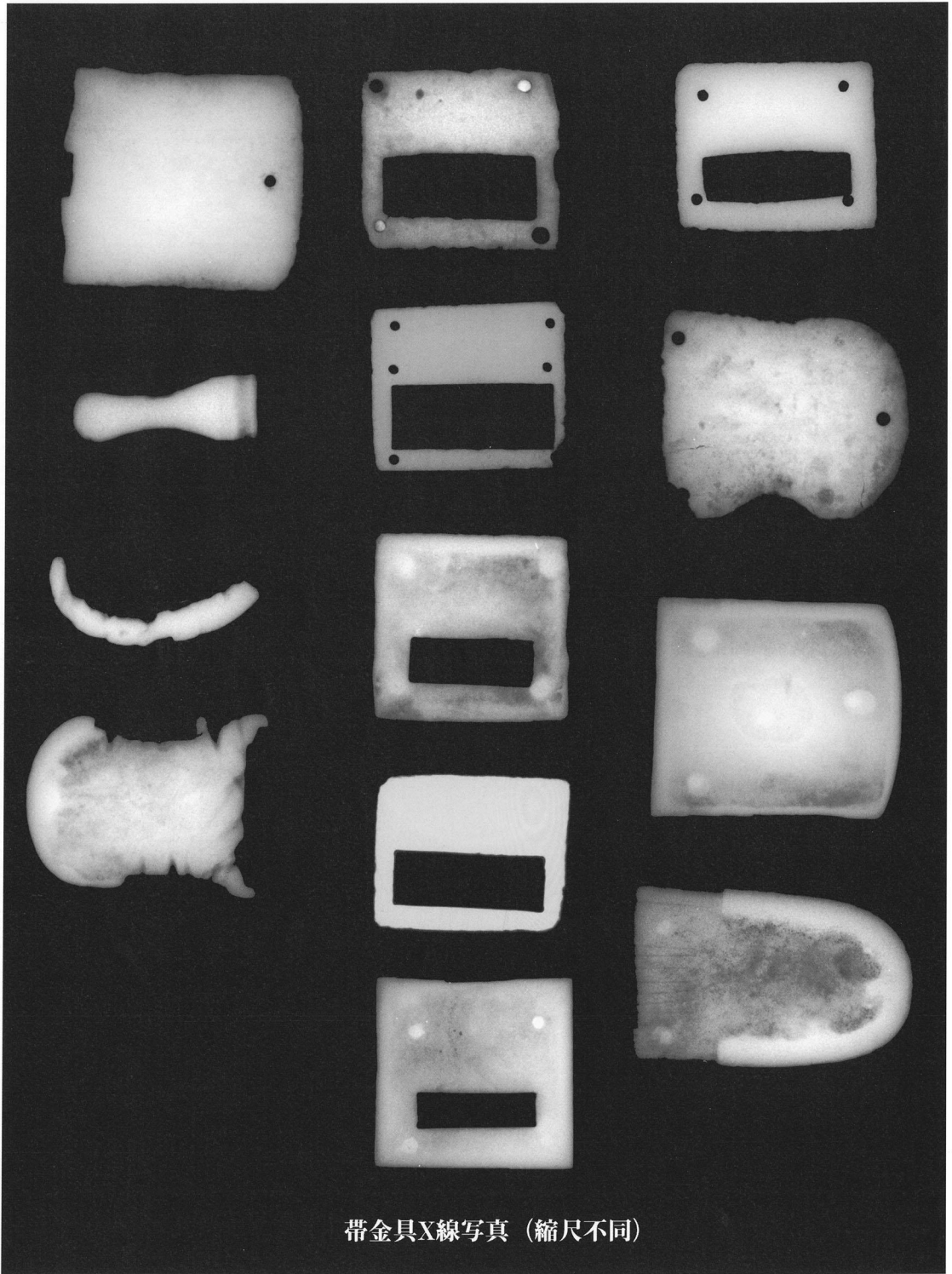


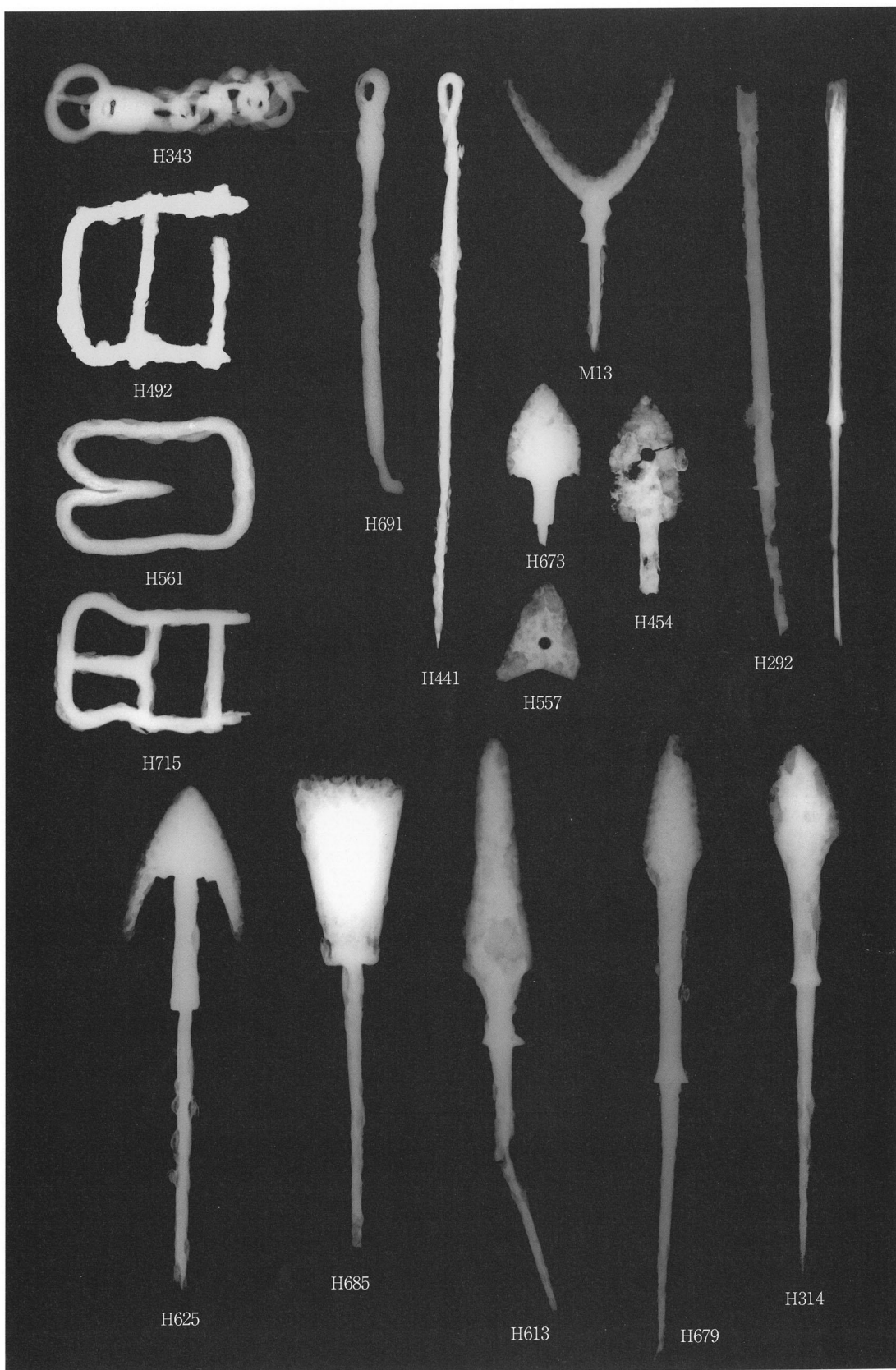
遺構外

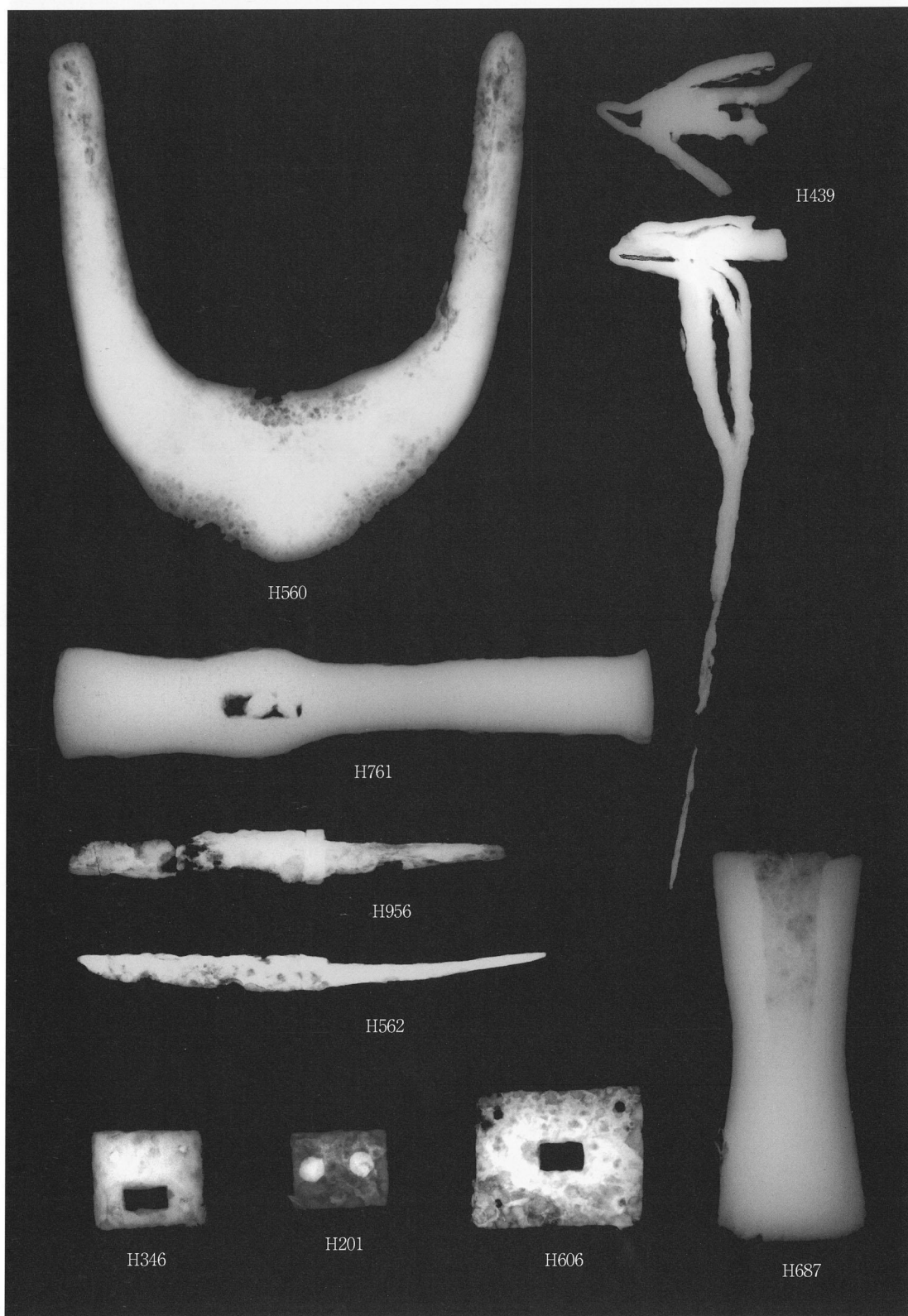


H118

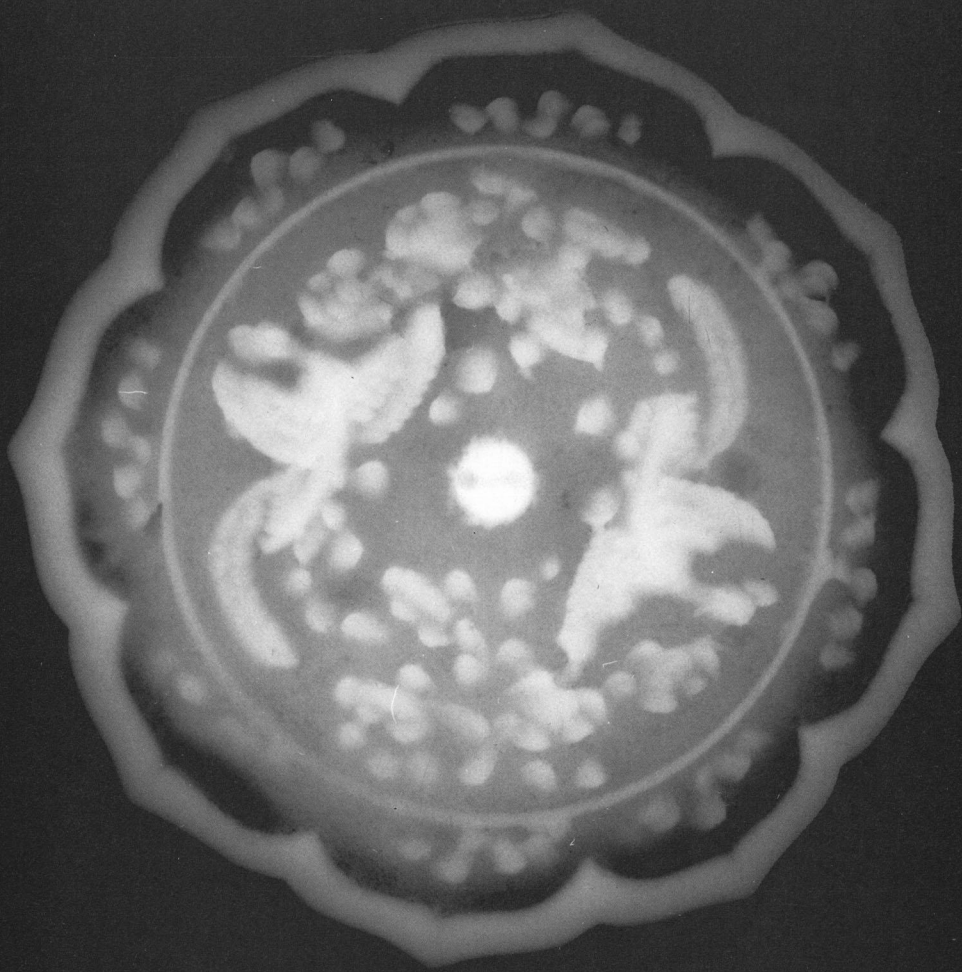
皇朝十二銭X線写真



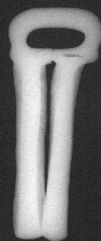




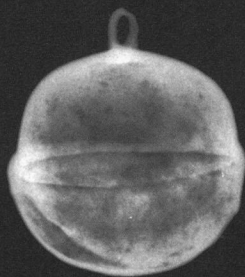




H615出土八稜鏡



H411



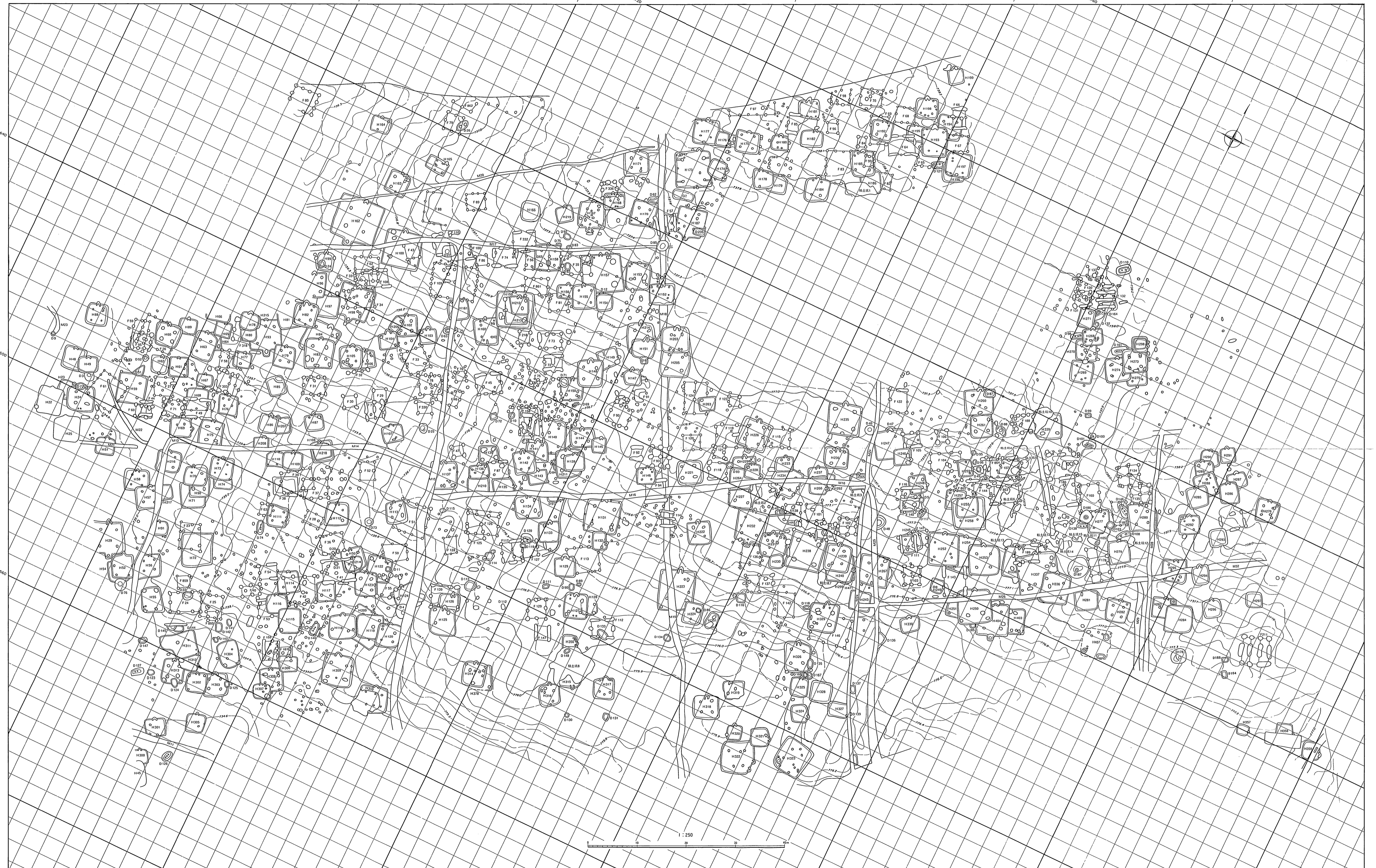
H203



# 聖原遺跡全体図



















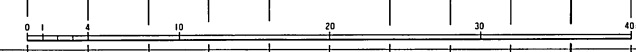
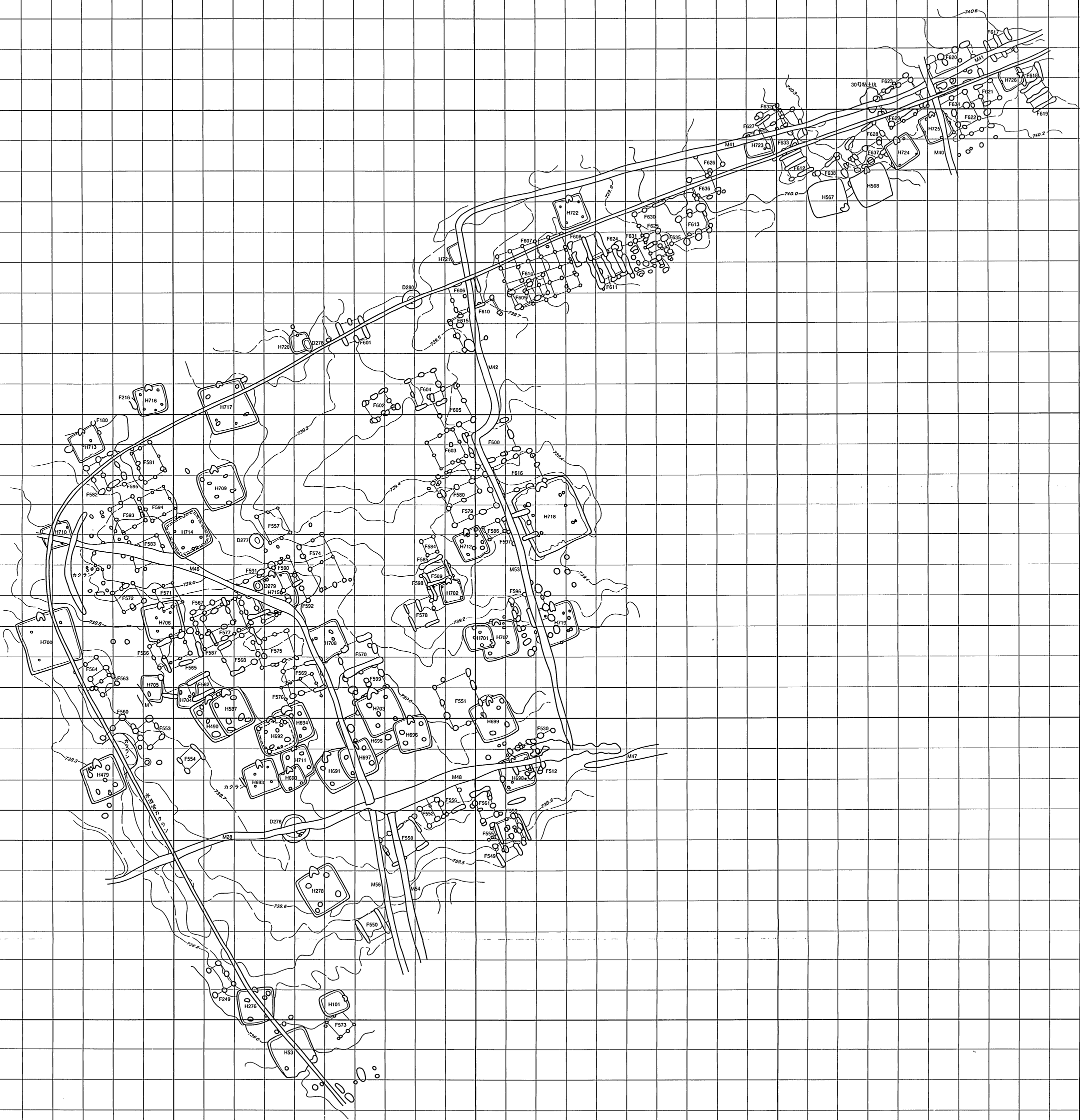
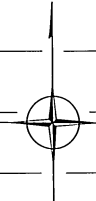


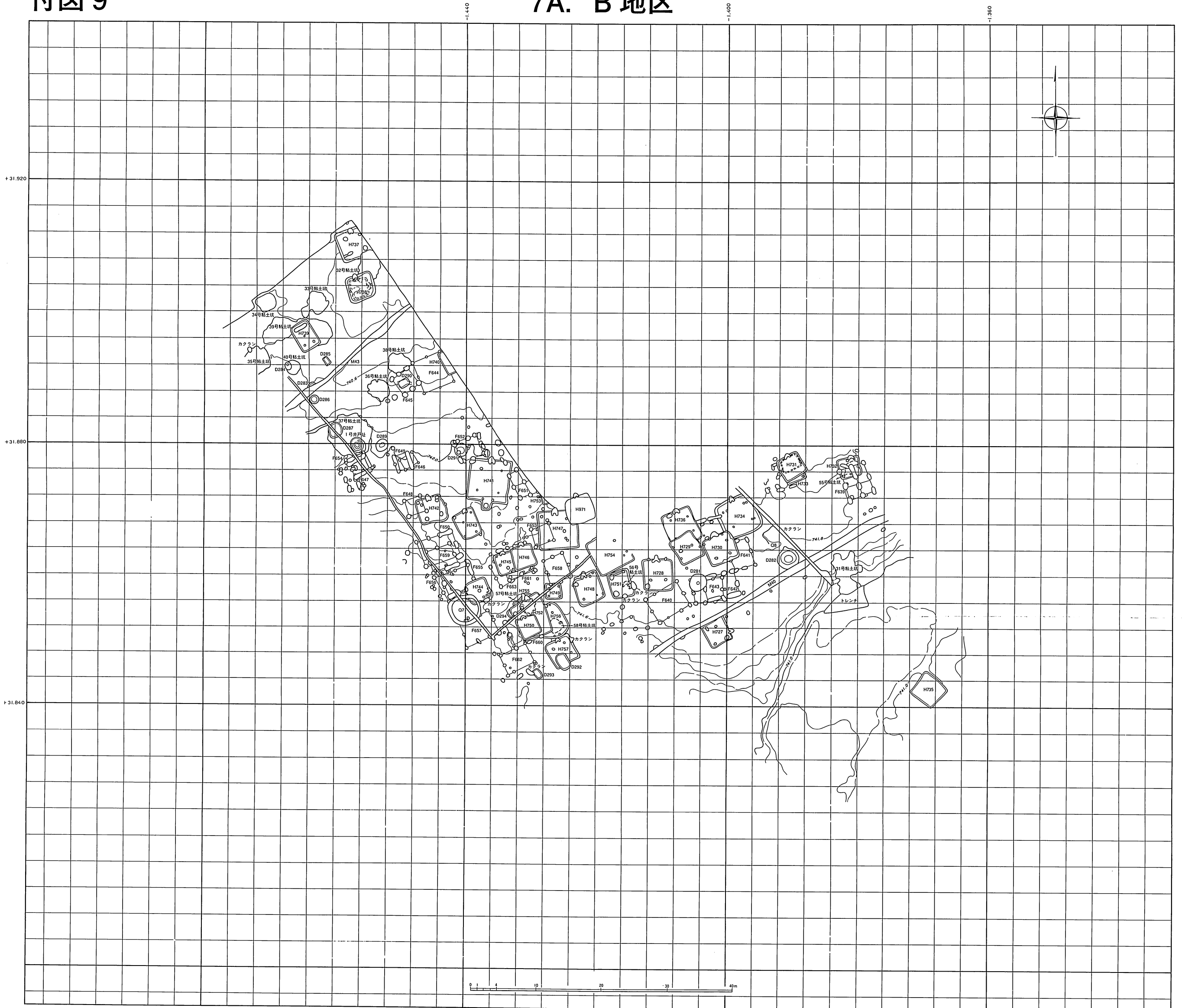
-1.820

-1.480

-1.440

-1.400



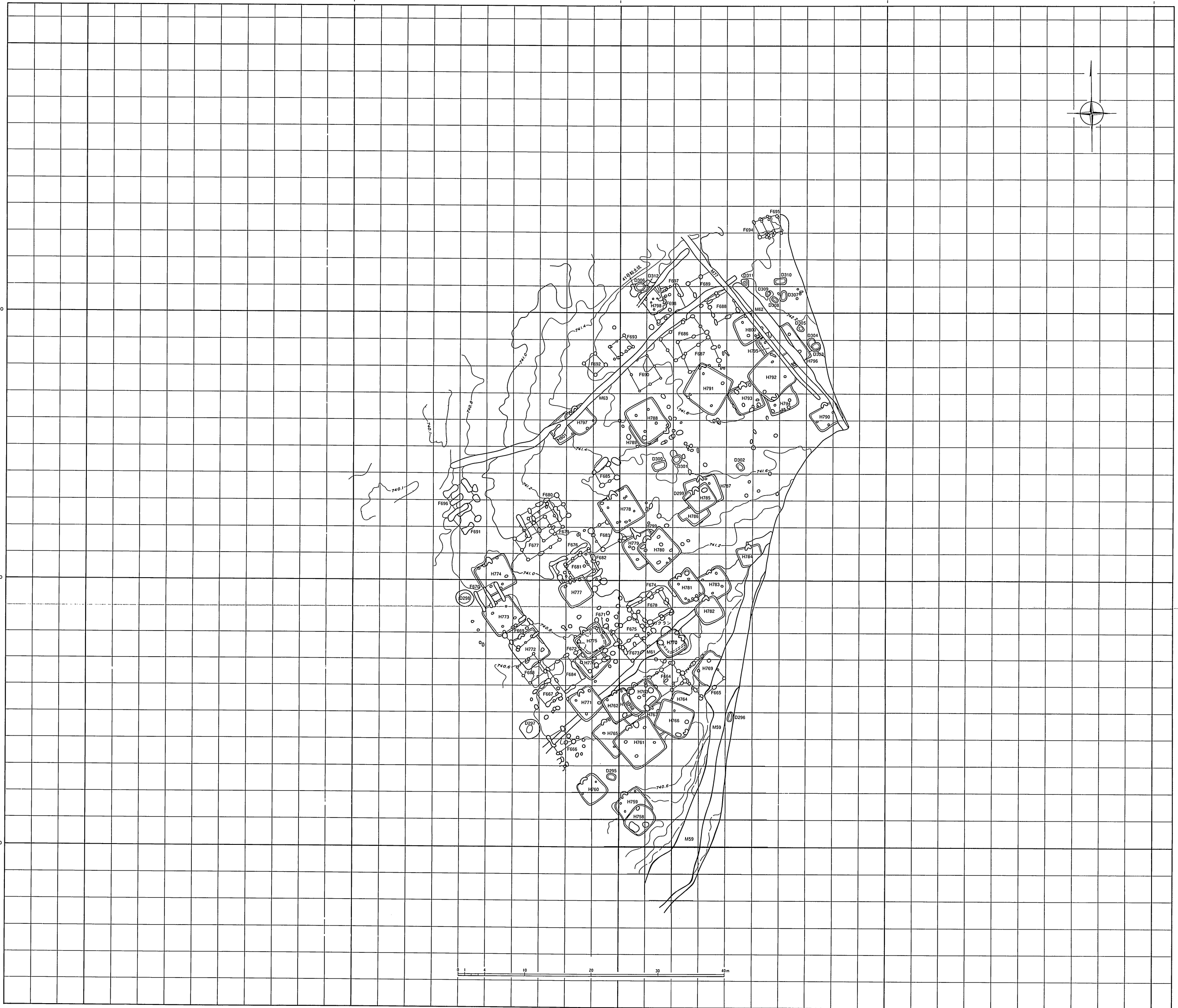
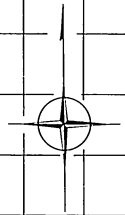


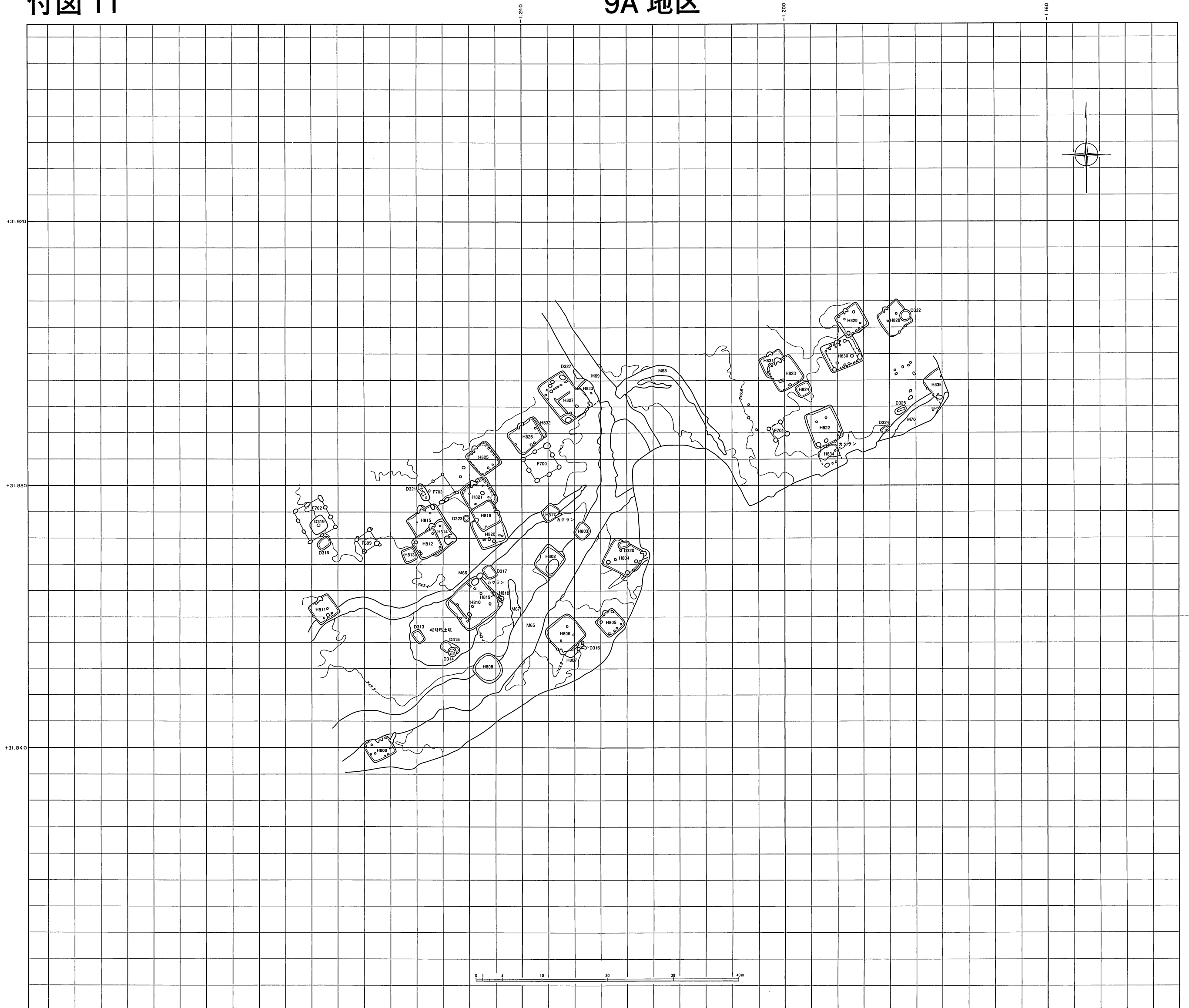
-1.400

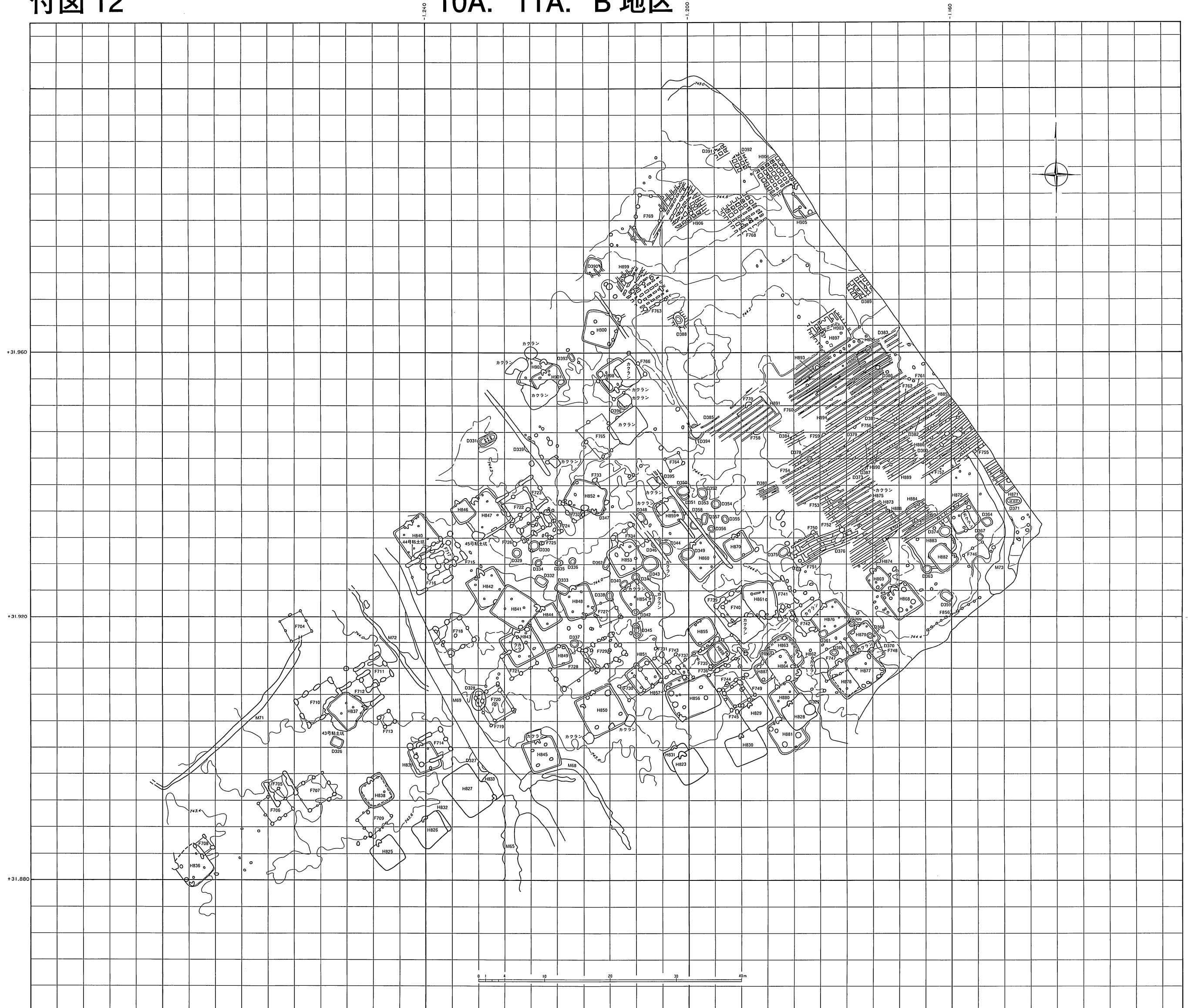
-1.360

-1.320

-1.280











-1.440

-1.400

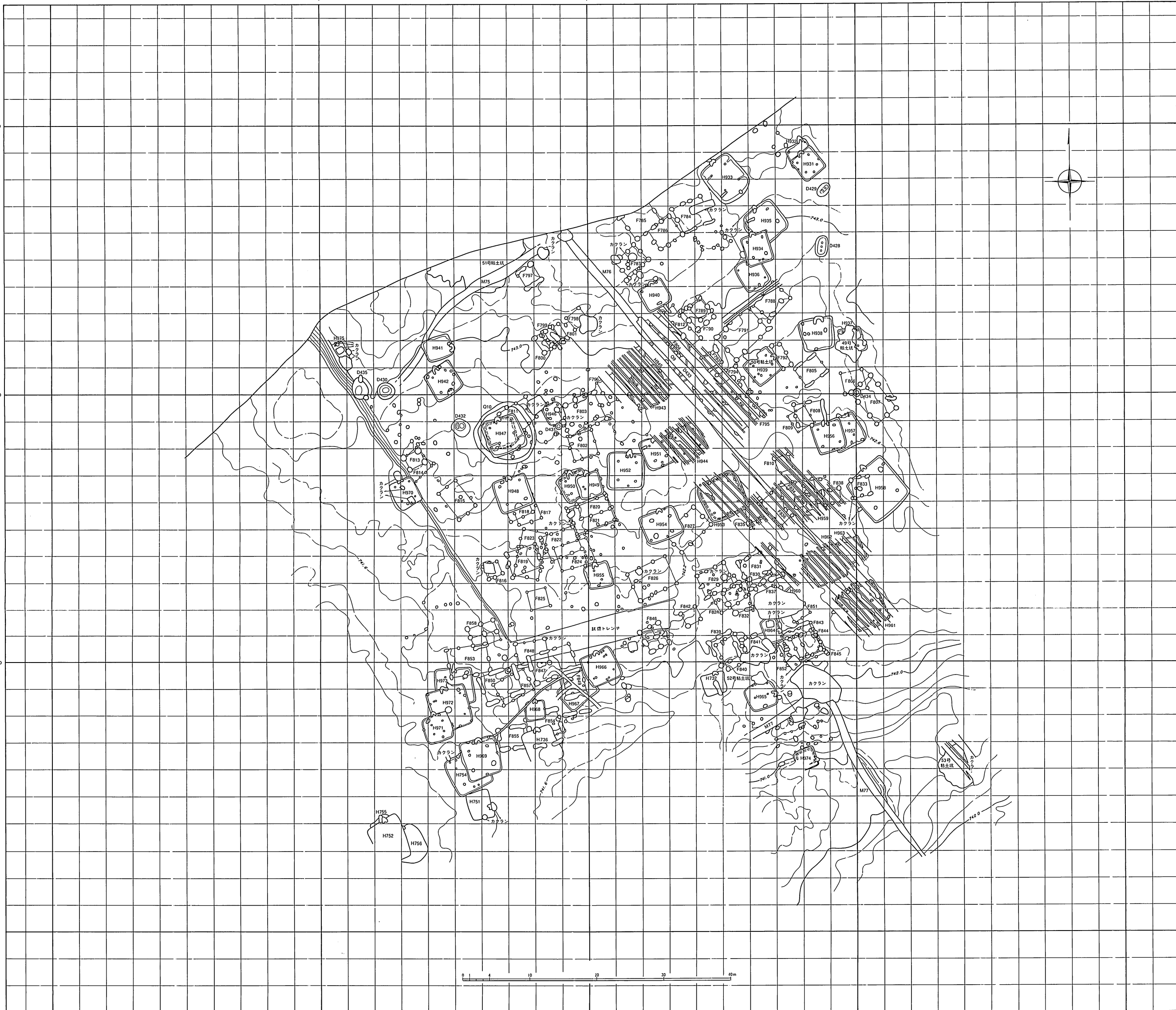
-1.360

-1.320

+31.960

+31.920

+31.880



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40m



# 状況図







平成7年度

縮尺 約1:2000



佐久市埋蔵文化財調査報告 第126集

**聖 原**

**第5分冊**

2005年2月

編集・発行

〒385-8501 長野県佐久市大字中込3056

**佐久市教育委員会**

〒385-0006 長野県佐久市大字志賀5953

☎0267-68-7321

**文化財課**

印 刷

(株)佐久印刷所

# 報告書抄録

書名	ひじりはら 聖原
副書名	長土呂遺跡群
巻次	第5分冊
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第126集
編著者名	小林眞寿
編集機関	佐久市教育委員会
発行機関	佐久市教育委員会
発行年月日	20050228
作成機関ID	
郵便番号	385-0006
電話番号	0267-68-7321
住所	長野県佐久市大字志賀5953
遺跡名	ひじりはら 聖原
遺跡所在地	ながの けん さく し おおあぎながと ろ あざかみひじりばた しんじょう しもひじりはら なかひじりはら かみひじりはら 長野県佐久市大字長土呂字上聖端、新城、下聖原、中聖原、上聖原
市町村コード	
遺跡番号	9
北緯	3617034801
東経	13829038873
調査期間	19890410-20050228
調査面積	96900
調査原因	流通業務団地造成
種別	集落址
主な時代	古墳後期(6・7C) / 奈良 / 平安
遺跡概要	狩場-縄文-陥穴-集落-古墳後期(6・7C)+奈良+平安-竪穴住居址+掘立柱建物址+土坑+溝+粘土採掘坑+Pit-縄文土器+弥生土器+土師器+須恵器+灰釉陶器+緑釉陶器+白磁+石器+石製品+鉄器+鉄製品+銅製品+古銭+玉類
特記事項	